筑摩叢書　5

正法眼蔵随聞記

水野弥穂子訳

目次

正法眼蔵随聞記

凡　例

一　この書は、現在までに知られる最善の本である長円寺本正法眼蔵随聞記を底本として、なるべく現代人に読みやすい形に整えようとしたものである。

一　章段の区切りは、原本では朱で○印をつけ、行を改めてある。この書の章段は、原本のこの区切りに従った。段の区切りの中でさらに細分した場合は一の㈠、一の㈡のようにその旨を示した。

一　章段の題は、本文のはじめの言葉をそのままとって、新たに加えた。

一　原文は、片かな漢字まじりで書かれ、所々に和化漢文の部分を交える。その片かなは平がなに直し、和化漢文の部分は読み下した。

一　和化漢文の読み下し文において、校訂者が付け加えたかなは、片かなとした。助詞、助動詞や、送りがなを補った場合も同様である。

一　右以外に補入した場合は（　）の中に入れて示した。

一　ふりがなは、校訂者においてつけた。ただし、原文にあるふりがなは〈　〉の中に入れて示した。

一　漢字の音読には、唐音の用いられることが少なくなかったと思われるが、今は、現代版であることを考慮に入れて、二、三の特殊な単語についてのみ、唐音を用い、一般には呉音によった。

一　原文で「心ロ」「力ラ」のように、名詞の下に一字送ってあるものは「心（ここ〈ろ〉）」「力（ちか〈ら〉）」の形にした。「自（オ）」「徒（イ）」は「自（〈おのづか〉）ら」「徒（〈いたづ〉）ら」とした。

一　原文のかなに漢字をあてたものは、漢字を〈　〉の中に入れ、原文のかなはふりがなの形にした。

一　漢字の字体は、現行普通の字体に統一した。

一　かなづかいは、歴史的かなづかいに統一し、一々その誤りをあげることはしなかった。

一　次の文字は統一して平がなに改めた。

非ズ――あらず　メ――して　如シ――ごとし　也――なり　亦・又――また　只――ただ　猶――なほ　須ク――すべからく

其――その（原文「其ノ」は「その」）　此――この（原文「此ノ」は「この」）

或――ある　或ハ――あるいは　程――ほど　為――ため　様――やう　莫レ・無レ――なかれ

一　句読点、引用符をつけ、行を改めることは、校訂者において行なった。

一　校訂は、底本の本文を改めた箇所を示す。慶安本、流布本との相違を一々あげることはしなかった。

一　注は、本文の読み方の典拠、その語の用例、参考事項等にわたり、特に、この書の性質上、道元禅師の他の述作中の言葉との関係をなるべくあげるように努めた。引用の漢文は、読み下し文に改めた。

正法眼蔵随聞記 一

一　はづべくんば明眼の人をはづべし

示に云く、はづべくんば明眼の人をはづべし。

予、在宋の時、天童浄和尚、侍者に請ずるに云く、「外国人たりといへども元子器量人なり。」と云ツてこれを請ず。

予、堅く是レを辞す。

その故は、「和国にきこえんためも、学道の稽古のためも大切なれども、衆中に具眼の人ありて、外国人として大叢林の侍者たらんこと、国に人なきがごとしと難ずる事あらん、尤もはづべし。」といひて、書状をもてこノ旨を伸べしかば、浄和尚、国を重くし、人をはづることを許して、更に請ぜざりしなり。

注

一　「はづ」とは元来、相手に対して自分の劣っている点

道元禅師が教えて言われた。

人の批判を気にするなら、物の道理の見通せる人からの批判を気にすべきである。

わたしが宋にいた時、天童山の如浄禅師が、わたしに侍者になるようにと頼んで言われるには、「外国人（日本人）ではあるが、道元君は徳もあり、力もある人物だ。」と言って、侍者になるようにと頼まれた。

しかし、わたしは堅く辞退した。

その理由は、「侍者にしていただくことは、わが日本に評判が伝わるためにも、仏道を学ぶ修練のためにも、わたくしにとって非常に重要なことでございます。しかし、同じ天童山の修行者の中に、道理のわかった人がいて、『外国人でありながら、天童山ともあろう大道場で侍者になるとは、大宋国に人物がないように見える。』と非難をするかもしれません。そうした批判は、特に心して反省しなければなりません。」と言って、手紙に書いて、この趣旨を申し

を自覚し、引け目を感ずる意。「ヒトヲ　ハヅ」(日葡辞書)。

二　物の道理のよく見通せる人。

三　道元禅師は貞応二年(一二二三)入宋、宋の宝慶元年(一二二五)から同三年(日本、安貞元年、一二二七)まで天童山で如浄禅師の教えを受け、その法を嗣いだ。

四　天童如浄(一一六三—一二二八)。南宋明州の人。長身であったので、世の人が長翁と呼んだ。雪竇智鑑の法を嗣いだ。

五　住持・長老のそばにいて、公私にわたり日常の仕事の代行補佐をする役。ここは特に堂頭侍者であろう。「如し侍者を請ぜば、すべからく色力少壮にして辞令分明に、梵行清修し、心機転旋なるべし。自然に堂頭(住持人)の諸事一切現成す。」(禅苑清規、堂頭侍者章)。

六　元は道元の上略。上字を欠くのが礼。子は名にそえて親しみを表わす。

七　仏道をまなぶこと。稽古は修練。

八　叢林は、衆僧が和合して仏道を修行する道場。大樹が叢りはえてよく調和している様子にたとえる。

のべたところ、如浄禅師も、大国の体面を重んじ、また、立派な人からの批判に心を用いるわたしの気持を了解して、二度と頼もうとはなさらなかった。

二　我れ病者なり、非器なり

示に云ク、有ル人の云ク、「我レ病者なり、非器[一]なり、学道にたへず。法門[二]の最要をきゝて、独住隠居して、性[三]をやしなひ、病をたすけて、一生を終へん。」と云フに、

教えて言われた。

ある人が、「わたしは病身ではあり、力量もない者で、仏道を学ぶには耐えられません。そこで、仏様の教えの、いちばん大切なところを承って、家族から離れてひとり住み、世間に交わらず隠居し

示ニ云ク、先聖[四]必ズしも金骨にあらず、古人豈[五]皆上器ならんや。滅後[六]を思へば幾ばくならず、在世を考フるに人皆俊なるにあらず。善人もあり、悪人もあり。比丘衆[七]の中に不可思議[八]の悪行するもあり、最下品[九]の器量もあり。然れども、卑下して道心[一〇]をおこさず、非器なりといツて学道せざるなし。

今生もし学道修行せずは、何れの生にか器量の物となり、不病の者とならん。ただ身命をかへりみず発心修行する、学道の最要なり。

注

一　それをなすだけの力量のないこと。
二　仏の教え。
三　いのち。生命。
四　過去に悟りを開いた人々。祖師たち。
五　すぐれた生まれつき。
六　釈迦牟尼仏が入滅されてからの年代。大きい目で見れば、千年、二千年はそれほどの長時間でない。道元禅師の末世思想への態度。
七　出家した男子。僧。bhikṣu の音訳語。
八　思いもよらない悪い行ない。
九　品は等級、階級。最下級。
一〇　仏の正覚を求める心。この心をおこすのが発心また発

て、いのちをだいじにして、病気養生しながら、一生を終えようと思います。」と言ったのに対して、道元禅師が教えて言われた。

むかし修行をして悟りを開かれた祖師たちは、必ずしも筋金入りの強いからだではなかった。また、いにしえの仏道を学んだ人がみな、特にすぐれた素質があったのでもない。釈迦牟尼仏入滅の後、年代が隔たるにつれて人間の器根が次第に低下し、修行も悟りもなくなるということであるが、今はまだそれほど衰えた世の中でもない。また逆に、仏在世の当時を考えてみるに、皆が皆すぐれた人たちばかりでもなかった。善人もあれば悪人もあった。出家の弟子たちの中にも、思いもかけない悪い行ないをする者もあった。最もそまつな生まれつきの者もあった。それでも、自分から卑下して道心をおこさなかったり、また、それだけの力がないと言って仏道を学ばなかった人はない。

今この一生のうちに仏道を学び、修行しなければ、この次、いつの世に生まれかわって力量のある人となり、病気をしない人になるというのか。ただ自分のからだのことも命のことも考えず、菩提心をおこして修行をするのが、仏道を学ぶ上でいちばん大切なことである。

菩提心である。

三　学道の人、衣食を貪ることなかれ

示に云ク、学道の人、衣食を貪ることなかれ。人々皆食分あり、命分あり。非分の食命を求むとも来るべからず。況ンや学仏道の人には、施主の供養あり、常の乞食に比すべからず。常住物これあり、私の営ミにもあらず。菓蓏・乞食・信心施の三種の食、皆是れ清浄食なり。その余の田商仕工の四種は、皆不浄邪命の食なり。出家人の食分にあらず。

昔一人の僧ありき。死して冥界に行きしに、閻王の云ク、「この人、命分未ダ尽キズ。帰すべし。」と云ヒしに、

有る冥官の云ク、「命分ありといへども、食分既に尽キぬ。」

王の云ク、「荷葉を食せしむべし。」と。

然シより蘇りて後は、人中の食物食することをえず、ただ荷葉を食して残命をたもつ。

然れば出家人は、学仏の力によりて食分も尽くべからず。白毫の一相、二十年の遺恩、歴劫に受用すとも尽くべきにあらず。行道を専ラにして、衣食を求むべきにあらざるなり。

教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、衣食をむさぼってはならない。人はめいめい一生にそなわった食べ料があり、寿命がある。分をこえた食や寿命を求めても得られるものではない。まして仏道を学ぶ人には施主の供養がある。それは仏道を行ずる人にのみそなわった徳で、世間普通の乞食とは比ぶべくもないものである。また修行の道場には共有の財産もあって、それは個人の営みによるものではない。木の実・草の実と、乞食と、信者の布施という三種の食は、みな清浄の食である。その他の農耕・商売・宮づかえ・手しごとなどの四種のなりわいによる食は、みな不浄な、仏の教えにそむいた食で、出家人の受けるべき食ではない。

昔、一人の僧があった。死んで冥土へ行ったところ、閻魔大王が、「この人はまだ寿命が尽きていない。娑婆へ帰せ。」と言った。ところが、閻魔の庁の役人のひとりが答えて、「命分はまだありますが、食分の方がすでに尽きております。」と言う。

大王は、「食分が尽きたのなら蓮の葉を食べさせよ。」と言った。

そのようなわけで、この僧が生きかえって後は、人間の食べ物を食べることができず、ただ蓮の葉ばかり食べて残りの命を保った。

これでわかるように、出家人というものは、仏道を学ぶ功徳によ

身躰血肉だにもよくもてば、心も随ツて好くなると、[三]医法等に見る事多し。況ンや学道の人、持戒梵行[一三]にして仏祖の行履[一四]にまかせて、身儀ををさむれば、心地[一五]も随ツて整なり。

学道の人、言を出さんとせん時は、三度顧ミて、自利、利他のために利あるべければ是レを言ふべし。利な(か)らん時は止べし。

是ノごとキ、一度にはしがたし。心に懸ケて漸々[一六]に習フべきなり。

注

一　寺に所属して、その寺全体の財産である田園雑具など。
二　菓は木の実、蓏は草の実。乞食は托鉢によって食物を得ること。信心施は信者がくれる布施。
三　上の三種の食べ物。清浄とは、人の執着の対象とならないこと。
四　四民。ここはその仕事。仕は当時は「さぶらいつかえる者」であったから、この字でもよい。
五　比丘が乞食によらず、田畑をたがやしたり、学問知識を売ったり、権門の庇護を受けたり、占いなどをして生活の資を求めること。清浄食の対。
六　目に見えない世界。地獄。めいど。
七　地獄の閻魔の庁の役人。

って、命はもとより、食べ料も尽きることはない。これは経文に説かれている通り、釈尊三十二相のうちの白毫相のおかげや、釈尊が自ら百年ある寿命を二十年縮めて、後の代の仏弟子のためにのこされた恩によるので、それはどんなに長い間いただいて用いても尽きることがない。だから出家人たるものは、仏道修行を専一にして、そのほかに衣食を求めてはならない。

医学の書などに、身体骨肉さえ健康に保てば、それにつれて心もよくなると書いてあるのを、よく見かける。まして仏道を学ぶ人は、戒をたもって清らかな行ないをし、仏祖の日常の行ないの通りに、その身をふるまえば、心もそれにつれてととのうのである。

仏道を学ぶ人が、物を言おうとする時は、言う前に三度反省して、自分のためにも相手のためにもなるようならば、言うがよい。利益のなさそうな時には言うのをやめるべきである。

こういうことは、一ぺんにはできないものである。心にかけてだんだんに習熟すべきである。

八 人間界。「ニンゲン、ヒトノ ナカ」（日葡辞書）。

九 「ジキモツ、クイモノ」（日葡辞書）。

一〇 仏蔵経、了戒品第九に、「仏弟子は衣食所須を思いわずらうな。如来は滅後、白毫相中百千億分のうちの一分を舎利および諸弟子に供養する。たとい、一切世間の人が皆同時に出家しても、白毫相の百千億分の一も、尽きることがない」とある。白毫は仏の三十二相の一。仏の眉間(みけん)にある一本の長い毛。ふだんは右に巻いておさまり宝石のように見える。

一一 釈尊は百年の寿命のうち二十年を縮めて、末世の仏弟子に施されるという。禅苑清規には「世尊二千年の遺蔭、児孫を蓋覆(がいふ)す。白毫光一分の功徳、受用不尽。」とある。

一二 医学の書。医方の音字か。

一三 戒にしたがった清浄の行。

一四 日常の一切の行ない。

一五 心のこと。心は一切を生ずるから地という。

一六 「ゼンゼン、シダイシダイニ」（日葡辞書）。

校訂

1 原文菓疏(さ)。漢字により、かなを改めた。

2 原文「豪」。

3 原文「遺思」。慶安本・流布本「遺因」。典座教訓は「世尊二千年の遺恩」。禅苑清規は「世尊二千年の遺蔭」。

四　学道の人、衣食に労することなかれ

雑話の次、示に云ク、学道の人、衣食に労することなかれ。こノ国は辺地小国なりといへども、昔も今も顕密二道に名を得、後代にも人に知ラれたる人、いまだ一人も衣食に饒なりと云フ事を聞かず。皆貧を忍び他事をわすれて一向その道を好む時、その名をも得ルなり。況ンや学道の人は、世度を捨テてわしらず。何としてか饒なるべき。

大宋国の叢林には、末代なりといへども、学道の人千万人の中に、あるイは遠方より来り、あるイは郷土より出で来るも、多分皆貧なり。しかれども愁とせず、ただ悟道の未だしき事を愁て、あるイは楼上若シクは閣下に、考妣を喪せるがごとくにして道を思ふなり。親り見しは、西川の僧、遠方より来リし故に所持物なし。纔に墨二、三箇の直、両三百、この国の両三十にあたれるをもて、唐土の紙の下品なるは、きはめて弱きを買ヒ取り、あるイは襖あるイは袴に作ツて着れば、起居に壊るる〈音〉してあさましきをも顧りみず、愁ず。人、「自ラ郷里にかへりて道具装束せよ。」と言フを聞イて、「郷里遠方なり。路次の間に光陰を虚シ

いろいろの話をされたとき、教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、衣食を思い煩ってはならない。わが国は仏出世のインドから遠く離れた小国ではあるが、昔も今も、顕教・密教において名声を得、後の代まで人々に知られた人で、衣食にゆたかであったということは、一人として聞いたことがない。みな貧乏に耐え、ほかの事は全く念頭におかず、ひたすらその専門の道をすてずに学ぶ時、その名声も得るのである。まして、仏道を学ぶ人は、世渡りのわざを捨て、世渡りのために東奔西走しないものである。物にゆたかであろうはずがない。

大宋国の修行の道場では、世は末代であるとはいえ、仏道を学ぶ人は千万人もある。その中には、あるいは遠方から来、あるいは生まれ故郷を離れてくる者もあるが、多くはみな貧乏である。それでも、貧乏など苦にせず、ただ仏道の悟りの及ばないことを苦にして、あるいは高殿の上、あるいは高殿の下に、所を見つけては坐禅に励み、あたかも亡父母の喪に服しているような気持で仏道を心にかけるのである。

自分が親しく見てきたことでは、こういう話がある。四川省出身の僧であったが、遠方からなので、何も持っていなかった。わずかに墨二、三箇、金額にして二、三百文、わが国の二、三十文にあた

くして学道の時を失ハん事」を愁て、更に寒を愁ずして学道せしなり。然れば大国にはよき人も出来るなり。

伝へ聞く、[一二]雪峰山開山の時は、寺貧にしてあるイは[一三]絶烟あるイは[一四]緑豆飯をむして食して日を送ツて学道せしかども、一千五百人の僧、常に絶えざりけり。昔の人もかくのごとし。今もまた此ノごとクなるべし。

僧の損ずる事は多く[一五]富家よりおこれり。如来在世に[一六]調達が[一七]嫉妬を起しし事も、日々[一八]五百車の供養より起れり。ただ自を損ずる事のみにあらず、また他をしても悪を作さしめし因縁なり。真の学道の人、なにとしてか富家なるべき。直饒浄信の供養も、多くつもらば恩の思を作して報を思ふべし。

こノ国の人は、また我がために利を思ひて施を至す。笑ツて向へる者に能くあたる、定マれる道理なり。他の心に随ハんとせば、是レ学道の礙なるべし。ただ飢を忍び寒を忍びて、一向に学道ずべきなり。

注

一　インドあるいは中国から遠く離れた地。

二　真言宗を密教というに対して天台宗その他、経文の教えによる宗派を顕教という。当時の仏教は禅、顕、密の三種に分類されたと言ってもよい。

るものを持っていたが、それで、かの地の紙の下級品はきわめて弱いものであるが、そういう紙を買い求め、あるいは上着に、あるいは袴に作って着るので、立ち居に破れる音がして人が驚くような姿もかまわず、苦にもしなかった。はたの人が、「自分で郷里に帰って、道具や身なりをととのえてきたらいい。」と言うのを聞いて、「わたしの郷里は遠方である。旅の途中でむなしく時を過ごして仏道を学ぶ時を失うのがつらい。」と言って承知せず、いっこう寒さを苦にもせず、仏道を学んでいた。これだから、大国には立派な人も出てくるのである。

伝え聞くところによると、雪峰義存禅師がはじめて雪峰山を開かれた時は、寺が貧しくて、あるいはかまどの煙も絶え、あるいは緑豆飯を蒸して食べては日を送って仏道を学んだが、一千五百人の僧は常に減ることがなかった。昔の人の修行ぶりはこの通りである。今もこの通りでなければならない。

僧の堕落はたいてい富裕な家からおこっている。如来在世の時代に、提婆達多が釈尊をねたむ心をおこしたのも、阿闍世王から日々五百車の供養を受けるようになったことがもとである。富はただ自分一人を誤ったばかりでなく、他人にも悪をなさしめた因縁を物語る話である。真実の仏道を学ぶ人は、どうして富家であってよいだろうか。たとえ清浄な信仰にもとづく供養でも、多く重なったら、恩を思ってそれに対して報いをする気持になるにちがいない。

それにわが国の人は、自分のための利益を考えて僧に供養する。また、笑って自分に向かう者にはおのずからあたりもよくなる。こ

れは人情の自然である。しかし、相手の心に追従しようとすると、きっと学道の障(さわ)りとなる。ただただ飢えを忍び、寒さに耐えて、ひたすら仏道を学ぶべきである。

三 世わたり。
四 走らず。
五 原文上欄に「〈親(オヤ)〉ノ〈忌(イミ)〉ヲツトムルヲ〈孝妣(カウヒ)〉に〈喪(モ)〉スト云。」とある。考はなくなった父、妣はなくなった母。
六 四川省。蜀(しょく)の地方をいう。
七 二、三百。銭(ぜに)の最低の単位「文(もん)」であろう。次の「両三十」は二、三十。
八 宋代であるが、中国の地を一般的にこう言った。
九 袍が絹で作った上のきぬであるのに対して、裏のついた、木綿の上着。
一〇 腰から下に着るもの。
一一 日月。
一二 雪峰義存（八二二—九〇八）。徳山宣鑑に嗣ぐ。雲門文偃の師。
一三 食糧がなくて飯をたくことができないこと。
一四 緑豆は八重(やえ)なり豆。小豆の一種。インド原産。高さ約四十センチ。和名ブンドウ、アサメ、アオアズキ。典座教訓に「先づ米裏に虫有らんを択(えら)べ、緑豆・糠塵・砂石等、精誠に択び了れ」とあるから、普通ならえらび捨てるべき雑穀を食べたことになる。
一五 富裕な家。
一六 Devadatta 音訳は提婆達多。調達はその訳名。斛飯(こくぼん)王(おう)の子、ブッダのいとこ。神通力を学び、三十相を備えたが、三逆罪（和合僧を破り、阿羅漢を殺し、仏身より血をいだす）を犯して、生きながら無間(むけん)地獄に堕ちたと

いう仏教における代表的悪人。

一七　ひとの善事をにくらしく思うこと。提婆は、阿闍世をまどわして大檀越とし、莫大な供養を得るに至ったので悪心を起こし、釈尊に対抗して釈尊の僧団を破り、釈尊を山くずれにより殺そうとし、大阿羅漢の蓮華色比丘尼をなぐり殺すという三逆罪を犯すに至る。増一阿含四十六、大智度論巻十四に見える。なお、知事清規に「調達が五百の衆を誘ふも果して逆となる」とある。

一八　大智度論には「五百釜の糞飯を送る」とある。

校訂

1　原文、顕蜜。

2　原文、嫉妣。

五　古人云く、聞くべし見るべし

一日示ニ云ク、古人云ク、「聞くべし、見るべし。」ト。また云ク、「〈経〉ずんば見るべし、〈見〉ずんばきくべし。」ト。

言は、きかんよりは見るべし。見んよりは〈経〉べし。いまだ〈経〉ずんば見るべし。いまだみずんば聞クべしとなり。

また云ク、学道の用心、[一]本執を[二]放下すべし。身の威[三]儀を改むれば、心も随ツて転ずるなり。先ヅ律[四]儀の戒

ある日、教えて言われた。

古人は、「耳で聞きなさい、目で見なさい。」と言っている。また、「実際に経験していないなら目で見なさい。目で見ていないならば耳で聞きなさい。」とも言っている。

その意味は、「耳で聞いたら、実際に目で見なさい。目で見たら、実際にやってみなさい。まだ自分でやったことがないならば、せめて見ておきなさい。まだ見ていないならば、せめて聞いておきなさい。」ということである。

行を守らば、心も随ツて改マるべきなり。宋土には俗人等の常の習ヒに、父母の孝養のために、宗廟にして各集会して泣くまねをするほどに、終には実に泣クなり。学道の人も、はじめより道心なくとも、ただ強て道を好み学せば、終には真の道心もおこるべきなり。

初心の学道の人は、ただ衆に随ツて行道すべきなり。修行の（用）心故実等を学し知らんと思ふ事なかれ。用心故実等も、ただ一人山にも入り市にも隠れて行ぜん時、錯なくよく知りたらばよしと云ふ事なり。衆に随ツて行ぜば、道を得べきなり。譬ば舟に乗りて行クには、故実を知らず、ゆくやうを知らざれども、よき船師にまかせて行けば、知りたるも知ラざるも彼岸に到るがごとし。善知識に随ツて衆と共に行ジて私なければ、自然に道人なり。

学道の人、若し悟を得ても、今は至極と思ウて行道を罷ル事なかれ。道は無窮なり。さとりてもなほ行道すべし。良遂座主、麻谷に参ぜし因縁を思ふべし。

注

一　もとから持っている執着。
二　なげすてる。
三　仏家の四威儀は行・住・坐・臥。日常の行為のすべて

また言われた。

仏道を学ぶ心得として、まずもとからのとらわれた気持をすっかりなげ捨てるがよい。作法にしたがって姿勢を整えると、心もそれにつれて正しくなる。まず、戒律に定められた行ないを守ると、心もそれにつれて改まるはずである。宋の国では、俗人の間の風習として、なくなった父母への孝養のため、先祖をまつる廟に皆が集まり、泣くまねをしているうちに、しまいにはほんとうに泣いてしまうのである。仏道を学ぶ人も、はじめから道心がなくても、気持にさからってでも、仏道をすてずに学んでいると、しまいにはほんとうの道心がおこってくるはずである。

初めて仏道を学ぶ人は、ただただ僧団に従って道を行ずべきである。修行の心得や秘訣を学び知ろうなどと思ってはならない。心得や秘訣などということも、つまりは、ただ一人山に入ったり、市中に隠れたりして仏道を行じようとする時、間違いなく正しく心得ていたらよいという事である。僧団に従って修行しておりさえすれば、道を得るはずである。たとえば舟に乗って行くには、漕ぎ方も知らず、進み方を知らなくても、腕のよい船頭にまかせて行けば、知っている人も知らない人も、向こう岸に着くようなものである。すぐれた指導者に従い、僧団といっしょに仏道を行じて、私心がなければ、そのままで仏道の人である。

仏道を学ぶ人は、もし悟ることができても、これでもうこの上はないと思って、仏道修行をやめてはいけない。仏道は無窮である。悟ってもなお修行しなければならない。昔、良遂座主が麻谷山宝徹

禅師に参じた因縁を考えてみるがよい。

をあらわす。

四　律儀は、一々の箇条にわたるきまり。戒行は、仏法を学ぶ者がしてはいけないと制止されている行ない。

五　「キョウヤウ、ブモ（父母）キョウヤウノ　タメニスル」（日葡辞書）。

六　中国の葬儀に哭の礼がある。

七　衆は saṃgha で、三人、あるいは四人以上の比丘の集まりを言う。ここは修行の道場の大衆をさす。

八　てほんとすべき先例。この書では、その道の人に親しく指導を受けてはじめて知りうる極意、秘訣といってもよいであろう。

九　「小隠は陵藪に隠れ、大隠は朝市に隠る。」（文選、王康琚、反招隠詩）。

一〇　知人朋友の善道にみちびく者をいう。教授の善知識、同行の善知識、外護の善知識の三があるが、ここは教授の善知識すなわち指導者。

一一　寿州の良遂座主が初めて麻谷山宝徹禅師（馬祖の法嗣）に参じた時の話。麻谷は、良遂の来るのを見ると鋤頭をとって畑の草とりに行ってしまった。良遂は草をすいているところまで追っかけて行ったが、麻谷はふり向きもしない。さっさと方丈に帰り門をとざしてしまった。

良遂は翌日もまた麻谷のところへ出かけて行った。麻谷はまた門をとざしてしまった。良遂はたまりかねて門をたたいた。麻谷が「だれだ。」とたずねた。「良遂。」と答える。自ら名前をとなえた時、良遂は忽爾として契悟した。

そこで良遂が言った。「和尚、良遂をだまさないでください。わたしがもし来って和尚を礼拝しなかったなら、ほとんど一生を経論のうちにだまされてすごしたでしょう。」と。あとで良遂は、そこから自分の講義の場所に帰ると、講義をやめ、弟子を解散してしまった。（正法眼蔵三百則による。）座主は、講座の主ということで、経論の講義のできる仏教学者。

六　学道の人は後日を待って行道せんと思ふ事なかれ

示ニ云ク、学道の人は後日を待ツて行道せんと思ふ事なかれ。ただ今日今時を過ごさずして、日々時々を勤むべきなり。

爰にある在家人、長病あり。去年の春の比相契りて云く、「当時の病療治して、妻子を捨て、寺の辺に庵室を構へて、一月両度の布薩に逢ヒ、日々の行道、法門談義を見聞して、随分に戒行を守りて生涯を送らん。」と云ヒしに、その後種々に療治すれば少しき減気在りしかども、また増気在りて、日月空シく過ゴして、今年正月より俄に大事になりて、苦痛次第に責ムるほどに、思ひきりて日比支度する庵室の具足運びて造るほどの隙もなく、苦痛逼るほどに、先づ人の庵室

教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、後日を待って仏道修行をしようと思ってはならない。ただ、今日ただ今をとりにがさずに、その日その日、その時その時に努力すべきである。

この近くに、ある在家の人がいたが、長い間病気であった。この人が、去年の春のころ、わたしに約束して、「この病気をなおしたら、妻子と別れて仏門に入り、お寺の近くに庵室を建て、月に二回の布薩にも参加し、毎日の仏道修行やら、教えのお話やらを見聞きして、できるかぎりは、戒にかなった行ないを守って、一生を送りましょう。」と言っていたが、その後、いろいろと治療を加えたので、少し病勢も衰えたが、重ねて病勢がつのり、むなしく月日をすごしてしまった。ところが今年の正月から急に重態となり、苦痛も

を借りて移り居て、纔に一両月に死去しぬ。前夜、菩[九]薩戒ヲ受ケ、三宝[一〇]に帰して、臨終よくて終りたれば、在家にて狂乱して、妻子に愛を発して死なんよりは尋[一一]常なれども、去年思ヒよりたりし時、在家を離レて寺に近づきて、僧に馴れて一年行道して終りたらば勝れたらましと存ズるにつけても、仏道修行は後日を待つまじきと覚ユるなり。

身の病者なれば、病を治して後に好く修行せんと思はば、無道心[一二]の到す処なり。四大和合[一三]の身、誰か病なからん。古人必ズしも金骨にあらず。ただ志の到りなれば、他事を忘れて行ずるなり。大事身に来れば小事は覚えぬなり。仏道を大事と思ウて、一生に窮メンと思うて、日々時々を空シく過ゴさじと思ふべきなり。

古人[一四]の云ク、「光陰虚シク度ルコトなかレ」ト。若シこの病を治せんと営むほどに除ずして増気して、苦痛弥逼る時は、痛ミの軽かりし時行道せでと思ふなり。然れば、痛ミを受けては重くならざる前にと思ひ、重くなりては死せざる前にと思ふべきなり。病を治するに除るもあり、治するに増ずるもあり。また、治せざるに除くもあり、治せざれば増ずるもあり。これ能々思ひ入るべきなり。

また行道の居所等を支度し、衣鉢等を調へて後に行ぜんと思ふ事なかれ。貧窮の人、世をわしらざれ[一五]。衣

次第にひどくなるので、思い切って平素準備していた庵室用の資材を運んで造ろうとしたがそのひまもなく、苦痛はいっそうひどくなるので、ひとまず、他人の庵室を借りて移り住んだが、わずか一、二か月のうちに死んでしまった。それでも死ぬ前の夜には菩薩戒を受け、三宝に帰依して、正式の仏弟子となり、臨終は立派にしてなくなったから、在家のまま心も乱れ、妻子への愛着をおこしたまま死ぬよりは結構なことであるが、去年思い立った時に在家の生活を離れて寺に近づき、僧団の生活にもなじんで、一年間正式に仏道を行じて死んだなら、ずっとよかったであろうのにと思う。これにつけても、仏道修行は後日を待つということではいけないと思われるのである。

自分は病気があるから、病気をなおして後に立派に修行しようと思うのは、道心がないからである。人のからだは、地水火風の四元素がかりにあつまってできているものであるから、病気がないということはない。むかしの人たちがみんな不死身であったのではない。ただ、仏道修行の志が徹底しているから、他のことはいっさい心にかけず行ずるのである。人間というものは、大事件が身に迫ると、小事は忘れているものである。仏道こそ一生の大事と思い、必ずこの命のあるうちにきわめつくそうと思って、その日その日、その時その時をむだにはすごすまいと思うべきである。

石頭希遷禅師は『参同契』で、「光陰をむなしくすごしてはならない。」と言っておられる。さしあたっての病気をなおそうと苦心している間に、病気はなおらないで、かえって容態が進み、苦痛が

鉢の資具乏しくして死期日々に近づくは、具足を待ツて、処を待ツて行道せんと思ふほどに、一生空シく過ゴすべきをや。ただ衣鉢等[一六]なくんば、在家も仏道は行ずるぞかしと思うて行ずべきなり。また衣鉢等はただあるべき僧躰の荘[一七]なり。実の仏道は其レニもよらず。得来らばあるに任すべし。あながちに求ムル事なかれ。ありぬべきをもたじと思ふべからず。わざと死せんと思ウて治せざるもまた外道[一八]の見なり。仏道には「命を[一九]惜シむ事なかれ。命を惜シまざる事なかれ。」と云フなり。より来らば灸治一所灸薬[二〇]一種なんど用ひん事は、行道の礙ともならず。行道を指置イて、病を先とし、後に修行せんと思ふは礙なり。

注

一　出家人に対する名。家庭生活をなし、職業を営むのを本務とする。
二　「チャウビャウ、ナガイ　ワズライ」(日葡辞書)。
三　約束して。
四　さしあたった今の時。「タウジ、イマノトキ」(日葡辞書)。
五　「アンジツ」(日葡辞書)。
六　upavasatha の音訳語。善宿と訳す。仏教徒が一月に二回、満月と新月の日に最寄りの精舎に集まり、出家の

いよいよひどくなると、痛みの軽いうちに仏道を行じないで残念なことをしたと思うものである。だから、病気によって痛みを感じたら、重くならないうちに仏道を行じておこうと思い、病気が重くなったら、死なないうちに仏道を行じておこうと思うべきである。病気というものは、治療してなおることもあり、治療してもなおらないこともある。また、治療しないでもなおることもあり、治療しないで悪化することもある。ここのところをよくよく深く考えるべきである。

また、仏道を行ずるための庵室などの用意をし、袈裟・応量器などをそろえた上で道を行じようと思ってはいけない。貧乏で困っている人は、世わたりに東奔西走してはいけない。袈裟・応量器等の必要な道具が足りなくても、一方で死ぬ時は日々に近づいているのであるから、道具がそろうのを待ち、適当な居所のできるのを待って仏道を行じようと思っているうちに、あたら一生をむなしくすごすことになる。袈裟・応量器なども、もし無いならば、そういう物を持たない在家の人でも、仏道を行ずるに不足はないのだからと思って、ただただ仏道を行ずべきである。また、考えてみれば、袈裟・応量器などは、ただ僧としての形をととのえるためのしかるべき飾りである。真実の仏道はそうした物のありなしによるものでもない。しかるべき因縁で手にはいれば、あるに任せて持つがよい。無理をしてまで手に入れようとしてはならない。かといって、また、持てるものをしいて持つまいと思ってもいけない。病気も同様で、わざと、いっそ死んでしまおうと思って治療をしないのも、また仏

道の考え方ではない。仏道では、「命を惜しんではいけない、また、命を惜しまずそまつにしてはいけない。」と教えるのである。しかるべきたよりがあれば、お灸の一所もすえ、病状にあわせて、あぶった薬の一種類など服用することは、仏道を行ずる邪魔にもならない。しかし、仏道を行ずるのをやめてまで、病気を第一に考え、病気がなおってから修行しようと思うのは、道のさまたげである。

僧は一堂に会して戒律の箇条を読み上げて罪を懺悔し、在家の信者は八戒を守り、説法を聞き、僧尼に飲食の供食をする。これが「梵網経」とともに中国に伝わり、道元禅師も正確に実行されたものらしい。梵網経に、「仏、もろもろの菩薩に告げて言く、我れ今半月半月に自ら諸仏の戒法を誦す。汝等一切発心の菩薩、乃至十発趣・十長養・十金剛・十地の諸菩薩もまた誦すべし。」「布薩の日は、新学の菩薩は半月半月に布薩して十重四十八軽戒を誦すべし。」とある。

七　病勢の減退すること。後世、「元気」の字をあてる。

八　病勢のつのること。

九　大乗戒。三帰十戒を受けて大乗の菩薩の資格を確認する儀式。

一〇　菩薩戒は、三帰（帰依仏法僧）。三聚浄戒（摂律義戒・摂善法戒・摂衆生戒）。十重禁戒（不殺・不盗・不婬・不妄語・不酤酒・不説過・不自讃毀他・不慳・不瞋・不謗三宝）から成る。正法眼蔵受戒巻、仏祖正伝菩薩戒作法等に詳しい。

一一　尋は八尺、常は一丈六尺。ともに長さの単位をあらわす文字を重ねて、細かいところまできっちりとしているのが原義で、やがて、あたりまえ、という意義にうつってゆく。しかし鎌倉時代のころには、きっちりしている、あたりまえであるということは、すぐれた意味をもっていた。「ジンジャウナ　ヒト」（日葡辞書）。

一二　菩提心のないこと。

一三　すべてのものは地（堅固の性質）・水（湿う性質）・火

（熱の性質）・風（動揺の性質）の四つの元素のあつまりであるという思想。もちろん人間も同様。

一四　石頭希遷（七〇〇—七九〇）の参同契であろう。石頭希遷は六祖の弟子、その滅後、青原行思の法嗣となる。南岳の石台上に庵を結んでいたので石頭（石の上にいる人の意）和尚と人が言った。弟子に天皇道悟・薬山惟儼・丹霞天然等がある。『参同契』は、洞山の『宝鏡三昧歌』とともに、短くて仏法の要を説きえたものとして洞門に尊重される。その結句に、「謹んで参玄の人に白す、光陰虚しく度ることなかれ。」とある。

一五　わしるは走る。東奔西走するのを戒める。

一六　衣は三衣で、九条・七条・五条の袈裟。鉢は応量器という仏家の正式の食器。住は樹下石上を原則とするから、衣鉢さえあれば、衣、食、住に不足がないわけである。

一七　形をととのえるためのもの。

一八　仏道以外の思想、学問、生活態度をいう。

一九　法華経比喩品に、「若し人、精進して常に慈心を修し、身命を惜しまざらんに、すなはち、為に説くべし。」とあり、正法眼蔵行仏威儀の巻に、「不惜身命也、但惜身命也。」とある。

二〇　霊雲の還魂丹に、「薬を炙りて陰を制し、以てその陰を引く。薬を炙りて陽を制し、以てその陽を引く。」とあり、病状にあわせてあぶって効用を発揮するようにした薬。原文「瀉薬」は音写の文字であろう。

校訂

1 原文、少事。
2 原文、「待チ」。チはテの古体であったかと思われる。
3 原文、瀉薬。
4 ン、原文、朱書。

七　海中に竜門と云ふ処あり

示ニ云ク、海中に竜門[一]と云フ処あり。浪頻に作なり。諸の魚、波の処を過ぐれば必ず竜と成るなり。故に竜門と云フなり。今は云く、彼ノ処、浪も他処に異ならず、水も同ジくし[二]はゆき水なり。然れども定マれる不思議にて、魚この処を渡れば必ず竜と成るなり。魚の鱗も改まらず、身も同ジ身ながら、忽に竜と成るなり。[三]衲子の儀式も是レをもて知ルべし。処も他所に似タれども、叢林に入れば必ず仏[四]となり祖となるなり。食も人と同ジく（食し[1]、衣も人と同じく）服し、飢を除き寒を禦ぐ事も同じけれども、ただ頭を円にし衣を[五]方にして[六]斉粥等にすれば、忽に衲子となるなり。成仏作祖も遠く求むべからず。ただ叢林に入ると入ラざるとなり。竜門を過グると過ギざるとなり。

また云ク、俗の云ク、「我れ金を売れども人の買フ事無ケればなり。」ト。仏祖の道も是のごとし。道を惜シむにあらず、常に与フレども人の得ざるなり。道

教えて言われた。

海の中に竜門という所がある。そこは波がしきりに打ち寄せる所である。いろいろな魚が、この波の所を過ぎると、必ず竜になる。それで竜門と言うのである。今この話で言いたいことは、この竜門という所は、ほかの所と波がちがっているわけではない。水も同じく塩からい水である。けれども、一定の不思議な力によって、魚がここを通ると必ず竜になるのである。見たところは、魚の鱗がかわるわけでもない、その魚のからだも、そのままでありながら、たちどころに竜となるのである。達磨門下の禅僧の儀式も、これによって理解するがよい。場所も他の所と同じような所であるが、修行の道場に入ると必ず仏となり祖となるのである。食物も普通の人と同じように食べて飢えをしのぎ、衣服も普通の人と同じように着て寒さを防ぐ事に変わりはないのであるが、ただ、頭をまるめ、四角い袈裟を着て、食事は正午に一回と朝のおかゆだけという仏家のきまりに従うと、たちまち達磨門下の禅僧となるのである。仏となり、祖師となるということも遠くに求めてはならない。ただ、出家して

を得ることは根の利鈍には依らず。人々皆法を悟るべきなり。ただ精進と懈怠とによりて得道の遅速あり。進怠の不同は志の到ると到ラざるとなり。志の到ラざる事は、無常を思はざるに依ルなり。念々に死去す、畢竟暫くも止らず。暫くも存ぜる間、時光を虚シクすごす事なかれ。

「倉の鼠食に飢ゑ、田を耕す牛の草に飽カず。」と云フ意は、財の中に有れども必ずしも食に飽かず、草の中に栖めども草に飢ウる。人も是のごとし。仏道の中にありながら、道に合ざるものなり。希求の心止マざれば、一生安楽ならざるなり。

道者の行は善行悪行皆おもはくあり。人のはかる処にあらず。昔恵心僧都、一日庭前に草を食する鹿を人をして打ちおはしむ。

時に人有り、問ウテ云ク、「師、慈悲なきに似たり。草を惜シンで畜生を悩マす。」

僧都云ク、「我れ若シ是レを打タずんば、この鹿、人に馴れて悪人に近づかん時、必ず殺されん。この故に打つなり。」ト。

鹿を打ツは慈悲なきに似タれども、内心の道理、慈悲余れる事是のごとし。

修行の道場に入ると入らないとのちがいだけである。竜門の魚の話で言えば、竜門を通過するかしないかのちがいだけである。

また、世間で言う言葉に、「わたしは黄金を売っているのに、人が黄金を手に入れないのは、人が買わないからだ。」というのがある。仏祖の道もこれと同じである。道を惜しんで与えないのではない、常に与えているのであるが、人がそれを手に入れないのである。仏道を得るということは、生まれつきのするどいとか鈍いとかによるのではない。だれでもめいめい法を悟ることができるのである。ただ、ひたすらに努力してやまないか、なまけているかによって、道を得るのに速い、おそいがある。またその努力するか、なまけるかの違いは、志が徹底するかしないかにかかるものである。志が徹底しないのは、無常ということをよく考えないからである。われわれのからだは刻々に片はしから死んでいっている。どこまでいっても少しの間も一定な状態を保ってはいない。生きているわずかの間に、時をむなしくすごしてはならない。

またことわざに、「倉にすむねずみが腹をすかしており、田をたがやす牛が腹いっぱい草を食べたことがない。」というのがある。その意味は、倉にすむねずみは穀物を積んだ中にいるが必ずしも腹いっぱいでいるわけではなく、田を耕す牛が草の中にいても、草を食べなければ腹をへらしているということである。人もこの通りである。人みな仏道の中にいながら、それを自覚しないために、仏道にかなった生活ができないのである。自ら仏道のまったただ中にいることに気がつかず、ほかに悟りがあるかと思って、ねがい求める心

注

一　山西省黄河の上流に竜門県あり。滝が三段になっていて竜門三級という。
二　塩からい。「鹹　シハ、ユシ、シホカラシ」(名義抄)。
三　達磨門下の禅僧。正法をまっすぐに伝えた仏弟子として、誇りをもって用いている。
四　正法眼蔵出家巻に「諸仏諸祖の成道、ただこれ出家受戒のみなり」とある。
五　「方　ケタニ」(名義抄)。四角い衣、すなわち仏袈裟のこと。
六　斎は、太陽が南中するまでに食べる一日一回の正式の食事。これを補って早朝には粥を食べる。仏門の定まった食事のしかた。
七　諸の善いことを心をこめて実行して休みのないこと。
八　「ケダイ、オコタリオコタル」(日葡辞書)。
九　精進と懈怠ということがあるのは。
一〇　いかなるものも常に変遷してとどまることがないこと。「誠に夫れ、無常を観ずる時、吾我の心生ぜず、名利の念起らず、時光のはなはだ速やかなることを恐怖す」(学道用心集)。「しばらく無常を心にかけて、よのはかなく、人のいのちのあやふきことをわすれざるべし」(正法眼蔵道心巻)。
一一　念は、外界の刺激に応じて記憶をとどめる心のはたらき。ゆえに時間的には一瞬一瞬と同じ。すべてのものが無常であるということは、刻々に一つの状態が死滅して

がある間は、一生安楽に生きることはできないのである。

さてまた、仏道に深くいたっている人の行ないというものは、善行につけ、悪行につけ、それぞれ考えがあってやっているものである。ほかの人がおしはかることのできないものである。昔、恵信僧都は、ある日、庭さきで草を食べている鹿を、人に命じて打ちたたいて追い払わせた。

そこにいた人が、「あなたさまは、慈悲のお心がないかのようです。なぜ庭先の草を惜しんで畜生を苦しめるのですか。」とたずねた。

僧都は、「わたしがもしこの鹿を打たなかったら、この鹿は人をこわがらなくなり、悪人にも安心して近づいて、殺されるにちがいありません。だから打つのです。」と言われた。

鹿を打つのは、見かけは慈悲がないようであるが、心の内の道理は、慈悲のあふれていることはこの通りである。

次の状態があらわれているということである。

一二 「仏道を行ずる者は、すべからく自己本道中にあって迷惑せず、妄想せず、顛倒せず、増減なく、誤謬なしと信ずべし。」（学道用心集）。

一三 ねがい求める心。

一四 源信。（九四二—一〇〇三）恵心院に住した。大和国葛城の人。比叡山の慈恵大師につき天台の教学の奥儀をきわめ、権少僧都となる。専修念仏を説き、わが国念仏宗の基礎をなす。『往生要集』『一乗要訣』等の著がある。

校訂

1 文意を考えて補う。慶安本、流布本とも「喫し衣も同じく」とある。

2 濁点原本にあり。

八　人法門を問ふ

一日示ニ云ク、人、法門を問ふ、あるイは修行の方法を問フ事あらば、納子ハすべからく実を以て是レを答フベシ。若シクは他の非器を顧み、あるイは[一]初心未入の人意得べからずとて、[二]方便不実を以て答フべからず。[三]菩薩戒の意は、直饒小乗の器、小乗ノ道を問フとも、ただ[四]大乗を以て答フべきなり。[五]如来一期の化儀も、尓前方便の権教は実に無益なり。ただ[六]最後実教のみ

ある日、教えて言われた。

人が仏の教えをたずねることがあったり、または修行の方法をたずねることがあったら、達磨門下の禅僧は、必ず真実をもって答えるべきである。あるいは相手がそれに耐えうるかどうかを考え、あるいは初心の人や、まだ真実の法を聞いたことのない人には、わからないだろうといって、かりの手だてや、真実でないことをもって答えてはいけない。菩薩戒の中に説かれている趣旨は、よしんば

実の益あるなり。

然れば、他の得不得をば論ぜず、ただ実を以て答フべきなり。若し此ノ中の人(これ)を見ば、実徳を以て是レをうる事を得べし。仮徳を以て是レをうる事を得べし。外相仮徳を以て是レを見るべからず。

昔、孔子に一人有ツて来帰す。

孔(子)問ウて云ク、「汝何を以てか来ツて我レに帰する。」

彼の俗云ク、「君子参内の時是レを見しに、顒々として威勢あり。依ツて是レに帰す。」ト。

孔子、弟子をして乗物・装束・金銀・財物等を取り出シて是レを与へき。

「汝我レに帰するにあらず。」ト。

また云ク、宇治の関白殿、有ル時鼎殿に到ツて火を焼く処を見る。

鼎殿見て云ク、「何者ぞ、左右なく御所の鼎殿へ入るは。」と云ツておひ出されて後、さきの悪き衣服を脱ギ改メて、顒々として取り装束して出給フ時に、前の鼎殿、遙にみて恐れ入ツてにげぬ。時に殿下、装束を竿に掛けられて拝せられけり。人、是レを問ふ。

「我レ人に貴びらるるも我が徳にあらず。ただこの装束の故なり。」ト。

愚かなる者の人を貴ブ事是ノごとシ。経教の文字等

小乗しかわからないような人が、小乗の道をたずねても、ただ、自分は大乗をもって答えるべきだというのである。釈尊一代の教化のなされ方も、真実の教えを説かれる以前のかりの教えは、まことに益がない。ただ、一代の最後、入滅の前に説かれた真実の教えだけが、ほんとうに益があるのである。

だから、相手が理解するかしないかは問題とせず、ただ、真実をもって答えるべきである。もし、教えをその通りに聞ける人が聞いたならば、実徳の人は実徳をもって法をさとることもできるであろうし、仮徳でもって法をさとることもできるであろう。姿かたちのよしあしや、表に見える徳でもって人を見てはならない。

それについて、昔、孔子のところへ一人の人が、従者になりたいと言ってやって来た。そこで孔子がたずねて言った。「お前は、どういうわけでわたしの従者になろうというのか。」

その男が言った。「あなたさまが宮中へおいでになるとき、お姿を見ましたところ、いかにも立派で勢いがありました。それであなたさまのお身内になりたくてまいりました。」

すると孔子は、弟子に命じて乗り物・衣装・金銀・財宝等を取り出して与え、「お前は、わたしに信服して来たのではない。この衣装におどろいただけだ。」と言った。

また言われた。

宇治の関白殿(藤原頼通)が、ある時、宮中の鼎殿にはいって、火をたくところを見ておられた。それを鼎殿の役人が見つけて、「むやみに宮中の鼎殿にはいっているのは何者だ、こんな所にいて

を貴ブ事もまた是ノごとシ。

古人云ク、「言[15]、天下に満チテ口過無く、行、天下に満チテ怨悪を亡ず。」ト。是レ則チ言ふべき処を言ヒ、行フべき処ヲ行ふ故なり。至徳要道[16]の行なり。世間の言行は私然[17]を以テ計らひ思ふ。恐らくは過のみあらん事を。衲子の言行ハ先証是レ定マれり。私曲[18]を存ずべからず。仏祖行ヒ来れる道なり。

学道の人、各自ラ己ガ身を顧みるべし。身を顧みると云フは、身心何やうに持ツべきぞと顧ミルべし。然ルに衲子は、則ち是レ釈子[19]なり。如来の風儀を慣フべきなり。身口意の威儀、皆[20]千仏行じ来れる作法あり。各そノ儀に随フべし。俗なほ「服[21]、法に応じ、言、道に随フべし。」と云へり。一切私を用フるべからず。

注

一　初心は仏道にはいったばかりの人。未入はまだ真実の法を聞かない人。「初めて一実を聞きて已に華台に入る。未入の者のために頓より漸を開す。」(法華玄義巻二)。

二　教えを聞く者の条件にあわせて教化するかりのてだて。

三　梵網経四十八軽戒の第十五に、「若仏子、仏弟子より外道悪人、六親、一切の善知識に及ぶまで、応に一々教へて大乗経律を受持せしむべし……而るを菩薩、悪心瞋心を以て、横に二乗声聞の経律、外道邪見の論等を教ふ

はいけない。」と言って追い出した。関白殿はそこで、前の見苦しい衣服を脱ぎ、関白の装束をさっとつけて、おごそかに、出ておいでになった。するとさっきの鼎殿の役人は、遠くからこれを見て、恐れ入って逃げてしまった。その時関白殿は、関白の装束を竿にかけて、うやうやしく拝された。おそばの人がその理由をたずねると、「わたしが人から尊重されるのも、自分にそなわった徳のせいではない。ただこの衣装のおかげである。」と言われた。

頭の粗雑な人間が人を尊重するのは、せいぜいこのようなものである。経文や教義の文句などをありがたがるのも、またこれと同様である。

孝経に、「為政者の言葉が天下一般に行なわれて言葉にあやまちがなく、為政者の行ないが天下一般に行なわれて、だれもうらみを抱くものがない。」とある。これはすなわち、言うべきことを言い、行なうべきことを行なうからである。これが最高の徳であり、道の最も大切なところを心得た行ないである。

世間の人の言行は、自分の考えで、よいとしてやってみる。おそらく間違いばかりではなかろうか。しかし、達磨門下の禅僧の言行には、昔からの実例がはっきり定まっている。自分勝手の間違った考えを持ってはならない。これがすなわち仏祖が代々行ってこられた道である。

仏道を学ぶ人は、めいめい自己の身を反省してみよ。自分の身を反省するというのは、身と心とをどのようにしていったらいいかと反省するのである。しかるに、仏弟子というのは、とりもなおさず、

れば軽垢罪を犯す。」とある。

四　大乗は Mahāyāna の訳。音訳は摩訶衍。乗は乗り物の意で大きな乗り物。これに乗って行けば真実の世界に至る。これに対して自分ひとり煩悩を去って空寂の境地に達しようとする声聞縁覚の教えを小乗という。道元禅師の仏法は大小乗の区別なくすべて一仏乗の立場であるが、ここは一応、教判の意味で区別している。

五　天台智者大師（五三八—五九七）の教相判釈は、仏教の全経典を五時（華厳・阿含・方等・般若・法華涅槃）八教（蔵・通・別・円・頓・漸・秘密・不定）に分けて組織立て、四十余年はいまだ真実をあらわさず、ただ法華涅槃時に至ってはじめて真の大乗を説いたとする。比叡山に学んだ者は、この教判が常識となっているから、今それによって説いているのであろう。次の「尓前方便の権教」も、法華に至る以前は、かりの教えと見る立場から言う。「尓前」は、ニゼンとも読むが、今、原本のかなに従っておく。

六　前項にあげた天台の教判五時のうち、釈迦入滅の前八年間に説いた真実の教え。法華涅槃時をさす。

七　実徳とは人々本具の仏性、仮徳は因縁によって表われた眼前の姿。実とか仮とか、初心、後心など、対立する概念は大乗仏教の立場からは、固定した差はない。

八　顔や姿の美醜等身体の上にあらわれたもの。

九　中国春秋時代の政治思想家。儒家の祖。世界の四聖人の一。弟子を教えて倦まなかった。この話で、物を与えて返したのは、従者志願の人であったからであろう。

釈尊の子である。だから、釈迦如来のなされかたの通りにすべきである。身ですること、口に言うこと、意に思うことのそれぞれについて、多くの仏が、同じように行なってこられた作法がある。めいめい、そのきまりに随いなさい。孝経でも、「衣服は先王の法にかなったものを用い、言葉は道にしたがって言うべきである。」と言っている。決して自分だけの考えを用いてはならない。

一〇　さかんなさま。また厳正のかたち。「稽古とは…古今の耳をして顒々然として聴かしむ。」(知事清規)。

一一　藤原頼通（九九二—一〇七四）。藤原道長の子。康平四年（一〇六一）太政大臣となる。宇治に平等院を建て、延久四年（一〇七二）八十一歳で剃髪、法名を蓮花覚と言った。「クヮンバク」(日葡辞書)。

一二　宮中主殿寮で、お湯殿の湯をわかす所。またその役人。

一三　取り太刀（いそいで太刀をとってかけつける意）という言葉が太平記にある。ここもすばやく装束をつけることであろう。

一四　皇族・摂政・関白・将軍などにつけた敬称。「テンガ」(日葡辞書)。

一五　古文孝経、卿大夫章第四「言、天下に満ちて口過亡（あやまちな）く、行、天下に満ちて怨悪を亡ず。三者備はり矣、然して後よくその宗廟を守るはけだし卿大夫の孝なり。」

一六　孝経、開宗明義第一「子曰く、先王至徳要道有り以て天下を順ふ。民用（もつ）て和睦し、上下怨無し。」

一七　自分で正しいとする。あるいは思念の音写か。「シネン、オモイ、ウ」意味は思案、考え。(日葡辞書)。

一八　公でなく、正でないこと。「監院の職は為公これ務む。いはゆる為公とは、私曲無きなり。」(知事清規)。

一九　衆生は仏戒を受けると仏の子となる。釈尊の子であるから釈子という。「既に仏子たり、いづくんぞ仏風に慣（なら）はざらんや。」(学道用心集)。

二〇　過去・現在・未来の三劫（数えきれない長い時間をあらわす）に、それぞれ千仏の出世があることになってお

り、釈尊はそのうち賢劫（現劫）の第四仏である。ここは無量の長い時間の間に、時あって出現する仏がすべてという意味。

三　「先王の法服にあらざればあへて服せず、先王の法言にあらざればあへて道はず、先王の徳行にあらざればあへて行ぜず。このゆゑに法にあらざれば言はず、道にあらざれば行なはず。」（孝経卿大夫章第四）。「俗なほいはく、先王の法服にあらざれば服せずと。仏子いづくんぞ仏衣にあらざらんを著せん。」（正法眼蔵袈裟功徳巻）。

校訂

1　原文のふりがなは「ニヘドノ」。漢字によってかなを改めた。「贄殿（にへどの）」は、宮中供御の料を納めておく所。

九　当世学道する人

示ニ云ク、当世学道する人、多分法を聞ク時、先ヅ好く領解する由を知られんと思ウて、答の言の好カらんやうを思ふほどに、聞くことは耳を過ゴすなり。詮ずる処道心なく、吾我を存ずる故なり。

ただすべからく先づ我レを忘れ、人の言はん事を好く聞イて、後に静カに案じて、難[二]もあり不審もあらば、逐ても難じ、心得たらば逐ツて帰すべし。[四]当座に領

教えて言われた。

近ごろ仏道を学ぶ人は、多くは、法を聞く時、まず、理解の早いのをわかってもらおうとして、気のきいたうけ答えをしようと思っているうちに、肝心の聞くべきことを、聞きのがしてしまう。結局のところ、道心がなく、自分というものを捨てていないからである。

法を聞く時は、ただ、ぜひともまず自分というものを念頭におかず、相手の言うことをよく聞いて、それから静かに考えて、もし欠

（解）する山を呈せんとする、法を好クも聞カざるなり。

注

一 「リャウゲ　サトリ、トク」（日葡辞書）。
二 欠点。まちがい。「ナンヲ　ユウ」（日葡辞書）は、誤解・間違いを非難する意。
三 帰依する。
四 その場で。

十　唐の太宗の時

示ニ云ク、唐の[1]太宗の時、異国より[2]千里ノ馬を献ず。帝是レを得て喜（よろこ）ばずして自ラ思はく、「直饒（たとひ）千里の馬なりとも、独（ひと）り騎（の）ツて千里に行くとも、従ふ臣なくんばそノ詮（せん）なきなり。」ト。因（ちな）ミニ魏徴（ぎちょう）を召シてこれを問フ。徴云く、「帝の心と同じ。」ト。依ツて彼（か）の馬に[4]金帛（はく）を負（おほ）せて還サしむ。

[5]今は云ク、帝なほ身の用ならぬ物をば持タずして是レを還ス。況ンヤ衲子ハ衣鉢（えはつ）の外（ほか）の物、[6]決定（けつぢやう）して無用なるか。無用の物、是レを貯（たくは）へて何かせん。俗なほ一

点や、疑問があったならば、次の機会にでも欠点をあげて論難し、納得がいったらその上で帰依したらよい。その場でよくわかった様子を見せようとするのは、肝心の法の話を、よくも聞いていないのである。

教えて言われた。

唐の太宗の時、外国から一日に千里を走る名馬を献上した。太宗はこれをもらっても喜ばず、ひそかに、「たとえ千里をゆく駿馬（しゅんめ）でも、自分ひとり乗って千里の先を走っても、あとについて来る家来がなかったなら、そのかいがない。」と考えた。

そこで魏徴を呼んで、これについて意見を求めた。

魏徴は、「わたくしの考えも陛下と同じでございます。」と言った。

それで、その馬に黄金や絹織物を背負わせて、贈り主に返させた。

今言おうとするところは、世俗の帝王でさえ無用の物は持たないで、これを返した。まして、達磨門下の禅僧は、袈裟・応量器以外

道を専ラにする者は、田苑荘園等を持スる事を要とせずぃ ただ一切の国土の人を百姓眷属とす。地相法橋子息に遺嘱スルニ、「ただ道を専ラにはげむべしっ」と云へり。況ンや仏子は、万事を捨て、専ラ一事をたしなむべし。是レ用心なり。

の物は、間違いなく無用であろう。無用の物をためておいて何になろう。在俗の人でさえ一つの道を専門にする人は、田苑や荘園などを持つことを必要としない。ただ一切の国土の人を、自分の領地にすむ民や一族の者と見るのである。

地相法橋はむすこに遺言して、「ただ道をもっぱらはげみなさい。」とだけ言った。まして、仏弟子は、万事をすてて、ひたすらに一つの事を身につけなくてはならない。これが心得である。

注

一 李世民（五九六—六四九）高祖の次子。隋末の乱れに当たり、父に勧めて挙兵せしめ、海内統一をなして秦王に封ぜられた。兄建成、弟元吉が世民の偉名をねたんで彼を殺そうとしているのを知り、かえって彼らを殺して帝位に即いた。在位二十三年、世に貞観の治といわれる。『帝範』の著あり。

二 ここは貞観政要からの引用であるが、『貞観政要』巻二にある話は次の通りである。太宗が西域に使いを発して良馬を求めた。これに対し、魏徴がいさめて、「ムカシ漢ノ文帝、千里ノ馬ヲタテマツルモノアリ、文帝ノノタマハク、予ヨノツネノアルキニハ、日ニユク事三十里ニスギズ。モシニハカナル事アツテアルカン時、日ニ五十里ニスグベカラズ……千里ノ馬アリトイフトモ、ワレヒトリノリテイヅクニカユカンヤ、スナハチソノイテマキレルミチノツヒエヲツグノヒテコレヲカヘス」（『仮名貞観政要』による。かなづかい訂）と言って、馬を買うのをやめさせた。この段の話では馬を返したのが太宗に

なっているが、それはこの随聞記が聞き書きであることを示すものであろう。『仮名貞観政要』は、江戸時代の出版であるが、そのよみ方は、道元禅師と同時代の菅原為長（一一五八—一二四六）が北条政子の求めに応じて書きくだしたものと伝える。

三　字は玄成。唐初の名臣。はじめ太宗の兄建成に仕え、世民の偉名日に盛んなのを見て早くこれを殺すようにと勧めた。太宗は、自分を殺そうとした者であるがその一命をかえりみず直諫する意気を愛し、諫議太夫、検校侍中に任じ、鄭国公に封じた。孔穎達のもとに周書、隋書の編纂に従った。二十四史中直諫第一と称せられる。

四　帛は絹織物。

五　今この話を引いて言おうとするところは。

六　「ケツジャウ、サダメ、(サダ) ムル」(日葡辞書)。事が定まって動かないのに言う。決定信、決定業などと使われる仏教用語。

七　貴族や寺社の私有地。同時にその地の人民も隷属した。

八　「百姓」は人民、庶民。「眷属」は一族、親族。ここは自分につき従うもの。

九　法橋は僧位の名。法眼の次に位し、五位に準ずる。地相は、固有名詞であろうが、いかなる人か不明。

校訂

1　原文、大宋。

2　原文、巍。

十一　学道の人、参師聞法の時

示ニ云ク、学道の人、参師[一]聞法の時、能々窮メて聞キ、重ネて聞イて決定すべし。問フべきを問はず、言ふべきを言はずして過ゴしなば、我が損なるべし。師は必ず弟子の問ふを待ツて発言するなり。心得[二]〈経〉たる事をも、幾度も問ウて決定すべきなり。師も、弟子に能々心得たるかと問ウて、云ひ聞かすべきなり。

注

一　師のところへ行って法を聞くこと。
二　わかって時を経る。

十二　道者の用心

示ニ云ク、道者の用心[一]、常の人に殊なる事有り。故[二]建仁寺ノ僧正在世の時、寺絶食す。有る時一人の檀那[三]請じて絹一疋施す。僧正悦ビて自ラ取ツて懐中して、人にも持せずして、寺に返ツて知事[四]に与へて云く、「明旦の浄粥等に作さる（べし）。」

教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、師匠の所へ行って法を聞くときは、よくよく窮極のところまで聞き、何度も重ねて聞いて、心に疑いのないようにすべきである。問うべきを問わず、言うべきを言わないで過ごしたなら、それは自分の損であろう。

師匠というものは、必ず弟子の質問を待って発言するものである。だから、わかったつもりでやってきたことでも、何度も尋ねて疑いのないようにすべきである。師匠のほうでも、弟子によくよくわかったかとたずねて、言って聞かすべきである。

教えて言われた。

仏道に深く至った人の心がけは、普通の人とはちがったところがある。

なくなった建仁寺の栄西僧正が在世の時、食物がなくて寺じゅう何も食べられないことがあった。そうしたある時、一人の檀家が僧

然ルに俗人のもとより所望して云ク、「恥がましき事有ツて絹二三疋入ル事あり。少々にてもあらば給ハるべき」よしを申す。僧正則ち先の絹を取リ返して即ち与へぬ。時にこの知事の僧も衆僧も思ひの外に不審す。

後に僧正自ラ云く、「各、僻事にぞ思はるらん。然れども、我れ思ハくは、衆僧面々仏道の志ありて集マれり。一日絶食して餓死すとも、苦シかるべからず。俗の世に交はれるが、指当ツて事闕らん苦悩を助ケたらんは、各々のためにも、一日の食を去ツて人の苦を息メたらんは、利益勝れたるべし。」ト。

道者の案じ入れたる事、是ノごとシ。

注

一　釈氏要覧に智度論を引いて、「得道の者を名づけて道人となす。余の出家者の未得道の者、また道人と名づく。道者またこの説に同じ。」と言う。

二　明菴栄西（一一四一―一二一五）。備中吉備津の人。十一歳の時安養寺に入り、十四歳、叡山に上り、ひろく顕密を学んだ。一一六八、一一八七年の二回入宋して虚菴懐敞から臨済宗黄竜派の禅を伝えた。幕府の支持を得て京都の建仁寺、鎌倉の寿福寺に住した。『興禅護国論』を著わし、叡山の圧迫を受けながら禅をひろめるにつとめた。栄西

正をおよびして絹一疋を布施としてさしあげた。僧正は喜んで、自ら取ってふところに入れ、人にも持たせず、寺に帰って知事に与えて、「明朝のお粥などにするように。」と言われた。

ところがある俗人のところから依頼があり、「体面にかかわる事情がございまして、絹二三疋どうしても入用でございます。少しでもありましたらいただきたい。」ということを言ってきた。僧正は直ちに例の絹を知事からとり返して、そのままその俗人に与えてしまった。その時にはこの知事の僧も修行の僧たちも、僧正のふるまいを思いがけぬことと不審に思った。

あとで、僧正は自分から、「あなたがたは、わたしのやることを間違ったこととお思いになるでしょう。しかしわたしが思うには、あなたがたはめいめい仏道を行じようという志があってここに集まっておいでです。その志どおり寺にいて、一日絶食して餓死しても、さしつかえはありますまい。在俗の人が世間づきあいをしていて、現に必要なものがなくて困るその苦悩を助けたならば、すなわち一日の食物をさいて人一人の苦しみをなくしてやるのですから、ごめいめいのためにも、利益は立ちまさっておりましょう。」と言われた。

仏道に深く至った人が、道のことを深く考えていることは、この通りである。

は道元禅師の出家後四年で入寂している。道元禅師が栄西に直接教えを受けたか否かについてはなお問題もあるが、天文本建撕記には、「建仁開山の会にいますこと四ヶ年なり」とあり、正式に建仁寺に入って明全に師事するまでは、比叡山と建仁寺との間を自由に往来していられたのであろうと見ている。

三 dāna 施と訳す。dānapati（檀越）が施主であるが、混同して檀那でも施主の意となる。

四 寺院内外の事務をつかさどる役。禅門には都寺・監寺・副寺・維那・典座、直歳の六知事がある。

五 禅院では朝はかゆをいただく。

六 三人あるいは四人以上の比丘が和合しているのを僧伽(saṅgha)、すなわち衆という。梵音と意訳とを重ねた語。「シュゾウ、モロモロノソウ」(日葡辞書)。

七 「ヒガコト」(日葡辞書)。

十三　仏々祖々、皆本は凡夫なり

示ニ云ク、仏々祖々皆本は凡夫[一]なり。凡夫の時は必ず悪業もあり、悪心もあり。鈍もあり、癡もあり。然レども皆改めて知識[二]に従ひ、教行[三]に依りしかば、皆仏祖と成りしなり。

今の人も然るべし。我が身おろかなれば、鈍なればと卑下する事なかれ。今生[四]に発心[五]せずんば何の時をか

教えて言われた。

どの仏もどの祖師も、皆もとは凡夫であった。そして凡夫の時には必ず悪い行ないもあり、悪い心もあった。にぶくもあり、ばかでもあった。しかし皆それを改めて、指導者に従い、仏の教えと仏の行ないとによって修行したので、みな仏となり祖となったのである。

現今の人もそうでなくてはならない。自分はばかだから、鈍いか

待ツべき。好むには必ず得べきなり。

注

一 聖者（惑いを断ち、真理を証した人）に対する称。迷いの中にある者。法華経に「凡夫は浅識にして、深く五欲に著す」とある。
二 指導者。
三 教えと修行。
四 この世に命のある間。
五 発菩提心。仏道に入り仏智を証する志をおこすこと。

十四 俗の帝道の故実を言ふに

示ニ云ク、俗の帝道の故実を言フに云ク、「虚襟[一]にあらざれば忠言を入れず。」ト。言は、己見[二]を存ぜずして、忠臣の言に随ツて、道理に任せて帝道を行ナフなり。

衲子の学道の故実もまた是ノごとクなるべし。若し己見を存ぜば、師の言耳に入らざるなり。師の言耳に入ラざれば、師の法を得ざるなり。

また、ただ法門の異見を忘るるのみにあらず、また世事[三]を返して、飢寒等を忘レて、一向に身心を清めて[四]

らといって卑下してはならない。この世で発心しなければ、どんな時を待って発心することがあろう。捨てずに行じていると、必ず道を得ることができるのである。

教えて言われた。

俗世の帝王の道の秘訣を説くのに、「心をむなしくしていなければ忠言を受け入れることができない。」と言っている。その意味は、自分の考えをすてて、忠臣の言葉にしたがって、道理のままに帝王の道を行なうのである。

達磨門下の禅僧が仏道を学ぶ秘訣もまた、この通りであろう。もし自分の考えを持っていると、師匠の言葉が耳にはいらないのである。師匠の言葉が耳にはいらなければ、師匠の法が身につかないのである。

聞ク時、親シく聞クにてあるなり。是ノごとク聞ク時、道理も不審も明ラめらるるなり。

真実の得道と云フも、従来の身心を放下して、ただ直下に他に随ひ行けば、即ち実の道人にてあるなり。

これ第一の故実なり。

注

一 心がむなしいこと。虚心。

二 自分一個の意見。

三 世俗のことを持ちこまないこと。

四 自分の思量、分別を全くなくすること。「参師聞法の時、身心を浄うし、眼耳を静かにし、唯、師の法を聴受して更に余念を交へざれ。」(学道用心集)。

五 師をさす。

さらに、ただ教えの上でのちがった考えを持たないばかりではない、世俗の事をいっさい持ちこまず、飢えや寒さも念頭におかず、ひたすら身心を無にして法を聞く時こそ、真に身に親しく聞けるのである。このようにして聞くとき、道理も不審も、自然に明らかになるのである。

真実の得道ということも、これまでの身心をなげ捨てて、ただまっすぐに師匠の教えについてゆけば、それがとりもなおさず真実の仏道の人なのである。

これが第一の秘訣である。

正法眼蔵随聞記　二

一の㈠　続高僧伝の中に

一日示ニ云ク、『続高僧伝』の中に、ある禅師の会に一僧あり。金像の仏と、また仏舎利とを崇め用ヒて、衆寮等にも有ツて、常に焼香礼拝し恭敬供養す。有ル時禅師の云ク、「汝が崇むる処の仏像舎利は、後には汝がために不是あらん。」ト。その僧肯ず。

師云ク、「是レ天魔波旬の付処なり。早く是レを捨テざらんや。」そノ僧憤然として出づれば、師、僧の後に云ヒ懸けて云ク、「汝、箱を開イて是レを見ルべし。」

(僧)、怒りながら是レを開イて見れば、果して毒蛇蟠つて臥せり。

是レを思フに、仏像舎利は如来の遺骨なれば恭敬すべしといへども、また一へに是レを仰ぎて得悟すべしと思はば、還ツて邪見なり。天魔毒蛇の所領と成る因縁なり。仏説に功徳あるべしと見えたれば、人天の福

ある日、教えて言われた。

『続高僧伝』の中に、次のような話がある。ある禅師の門下に、一人の僧がいた。この僧は黄金の仏像と仏舎利とをありがたがって持っていて、衆寮などにいても、いつも香をたいて礼拝し、つつしみうやまい、供養していた。

ある時禅師が、「お前がありがたがっている仏像と舎利は、後にはお前のためによくないことになるだろう。」と言われた。しかし、その僧は納得しなかった。

禅師は、「こんな物は、天魔のとりつき場所である。急いで捨てないか。」と言った。言われた僧はむっとしてその場から出て行ったので、禅師は僧のうしろから声をかけた。

「お前、箱を開いてそれを見るがよい。」

その僧が怒りながら箱を開いて見ると、はたして毒蛇がとぐろをまいていたという。

この話について考えるのに、仏像とか舎利とかいうものは釈迦如

分と成る事、生身と斉し。惣て三宝の境界、恭敬すれば罪滅し功徳を得る事、悪趣の業をも消し、人天の果をも感ずる事は実なり。是レによりて仏の悟りを得たりと執するは僻見なり。

仏子と云フは、仏教に順じて、直に仏位に到らんためには、ただ教に随ツて功夫辦道すべきなり。その教に順ずる実の行と云フは、即チ今の叢林の宗とする只管打坐なり。是レを思フべし。

注

一 三十巻。唐の道宣（五九六―六六七）の著。梁の慧皎の『高僧伝』に続いて、梁の天監年間から唐の貞観年間に至る高僧の伝を記しあつめてある。本書巻五第七段に、「因みに高僧伝・続高僧伝を披見せしに」とあり、道元禅師がその修行時代、読んだ書の一つである。

二 一人の宗師のもとにあつまって修行する門下。

三 仏の遺骨。唐招提寺に鑑真がもたらした仏舎利のように宝石などの場合もある。

四 看読寮。僧堂が坐禅・斎粥等の道場であるのに対し、斎・粥などの終わったあと、仏経祖録を見るための建物。

五 三宝に香華、飲食等を供え、ほめたたえて敬い、教えにしたがって修行すること。ここは、香華などを供えたのである。

来の遺骨であるから、つつしみうやまうべきではあるが、また一方、ただただこれをあがめていれば悟りが得られると思うのは、かえって間違った考えである。天魔や毒蛇のとりことなる因縁である。仏の説かれた教えに、うやまえば功徳があるであろうと書かれてあるから、仏像・舎利が人間界・天上界にしあわせをもたらすもととなることは、ほんものの仏と全く同じである。一体に、仏法僧の三宝と称せられるものは、どんなものでもたいせつにしてうやまえば、罪が消え、功徳を受け、地獄・餓鬼・畜生などに生まれる悪業をも消し、人間界や天上界に生まれる果報をも受けることは真実である。しかし、この三宝をうやまうことによって、仏の悟りを得たと思いこむのは、間違った考えである。

仏弟子というものは、仏の教えに従って、直接に仏の位に至ろうとするのであるから、そのためには、ただ教えにしたがって一生懸命、仏道に力をいたすべきである。その教えに従う真実の修行というのは、すなわち、今のこの修業の道場が第一とする只管打坐である。よくよくこれを考えよ。

六　よくないこと。

七　天魔は欲界の最上位、第六天の魔王。人の真実の智慧を断ち、悪業を成就させる。波旬（Pāpiyas）はその名である。

八　よりつく手がかり。

九　仏十号の一。ここは釈尊をさす。

一〇　因果の道理を無視する間違った考え。

一一　領有するところ。ここは魔王につかまえられて、魔王の手下となること。

一二　因は事物の起源、縁は因が果を結ばせる動機、または作用。ここはたより。

一三　人間界と天上界。

一四　現世のしあわせを受けるもととなる行（ぎょう）。道分（さとりを得るもととなる行）に対する。

一五　本人。舎利のほんものである仏。

一六　仏法僧の三宝。三宝には、一体三宝（無上の真理と、その清浄の徳と和合の徳）、現前三宝（如来と、如来の証した法と、如来の法を学ぶもの）、住持三宝（仏像、経巻、剃髪染衣の僧）の三種がある。

一七　環境として認識される対象。とにかく三宝と名づけられる対象のすべてをさす。

一八　六道のうち、悪業の因によっておもむくところ。すなわち、地獄・餓鬼・畜生・修羅等。

一九　身と口と意（こころ）とのなす一切のしわざ。

二〇　衆生は仏戒を受けて仏の子となる。仏弟子。

二一　直に仏位に至るのは、坐禅以外に道がない。

三一 功夫は、力をいたすこと。辦道は成辦道業で、菩提の完成に力をいたすこと。その内容は坐禅である。

三二 ひたすら坐禅すること。『普勧坐禅儀』に説くところの坐禅。

校訂

1 原文、右傍に「ヒカ叓カ」とあり。

2 原文、工夫辦道。

一の㈡ 戒行持斎を守護すべければとて

また云ク、戒行持斎を守護すべければとて、また是レをのみ宗として、是レを奉行に立て、是レに依ツて得道すべしと思ふもまた是れ非なり。ただ衲僧の行履、仏子の家風なれば従ひゆくなり。是れを能事と云へばとて、あながち是レをのみ宗とすべしと思ふは非なり。然レばとて、また破戒放逸なれと云フにあらず。若シまた是ノごとく執せば邪見なり、外道なり。ただ仏家の儀式、叢林の家風なれば随順しゆくなり。是レを宗とすと、宋土の寺院に住せし時も、衆僧に見ゆべからず。実の得道のためにはただ坐禅功夫、仏祖の相伝なり。

また言われた。

戒律にかなった行ないをし、正午前に一食という仏弟子の規定を守るのがよいからといって、またこればかりを第一とし、これを何よりの大事として、これによって道の悟りを得ようと思うのも、これまた正しくない。戒行持斎はただ達磨門下の禅僧が今までやってきた行ないであり、仏弟子の家風であるから、したがってゆくまでである。これが結構なことだからといって、しいてこれを第一にしようと思うのはよくない。

だからといって、戒を破り、勝手気ままにせよというのではない。もしまた、破戒放逸で通そうとするならば、それは間違った考えであり、仏道にはずれている。戒行持斎はただ、仏道修行者のきまっ

是れに依つて一門の同学五根房[5]、故用祥僧正[6]の弟子なり、唐土[7]の禅院にて持斎を固く守りて、戒経[8]を終日誦[9]せしをば、教へて捨テしめたりしなり。

奘公[10]問ウテ云ク、叢林学道の儀式は百丈[11]の清規を守るべきか。然ルに、彼にはじめに「受戒護戒をもて先とす。」と見エたり。また今の伝来、相承の根本戒[12]をさづくと見エたり。当家の口決面授[13]にも、西来相伝[14]の戒を学人に授く。是レ則チ今の菩薩戒なり。然るに今の戒経に、「日夜に是レを誦せよ。」[15]と云へり。何ぞ是レを誦スルを捨テしむるや。

師云ク、然り。学人最モ百丈の規縄を守ルべし。然ルにその儀式[16]ハ護戒坐禅等なり。「昼夜に戒を誦し[17]、専ら戒を護持す。」と云フ事は、古人の行李にしたがうて祗管打坐すべきなり。坐禅の時何の戒か[18]持たれざる、何ノ功徳か来らざる。古人の行じおける処の行履、皆深キ心あり。私の意楽[19]を存せずして、ただ衆に従ツて、古人の行履に任せて行じゆくべきなり。

注

一　戒行は戒律の教えにしたがった行ない。持斎は、仏弟子の定めとして、正午までに一回食し、以後は食物をとらないこと。

たやり方であり、修行の道場の家風であるから、したがってゆくまでである。これを第一にするということは、わたしが宋土の寺院にいた時も、修行僧の間にも見られなかった。

真実道を得るためには、ひたすら坐禅に力をいたすのが、仏祖からしたしく伝わったところである。

そういうわけで、われわれと同じ建仁寺門下の五根坊—この人は故栄西禅師の弟子である—が唐土の禅院で持斎をかたく守り、梵網戒経を一日じゅうとなえていたのを、教えてやめさせたのである。

その時、わたし（懐奘）がたずねた。

修行の道場で道を学ぶきまりは、百丈禅師の制定された清規を守るべきかと存じます。そうすると、かの清規には、まず最初に「受戒・護戒を第一とする」と書いてあります。また、ただ今伝わるところも、仏祖から伝わった根本戒を授けているようでございます。わが達磨門下で弟子と師匠が顔を合わせて親しく伝える教えにも、達磨大師がインドから親しく伝えた戒を、仏道を学ぶものにさずけております。これがすなわち現在行なわれている菩薩戒でございます。しかるに、そのよりどころである梵網戒経にも「日夜これをとなえよ。」としてあります。どうして戒経をとなえるのをやめさせるのでございますか。

道元禅師が言われた。

その通りである。仏道を学ぶ人は、特に百丈の定めたきまりを守るべきである。しかるに、そこに定められているきまりは、護戒・坐禅等である。「昼夜に戒経をとなえもっぱら戒をかたく守る」と

いうことは、すなわち古人の行なったところにしたがって、ひたすら坐禅することである。坐禅の時、どの戒として持(たも)たれないということがあろうか。またどんな功徳ももたらされないということがあろうか。古人が行じておかれたところの行ないには、皆深い意味がある。個人のすき勝手な考えを持つことなく、ただ僧団にしたがって、古人の行なったところのままに行じてゆくべきである。

二　旨を奉じて行なう。「方今の務め、故事を奉行するに在るのみ。」（漢書魏相伝）。

三　戒を破り、感覚の刺激に心をうばわれること。「放逸にして五欲に入らしむることなかれ」（遺教経）。

四　仏の道場、また仏の教えを信奉する者の意ともなる。

五　三十七品菩提分法に「五根、一ニハ信根、二ニハ精進根、三ニハ念根、四ニハ定根、五ニハ慧根」とあるのがこの名のよりどころであろう。また『宝慶記』に、「道元拝問して云く、菩薩戒序とは何ぞや」、和尚示して曰く、「今隆禅が誦する所の戒序なり。」とある。この隆禅のことではなかろうか。隆禅上座のことは正法眼蔵嗣書巻にも見える。

六　栄西禅師のこと。その号葉上坊の異字音写である。このような字音による音表記は、『渓嵐拾葉集』にも「用浄房、用上房」とも見え、当時よく行なわれたものらしい。なお、「赴粥飯法」にも「用祥僧正」とある。

七　当時は宋であるが古来の言いならわしによっている。

八　戒の書かれてある経文。ここは梵網経であろう。

九　「ジュシ、スル、シタ、ヨム」（日葡辞書）。声を出してよむこと。

一〇　この「公」の字は、懐弉禅師滅後の弟子が、随聞記書写の際、敬ってつけた敬称であろう。

一一　百丈は百丈懐海（七四九—八一四）。その制定した禅院の規則。百丈は馬祖道一の法嗣。達磨門下の僧は、はじめ方方の寺に寄宿して、めいめい修行していたが、百丈のころその数もふえ、一つの寺にあつまって共同の生活をしながら修行するようになった。百丈ははじめてこのよう

た禅専門の寺をつくり、その必要に応じて規則を作った。大小乗の戒律を折衷したもので、これを古清規という。百丈滅後百九十一年、宋の揚億が景徳元年（一〇〇四）に序文を作って世に流布したが、その本文は今に伝わらない。景徳元年から百年後、宋の崇寧二年（一一〇三）に、長蘆宗賾が、諸本を校定して『禅苑清規』を出版したので、これにより古清規のおもかげを知ることができる。次にある百丈の規縄も同じものをさす。「禅苑清規に云く、……然れば則ち参禅問答は戒律を先と為す。」（正法眼蔵受戒）。「禅苑清規に云く……百丈高祖の規縄、あに虚然ならんや。」（典座教訓）。

一二　大乗の菩薩戒。梵網経に「諸仏の法戒…是れ諸仏の本源、行菩薩道の根本、是れ大衆諸仏子の根本なり。」とある。道元禅師の正伝の菩薩戒は梵網経にもとづき、三帰（帰依仏、法、僧）・三聚浄戒（摂律儀戒・摂善法戒・摂衆生戒）・十重禁戒を授ける。

一三　口伝や、直接会っての教授。

一四　道元禅師が如浄禅師のもとで伝授せられた仏祖正伝の菩薩戒。その内容は一二項参照。

一五　梵網経四十八軽戒の第三十四に、「若仏子、禁戒を護持し、行住坐臥、日夜六時に是の戒を読誦すること、なほ金剛のごとく、浮嚢を帯持して大海を渡らんと欲するがごとくなるべし。」とある。

一六　『禅苑清規』巻頭第一が受戒、次が護戒の章である。護戒の章にいわく、「受戒の後、常にまさに守護すべし、むしろ法有りて死すとも、法無くして生きざれ。」また、

坐禅、坐禅儀の章あり。

〔一七〕前出梵網経四十八軽戒第三十四。また同第十八には、「日夜六時に菩薩戒を持し、その義理、仏性の性を解すべし。」とある。

〔一八〕道元禅師の戒は坐禅と別のものではないから、坐禅をすればおのずから保たれるのである。「れ」は自発の助動詞。

〔一九〕内心に満足してよろこびをおこすこと。

校訂

1 原文、奉公。したがってここは漢音で読む。

二 人その家に生まれ、その道に入らば

一日示ニ云ク、人[一]その家に生マれ、その道に入らば、先づその家の業を修スべし、知ルべきなり。我が道にあらず、自(おの)が分にあらざらん事を知り修するは即チ非なり。

今、出家の人として、即チ仏家(ぶつけ)に入り、僧道に入らば、すべからくその業を習フべし。

その[二]儀を守ると云ふは、[三]我執を捨て、知識の教(をしへ)に随ふなり。その[四]大意(だいい)は、[五]貪欲(とんよく)無キなり。貪欲無カらんと思はば先ヅすべからク[六]吾我ヲ離ルベキなり。吾我を離

ある日、教えて言われた。

人は、ある専門の家に生まれ、ある専門の道に入るならば、まず第一にその専門の家のしごとを身につけるべきでありよく理解すべきである。そして、自分の専門の道でなく、自分のなすべき範囲でない事を知り、身につけようとするのは、すなわち心得違いである。

今、出家者として仏の道場に入り、僧の道に入るならば、ぜひとも出家としてのしごとを身につけるべきである。

その出家としてのやり方を守るというのは、自分に対する執着を捨て、指導者の教えにしたがうことである。その大事な点は、むさ

るるには、[7]観無常是れ第一の用心なり。

世人多ク、我レは元来人に能シと言ハれ思はれんと思ふなり。[8]そレが即チよくも成リ得ぬなり。ただ我執を次第に捨て、知識の言ニ随ひゆけば昇進[9]するなり。[10]「理を心得たるやうに云へども、しかありと云へども、我レはその事が捨テ得ぬ。」と云ツて執し好み修するは、弥[11]沈淪するなり。

[12]禅僧の能く成る第一の用心は祗管打坐すべきなり。利鈍賢愚を論ぜず、坐禅すれば[13]自然に好くなるなり。

注

一　一つの専門の家。
二　やり方。
三　自分の身を、実体あるものと認めるのが執着になる。
四　重要な内容。
五　欲望の対象をむさぼり求めて飽くことない心。
六　自分というもの。しかしこれは、因縁によって成り立っているのであるから、元来実体のないものである。
七　すべてのものはうつり変わって一定の状態にあるものでないことをよくよく知ること。「誠にそれ無常を観ずる時吾我の心生ぜず、名利の念起らず。」（学道用心集）。
八　その心がとりもなおさず。
九　のぼり、すすむ。「抜群昇晋す」（知事清規）。「百尺の

ぼりほしがる心がないことである。その貪欲の心をなくそうと思うならば、まず、ぜひとも自分というものを捨て去るべきである。自分を捨て去るには、無常を観ずることが、第一の心得である。

世間の人はたいてい、もともと、人から立派だと言われよう、思われようと思っている。ただ自分に対する執着をだんだんに捨て、指導者の言葉に従ってゆけば、進んで行くのである。「あの指導者は、道理のわかったような事を言うが、それはそうではあるけれども、自分はこれこれのことは捨てかねる」と言って執着し、特に取りあげて身につけようとすると、いよいよ下落するのである。

禅僧がまくなる第一の秘訣は、ひたすら坐禅すべきことである。生まれつきのするどいのも鈍いのも、賢いのも愚かなのも問題にしないで、坐禅をすれば、おのずから立派になるのである。

竿頭に昇進するとも」（正法眼蔵大悟）。

一〇 師匠の話が。

一一 しずむ。おちぶれる。昇進に対する語。

一二 「ゼンゾウ、ゼンシュウノ　ソウ」（日葡辞書）。

一三 人為の造作なくそれ自身のあり方としてそうあること。

校訂

1 「は」、原文朱書。

三　広学博覧はかなふべからざる事なり

示ニ曰ク、広学博覧はかなふべからざる事なり。一向に思ひ切ツて、留るべし。ただ一事に付イて用心故実をも習ひ、先達の行履をも尋ネて、一行を専ラはげみて、人師先達ノ気色すまじきなり。

教えて言われた。広く学び、博く書物を読むことは、到底できるものではない。すべて思い切ってやめるがよい。ただ一つの事について、心得や、秘訣を習い、先輩の修行のあとをもよく調べて、一つの行に専心努力し、人の師匠ぶったり、先輩顔をしないことである。

注

一 その道の先輩。

二 人間界に法を説く師。世尊は人間・天上の両方に法を説く。

四の㈠　如何なるか是れ不昧因果底の道理

ある時、奘、師に問ウて云ク、如何ナルカ是レ不昧因果底の道理。

師云ク、不動因果ナリ。

云ク、なにとしてか脱落せん。

師云ク、歴然一時見なり。

云ク、是ノごとくならば、果、引起すや。

師云ク、惣て是ノごとくならば、南泉猫児を截ル事、大衆已に道得ず。即チ猫児を斬却シ了ンぬ。後に趙州 草鞋ヲ脱シテ戴キ出し、また一段の儀式なり。

また云ク、我レ若シ南泉なりせば即チ道フベし、「道ヒ得たりとも即チ斬却せん。道不得なりとも即チ斬却せん。何人か猫児を争ふ、何人か猫児を救ふ。」ト。

大衆に代ツて道ハん、「既に道得す。請フ、和尚猫児ヲ斬ラン（ことを）。」ト。

また大衆に代ツて道ハん、「南泉ただ一刀両段のみを知ツて一刀一段を知ラず。」ト。

奘云ク、如何ナルカ是レ一刀一段。

ある時、懐奘が、禅師におたずねした。

「百丈野狐の話に、不昧因果ということがありますが、不昧因果の道理とは、どういうことでございますか。」

禅師が言われた。

「不動因果である。」

「因果とはそんな堅固なものであるとすれば、どうしてぬけ出られますか。」

「因果ははっきりと、同時にあらわれている。」

「因果が同時であるとすれば、次の結果を引き起こしますか。」

禅師が言われた。

「いつもそんなふうに、次々と結果を引き起こすとしたら、南泉斬猫の話はどうだろう。ある時、南泉の門下で、両堂の大衆が猫を争っていた。南泉はこれを見ると、たちまち猫を引っとらえ、『一句言ってみよ、言い得れば切らずにおこう。一言もなければ切ってしまうぞ。』と言った。しかし、大衆のうち一人として物も言えなかった。そこで南泉は猫を一刀両断に切りすててしまった。

そのあとで南泉が趙州にこの話をすると、趙州はわらじを脱いで、頭にのせて出て行ってしまった。これはまた一段とみごとなやり方であった。」

師云ク、大衆道不得、良久不対ナラバ、泉、道フベし、「大衆已に道得す。」と云ツて猫児を放下せまし。
古人云ク、「大用現前して軌則を存せず。」ト。
また云ク、今の斬猫は是レ即チ仏法の大用、あるいは一転語なり。若シ一転語にあらずは、山河大地妙浄明心とも云フべからず。また即心是仏とも云フべらず。即チこノ一転語ノ言下にて、猫児ガ躰仏身と
またこの語を聞イて学人も頓に悟入ずべし。
また云ク、こノ斬猫即チ是レ仏行なり。
喚ンで何とか道フべき。
喚ンで斬猫とずべし。
また云ク、是レ罪相なりや。
云く、罪相なり。
何としてか脱落せん。
云ク、別。並ビ具ス。
云く、別解脱戒とハ是ノごとキヲ道ふか。
云く、然なり。
また云ク、但シ是ノごとキ料簡、直饒好事なりとも無カランにはしカじ。

注

一　百丈野狐の話に出る言葉。

また禅師は言われた。
「わたしがもし南泉であったら、ずなわちこう言おう。
『一句言い得ても斬ってしまうぞ。言い得なくても斬ってしまうぞ。猫をとりあっていたのは一体だれだ。猫を救おうというのはだれだ。』
それから、わたしが大衆の代わりにこう言おう。
『このように大衆一同黙然としているのは、まさに道の全体を言い得ております。さあお師匠さま、どうぞ猫をお切りください。』
また、大衆に代わってこうも言おう。
『南泉大和尚はただ一刀両段だけを知って一刀一段を知りませんな。』と。」
懐奘がたずねた。
「一刀一段とはどういうことでございますか。」
禅師が言われた。
「大衆が一言もなく、しばらくうけ答えがなかったならば、南泉はこう言ったらよい。
『諸君が黙っているところに、道の全体がそのまま現われている。これが言い得たところだ。』と言って、つかまえていた猫を放してやったらよかろう。（猫は逃げてゆく、これが一刀一段である。）古人も、『真に偉大な働きが実現するときは、きまったやり方というものはない。』と言っている。」
また言われた。
「この南泉の斬猫は、とりも直さず仏法の偉大なるはたらきである。

あるいは言い得ないところを言いあらわして大転換をもたらす一転語である。もし、一転語でなければ、山河大地妙浄明心とも言うことはできない。また即心是仏と言うこともできない。すなわち、この一転語の言下に、直ちに猫の体を、すなわち仏の身と見るのである。またこの一転語を聞いて、学人も即座に真実の悟りに入るであろう。」

また言われた。

「この斬猫はすなわち仏行である。」

「それでは、その行為を何と名づけたらよろしゅうございましょう。」

「斬猫と言ったらよい。」

また懐奘がたずねた。

「これは罪相でございますか。」

禅師が言われた。

「罪相だとも。」

「どうしたら罪相からぬけ出せますか。」

禅師が言われた。

「仏行として大衆を悟入せしめることと、罪相ということとは別のことである。しかし、一つの行為に仏行と罪相とが同時にそなわっているのだ。」

懐奘が言った。

「別解脱戒とは、こういうのを申しますか。」

禅師が言われた。

一 洪州百丈山大智禅師、およそ参のついで、一老人有つて常に法を聴く。大衆もし退けば老人もまた退く。たちまち一日退かず。師、つひに問ふ、面前に立つ者はまた是れ何人ぞ。老人対へて曰く、某甲は是れ非人なり。過去迦葉仏の時において、かつてこの山に住す。因みに学人問ふ、大修行底の人、還つて因果に落つるやまた無しやと。某甲他に答へて云く、不落因果と。後五百生野狐身に堕す。今請ふ、和尚代つて一転語したまへ。貴むらくは野狐身を脱せんことを。つひに問うて曰く、大修行底の人、還つて因果に落つるやまた無しや。師云く、不昧因果。老人言下において大悟し、礼を作して曰く、某甲すでに野狐身を脱してこの山後に住す。あへて和尚に告ぐ、乞ふ、亡僧の事例に依れと。」(正法眼蔵大修行巻による)。正法眼蔵深信因果にもこの話をあげる。

「不昧因果の道理は、因果にくらからずとなり。」(深信因果)。「不昧因果は、因果にくらからずといふは、大修行は超脱の因果なるがゆゑに脱野狐身すといふ。」(大修行)。「底」は、上の事がらを名詞とする辞。

二 道元禅師の一転語であるが、懐奘禅師は「因果は動かすべからざるもの」と取ったので、「どうしたらそれから解脱できるか」という問いが出てくる。

三 解脱と同じ。とらわれがなくなること。

四 見は現に同じ。はっきりと、同時にあらわれている意。

「大因果と云ふは、円因果満の道理なる因果をさすなり。今の大修行の姿を因果とは談ずべきなり。」(大修行巻御抄)。「上堂、百丈野狐の話を挙し了つて云く、まさに為

へり、胡鬚赤と。希有なり、赤鬚胡。不落と不昧と。因果さらに因果。諸人因を知り果を識らんと要すやまた無しや。払子を挙して云く、看よ、看よ、因果歴然。払子を擲下して下座す。」（永平広録巻一）。

五　因果が同時に完成しているなら、次の果はどうして出てくるかと疑う。因果同時がまだ理解されていないからである。

六　南泉斬猫の話。「南泉一日、東西の両堂猫児を争ふ。泉、見て遂に提起して云く、道ひ得ば斬らじと。衆無対。師、猫児を斬却して両段となす。泉、前話を挙して趙州に問ふ。州、便ち草鞋を脱して、頭上に戴いて出づ。泉云く、子若し在りしかば猫児を救ひ得てん。」（宏智頌古・永平広録巻九頌古）。

　南泉普願（七四八—八三四）は馬祖道一の法嗣、王老師とも言われる。趙州従諗（七七八—八九七）は南泉の法嗣。六十歳から出家し、以後六十年法を説いたと伝える。ちなみに、宏智頌古では百丈野狐の話の次が南泉斬猫の話である。

七　すぐれたやり方とほめる。南泉が、弟子たる趙州に、すでにすぎ去ったことを話してたずねたのは本末転倒である、という意味を表現したのであろう。趙州は仏行のみを見て、猫を殺したことを大問題としなかった。

八　いわゆる代語である。南泉に代わって南泉より一歩進んだ道得をする。

九　絶体絶命の境地に立たせて猫児を争う当体を問う。

一〇　大衆が無対であったのは無言によって人々の当体を全露したのであるからすなわち道得である。

「その通りである。」
　また禅師は言われた。
「ただし、猫を殺して道を悟らせるというような手だては、たとい結構なことでも、ないにこしたことはなかろう。」

一一　しばらく答えがない。

一二　雲門文偃の語。すばらしい働きがあらわれる時には、一定のきまりにかかわらないという意。

一三　目前の事態そのままに真如の悟りとならせる契機をなす語。

一四　「古徳云く、作麼生か妙浄明心。山河大地日月星辰。あきらかにしりぬ、心とは山河大地なり、日月星辰なり。」（正法眼蔵即心是仏巻）。あらゆるものをあらしめている不可思議の、けがれのない心とは、山河大地、日月星辰と別のものではない。

一五　正法眼蔵即心是仏の巻参照。大梅山法常禅師は、馬祖道一から「即心是仏」と聞いて直ちに山居し、草庵に独居して坐禅弁道三十年に及んだ。一切をあらしめている原理に即して修行するのが仏であるということ。

一六　とみに。ただちに。

一七　仏教ではすべて実体あるものと考えないから、相をとるだけである。

一八　仏行と罪相と（因と果と）は別のものである。しかし、斬猫において同時にそなわっている。

一九　波羅提木叉（prātimokṣa）の訳。防非止悪の意。受戒の作法に従って、五戒、十戒等を持って、身口意の悪業を離れること。別々に戒を保つことによって全体解脱を得る。道元禅師の戒は、「一戒を受持する時、諸戒受持ならずといふ事なし。」（梵網経略鈔）という立場である。

二〇　救済手段。（日葡辞書）。手だて。

二 雲門にもこの語あり。

校訂

1 はじめからここまで、原文は前段に属しているが、内容により、段を改めた。
2 原文、不道得。
3 原文、脱草鞋。
4 原文、載。宏智頌古、永平広録により改む。
5 原文、不得の間にレ点あり。

四の(二) 犯戒と言ふは受戒以後の所犯を道ふか

弉問ウテ云ク、「一犯戒と言フは、受戒以後の二所犯を道フか、ただシまた未受以前の罪相をも犯戒と道フべきか。

師答ヘテ云ク、犯戒の名は受後の所犯を道フべし。未受以前所作の罪相をばただ罪相、罪業と道ツて、犯戒と道フべカラず。

問ウテ云ク、三四十八軽戒の中に、未受戒の所犯を犯と名ヅクと見ゆ。如何。

答ヘテ云ク。然ラず。彼の未受戒の者、今受戒せんとする時、所造の罪を四懺悔する時、今の戒に望めて十

懐弉がたずねて言った。

「犯戒（戒を犯す）ということは、戒法を受けてから後に犯したことを言うのでございましょうか、それともまた、受戒以前の罪相をも犯戒と言うべきでございましょうか。」

禅師が答えて言われた。

「犯戒ということは、受戒以後の犯したところについて言うのである。まだ受戒しない前に犯したところの罪相は、ただ罪相（罪のすがた）、罪業（罪のしわざ）と言って、犯戒と言うべきではない。」

懐弉がたずねて言った。

「梵網経の四十八軽戒の中に、未受戒の時に犯したところを犯すと

戒を授クルに、軽戒ヲ犯セルを犯すと云フなり。以前所造ノ罪を犯戒と云フにあらず。

問ウテ云ク、今受戒せん時、所造の罪を懺悔せんために、未受の者をして懺悔せしむるに、「十重四十八軽戒を教へて読誦せしむべし。」と見エたり。また下ノ文に、「未受戒の前にして説戒すべからず。」と云へり。二度の相違如何。

答ヘテ云ク、受戒と誦戒とは別なり。懺悔のために戒経を誦ずるはなほ是レ念経なるが故に、未受の者、戒経を誦せんとす。彼がために戒経を説カん事、咎有ルべカラず。下ノ文には「利養のための故に、」未受の前に是レを説くことを修せんとす。最も是レを教フべし。

問ウテ云ク、受戒の時は七逆の懺悔すべしと見ゆ。如何。

答ヘテ云ク、実ニ懺悔すべし。受戒の時許サざル事は、且ク抑止門とて抑フる儀なり。また上の文は、破戒なりとも還得受せば清浄なるべし。懺悔すれば清浄なり。未受にハ同じカラず。

問ウテ云ク、七逆既に懺悔を許さばまた受戒すべきか、如何。

答ヘテ云ク、然なり。故僧正自ラ立つ所の義なり。既に懺悔を許サばまた是レ受戒すべし。逆罪なりとも

名づけると見えますがいかがでございましょう。」

禅師が答えて言われた。

「そうではない。四十八軽戒の中で言っているのは、未受戒の者がこれから受戒しようとする時、今までに造った罪を懺悔する時、これから受けようとする戒にてらして、十戒を授けるのに、今までした行為の中で四十八軽戒にあたる行為を犯しているのを、『犯した』と言うのである。受戒以前に犯した罪を犯戒と言うべきではない。」

懐弉がたずねて言った。

「これから受戒しようとする時、今までに造った罪を懺悔するために、未受戒の者を懺悔させるのに、『十重四十八軽戒を教えて読誦させよ』と経に見えております。しかるにまたそのあとの文に、『未受戒の者の前で戒を説いてはならない』と言っております。この二個所の違いはどういうことでございましょう。」

禅師が答えて言われた。

「受戒（戒を受けること）と、誦戒（戒を声を出してよむこと）とは別である。懺悔のために戒経を声を出してよむのは、これはやはり念経（経の意を思いめぐらしてよむこと）であるから、未受戒の者も、戒経を声をあげてよもうとするのである。この人のために戒経を説くことはさしつかえない。あとの文章では『利養のためのゆえに』未受戒の者のために戒を説こうとするのをいましめているのである。利養のためでなければ、申すまでもなく説いて教えるのがよい。」

懐弉がたずねて言った。

悔イて受戒せば授クベシ。況ンヤ菩薩は、直饒自身は〔一五〕破戒の罪を受クとも、他のために受戒せしむべし。

注

一 戒をおかすこと。

二 仏祖正伝の菩薩戒を受けて仏子となること。道元禅師は嘉禎三年（一二三七）に「得度略作法」（出家を求める人に剃髪、受衣、受戒を行なうやり方を示す）を著わされた。また別に、在家の男女が仏子としての資格を得るための大乗の菩薩戒を受ける「仏祖正伝菩薩戒作法」一巻が伝授されている。いずれも「梵網経菩薩戒経」による。以下この段の問答も梵網経による。ちなみに、懐弉禅師は嘉禎元年八月十五日、道元禅師から伝戒相承されている。この段はその前後の商量であろう。

三 梵網経に説くところの菩薩戒は、三帰（仏法僧に帰依する）、十重禁戒（不殺生、不偸盗、不貪婬、不妄語、不酤酒、不説四衆罪過、不自讃毀他、不慳貪、不瞋恚、不謗三宝）、および四十八軽戒から成る。ここはその第四十一軽戒が問題となるので、次に煩をいとわず引いておく。

「なんぢ仏子、人を教化して信心を起さしめん時、菩薩、他人のために教戒の法師とならば、受戒せんと欲する人を見てまさに教へて二師を請ぜしむべし。和上と阿闍梨となり。二師まさに問うて言ふべし[1]『汝、七遮罪有りや

「受戒の時には七逆の懺悔をするようにとあります。しかし、梵網経では七逆の人は現身に得戒することを得ずとあります。いかがでございましょう。」

禅師が答えて言われた。

「まことに懺悔すべきである。受戒の時、梵網経で、『七逆罪の者は懺悔を許さない』と言っているのは、一応、抑止門といって、悪をおさえて正道に入れるやり方である。また、この前の文章から言って、破戒の人でも、懺悔してふたたび戒を得れば、もはやけがれはないであろう。懺悔をすれば、すべて清浄である。『未受戒不清浄の者』とはちがうのである。」

懐弉がたずねて言った。

「七逆罪も懺悔を許すとすれば、さらに受戒をさせてよろしゅうございましょうか。いかがでございましょう。」

禅師が答えて言われた。

「その通りである。なくなった栄西禅師が御自身でお立てになったところである。懺悔を許した上は、さらに受戒するがよい。逆罪であっても、悔いて、受戒を求めたら授けるべきである。ましてや菩薩は、たとえ授くべきでない人に授けたために自分は破戒の罪を受けても、ひとのために受戒させるべきである。」

不や』と。(2)若し現身に七遮罪有らば、師はまさにために受戒せしむべからず。(3)若し十重を犯すこと有らば、まさに教へて懺悔せしむべし。仏菩薩形像前に在つて、(4)日夜六時に十重四十八軽戒を誦し、苦到に三世の千仏を礼して好相を見ることを得しめよ……若し好相無くんば、懺すといへども益無し、この人現身にまた得戒せず、而(4)も増受戒することを得。(5)若し四十八軽戒を犯せば、対首懺悔して罪すなはち滅することを得、七遮には同じからず。」

ここは、(3)および(5)の傍点の個所の「犯する」の意味を検討しているのであろう。

四　懺は kṣma の音訳下略。悔がその意訳語。過去の罪過を申しのべて許しを請うこと、受戒の前、および布薩の時、懺悔文を唱えて行なわれる。

五　前々項に引く梵網経(4)の傍点の部分を見よ。

六　第四十二戒に「なんぢ仏子、利養のための故に、未受菩薩戒の者の前、若しくは外道悪人の前において此の千仏の大戒を説くことを得ざれ。邪見人の前にも亦説くことを得ざれ。」とある。この文が第四十一戒の内容と矛盾していると見たのである。

七　誦は声をあげてよむこと。

八　経文の意を考えてよむこと。声をあげるにもあげないにも、通じて用いる。六祖の教えによって法華経の真意を理解した法達は、六祖から念経僧の称を許されている。

九　注六に引く四十二戒の傍点の部分。

一〇　第四十戒に、「菩薩の法師は七逆人のために現身に受

戒せしむることを得ざれ。七逆とは、出仏身血と、殺父と、殺母と、殺和上と、殺阿闍梨と、破羯磨転法輪僧と殺聖人となり。若し七逆を具せば即ち現身に得戒せず。」とあり、また第四十一戒にも(2)の傍点の個所のように、これを「七遮」と言って、戒を授けてはならない事になっている。しかし、第五軽戒には、「一切衆生の八戒、五戒、十戒を犯し、禁を毀り、七逆・八難一切の罪を見てはまさに教へて懺悔せしむべし。」とある。

一二　衆生を悪に入れないため、しばらく慈悲をかくし、悪人は救われないと言って悪をいましめること。これに対し、善悪一切を例外なく受け入れる方面を摂取門という。

一三　注三の第四十一戒(4)の傍点「増受戒することを得」に当たるであろう。

一三　「自ら罪有りと知らばまさに懺悔すべし、懺悔すれば即ち安楽なり。懺悔せざれば罪ますます深し。罪無くは黙然せよ。黙然するが故に、まさに知るべし、衆清浄なり。」(梵網経菩薩戒序)。

一四　七逆は前掲のごとく梵網経では現身に受戒を認めないが、戒の本体は本有の仏性であるから例外はない。栄西禅師がそのような解釈を立てたところによるというのであろう。

一五　軽戒の制止に反すれば「軽垢罪を犯す」ことになる。その罪を承知で、戒を与えるのである。

校訂

1　濁音原文。

2　原文、所レ立。「立つ」は四段でもよい。

五　悪口をもて僧を呵嘖し

夜話に云ク、悪口をもて僧を呵嘖し、毀呰する事なかれ。悪人不当なりと云フとも、左右無ク悪毀る事なかれ。先づ何にわるしと云フとも、四人已上集会し(行)ずべければ、僧の躰にて国の重宝なり。最モ帰敬すべき者なり。住持長老にてもあれ、若シクは師匠知識にてもあれ、不当ならば慈悲心老婆心にて能教訓し誘引すべきなり。その時直饒打つべきをば打ち、呵嘖すべキをば呵嘖すとも、毀呰謗言の心を起スべカラず。

先師天童浄和尚住持の時、僧堂にて衆僧坐禅の時、眠リを警むるに履を以て是レを打チ謗言呵嘖せしかども、僧皆打タルる事を喜び、讃歎しき。

ある時、また上堂の次でには、常に云ク、「我レ已に老後の今は、衆を辞し、庵に住して老を扶ケて居るべけれども、衆の知識として各々の迷ヒを破り、道を助けんがために住持人たり。是レに因ツてあるイは呵嘖の言を出し、竹篦打擲等の事を行ず。是レ頗る恐レあり。然れども、仏に代ツて化儀ヲ揚グル式なり。諸兄弟、慈悲をもてこれを許し給へ。」と言へば、

夜話に言われた。

口ぎたない言葉で僧をしかり責め、また過失を言い立ててそしってはならない。たとえその者が悪人で、道理に反していようとも、わけもなくにくみそしってはならない。第一、どんなに悪いといっても、四人以上集まって仏道を行ずるならば、僧団を形づくっているのであって、国のたいせつな宝である。特に帰依し尊敬すべきものである。一山の住持とか、長老とか言われる身であっても、もしくは師匠、指導者であっても、衆僧が道理にはずれていたら、慈悲心、老婆心をもってよく教えて、善道にさそい入れるべきである。その時、たとえ打たねばならないものを打ち、しからねばならない者をしかり責めても、相手の過失を言い立て、悪口を言おうという気持をおこしてはならない。

なくなった恩師如浄禅師が天童山に住持の時、僧堂で衆僧が坐禅をする時、居眠りをやめさせるには、はき物でもって打ち、非を言い立ててしかり責めたけれども、僧はみな打たれることを喜び、その慈悲の行をほめたたえた。

ある時、また上堂のおりには、いつも言われた。「自分はすでに年をとったから、今はもう修行者といっしょに修行するのをやめて、そまつな庵にでも住んで、老後を養っていればよいのであるが、衆

衆僧流涕しき。

是ノごとキ心を以てこそ、衆をも接し化をも宣ブべけれ。住持長老なればとて猥りに衆を領じ、我ガ物に思うて呵嘖するは非なり。況ンヤそノ人にあらずして人の短を謂ヒ、他の非を謗るは非なり。能々用心すべきなり。

他の非を見て、わるしと思ウて、慈悲を以てせんと思はば、腹立つまじきやうに方便して、傍の事を言ふやうにてこしらふべし。

僧の指導者としてお前がたの迷いを破り、仏道を助けようために、住持人となっている。このために、あるいはしかり責める言葉を口に出し、竹篦で打ちたたくなどのことを行なう。これは非常に慎むべきことである。ではあるが、これは仏に代わって、化導をさかんにするやり方である。みなさんがた、慈悲をもってこれを許してくだされ。」と言うと、衆僧はみな涙を流したものであった。

このような心をもってこそ、衆僧をも指導し、教化をもひろめることができるであろう。住持、長老であるからといって、むやみに衆僧を支配し、自分の配下と思ってしかり責めるのは間違っている。まして、しかるべき立場にない人が、人の短所を言い、他人の欠点をそしるのは間違っている。よくよく気をつけるべきである。

ほかの人の間違いを見て、いけないと思い、慈悲をもって教化しようと思ったら、相手の人が腹を立てないように手段をめぐらして、ほかの事をいうようにして、教え導くべきである。

注

一 住持人が、大衆の修行を励ますため、夜間、坐禅の間でする道話。

二 比丘を罰する七種の法をいう。僧衆の前で呵責を宣言し、三十五事の権利を奪う。ここは多くの人の前で非をあげて罰を加えること。

三 そしりとがめる。

四 道理にはずれている。

五 わけもなく。むやみに。

六 僧は saṃgha の略語。和合と訳す。四人以上の比丘が一所に集まって和合していること。僧は単数ではない。

七 仏法僧の三宝は、国家のためにもたいせつな宝であるという考え方。

八　帰依しうやまう。
九　長老は徳高く、出家して年を経た比丘をもいうが、ここは住持人をいう。前の住持と、同じ意の語を重ね用いてある。次の師匠知識と同じ使い方。
一〇　もとは、顔も心も知っている友人の意。善知識、悪知識の二類があるが、ここはもちろん善知識。
一一　慈は抜苦、悲は与楽。老婆心はゆきとどいた思いやりの心。
一二　悪口を言ってやろうという心。
一三　なくなった師のこと。「センジ、マエノ　シシャウ」(日葡辞書)。
一四　坐禅堂、雲堂、撰仏堂ともいう。禅院の主たる建物。修行僧が集まり、坐禅、斎粥(朝、昼の食事)、起臥をともにする所。堂の中央に聖僧(しょうそう)(文殊菩薩)を安置し、周囲に長いさじきを作り(いわゆる長連床)、大きな禅院では数千の僧がいた。住持人は別に倚子(いす)があり、方丈から来てこれに坐し、衆僧を指導する。
一五　住持、長老が法堂(はっとう)にのぼって法をのべること。禅院の正式の説法。
一六　衆は僧衆。修行僧の指導から手を引く。
一七　草庵、ここは寺内の小庵。
一八　法具。長さ約三尺、弓のようにそった竹裂のつえ。籐(とう)を巻き、漆をぬってある。禅家で学人を指導するに用いる。「竹篦、人を打つ杖なり。」(下学集、器財門)。
一九　化儀は化導するしかた。それをさかんにする。
二〇　同学、同参の者にいう呼び名。住持人としては、門下

に対してであるが、親しみをもって言っている。

二一　なみだを流す。

二二　接得。手をとって、指導する。

二三　化導をさかんにする。

二四　支配下におく。濁音原文。

二五　しかるべき位置にある人。

二六　てだてをめぐらす。

二七　わきのこと。別のこと。

二八　教え導く。「誘誨古之良布」（華厳経音義）。「誘コシラフ」（名義抄）。

校訂

1　原文、流涕ノ。

2　原文、人ヲ。

六　故鎌倉の右大将

また物語ニ云ク、故鎌倉の右大将、始め兵衛佐にて有りし時、内府の辺に一日はれの会に出仕の時、一人の不当人在りき。

その時、大納言[1]のおほせて云ク、「是レを制すべし。」

（大）将の云ク、「六波羅[2]におほせらるべし。平家の将軍なり。」

また、お話の中にこんなことがあった。なくなった鎌倉の右大将すなわち源頼朝が兵衛の佐であった時、ある日、はれの饗宴があって、頼朝は、内大臣の身近に、役目がら出ていた。その時、一人の狼藉者があった。

その時、大納言が、「あの者をとりおさえよ。」と命じられた。

頼朝は、「六波羅にお命じください。六波羅は平家の総指揮者であります。」と言った。

大納言の云ク、「近々なれば。」
大将の云ク、「その人にあらず。」と。
是れ美言なり。この心にて、後に世をも治めたりしなり。今の学人もその心あるべし。そノ人にあらずして人を呵する事なかれ。

大納言は、「手近にお前という武士がいるのだから。」と言われた。
大将は、「私は武士でも、平家の武士を取り締まる立場の者ではございません。」と言われた。
この頼朝の言葉は立派なものである。この心がけで、後には征夷大将軍として天下をも治めたのである。今の仏道を学ぶ者も、こうした心がけがなくてはいけない。しかるべき立場の人でないのに、人をしかりつけてはならない。

注

一　源頼朝（一一四七—一一九九）。
二　頼朝が右兵衛権佐に任ぜられたのは、いわゆる平治の乱の信頼の除目によるもので、平治元年（一一五九）十二月十四日、十三歳の時である。同月二十七日には父義朝は敗れて美濃にのがれ、翌年正月三日尾張で長田忠致父子に殺される。頼朝は三月に伊豆に流されている。
三　平治元年の内大臣は藤原公教であるが、翌永暦元年八月には松殿基房である。道元禅師は祖父基房からこの話を聞いたのではなかろうか。
四　平家の居館のあった所。
五　立派な言葉。

校訂

1　原文、ニ。
2　原文、ヲセラルベシ。ヲは上声のかなであるから、のばしてよむ。

七の㈠　昔、魯の仲連

夜話ニ云ク、昔、魯の仲連[一]と云フ将軍ありて、平原[二]君が国に有ツて能く朝敵を平ラぐ。時に平原君賞して数多の金銀等を与へしかば、魯の仲連辞して云ク、「ただ将軍の道なれば敵を討つ能[三]を成す已而。賞を得て物を取ランとにはあらず。」と謂ツて、敢て取ラずと言フ。魯仲連ガ廉直[四]とて名よ[五]の事なり。

俗なほ賢なるは、我レその人[六]としてその道の能を成すばかりなり。代り[七]を得んと思ハず。学人の用心も是ノごとクなるべし。仏道に入リては仏法のために諸事[八]を行じて、代リに所得あらんと思フべからず。内外[九]の諸教に、皆無所得なれとのみ進むるなり。心を取ル。[一〇]

夜話に言われた。

昔、魯仲連という将軍がいた。平原君の国にあって、よく朝敵を平定した。平原君はその功を賞して多くの金銀等を与えた。ところが、魯仲連はそれを辞退して、「ただ将軍として当然なすべきことですから、敵を討伐するはたらきを発揮しただけです。賞を得、物をいただこうためではありません。」と言って、どうしても受け取らなかったという。魯仲連の廉直な行ないとして、有名なことである。

在俗の人でさえ、すぐれた人は、自分がその任にある者として当然のはたらきを発揮するだけである。それによって代償を得ようとは思わない。仏道を学ぶ人の用心も、こうあるべきである。仏道にはいった上は、仏法のためにさまざまの事を行なって、代わりに何か得る所があろうと思ってはならない。仏教や仏教以外のさまざまの教えに、みな、所得があってはならないと勧めるのである。この話は要約である。

注

一　中国、戦国時代の高士。あえて職に任ぜず、高節を持した。かつて、秦が趙を攻めて趙の四十万の軍を破り、邯鄲城をも囲んだ時、魏の客将軍新垣衍は、平原君を介して、趙が秦を帝とする意志表示をすれば、秦は囲みを解くであろうと説いた。この時、たまたま仲連は趙に遊んでこの囲みの中にあったが、平原君に会って新垣衍と会見できるように取りはからってもらった。そして、秦

が帝となることの不可を説き、趙が秦を帝とするように勧めることを思い止まらせた。その結果、形勢は一変し、秦の軍は囲みを解いて退き、魏の公子無忌がさらにこれをうち退けた。そこで平原君は仲連に土地を与えようとして使者三たび至ったが仲連は辞して受けなかった。平原君はさらに仲連のために酒宴を催し、酒たけなわにして千金をもって仲連に贈ろうとした。この時、魯仲連は笑って言った。「いはゆる天下の士に貴ぶものは、人のために患をはらひ、難をとき、紛乱を解きて取ることなければなり。もし取ることあらば是れ商賈の事なり。而して連、なすに忍びざるなり。」と。ついに平原君を辞して去り、一生会うことがなかった。（史記巻八十三、魯仲連列伝）。

二　戦国時代、趙の武霊王の子。名は勝。平原に封ぜらる。賢明にして賓客を好み、至る者数千人。趙の宰相となる。

三　物事をよくする力。はたらき。

四　いさぎよく心が正しい。

五　名高いこと。評判の高いこと。

六　しかるべき地位にある人。

七　代償。

八　「仏法のために仏法を修す、すなはち是れ道なり。」（学道用心集）。

九　内は仏教の教え、外はそれ以外の儒教、道教等の教え。

一〇　取意要文の意。魯仲連の話は詳しくされたのであろうが、ここには書かないという、断わり書き。

校訂

1 原文、中連。

七の(二) 直饒我れ道理を以て道ふに

法談の次に示して云ク、直饒我レ道理を以て道ふに、人僻事を言フを、理を攻めて言ヒ勝ツは悪きなり。次に、我れは現に道理と思へども、「我が非にこそ」と言ツて負けてのくもあしばやなると言フなり。

ただ人をも言ヒ折らず、我が僻事にも謂ヒおほせず、無為にして止めるが好キなり。耳に聴キ入レぬやうにて忘るれば、人も忘れて怒らざるなり。第一の用心なり。

注

一 法の義理を語ること。談義。
二 理詰めに押して。
三 我が非にこそあらめ。私の方が間違いなのでしょう。
四 退く。
五 早すぎて悪い。
六 言い敗かさない。
七 何ごともなく。

法の話をなさったおりに、教えて言われた。

よしんば自分は道理にかなったことを言っているのに、相手が間違ったことを言っても、理屈で攻めて相手を言い敗かすのはよくない。

また次に、自分では、たしかに自分の方が道理に合っていると思っても、「わたしが間違っているのでしょう。」と言って、敗けて引きさがるのも、あきらめが早すぎてよくない。

ただ、相手もへこませず、自分の間違いにもしてしまわず、何事もなく、そのままにしておくのがよいのである。相手の議論も、聞こえないようにして、気にかけないと、相手も同様に忘れて、怒りもしないのである。何より大切な心得である。

八　「止む」の已然形に完了の助動詞「め」の連体形がついた形。

校訂

1　原文、改テ。

八　無常迅速なり、生死事大なり

示ニ云ク、無常迅速なり、生死事大なり。暫ク存命の間、業を修し学を好マンには、ただ仏道を行じ仏法を学すべきなり。

文筆詩歌等その詮なきなり。捨ツべき道理左右に及ばず。仏法を学し仏道を修するにもなほ多般を兼ネ学すべからず。況ンや教家の顕密の聖教、一向に擱くべきなり。仏祖の言語すら多般を好み学すべからず。一事ヲ専ラにせん、鈍根劣器のものかなふべからず。況ンや多事を兼ネて心想を調へざらん、不可なり。

注

一　永嘉一宿覚の話（永嘉真覚が六祖のもとに一宿して道を悟り、そのまま止まらずに去った話）にもこの語がある。また、『勅修百丈清規』には、請益（住持人、師僧に特に個人的に教えを受ける形式）の時には、住持人の

教えて言われた。

生滅の転変は速やかである。生死を明らめることは重大である。わずかに命のある間に、何かわざを身につけ、何かとりあげて学ぼうと思うならば、ただ仏道を修行し、仏法を学ぶべきである。

文章を作ったり、詩歌を詠んだりなどは、結局役に立たない。これらを捨てるべき道理は言うまでもない。また、仏法を学び、仏道を修行するのにも、やはり、手びろくあれもこれもと学んではならない。まして、学問仏教における顕教、密教などという区別を立てた教えは、全くやらずにおくべきである。仏祖の言われた言葉であっても、あれもこれもととりあげて学んではいけない。

ただ一つの事を専一に行なうことさえ、生まれつき力の劣った者には、できはしない。まして多くの事を同時にして、心やそのはたらきを静かにしないのは、いけないことである。

もとに至り、焼香礼拝して、「生死事大無常迅速、伏して望むらくは和尚慈悲方便をもて開示したまえ。」と言ってたのむことになっている。

二 道元禅師には「久しく人間に在って愛惜無し、文章筆硯既に抛ち来たる、花を看、鳥を聞きて風情少なし、時の人の不才を笑ふに一任す。」の偈がある。

三 役に立たない。

四 とやかく言うまでもない。

五 多くの方面。

六 禅に対し、経論にもとづいて教義を立てる宗旨をいう。

七 教家はさらに密教と、それ以外の顕教とに分けられる。

八 ここは経論等にもとづく仏の教え。

九 禅家の祖師の語録、公案等をさす。

一〇 生まれつきのにぶく劣っている者。

一一 心とその働きである想念。これを寂静にするのが禅である。「若し無明にして断ぜば、心想あることなし。」(大乗起信論)。

校訂

1 原文、蜜。

2 原文、閣

九 昔、智覚禅師と云ひし人

示ニ云ク、昔、智覚禅師と云ヒし人の発心出家の事、

教えて言われた。

コノ師は初メは官人なり。富に誇るに正直ノ賢人なり。有ル時、国司たりし時、官銭を盗ンで施行す。旁ノ人、是レを官奏す。帝、聴イて大イに驚き怪しむ。諸臣皆怪シむ。罪過已に軽カラず。死罪に行なはるべしと定マりぬ。

爰に帝、議して云ク、「コノ臣は才人なり、賢者なり。今ことさらコノ罪を犯す、若シ深キ心有ランか。若シ頸を斬ラン時、悲シミ愁たる気色有ラば、速ヤカに斬ルベシ。若シその気色無クんば、定めて深キ心有り。斬ルベカラず。」

勅使ひきさりて斬ラント欲スル時、少シも愁の気色無し。返りて喜ぶ気色あり。

自ラ云ク、「今生の命は一切衆生に施ス。」と。

使、驚き怪シンで返り奏聞す。

帝云ク、「然り。定メて深キ心有らん。コノ事有るべしと兼ネて是レを知れり。」ト。仍ツてその故を問フ。

師云ク、「官を辞して命を捨て、施を行じて衆生に縁を結び、生を仏家に稟けて一向ニ仏道を行ぜんと思フ。」と。

帝、是レを感じて許して出家せしむ。仍ツテ延寿と名を賜ひき。殺スベキを、是を留むる故なり。

今の衲子も是レほどの心を一度発すべきなり。命を

昔、智覚禅師と言った人が発心出家したことについて、こんな話がある。このかたは初め、官吏であった。財産も多く、その上、心のまっすぐな、賢者であった。ある時、国司をしていた時、役所の銭を盗んで貧しい人々に施した。役人仲間の者がこれを見て、公式に皇帝まで申し上げた。皇帝はそれを聞いて、たいへん驚き、またふしぎに思った。皇帝のみならず、諸臣も皆、ふしぎに思った。しかし、犯した罪は軽くないので、死罪にすべきだと決定した。

その時、皇帝は、臣下にはかって、「この者は学問もあり、賢者でもある。それを、今わざわざ、こんな罪を犯すについては、深い考えがあるのではなかろうか。もし、首を斬る時に、悲しみなげく様子があったなら、さっさと斬るがよい。もし、その様子がなかったなら、きっと深い考えがあるに違いないから、斬ってはならない。」と言った。

いよいよ勅使が引き出して斬ろうとする時、少しも悲しみなげく様子が見えない。かえって喜んでいる様子であった。そして、自分から、「このたび人間と生まれた命は、一切の生きとし生けるものにほどこすのである。」と言った。

勅使は驚きふしぎに思って、その次第を皇帝に復奏した。

皇帝は、「思った通りだった。きっと深い考えがあるのであろう。こんな事ではないかと、前から思っていた。」と言われた。そこで、その理由をたずねた。

智覚禅師は、「私は官職をやめ、命を捨てて、施しを行ない、生きとし生けるものと仏縁を結び、次の世には修行僧に生まれて、ひ

軽くし生を憐レむ心深くして、身を仏制に任せんと思ふ心を発すべし。若シ前よりこノ心一念も有らば、失はじと保つべし。これほどの心一度発サずして、仏法ヲ悟る事はあるべからず。

たすら仏道を行じようと思うのです。」と言った。

皇帝はこの言葉に心をうたれ、罪を許して出家させた。そして、この因縁により、延寿という名をたまわった。それは死罪にすべき命を留めたからである。

今の禅僧もこれほどの気持を一度おこすべきである。命を軽くし、衆生をあわれむ心を深く持って、自分の身を、仏の定められた通りにしてゆこうと思う心をおこすべきである。もし前からこの心を少しでも持っていたら、失わないように持ち続けるべきである。一度はこれくらいの心をおこさなくては、とても仏法を悟ることはできないであろう。

注

一　永明延寿（九〇四—九七五）。天台徳韶（法眼宗第二祖）の法嗣。法眼宗第三祖。出家の年は二十八歳。呉越王銭元瓘（文穆王）の治世にあたる。呉越は五代七十二年、銭弘俶（忠懿王）の時（九七八）、その地を宋の太宗に献じ、自らは淮南王に封ぜられて終わる。代々仏教を信奉した。洪覚範（一〇七一—一一二八）の『禅林僧宝伝』には、「年二十八、華亭の鎮将となった。ある時、漁船に多くの魚がつかまえられているのを見て、惻然として気がめいり、官服を破って出家した。」とあるが、思うに、高僧の在俗時代を潔くしようとするあまり、話の核心を見誤ったものではなかろうか。のち、忠懿王に請ぜられて永明第二世となり、『宗鏡録』百巻を著わす。

二　官銭を盗むような人でないことをあらかじめ述べる。

三　同輩。同僚。

四　役目として申し上げる。奏は天子にむかって言うこと。

五　学問のある人。才は学才をいう。

六　王使であるが、ここは一国の王として、日本の天皇と同じく扱っている。

七 前もって。
八 高位の菩薩。専門の仏道修行者。「不思議の仏法是れ仏の住所。初地（高位の菩薩）以上は仏家の中に入る。これによって行におもむくを仏家に生ずといふ。」（観経慧遠疏）。
九 衆生。生きとし生けるもの。

校訂

1 原文、・。
2 原文、賜テ。

十　祖席に禅話を覚り得る故実

夜話に云く、[一]祖席に禅話を覚り得ル故実は、我ガ本ヨリ知り思ふ心を、[二]次第に知識の言に随ツて改めて去くなり。

[三]仮令仏と云フは、我ガ本知ツたるやうは、[四]相好光明具足し、[五]説法利生の徳有りし釈迦弥陀等を仏と知ツたりとも、知識若シ仏と云フは[六]蝦蟆蚯蚓ぞと云はば、蝦蟆蚯蚓を、是レらヲ仏と信じて、日比の知恵を捨ツルなり。コノ蚯蚓ノ上に仏の相好光明、種々の仏の所具の徳を求ムるもなほ情見[八]改まらざるなり。ただ当[九]時の見ゆる処を仏と知るなり。若シ是のごとク言に従ツて、情見本執を改めもて去けば、自ラ合ふ[一〇]処あ

夜話に言われた。

達磨門下の法席で禅話を聞いてよく理会する秘訣は、自分が今まで理解し、考えていた気持を、指導者の言葉にしたがって順々に改めてゆくことである。

よしんば仏というのは、自分が前から知っていたところでは、仏としての特別立派なお顔かたちやら輝く光明やらがそなわり、法を説き、衆生を利益する徳のあるお釈迦様とか、阿弥陀様などのことだと理解していても、指導者が、もし、仏というのは、ひきがえるやみみずであると言ったら、ひきがえるやみみずを、これが仏であると信じて、平生の知識を捨てるのである。その時、このみみずの上に、仏としてのすぐれたお姿や光明や、仏の持っていられるさま

るべきなり。

然ルに近代の学者、自(みづか)らが情見を執して、已見にたがふ時は、仏とはとこそ有るべけれ[一]、また我が存ずるやうにたがへば、さは有ルまじなんどと言ツて、自(みづか)が[二]情量に似タる事や有ると迷ひありくほどに、おほかた仏道の昇進無きなり。

また身を惜シミて、「百尺[三]の竿頭(かんとう)に上ツて手足を放ツて一歩進め。」と言フ時は、「命有ツてこそ仏道も学せめ。」と云ツて、真実に知識に随順せざるなり。能(よく)能(よく)思量スベシ。

注

一　達磨門下の法席。
二　順々に。
三　よしんば。かりに。
四　仏の三十二相八十種好を具足し、全身から光明を放つ。
五　法を説いて衆生を利益する。
六　「先師古仏（如浄禅師）上堂に云く、霖霪(りんいん)たる大雨、豁達たる大晴、蝦蟆鳴き蚯蚓鳴く。古仏曾(かつ)て過去せず、金剛の眼睛を発揮す。咄(とつ)。葛藤葛藤。いはくの金剛眼睛は霖霪大雨なり、豁達大晴なり、蝦蟆鳴なり、蚯蚓鳴なり。」（正法眼蔵眼睛）。また、「風条(えだ)を鳴らし雨塊(つちくれ)を破る、蝦蟆啼き蚯蚓啼く。」（永平広録二）。

ざまの徳がそなわっているかと、さがして見るのも、やはり自分勝手な物の見方が改まっていないのである。ただ現在目に見えるところそのままを、仏と理解するのである。もしこのように、指導者の言葉にしたがって、自分勝手な物の見方や、昔から持っている執着を改めてゆくと、おのずから、道にかなうところがあるはずである。

ところが、近ごろの道を学ぶ者は、自分勝手な物の見方を絶対てず、自分の考えとあわない時は、「仏はこんなふうであるに違いないのだが。」と言い、また、自分の考えているところとちがうと、「そうではありますまい。」などと言って、自分が勝手におしはかったところと似かよったことがありはしないかと、あちこちと迷いまわるから、ちっとも、仏道の進歩がないのである。

また、自分の身をだいじにして、指導者が「百尺の竿のさきに上って、手を放って一歩進め。」と言うと、「仏道を学ぶのも命があってのことだ。」と言って、指導者に心からしたがわないのである。このことはよくよく思いめぐらすべきである。

七 長沙蚯蚓の話がある。「長沙景岑和尚、因みに竺尚書問ふ、蚯蚓を斬つて両段と為す。両頭ともに動く。未審、仏性阿那箇頭にありや。師云く、莫妄想。」(正法眼蔵三百則)。

八 真実と一致しない分別判断。凡夫の考え。

九 さしあたったその時。

一〇 仏道にかなう。

一一 妄情によるおしはかり。

一二 長沙景岑の頌に、「百尺竿頭不動の人、然も得入すといへども未だ真となさず、百尺竿頭すべからく歩を進むべし、十方世界これ全身。」とあり。

校訂

1 原文、トコゾ。

十一　人は世間の人も衆事を兼ね学して

夜話ニ云ク、人は世間の人も、衆事[一]を兼ネ学して何れも能もせざらんよりは、ただ一事を能して、人前にしてもしつべきほどに学すべきなり。況ンや出世[二]の仏法[三]は、無始より以来[四]修習せざる法なり。故に今もうとし[五]。我が性[六]も拙なし。高広なる仏法の事を、多般を兼ヌれば一事をも成ず[七]べからず。一事を専ラにせんずら

夜話に言われた。

人は、俗世の人でも、多くのことを同時に学んで、そのどれもしっかりとできないよりは、ただ一つの事をじゅうぶん究めて、人前でも通用するほどに学ぶべきである。ましてや世間を超えた仏法は、無限の過去以来、かつて自らやったことも習ったこともない法である。だから、今もよくわからない。その上学ぶ自分のうまれつきも

本性昧劣の根器、今生に窮め難し。努々学人一事を専ラにすべし。

弉問ウテ云ク、若シ然ラバ、何事いかなる行か、仏法に専ら好み修スべき。

師云ク、機に随ヒ根に随フべしと云へども、今祖席に相伝して専ラする処は坐禅なり。この行、能ク衆機を兼ネ、上中下根等シク修し得べき法なり。

我レ大宋天童先師の会下にしてこノ道理を聞イて後、昼夜定坐して極熱極寒には発病しつべしとて諸僧暫く放下しき。我レその時自ラ思はく、直饒発病して死ヌべくとも、なほただ是レを修ずべし。病まずして修せずんば、こノ身労しても何の用ぞ。病して死なば本意なり。大宋国の善知識の会にて修し死ニて、よき僧にさばくられたらん、先づ結縁なり。日本にて死なば是レほどの人々に如法仏家の儀式にて沙汰すべからず。修行して未だ契ハザル先に死せば、好キ結縁として生を仏家にも受クべし。修行せずして身を久シく持つても詮無キなり。何の用ぞ。況ンや身を全くし病作ラずと思ふほどに、知ラず、また海にも入り、横死にも逢はん時は後悔如何。是ノごとく案じつづけて、思ヒ切ツて昼夜端坐せしに、一切に病作らず。

如今各々も一向に思ヒ切ツて修して見よ。十人は十人ながら得道スべキなり。

劣っている。この上なく高く、広い仏法の中で、多くの方面を同時にやると、その中の一事さえも成就することができない。一事を専門にやろうとしてさえ、生まれつきおろかなものが一生のうちにきわめることはむずかしい。仏道を学ぶ人は、必ず必ず一事をもっぱらにせよ。

懐弉がたずねて言った。

それでは、どの一事、どのような行を、仏法においてもっぱら取りあげて身につけたらよろしゅうございましょうか。

道元禅師が言われた。

何を専一にしたらよいかは、それぞれの人により能力に応じてきめるべきであるが、現在達磨門下の法席に代々相伝えて専一にするところは、坐禅である。この坐禅の行は、よく多くの人に通じて適し、生まれつきの上、中、下の区別なくみな修することのできる法である。わたしは、大宋国で、先師天童如浄禅師の門下にあってこの道理を聞いてからは、昼夜に坐禅した。極暑厳寒のおりには、病気になりそうだといって、多くの僧がしばらく坐禅をやめてしまったが、自分はその時考えた。「たとい発病して死のうとも、やはりただ坐禅をしよう。今、現に病気でもないのに修行をしなかったら、こうして宋まで来てこの身を労しても何の役に立とうか。病気になって死んだらそれこそ本望である。大宋国のすぐれた指導者の門下にあって、教えにしたがって坐禅して死んで、立派な仏弟子たちに葬ってもらうなら、何より第一に、未来に得度を得るもとである。日本にいて死んだなら、これほどの僧たちに、法にかなった仏道修

先師天童のすすめ是ノごとシ。

注

一　多くのこと。
二　仏法は流転生死の世界を立ちいでたものである。
三　遠い遠い過去のむかしからいくらさかのぼってもその始点を知ることはできないから無始である。
四　仏法の難値難遇を言い、仏道が人間の分別判断をこえていることを言う。
五　身に親しくわかっていない。
六　本性、うまれつき。
七　「ず」の濁点原文にあり。
八　くらく、劣っている。
九　根は生まれつきの可能性。器は器量。
一〇　必ず必ず。古くはもっぱら禁止に用いる。ここで命令に用いているのは、鎌倉時代の語法である。「努　ユメ　ユメ」(名義抄)。
一一　教法に激発されて活動する心のはたらき。法を聞く人をいう。
一二　どんな人にも向いている。
一三　生まれつきのよしあしにかかわらず同様にできる。
一四　「エゲ」(日葡辞書)。「会下」(饅頭屋本節用集)。一人の師僧のもとにあつまって学ぶ所。
一五　正身端坐。

行者の儀式によって葬ってはもらえない。坐禅修業して、仏道にいたりつかないうちに死んだならば、これが仏果を得るよき因縁となって、次の世には生命を専門の仏道修行者として受けるであろう。修行もしないで、命を長らえてもかいのないことである。何の役に立とうか。ましてや、からだをいためず、病気もおこらないで、よかったと思っているうちに、航海の途中でおぼれ死ぬか、また不慮の死にでもあったときは、どれほど後悔するか知れない。」このように思案を重ねて、思い切って昼夜に坐禅をしたところ、全く病はおこらなかった。

今、お前がたも、ひたすらに思い切って坐禅をしてみなさい。十人が十人とも、例外なく道を得るはずである。

亡き師、如浄禅師の勧めはこの通りであった。

一六 やめた。
一七 もとからの意志。本懐、本望。
一八 さばくるは取りはからいあつかう。
一九 仏法に縁を結び未来得度の因縁をつくること。
二〇 如法は法にかない、理にかなうこと。
二一 災難にあって思いがけなく死ぬこと。

校訂

1 原文、発病メツベシ。メの右傍にシとあり。
2 原文、未契。

十二 人は思ひ切つて命をも捨て

示ニ云ク、人は思ヒ切ツて命をも捨て、身肉手足をも斬ル事は中々(なかなか)せらるるなり。然れば、世間の事を思ひ、名利執心のためにも、是(かく)ノごとク思ふなり。ただ依リ来(きた)る時に触レ、物に随ツて心器を調フる事難きなり。

学者、命を捨ツると思ウて、暫く推し静めて、云フべき事をも修すべき事をも、道理に順ずるか順ぜざるかと案じて、道理に順ぜばいひもし、行じもすべきなり。

教えて言われた。

人は思い切って命をもすて、身肉手足をも切ることは、威勢がいいからかえってできるものである。してみれば、世間の事を考え、名誉や利益や、自分が思いこんだことのためにも、こうして命もすてる気になるのである。ただ、何事かあった時に応じ、物にしたがって、心をととのえることがむずかしいのである。

仏道を学ぶ者は、命をすてる気になって、しばらく心をおちつかせて、言うべきことでも、修行すべきことでも、道理にかなっているか、かなっていないかと思いめぐらして、道理にかなっていれば言いもし、修行もすべきである。

注

一 「乃至餓ゑたる虎狼師子、一切の餓鬼に、ことごとくまさに身肉手足を捨てて之れを供養すべし。」（梵網経四十八軽戒第十六）。
二 かえって。張り合いがあるから、かえってやりやすい。
三 名聞利養や自分個人の思いこんだこと。
四 心のこと。心は万法を受ける器である。
五 仏道を学ぶ者。

十三　学道の人、衣粮を煩はす事なかれ

示ニ云ク、学道の人、衣粮を煩ハす事なかれ。ただ仏制を守ツて、心ヲ世事に出す事なかれ。仏言く、「衣服に[二]糞掃衣あり、食に[三]常乞食あり。」ト。何れの世にかこノ二事尽クる事有ラん。無常迅速なるを忘れて徒らに世事に煩フ事なかれ。露命の暫く存ぜる間、ただ仏道を思ウて[一]余事を事とする事なかれ。

ある人問ウテ云ク、「名利の二道は捨離しがたしと云へども、行道の大なる礙なれば捨てずんばあるベカラず。故に是レヲ捨ツ。衣粮の二事は小縁なりと云へども行者の大事なり。糞掃衣、常乞食、是レは[四]上根の

教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、衣食に心を煩わしてはいけない。ただ仏の定められたきまりを守って、心を俗事に向けてはならない。仏は、「僧の衣服には糞掃衣があり、食には常乞食がある。」と言われている。この二つは、いつの世にも尽きることはあるまい。無常の迅速であるのを忘れて、いたずらに俗事に心をわずらわしてはならない。露のようにはかない生命がしばらくある間に、ひたすら仏道に専心して、ほかの事を問題にしてはならない。

ある人がたずねて言った。

「名誉・利益の二つは、捨て難いとはいっても、仏道修行の大きな

所行、また是レ西天の風流なり。神丹の叢林には常住物等あり。故にそノ労なし。我ガ国の寺院には常住物なし。乞食の儀も即チ絶エたり、伝ハラず。下根不堪の身、如何がせん。尓らば予がごときは、檀那の信施を貪らんとするも虚受の罪随ヒ来る。田商仕工を営むも是レ邪命食なり。ただ天運に任せんとすれば果報また貧道なり。飢寒来らん時、是レを愁として行道を碍つべし。ある人諫めて云ク、『汝が行儀太あらじ。時機を顧ミざるに似たり。下根なり、末世なり。是ノごとく修行せばまた退転の因縁と成リぬべし。あるイは一檀那をも相語らひ、若シクは一外護をも契ツて、閑居静所にして一身を助ケて、衣粮に労スル事無くして仏道を行ずべし。是レ即チ財物等を貪ルにあらず。時の活計を具して修行すべし。』と。この言を聞クと云へども未ダ信用セず。是のごとキ用心如何。」

答へテ云ク、夫レ衲子の行履は仏祖の風流を労すべし。三国殊なりと云へども、真実学道の者未ダ是ノごとキ事有ラず。ただ心を世事にいだす事なかれ。一向に道を学すべきなり。

仏言く、「衣鉢の外は寸分も貯へざレ。乞食の余分ハ、飢エたる衆生に施す。」ト。直饒受ケ来るとも寸分も貯フベカラず。況ンや馳走有ラんや。

外典に云ク、「朝に道を聞カバ夕べに死スとも可な

障害でございますから、捨てないわけにはまいりません。ですからこれは捨てましょう。しかし衣と食の二つの事は、小さなことではありますが、仏道を行ずる者にとっては大事件であります。糞掃衣・常乞食といっても、これは摩訶迦葉尊者のような素質のすぐれた人のするところであり、またそれはインドで行なわれたことであります。中国の禅院には寺に所属する財産があります。ですから衣食のわずらいはありません。わが国の寺院には寺に備わる財産もなく、乞食の行も今は絶えて伝わっておりません。こうした状況で、素質も劣り力もない者はどうしたらよろしゅうございましょうか。私のような者は、檀家の信心による布施に頼ろうとすれば、受ける資格がないのに、布施を受ける罪になります。農耕・商売・宮づかえ・手しごとなどの職業を営むのは、僧としては正しい食のとり方ではありません。ただ運を天に任せようとすると、持って生まれた福分の乏しいやせ法師です。飢えや寒さが襲ってきたとき、その方の心配をして、きっと仏道修行をさまたげましょう。私に、ある人が意見をして、『お前のやり方は大いにまちがっている。時代や、人の生まれつきを考えに入れていないようだ。生まれつきはわるし、世は末世である。それを考えずにお前のような修行をしたら、きっと修行もゆきづまって、あともどりするもとを作るようなものだ。だから、あるいは檀家の一軒も持ってめんどうを見てもらうとか、または修行を助けてくれる人の一人とでも約束して、その庇護のもとに、静かな土地に閑居して、身一つを無事にたもって、衣食に心を労することなく仏道を行じたらよかろう。これは財物などを貪る

り。」ト。直饒飢ヱ死ニ寒ヱ死ニすとも、一日一時なりとも仏教に随フべし。万劫千生、幾回か生じ幾回か死せん。皆是レ是のごとキ世縁妄執なり。今生一度仏制に順ツて餓死せん、是レ永劫の安楽なるべし。

何ニ況ンヤ未だ一大蔵教の中にも、三国伝来の仏祖有ツて一人も餓ヱ死ニ寒ヱ死ニシたるを聞カず。世間衣粮の資具ハ生得ノ命分なり。求ムるに依ツて来ラず、求メずとも来ラざるにもあらず。正に任運として心をおく事なかれ。末法なり、下根なりと云ツて、今生に(心を)発サずハ何れの生にか得道せん。直饒空生迦葉のごとクにあらずとも、ただ随分に学道すべきなり。

外典ニ云ク、「西施毛嬙にあらざれども色を好む者は色を好む。飛兎緑耳にあらざれども馬を好む者は馬を好む。竜肝豹胎にあらざれども味を好む者ハ味を好む。」ト。ただ随分の賢を用フるのみなり。俗なほコノ儀有リ。(僧)また是ノごとクなるべし。

況ンやまた仏二十年の福分を以て末法の我等に施す。是レに因ツて天下の叢林、人天ノ供養絶エず。如来神通の福徳自在なる、なほ馬麦を食して夏を過ゴしましましき。末法の弟子豈是レを慕ハざらんや。

問ウテ云ク、破戒にして空シく人天の供養を受け、無道心にして徒らに如来の福分を費ヤさんよりは、在家人にしたがうて在家の事を作シて、命いきて能ク修

のではない。その時その時の生計の用意をして修行したらよかろう。』と言いました。しかしこの言葉を聞いても、私はまだ信じて用いることもできません。これについてどのように考えたらよろしゅうございましょうか。」

禅師が答えて言われた。

そもそも、達磨門下の禅僧の行ないは、仏祖のなされ方を伝えることに力をいたすべきである。インド・中国・日本と仏法の伝来は三国にわたってそれぞれちがっているが、真実に道を学ぶ者が、そのように、衣食の後援者をきめておいて道を行じたということはかつてない。ただ世俗の事に心を向けてはならない。ひたすら道を学ぶべきである。

仏は、「三衣と応量器のほかはすこしも貯えるな、乞食によって得た食物も余分があったら飢えた人々に施すのである。」と言われた。たとい余分にもらってきても、少しでも貯えてはいけない。まして食物のために奔走することなどあろうはずがない。

論語には、「朝に道を聞いたなら夕方に死んでもよい。」とある。たとい飢え死に、凍え死にしようとも、一日でも一ときでも、仏の教えにしたがって生きるべきである。人間の計算では数え切れない長い長い時の経過の間に、人はいくたび生まれかわり、いくたび死にかわることであろうか。こうした輪廻転生は、みな転変する世間のことにかかわるまちがった執着のためである。このたびの一生に、一回だけ、仏の定めにしたがって餓死すると、この輪廻がたち切られるのであるから、実に永遠の安楽であろう。

道せん事、如何。

答ヘテ云ク、誰か云ツし破戒無道心なれと。ただ強ヒて道心をおこし、仏法を行ずべきなり。何ニ況ンや持戒破戒を論ぜず、[四二]初心後心をわかたず、斉シく如来の福分を与フとは見エたり。未ダ破戒ならば[四三]還俗すべし、無道心ならば修行せざれとは見エず。誰人か初めより道心ある。ただ是ノごとく発し難きを発し、行じ難きを行ずれば自然に増進するなり。人々皆[四四]仏性有ルなり。徒らに卑下する事なかれ。

また云ク、[四五]文選に云ク、「(一)[四六]国は一人ノ為ニ興リ、先賢ハ後愚ノ為ニ廃ル」ト。[四七]文。[四八]言ふ心は、国に賢一人出来ラざれば賢の跡廃ルトなり。是レを思フべし。

注

一　着るものと食べるもの。

二　人が捨ててかえりみない布をつづり合わせて作る袈裟。牛嚼衣・鼠嚼衣・火焼衣・月水衣・産婦衣・神廟衣・塚間衣・求願衣・王職衣・往環衣の十種の糞掃衣がある。これらは俗世の人の執着の全くない布であるから、仏法から言えば最上の材料である。

三　乞によってのみ食物を得て生活する行。十二頭陀行の一。十二頭陀行は、糞掃衣・但三衣・常乞食・不作余食・一坐食・一揣食・空閑処・塚間坐・樹下坐・露地

ましてや、大蔵教全体の中でも、インド・中国・日本と伝わってきた仏祖たちの中で、一人たりとも飢え死にし、凍え死にしたためしは、いまだかつて聞いたことがない。生きてゆくための衣食の資材は、人の一生に備わった分量がある。求めたからといって得られもしないが、また求めないからといって得られないものでもない。まさしく自然にまかせて、心をつかってはならない。末法の世であるとか、生まれつきが劣っているとか言って、この一生のうちに道心をおこさなかったら、いつの世に生まれかわって道を得ることがあろう。たとい須菩提尊者とか、摩訶迦葉尊者ほどでなくても、ただめいめいの分際にしたがって道を学ぶべきである。

外典には、「西施・毛嬙ほどの美人でなくても、色を好む者は色を好む。飛兎・緑耳ほどの駿馬でなくても、馬を好む者は馬を好む。竜肝・豹胎ほどの美味でなくても、味を好む者は味を好む。」と言っている。ただめいめい応分の力を発揮するまでである。世俗の人でさえもこうである。出家者もまたこの通りでなければならない。

ましてや仏は、御自分の百年の寿命のうち二十年をさいて、末法の世のわれら仏弟子に施してくださってある。そのおかげで、天下の仏道修行の道場には人間界からも天上界からも供養が絶えない。また釈迦如来は神通力があり、一切の善行を修して得られた福徳には欠けたところのないおかたであったが、それでも因縁により馬の飼いばにする麦を食べ、一夏九十日の安居の期間をおすごしになったこともある。末法の世の仏弟子たるわれわれが、どうしてこの風儀を慕わずにいられようか。

坐・随坐・常坐不臥。

四 前項の十二頭陀行は、仏の正法眼蔵を嗣いだ摩訶迦葉が常に行じたと言われる。すぐれた素質を持った人でないとできないという意。

五 西天竺。インドのこと。

六 先人の遺風、余流。

七 中国のこと。「シンダン」（日葡辞書）。

八 寺院の経済をまかなう財産。

九 インドで仏弟子たちがしたような食物を乞うやり方。

一〇 生まれつきがわるく、物事にたえられない者。

一一 信者が三宝にささげた施物。

一二 仏弟子として布施を受けて他にその福を分かたず、道を行じないために受ける罪。

一三 出家者が、信施、乞食によらず、農、商、仕、工により生活すること。

一四 普通、徳少なき道人の意で僧の自称として使われるが、ここは現世の福もそなわらない貧窮の道人という意味。

一五 やり方。方針。

一六 「あらず」は、正しくない、まちがっているの意。

一七 時と人。末世、下根に対応する。

一八 いったん進んだ境地からあともどりすること。

一九 身方に引き入れて契約する。次の契るもその意味。長期の保証を得ておく。

二〇 僧団の外にあって、財力勢力等により仏教を保護する人。「一檀那をも相語らひ」と同じ意になる。

二一 しずかなすまい、静かな所。

たずねて言った。

戒を破りながらなすこともなく、人間界、天上界の供養をうけ、道心も無くてむだに如来からいただいた福分を費やすよりは、俗世にある人々と同じようにして、俗世の人のすることをして、生きながらえて、よく仏道を修行するのはいかがでございましょう。

禅師が答えて言われた。

破戒無道心でおれとだれが言ったか。ただ無理にも道心をおこし、仏法を行ずべきなのである。まして経典には、持戒・破戒を問題とせず、初心・後心の区別なく、平等に如来の福分を与えると説いてある。戒を破ったら還俗せよ、道心がなければ修行をするなと書いたものは見たことがない。だれといって最初から道心のある人などがあろうか。ただこのように、おこしにくい道心をおこし、行じにくい仏道を行ずると、おのずと進歩するのである。人は皆仏性があるのだ。いたずらに卑下してはならない。

また言われた。

文選に、「一国は一人のために興り、先賢は後愚のためにすたる。」と言っている。その説くところは、国に一人の賢者が出なければ、先賢の跡はたちまちすたれてしまうというのである。この意味をよく考えよ。

二二　インド、中国、日本。

二三　仏教以外の経典。内典に対する「ゲデン」(日葡辞書)。

二四　論語里仁篇第四の言葉。

二五　劫は、四十里四方の蔵に詰めた芥子粒を、百年に一回一粒ずつとり出してなくなる時間（芥子劫）、あるいは、四十里四方の石に、百年に一回長寿の人が来て、そのうすい衣でこすってその石がなくなる時間　磐石劫）とも言い、考え切れない長い時間をいう。

二六　「幾廻　イクタヒ」(名義抄)。「幾回」(易林本節用集)。

二七　うき世とのかかわりを断ち切れない、それが妄情による執着である。

二八　経典に説かれた仏の教の集大成。一は全の意。

二九　生活をたすける道具。

三〇　生まれつきその人の一生に備わっているもの。

三一　人の造作を加えないこと。自然に。

三二　須菩提　Subhūti　の訳語。釈迦の十大弟子のうち解空第一と称せられる。

三三　摩訶迦葉　Mahākāsyapa　十大弟子のうち頭陀第一と称せられ、付法蔵第一祖。

三四　分にしたがって。

三五　「威王ノノタマハク、古ノ賢人ニオヨベル賢人ナシ、故ニコノマズ。淳于髡ガイハク、イニシヘニスグレタル色ハ西施毛嬙ノカホヨキタグヒナリ。今ハコレニオヨベル色ナシトイヘドモ王強テ求メコレヲ愛ス。イニシヘノ滋アヂハヒハ竜ノ肝、豹ノハラゴモリノタグヒナリ。今ハコレニオヨベル味ナシトイヘドモ、王タシナミモトメ

テコレヲ愛ス、イニシヘノヨキ馬ハ飛免（ヒト）・緑耳（リョクシ）ノタグヒナリ。今ハコレニオヨベル馬ナシトイヘドモ、随分（ズイブン）ニコレヲコノムゾ。」（仮名貞観政要巻第一。かなづかい訂）淳于髡は戦国斉の人。斉の宣王の入り聟となる。弁舌をもって人を動かす力があり、諸国に使してかつて国の体面をけがすことがなかった。史記滑稽列伝に入る。西施、毛嬙は、中国古代の美女の代表。縦ひ毛嬙西施美妙の容顔を見るも、朝（あした）の露眼を遮る。」（学道用心集）。

三六　名馬の代表。

三七　豹胎は、文選、枚乗の七発の注に、「玉杯象箸は菽藿之羹を盛らず、必ずや熊蹯豹胎を将てせん。」とある。美食の代表。

三八　一〇ページ注一一参照。

三九　道分に対する。この世的なしあわせ。ここは、世間衣粮の資具。

四〇　はかり知れぬ自在な力。

四一　仏九難の一。随羅然国の波羅門王阿耆達は釈尊および五百の弟子に一夏（げ）九十日の間自分の国ですごしていただくようにお願いした。釈尊はこれを許されて五百弟子とともにその国に行ったところ、王は仏および仏弟子への日々の供養をすっかり忘れてしまった。釈尊の一行は食べるものもなく困っていると、五百匹の馬を持つ馬師がいて、馬の食べる麦を半分さいて、仏および五百の弟子に供養し、これによって仏の一行は九十日をすごしたという。（法苑珠林に興起行経を引く。）

四二　初心ははじめて道に入った者。後心は仏道に入って時

経たる者。

四三　一たん出家した人が髪をのばして俗人となること。

四四　仏果に至るべき本性。大乗仏教ではあらゆるものが成仏する。

四五　六十巻、梁の昭明太子蕭統の撰。周秦から梁までのすぐれた詩文を集める。

四六　文選第三十八巻、張子然の「呉の令謝詢がために諸孫の守冢の人を置かんと求めし表」。

四七　以上が本文であるという意味の注記。

四八　その意味は。

校訂

1　余事、事のふりがなは朱書。

2　原文、依レ求不レ来、不レ求非レ不レ来。

3　原文、毛牆。

4　原文、胎。

5　慶安本、流布本は「仏家」。俗に対する語は僧であり、またこの書の「仏家」の用法は単なる僧をさすと見えないので、ここは「僧」と補った。

6　原文、二千年。禅苑清規は「二千年遺蔭」。

7　原文、国為一人興レ先賢為後愚癡。返り点がおかしいが、慶安本も「国ハ一人ノ為ニ先賢ヲ興シ後愚ノ為ニ廃ス」とあり、かなり古くからの形らしい。

十四　世間の男女老少

雑話の次デに云ク、世間の男女老少、多く雑談の次デ、あるいは交会淫色等の事を談ず。是レを以テ心を慰メンとし興言とする事あり。一旦心も遊戯し、徒然も慰むと云フとも、僧は尤モ禁断すべき事なり。俗なほよき人、実しき人の、礼儀を存じ、げにげにしき談の時出来らぬ事なり。ただ乱酔放逸なる時の談なり。況ンや僧は、専ら仏道を思フべし。希有異躰の乱僧の所言なり。

宋土の寺院なんどには、惣て雑談をせざれば、左右に及ばず。我ガ国も、近ごろ建仁寺の僧正存生の時は、一向あからさまにも是のごとキ言語出来ラず。滅後も在世の門弟子等少々残リ留マリシ時は、一切に言ハざりき。近ごろ七八年より以来、今出の若人達時々談ズルなり。存外の次第なり。

聖教の中にも、「麁強ノ悪業ハ人ヲシテ覚悟セシム、無利の言説は能ク正道を障ふ。」ト。ただ打チ出し言ふ語すら利無キ言説は障道の因縁なり。況ンや然ノごとキ言説ノことばに引カれテ、即ち心も起りつべし。尤も用心すべきなり。わざとことさらいでかくなんいはじとせずとも、あしき事と知リなば漸々に退治すべ

さまざまの話のおりに言われた。

俗世の男女は老いも若きも、雑談しているとたいていは、猥談、色ごとの話を始める。それで心を慰めたり座興とすることがある。しばらくは気持を解放し、手持ちぶさたをまぎらせはするが、仏弟子は特にかたく禁ずべきことである。世俗の人でさえも、教養もあり身分もある立派な人や、きちんとした人が、礼儀をわきまえ、まともな話をする時には、出てこないことである。ただ、酒に酔ってしまりもなくなったときに話すことである。ましてや、仏弟子たるものは、専ら仏道を心にかけるべきである。猥談などするのは、めったにない行儀はずれの気ちがい坊主の言うことである。

宋の国の寺院などでは、全く雑談をしないから問題はない。わが国でも、近ごろ建仁寺の僧正栄西禅師が世においでの時には、全く、かりそめにもこのような言葉は出てこなかった。亡くなった後も、禅師御在世当時の門人たちが少し寺に残りとどまっている間は、全く言わなかった。最近この七、八年以来、新参の若い人たちが時々するのである。もってのほかけしからぬ事である。

仏の教えの中にも「粗雑ではげしい悪業はかえって人を悟りに入れることもある。役に立たないおしゃべりは仏道をさまたげる。」とある。ちょっと口に出す言葉でさえ、役に立たない話は仏道をさまたげるもとになる。ましてや、猥談などは、その言葉にひかれて、

きなり。

すぐにそうした煩悩も起るであろう。特に気をつけるべきである。しいて特別にこんなことは言うまいとしなくとも、悪いこととわかったら、次第次第にこの煩悩を断ずることができるのである。

注

一　いろいろとりまじえた話。
二　淫色を交会する。女色、男色の肉体的な交わり。「白衣の為に男女を通致し、淫色を交会し、諸の縛著を作す。」(梵網経軽戒第三十)。「ケウクヮイ、マジワリ、ワウ。フウフノケウクヮイ」(日葡辞書)。
三　おもしろい言葉。即興のことば。
四　「ユケ　アソビタワブルル」(日葡辞書)。
五　教養もあり身分もある人。立派な人。
六　まじめな人。きちっとした人。
七　まともな。
八　交会淫色等のことを談ずるのは。「希有異躰」はめったにない、あるべからざる身なり姿。
九　乱行の僧。「ランソウ、ミダレタ　ソウ」(日葡辞書)。
一〇　栄西禅師。
一一　かりそめにも。
一二　「ゴンゴ、ゴンゴニ　オヨバヌ」(日葡辞書)。
一三　道元禅師が安貞元年に帰朝されてからこの嘉禎元年までおよそ七、八年になる。
一四　新参。
一五　思いもかけぬ。
一六　あらあらしく強い言葉や行ないは悪業である。

一七 ちょっと口に出す。
一八 仏道のさわりとなるもと。
一九 直ちに。
二〇 交会淫色の煩悩がおこる。
二一 「ことさらびて」の音便。特別に。
二二 対治とも書く。煩悩を断ずること。

校訂

1 原文、慰。
2 原文、「麁強悪業ノ人覚悟」。慶安本、流布本は、「麁強悪業令人覚悟、無理言説能障正道」とする。

十五 世人多く善事を成す時は

夜話ニ云ク、世人多く善事を成す時は人に知ラれんと思ひ、悪事を成ス時は人に知ラれじと思ふに依ツて、コノ心冥衆の心にかなはざるに依ツて、所作の善事に感応なく、密に作ス所ノ悪事には罰有るなり。己に依ツて返りて自ラ思はく、善事には験なし、仏法の利益なしなんど思へるなり。是レ即チ邪見なり。尤も改ムベシ。

人も知ラざル時は潜に善事を成し、悪事を成シて後は発露して咎を悔ゆ。是ノごとクすれば即チ密々に成ス所ノ善事には感応有り、露レたる悪事は懺悔せられ

夜話に言われた。

世俗の人はたいてい善い事をする時は、人に知られたいと思い、悪事をする時は、人に知られまいと思う。それでこの気持が、目に見えない世界にいる諸天や閻魔王などの心にかなわないために、善い事をしてもよい報いがあらわれず、人知れずやった悪事には罰が下るのである。そうした自分の経験から、かえって、「善い事をしてもいい結果はあらわれない。仏法のご利益はないものだ」などと思っている。これがとりもなおさず間違った考えである。まずこの考えを改めなくてはならない。

だれも知らない時に、ひそかに善い事をし、悪い事はしたらあと

て罪滅する故に、自然ニ現益も有るなり。当果をも知ルベシ。

爰に有ル在家人、来ツて問ウテ云ク、「近代在家人、衆僧ヲ供養じ仏法を帰敬するに多く不吉の事出来ルに因ツテ、邪見起りて三宝に帰（敬）せじと思ふ、如何。」ト。

答ヘテ云ク、即チ衆僧、仏法の咎にあらず。即チ在家人の自ガ誤なり。その故は、仮令人目ばかり持戒持斎の由現ずる僧をば貴くし、供養じ、破戒無慚の僧の飲酒肉食等するをば不当なりと思ウて供養セず。このノ差別の心、実に仏意に背けり。因ツて帰敬の功も空シく、感応無キなり。戒の中にも処々にこの心を誡めたり。僧と云はば、徳の有無を択バず、ただ供養スベキなり。殊にその外相を以て内徳の有無ヲ定ムベカラず。

末世の比丘、聊カ外相尋常なる処と見ユれども、また是レに勝ツたる悪心も悪事もあるなり。仍て、好キ僧、悪シキ僧を差別し思フ事無クて、仏弟子なれば此方を貴びて、平等の心にて供養帰敬もせば、必ズ仏意に叶ツて、利益も速疾にあるべきなり。

また冥機冥応、顕機顕応等の四句有る事を思フべシ。また現生後報等の三時業の事も有り。此等の道理能々学スベキなり。

で告白して罪を悔いる。このようにすれば、人に知られないようにした善事は神仏に通じ、告白して人に知られた悪事は懺悔が行なわれて罪が消滅する。だからおのずから、この世でのご利益もあるのである。これによって、未来に受ける果報も、わかるであろう。

ここに一人の在家の人が来て、たずねて言った。

「近ごろ在家の者が御出家がたを供養し、仏法に帰依しうやまうと、たいてい縁起でもない事が起こってくるので、間違った考えをおこして、仏法僧の三宝に帰依するのはやめようと思いますが、これはいかがなものでございましょう。」

禅師が答えて言われた。

それはとりもなおさず、お坊さんがたや仏法の罪ではない。すなわち、在家の人自身のまねいた間違いである。そのわけは、こうである。たとえば見かけばかり戒を保ち、正午前一食の作法を守る様子を見せる僧をありがたがって供養し、戒を破って恥を知らない僧が酒を飲んだり肉を食ったりするのを、道にはずれたものだと思って供養をしない。この分けへだてする心が、実に仏の心にそむいているのである。だから、帰依しうやまっても功徳はなく、神仏にも通じないのである。四十八軽戒の中でも、方々でこの気持をいましめている。出家の仏弟子とあれば、徳の有り無しを問題とせず、ただ供養すべきである。特に、その姿かたちによって内にある徳の有り無しをきめてはいけない。

末世の比丘というものは、少しばかり見かけのいいところが見えても、またそれを上回る悪心も悪事もあるものである。だから 立

派な坊さんだとか、悪い坊さんだとか差別して考えることなく、仏弟子とあれば、その点を尊敬して、差別のない気持で供養もし帰依もしてうやまったならば、必ず仏の心にもかなって、ご利益も直ちにあるに違いない。

　また論理的に言って、冥機冥応といって、見えないところでしたことが見えないところで報いられることもあり、冥機顕応で見えるところで報いられることもあり、顕機に冥応のある場合もあり顕応のある場合もある。この四つの場合があることを考えてみよ。また、報いというものは、順現報受といって現世でした行ないの報いを現世で受けることもあり、順次生受といって、次の生で報いを受けることもあり、順後次受といって、第三生以後に生まれ変わった時に報いを受けることもある。これを三時業というのである。こういう道理をよくよく指導者について学ぶべきである。

注

一　人間の目に見えない梵天、帝釈天や閻魔王など。

二　衆生の信心善根が諸仏・菩薩に通じてその力があらわれること。

三　犯した罪をかくさず申しあらわすこと。懺悔がこの形で行なわれる。

四　現世の利益。

五　当来の果。未来の果報。

六　「日葡辞書」に、「クヤウジ、ズル、シタ、ソウヲ　クヤウ　スル、ホトケヲクヤウズル」と両様に出ている。ここの濁音は原文のまま。

七　戒をたもち、食事は正午前に一回だけというきまりを実行する。

八　「シャベツ」（日葡辞書）。

九　「ブツイ、ホトケノ　ココロ」（日葡辞書）。

一〇　梵網経四十八軽戒のうち第二十八に「知事報じて言ふべし、次第に請ぜば即ち十方の賢聖僧（けんじやうそう）を得ん。しかるに世人五百羅漢僧を別請（べつしやう）せんは、僧次の一凡夫僧にしかず。もし僧を別請せば是れ外道の法なり。」とある。

一一　身体の上にあらわれた美醜をいう。

一二　仏弟子であるという点だけを。

一三　冥機冥応（見えないところでしたことが見えないところで報いる）、冥機顕応（見えないところでしたことが表にあらわれたところに報いる、以下同様）、顕機冥応、

顕機顕応の四通りの組み合わせができる。

一四　四句分別といって、諸法は一である、諸法は一ではない、諸法は一でもあり一でなくもある、諸法は一でもなく一でないのでもないという四句によって諸法を解釈分別する論理形式があるが、ここは前項のような四つの言い方をさしたのであろう。

一五　順現報受（今生でなした業の報いを今生で受ける）、順次生受（今生でなした業の報いを次の生で受ける）、順後次受（今生でなした業の報いを第三生以後百千生に受ける）の三をいう。正法眼蔵三時業巻がある。

校訂

1　原文、「帰敬三宝不レ帰思フ」。上の帰敬は余分と見て削る。

2　原文「不レ供養」「可レ供養」。ゆえにこの場合は清音で読む。注六参照。

十六　若し人来つて用事を云ふ中に

夜話ニ云ク、若シ人来ツて用事を云フ中に、あるイは人に物を乞ヒ、あるイは訴訟等の事をも云はんとて、一通の状をも所望する事出来有るに、その時、我レは非人なり、遁世籠居の身なれば、在家等の人に非分の事を謂ハんは非なりとて、眼前の人の所望を叶へ

夜話に言われた。

もし、だれか来て用件を話しているうちに、あるいはほしい物があるため、あるいは訴訟事件などのため、一通の手紙をいただきたいということが起こったら、その時、「わたしは俗世を捨てた人間である。僧になってもその道で出世しようという望みは持たず、世

ぬは、その時に臨ミ思量すべきなり。
実に非人の法には似たれども、然有ラず。そノ心中を捜るに、なほ我レは遁世非人なり、非分の事を人に云はば人定メて悪シく思ひてんと云ふ道理を思ウて聞かざらんは、なほ是レ我執名聞なり。ただ眼前の人のために、一分の利益は為スべからんをば、人の悪シく思ハん事を顧ミず為スベキなり。こノ事非分なり、悪しとてうとみもし、中をも違はんも、是ノごとキ不覚の知音中違ん、何か悪カルベキ。顕には非分の僻事をすると人には見ユれども、内には我執を破ツて名聞を捨つる、第一の用心なり。

仏菩薩は、人の来ツて云フ時は、身肉手足をも斬るなり。況ンや人来ツて一通の状を乞ハん、少分の悪事の名聞ばかりを思ウてそノ事を聞カざランは我執の咎なり。人は「ひじりならず、非分の要事云フ人かな」と、所詮無ク思ふとも、我レは名聞ヲ捨テ、一分の人の利益とならば、真実の道に相応スベキなり。古人もそノ義あるかと見ユる事多し。予もそノ義を思ふ。少少檀那知音の思ヒ懸ケざる事を人に申シ伝へてと云フをば、紙少分こそ入レ、一分の利益をなすは、やすき事なり。

弉聞ウテ云ク、この事、実に然なり。但し善キ事に人の利益とならん事を、人にも云ヒ伝へんはさるべし。

間づきあいをやめている身であるから、世俗の人に分をこえた口出しをするのは、いけないことである。」と考えて、目の前にいる人の希望をかなえてやらないのは、その時と場合に応じ、よく考えてみなければならないことである。

実際、それが世捨て人のやり方のように見えるが、そうではない。そんなことを言う人の心中を察してみるのに、やはり、「自分は世俗の名利に望みをかけぬ世捨て人である。分不相応のことを人に言ったら、世間の人がきっと自分を悪く思うだろう。」という道理を考えているのである。そのため相手の頼みを聞きとどけないのは、やはりこれは自分のことを考え、世間の評判を気にしているのである。ただただ目の前にいる人のために、身分相応に、自分にできるだけのことは、人が自分を悪く思うのは気にかけないで、利益をはかってあげるべきである。その結果、手紙を受け取った人が、「これは、世捨て人らしからぬことである。よくない事だ。」といって、疎遠にしたり、仲たがいしたりすることがあっても、そんな道理のわからない知人とは仲たがいしてもなんの悪いことがあろうか。外見は、分不相応のまちがいをするように人からは見られても、内心に、自分のことばかり考える気持を打ち破り、名誉心をすてること、これが第一に心がけねばならぬことである。

仏菩薩は、人が来て頼むときには、自分の身の肉でも、手足でも切ってあたえるのである。ましてや、人が来て、手紙一本頼むのに、わずかな世間の不評判を気にして、その頼みを聞かないのは、これは自分のことばかり考えているまちがいである。相手は「遁世者ら

若し僻事(ひがこと)を以て人の所帯[13]を取らんと思ひ、あるイは人のために悪シキ事を云フをば、云ヒ伝フベキ乎(か)、如何(いかん)。

師答ヘテ云く、理非[14]等の事は我が知ルベキニあらず。ただ一通の状を乞へば与フれども、理非に任せて沙汰[15]スベキ由、云ふ人にも、状にも載スベシ。請ケ取ツテ沙汰せん人こそ、理非をば明ラムべけれ。我ガ分上ニあらず。是(かく)のごとキ事を理ヲ枉(ま)ゲテ人に云ハん事、また非なり。また現(げん)[16]の僻事なれども、我レを大事にも思ふ人の、この人の云ハん事は善悪違(たが)へじと思ふほどの知音檀那の処へ、僻事を以て不得心[17]の所望をなさば、其レをば、今の人の所望をば、一往聞クとも、彼(か)ノ状にも、去[18]リ難ク申せば申すばかりなり、道理に任せて沙汰有ルベシト云フベキなり。一切に是(かく)(のごとく)ナレば、彼も此レも遺恨(ゐこん)[19]有ルベカラざルなり。

是(かく)ノごとキ事、人に対面をもし、出来(いでき)る事に任せて能々(よくよく)思量すべきなり。所詮は事に触レて名聞我執を捨ツベキなり。

注

一 「シュツライ　イデキタル」(日葡辞書)。

二 世捨て人。世俗の人に対する。

三 平安時代以来、僧が顕密のしかるべき寺院に籍を置き、

しくもない、分不相応の俗用を言ってくる人だ。」しようがないな、と思っても、自分としては、世間の評判を捨て、自分なりに人の利益となるならば、それが真実の道にかなうはずである。昔の人にも、こうした道理によっているのではないかと思われる行ないが多い。わたしもそういう道理を考えている。檀那や知人が、少々思いがけないようなことを、人に伝えてくださいと言うのに対しては、紙は少しはいるけれども、分相応の利益をはかってあげるのは、たやすいことである。

懐弉がたずねて言った。

このことはまことにおっしゃる通りでございます。ただし、善いことでしかも人の利益になることを人に言い伝えるのはよろしゅうございましょう。けれども、もし間違った事で、人の財産を取ろうと思ったり、あるいはだれかにとって不都合な事を言う場合でも、依頼に応じて伝えるべきでしょうか、いかがでございましょう。

禅師が答えて言われた。

その場合、道にかなっているか、かなっていないかはわたしのかかわり知るところではない。ただ、「手紙を一通望まれたので書き与えますが、その裁定は道理のあるなしにしたがってなさるように」ということを、相手方にも言い、また手紙にも書いておくのがよい。手紙を受け取って処理する人が理非を明らかにするであろう。そこまでは自分の範囲ではない。こういうことを道理をまげてまで人に要求するのは、これまたいけないことである。また、明らかに間違ったことであるけれども、自分を尊重してくれている人で、

「あなたのおっしゃることなら善悪ともにそむきますまい。」とまで思ってくれている知友や檀那の所へ、間違った事をもって納得のいかない要求をするようならば、その場では一応、その人の頼みを聞いてやるが、書いて与える手紙には、「たって望むからお伝えするだけです。道理にしたがって処理してください。」と書くべきである。すべてにこのようであれば、双方とも恨みを残すことはないはずである。

　このようなことは、人と会ったり、事の起ったりするにしたがって、よくよく考えめぐらすべきである。要は、何事につけても名声を思い、自分のことばかり考える心を捨てるべきである。

師匠について学問をするのは、それによって世間に認められ、貴族の帰依を受け、ひいては僧綱の位にのぼる立身出世の道となってしまっていた。鎌倉時代にはそれに不満をいだき、寺院の籍を離れ、立身を求めずひたすら仏道にかなった生活をしようとする出家者があらわれた。これらを遁世者と呼んだ。「トンセイ、トンゼイ、ヨヲノガルル」(日葡辞書)。

四　世間づきあいをせず、引きこもっていること。「ロウキョ　コモリイル」(日葡辞書)。

五　分にはずれたこと。遁世者は遁世者なりの名聞を持っていたことが知られる。

六　「あし」は善に対する悪であり、「わるし」「わろし」は見かけがわるい、見っともないの意。

七　疎遠にする。寺院や師僧についていればそれぞれ衣、食、住に事欠かないが、遁世者は篤信者の布施にまつよりほかないから、そこに弱みがあるところを突いている。

八　道理のわからないこと。

九　七七ページ注一参照。

一〇　かたく戒行を守る高徳の僧。また遁世者。

一一　かいがない。せっかく後援者となっていてもはりあいがないと思う。

一二　予想外な、ふさわしくないこと。

一三　領有物。領土、財産。

一四　よい悪いというような事。

一五　理非を論じ定めること。

一六　現在目に見えた。

一七 納得のいかない望み。
一八 断わりきれない。

校訂
1 原文、訴詔。
2 原文、扗レ理。

十七 今の世出世間の人

夜話ニ云ク、今ノ世、出世間の人、多分は善事をなしては、かまへて人に識ラれんと思ひ、悪事をなしては人に知られじと思ふ。此レニ依ツテ内外不相応の事出来る。相構へて内外相応し、誤りを悔い、実徳を蔵シて、外相を荘らず、好事をば他人に譲り、悪事をば已に向フる志気有るべきなり。

問ウテ云ク、実徳を蔵し外相を荘ラざらん事、実に然ルベシ。但シ、仏菩薩の大悲ハ利生を以て本とす。無智の道俗等、外相の不善を見て是レを謗難せば、謗僧の罪を感ぜん。実徳を知ラずとも外相を見て貴ビ供養せば、一分の福分たるべし。是レ等の斟酌いかなるべきぞ。

答ヘテ云ク、外相を荘ラずと云ツて、即チ放逸ならば、また是レ道理にたがふ。実徳をかくすと云ツて在

夜話に言われた。

今の世の在俗の人も出家の人も、たいていは、善い事をすると、どうかして人に知られようと思い、悪い事をすると、人に知られまいと思う。そのために心の内と外とが一致しなくなる。どうか努めて、心の内と外を一つにし、間違いは悔い改め、真実の徳は内にかくし、うわべのすがたを飾らず、好い事は他人に譲り、悪事は自分がその責めを引き受ける意気ごみをもつべきである。

たずねて言った。

真実の徳を内にかくし、うわべを飾らないことは、まことに仰せの通りでございましょう。ただ、仏菩薩の大きな慈悲心は、生あるもののためになることを根本としております。物もわからぬ出家、在家の人々が、出家人のうわべの姿の悪いのを見て、悪口を言い、非難をしたならば、僧をそしる罪の報いを受けましょう。真実の徳はわからないでも、うわべの姿を見て、ありがたがって供養をすれ

家等の前に悪行を現ぜん、また是レ破戒の甚しきなり。ただ希有の道心者の由を人に知られんと思ひ、身ニ在ル失を人に知られじと思ふ。諸天善神及ビ三宝の冥に知見する処を愧ヂずして、人に貴ビられんと思ふ心を誡ムるなり。ただ時に臨ミ事ニ触レて興法のため利生のため、諸事を斟酌すべきなり。「擬して後言ヒ、思ウて後行じて率暴なる事なかれ。」となり。所詮は一切の事に臨ミて、道理を案ズベキなり。

念々に留マラず日々に遷流して、無常迅速なる事、眼前の道理なり。知識経巻の教を待ツベカラず。念々に明日を期スル事なかれ。当日当時許と思ウて、後日は甚だ不定なり、知り難ければ、ただ今日ばかりも身命の在らんほど、仏道に順ゼント思フべきなり。仏道に順ゼン者は、興法利生のために、身命を捨テ諸事を行じ去なり。

問ウテ云ク、仏教の進めに順ツて乞食等を行ズベキ歟、如何。

答ヘテ云ク、然ルベシ。但シ、是レは土風に順ツて斟酌有るべし。なにとしても、利生も広く、我が行も進むかたに就クベキなり。是レ等の作法、道路不浄にして、仏衣を着ケて行歩せば穢つべシ。また人民貧窮にして次第乞食も叶フベカラず。行道も退クベク、利

ば、それなりに俗世のしあわせを得るもととなりましょう。このへんの考慮は、どのようにしたものでございましょうか。

道元禅師が答えて言われた。

うわべの形を飾らないからと言って、すぐさま勝手気ままにするなら、これまた道理に反する。真実の徳を表にあらわさないからと言って、在家の人などの前で悪い行ないをして見せるのは、これまたとんでもない破戒である。かれらはただ、自分が世にもまれな道心者であることを人に知られようと思い、また自分の持っている欠点を人に知られまいと思うのである。諸天善神や仏法僧の三宝が人の目に見えないところで見通していらっしゃるのに対して、恥ずかしいとも思わず、ただ世人にありがたがられようと思う心を戒めるのである。ただ時に臨み、事に触れて、ひたすら仏法がさかんになるよう、生あるものに利益のあるよう、さまざまの事を考慮すべきである。「実際にあてはめて考えてから物を言い、よく考えてから実行に移して、決して軽々しく粗暴であってはならない。」とも言われている。つまりはすべての事に当たって道理をよく考えるべきである。

われわれの生命は刻々に流れゆいて少しもとどまらず、物事は日日うつりかわって、一定の状態なく、変化することのすみやかなことは、だれでも目の前に見ている道理である。指導者や経典の教えを待つまでもない。一刻一刻に、明日のあることをあてにしてはならない。その日、その時だけ生きているものと考えて、このあとどうなることかはきまったものではない、先のことはわからないから、

益も広カラざル歟。ただ土風を守ツて、尋常[29]ニ仏道を行じ居たらば、上下の獲自ラ供養を作すべし。自行化他成就せん。

是のごとキ事も、時ニ臨ミ事に触レて、道理を思量して、人目[30]を思ハず自の益を忘レ、仏道利生の方によきやうに計ラフベシ。

注

一　世間にある人と俗世を出た人と。
二　心にかけて。なんとかして。
三　心の中と外の態度が一致しないこと。
四　真実心にたくわえられた徳。外相に対する。外相は身体の上にあらわれた美醜。
五　「しかも菩薩はまさに一切衆生に代りて毀辱を加ふるを受け、悪事をば自ら已れに向へ、好事をば他人に与ふべし。」（十重禁戒のうち、不自讃毀他戒）。また、「如し大已の所に在らば苦事はまづ作せ。好事はまさに大已に譲ろべし。」（対大已五夏闍梨法第三十）。
六　事を成そうとする意気ごみ。こころざし。
七　衆生を利益すること。
八　道は道人すなわち出家人、俗は在俗の人。
九　そしり、非難する。
一〇　仏法僧の三宝をそしれば、不謗三宝戒を犯す。
一一　この世的なしあわせが報いられる善行。道分に対する語。

ただ、きょうだけでも、命のある間、仏道にしたがおうと思うべきである。その仏道にしたがうということは、仏法を興し、生あるものに利益を与えるため、身を捨て命を捨ててさまざまの事を行なっていくのである。

また、たずねて言った。

仏教のすすめにしたがって、托鉢などの行も行なうべきでしょうか、いかがでございましょう。

禅師が答えて言われた。

そうあるべきである。ただし、これはその土地の風俗習慣にしたがって考えるべきであろう。何にしても、広く生あるものを利することができ、また自分の修行も進む方につくべきである。托鉢などの作法は、この国でやっては、道がきたないから、お袈裟を着けて歩いたら、お袈裟がよごれてしまう。またわが国では庶民が貧乏であるから、順に七軒だけ門に立って食を乞うて帰るということもできない。それでは仏道を行ずることもあともどりして、人々に利益を与えることも広くないことになるであろうか。ただその土地の風俗習慣を守って、まともに仏道を行じていたならば、上下の人々も自然に供養をするようになるであろう。そうすれば自分の修行も、他人を教化することも成し遂げられるであろう。

このような事も、時に臨み事に触れて、その道理をよく考えめぐらし、人が見て何と思うかを気にせず、自分の利益を念頭におかず、ただ、仏道のため、また生あるものに利益を与えるため、少しでもうまくいくように計らうべきである。

一二　事情をよく見て考えはかること。

一三　さまざまの対象に心をうばわれて制止なく勝手気ままなこと。

一四　たぐいまれな道心を持った人であるということを。

一五　欠点。

一六　天界（人間界の上）にいる天人や護法の善神。

一七　人の目に見えないこと。諸天善神は人の目に見えないところで見通している。

一八　仏法を興隆せしめること。

一九　おしはかる。

二〇　軽率であらあらしいこと。

二一　うつりかわってとどまらないこと。これを世(せ)という。

二二　あてにする。

二三　一定していない。

二四　その土地の風習。

二五　袈裟のこと。

二六　「ギャウブ　ユキ、アルク」（日葡辞書）。

二七　貧富をえらばず、得、不得にかかわらず、順に七軒を托鉢して帰る乞食(こつじき)の仕方。十二頭陀行(ずだぎょう)の一。

二八　あともどりする。

二九　あたりまえなことが立派なことである。まともに。

三〇　人が見て何と思うかを気にしない。

校訂

1　原文、道俗。

十八　学道の人、世情を捨つべきに就いて

示ニ云ク、学道ノ人、世情[1]を捨ツベキに就イて重々[2]ノ用心有ルベシ。世ヲ捨テ、家ヲ捨テ、身ヲ捨テ、心ヲ捨ツルなり。能々思量スベキなり。

世を遁レて山林に隠居[3]し、我ガ重代ノ家を絶ヤサず、家門親族の事を思ふも有り。

家ヲ遁捨シて親族の境界[4]をも捨離すれども、我ガ身に苦シキ事を為サじと思ひ、病発[5]しつべき事を、仏道をも行ゼじト思ふハ、未だ身を捨テざルなり。

また身をも惜まず難行苦行すれども、心仏道に入ラずして、我ガ心に違く事をば、仏道なれども為じと思ふハ、心ヲ捨テざルなり。

注

一　俗世において習慣となった分別判断。情は、感覚、意識にひき回されておこる心の動き。

二　いくえにも。段階のあること。

三　かくれすむこと。

四　自分の勢力の及ぶ範囲を、自己のものとして執着する

教えて言われた。

仏道を学ぶ人が、俗世で習慣になった分別判断を捨てるについて、段階的に心がけるべきことがある。世を捨て、家を捨て、身を捨て、心を捨てるという四段階である。これについてよくよく考えめぐらすべきである。

まず、ともかくも世をのがれて山深くかくれ住んだが、祖先代々伝わった家は絶やさず、一家、一門、親族の者どもの身の上まで考えている者もある。

次に、俗家はのがれいで、一門一族とも縁が切れたが、自分の身に苦しいことはすまいと思い、病気になりそうなことは、仏道でも行じまいと思うのは、まだ身を捨てていないのである。

第三に、我が身を惜しまず難行苦行をするけれども、心が仏道に入らず、自分の気持に合わないことは、仏道であってもすまいと思うのは、まだ心を捨てていないのである。

こと。

五　病気のおこりそうな事をしない、そのためには仏道をも行じない。

校訂

1　原文、可(ツキ─ヲツ)レ発。

2　原文、「遠ク」の左側に「違ソム」とあり。

正法眼蔵随聞記　三

一　行者先づ心を調伏しつれば

示ニ云ク、行者先ヅ心を調伏[一]しつれば、身をも世をも捨ツル事は易きなり。ただ言語に付き行儀に付キて人目ヲ思ふ。コノ事は悪事なれば人悪く思フベシとて作サず、我れコノ事をせんこそ仏法者と人は見めとて、事に触れ能キ事をせんとするもなほ世情[二]なり。然ればとて、また恣に我意に任せて悪事をするは一向の悪人なり。所詮は悪心を忘れ、我が身を忘レ、ただ一向[三]に仏法のためニすべき也。向カひ来らん事にしたがツて用心スベキなり。

初心の行者は、先づ世情なりとも人情[四]なりとも、悪事をば心に制して、善事をば身に行ずるが、即ち身心をすつるにて有るなり。

注

教えて言われた。

仏道修行をする者は、まず心を調え、その動きをおししずめてしまえば、身を捨てることも世を捨てることも、たやすいことである。ところがなかなかそれができないで、物を言うにつけても動作の仕方につけてもただ人目ばかりを考えている。この事は悪事であるから人が見て悪く思うであろうと思ってしなかったり、自分がこの事をしたならば、人はいかにも自分が仏法者だと思うであろうと考えて、何かにつけてよい事をしようとするが、それもやはり世情である。そうかといって、また好き勝手に自分の気持にまかせて悪い事をするのは、全くの悪人である。結局のところ悪心も忘れ、自分の身をも忘れて、ただひたすらに仏法のためにすべきである。個々の事については、起こってくる事に応じて気をつけるべきである。、

道にはいったばかりの修行者は、まず世情で考えても、人情で考えてもよいから、悪事はしないようにし、善事を身をもって行なってゆくのが、とりもなおさず身も心も捨てることになるのである。

一 身心を調えてもろもろの悪行をとりのぞくこと。ここは心の方に重点をおいている。
二 九八ページ注一参照。
三 「それ仏法修行はなほ自身のためにせず、いはんや名聞利養のためにこれを修せんや。ただ、仏法のためにこれを修すべきなり。」(学道用心集)。
四 人間的な思慮分別。世情と根本的な差はない。

校訂

1 原文、見ヌ。「こそ」の結びでもあり、「メ」であろう。

二 故僧正建仁寺に御せし時

示ニ云ク、故僧正建仁寺に御[1]せし時、独の貧人来ツて道ツて云ク、「我ガ家貧にして絶烟数日ニ及ビ、夫婦子息両三人餓死しなんとす。慈悲をもて是レを救ひ給へ。」と云ふ。

その時、房中[一]に都て衣食財物等無りき。思慮をめぐらすに計略尽キぬ。時に薬師の仏像を造らんとて、光[二]の料に打チのべたる銅少分ありき。これを取ツて自ラ打チ折ツて束円めて彼の貧客に与へて云ク、「是レヲ以テ食物をかへて、餓を塞ぐべシ。」ト。彼ノ俗悦ンで退出ぬ。

門弟子等難[2]じて云く、「正シく是レ仏像の光なり。

教えて言われた。

なくなった葉上僧正栄西禅師が京都の建仁寺においでになった時、一人の貧乏人が来て、「わたくしの家は貧乏で、数日にわたり、ご飯をたくこともできないでおります。それで夫婦と息子二、三人が餓え死にしそうになっております。お慈悲をもってわたくしどもをお救いください。」と言って頼んだ。

その時、建仁寺内のどこにも、衣類も食物も、ねうちのある品物もなんにもなかった。考えてみたが全くてだてもなかった。ところがちょうどその時、薬師如来の像を造るというので光背の材料に使う打ちのべた銅が少しあった。僧正は、これを持って来て、自分で打ち折り、束ねまるめて、さっきの貧しい客に与え、「これでもっ

以て俗人に与フ、仏物己用の罪如何。」
僧正答ヘテ云ク、「実に然ルなり。但シ、仏意を思フに、身肉手足モ分ツて衆生に施スベシ。現に餓死スベキ衆生には、直饒全躰ヲ以て与フとも仏意に叶フベシ。また我レこの罪に依ツテ縦悪趣に堕スベクとも、ただ衆生ノ餓エを救フベシ。」云々。
先達の心中のたけ、今の学人も思フベシ、忘ルル事なかれ。
またある時、僧正の門弟の僧云ク、「今の建仁寺の寺敷河原に近し。後代に水難有リぬベシ。」
僧正云ク、「我等後代の亡失こレヲ思フベカラず。西天の祇園精舎も礎計留れりしかども、寺院建立の功徳失スベカラず。また当時一年半年の行道、そノ功莫大なるべし。」ト。
今これヲ思ふに、寺院の建立ハ実に一期の大事なれば、未来際をも兼ネて難無キやうにとこそ思フべけれども、さる心中にも、是ノごとキ道理を存ぜらレシ心のたけ、実ニこれヲ思フベシ。

注

一 房は僧の居所。「バウヂウ、バウノ ウチ」(日葡辞書)。

て食物と交換して餓えをしのぐがよい。」と言われた。そこでその俗人は喜んで帰って行った。
そのあとで、弟子たちはこれを非難して、「この銅は、ほかならぬ仏像の光背でございます。それを俗人に与えられたのは、仏のために使うものを私用する罪になると思いますが、いかがでございましょう。」とたずねた。
僧正が答えて言われた。「まことにその通りである。けれども、仏様のお心を考えてみると、仏様は、からだの肉や手足をさいても衆生に施しなされるであろう。目の前に餓え死にしそうになっている人々には、たとえ、仏像の全体を与えても、仏様のお心にかなうであろう。また、わたし自身はこの罪によって、たとえ地獄におちようとも、ただ生あるものの飢えを救うべきである。」と。
仏道に深くいたった先輩の心の高さを、今の道を学ぶ者もよく考えて、こういう心を忘れてはならない。
また、ある時、僧正の弟子の僧が、「今の建仁寺の寺の敷地は、加茂川の川原に近いから、後世、洪水にあう危険がありましょう。」と言った。
僧正は、「われわれは、後世になって寺がなくなる心配までしてはならない。インドの祇園精舎でさえも、礎石だけしか残っていないが、それでも寺院建立の功徳はなくなりはしない。後代はどうあろうとも、今さしあたって一年でも半年でも、ここで修行が行なわれる功徳は、莫大なものであろう。」と言われた。
今、この話を考えてみると、寺院を建立することは、まことに一

代の大事業であるから、遠い未来の先までも欠点のないようにと思うのは当然であるが、そうした気持の中でも、栄西禅師はまたこのような道理を考えておいでになったのである。そのお心の高さを、ほんとうに考えてみなくてはならない。

二　後光。「ひかりのなかの化仏無数億」(栄華物語)。

三　仏に供養されたものを他に流用すると、盗戒を犯した罪となる。

四　釈尊の前生譚には、餓えた虎の親子のために身を施した話や、鴿を助けるために身の肉をさいて鷹に与えた話がある。なお七七ページ注一参照。

五　地獄、餓鬼、畜生、修羅の悪道。

六　自分より先にその道に達した人。先輩。「センダチ、またはセンダツ」(日葡辞書)。

七　高さ。

八　家の敷地が家敷であるに対して、寺の敷地。

九　インド。

一〇　祇陀園林須達精舎の略。祇樹給孤独園ともいう。仏在世に舎衛国の富豪須達長者は釈尊のために寺院を建てて献じようとし、祇陀太子の土地が最もふさわしいので、これを買い取ろうとした。太子はたわむれに、この土地に黄金を敷きつめたら売ろうと言った。長者が真実に黄金を敷きつめたので太子は前言を悔い、土地は長者の買ったものであるが、樹木は自分のものであるからこれを献じようと言って、両人力を合わせてできあがった。それでこの二人の名をとって寺の名とした。西域伝には、「今荒廃して石柱のみ有り。高さ七十余尺、育王之れを造る。甎室一つ存せり、余は並びに湮滅す。」とある。

一一　さしあたった今の時。「タウジ、イマノトキ」(日葡辞書)。

一二　一生にまたとない大事件。嘉禎二年十月十五日には興

聖寺が開堂されるから、この筆録のころ寺院建立のことは進行していたであろう。

〔三〕 未来のはて。未来にはてはないから永遠と同じことになる。

校訂

1 原文、御セン。
2 原文、歟。
3 原文、祇薗。

三 唐の太宗の時

夜話ニ云ク、唐の太宗の時、魏徴奏して云ク、「土[1]民、帝ヲ謗ズル事あり。」帝の云ク、「寡人仁あツて人に謗ぜられば愁と為すべからず。仁無クして人に褒られば是ヲ愁フベシ。」ト。

俗なほ是ノごとシ。僧ハ尤モこノ心有ルベシ。慈悲あり、道心ありて愚癡人に謗ぜらレ譏らるルはくるしかるべからず。無道心にして人に有道と思ハれン、是レを能々慎むべし。

また示ニ云ク、隋[三]の文帝の云ク、「密[2]々の徳を修して〈称[四]〉ぐるをまつ。」ト。言ふ心は、能[五]き道徳を修してあぐるをまちて民を厳ウするとなり。僧なほ及バ

夜話に言われた。

唐の太宗の時、魏徴が太宗に、「人民どもが陛下の悪口を言っております。」と申し上げた。

太宗は、「わたしに仁徳があって、しかも悪く言われるならば心配しないでよい。もし、仁徳もないのに人からほめられるならば、それは心配しなくてはならない。」と言われた。

世俗の人でもこの通りである。仏弟子たる者は特にこの気持がなければならない。慈悲もあり、道心もあって、ばかな人々に悪口を言われ、非難されるのはいっこうさしつかえない。道心もないのに、人から道心のあつい人だと思われるのはよくよく気をつけなければならない。

また、教えて言われた。

ざラン、尤モ用心スベキなり。ただ内々ニ道業を修セバ自然に道徳外に露ルベシ。自ラ道心道悳外に露れ人に知られン事を期セず望マず、ただ専ラ仏教に随ヒ祖道ニ順ひ行けば、人自ラ道徳に帰スルなり。

此に学人の誤り出来るやうは、人に貴びられて財宝出来たるを以て道徳彰たると自ラも思ひ、人も知ルなり。是レ即チ天魔波旬の心に付キたると知ルベシ。尤モ思量スベシ。教の中にも、是レをば魔の所為と云フなり。未ダ聞カず、三国の例、財宝に富ミ、愚人の帰敬を以て道徳と為スベしとは。

道心と云フは、昔より三国皆貧にして身を苦しめ、省約して慈有リ道有ルを実の行者と云フなり。

徳の顕ハルると云フも、財宝に饒に、供養に誇るを云フにあらず。徳の顕ハルルに三重あるべし。先ヅは、その人、その道を修するなりと知らるルなり。次には、その道を慕ふ者出来る。後にはその道を同ジク学し同ジク行ずるなり。是れを道悳の顕ハるると云フなり。

注

一　次に「愚擬人」と言っているような無知の人民をさす。
　原文「尘」。

二　徳すくなき人。天子。諸侯の自称。

隋の文帝は、「人知れず徳をおさめて、人民が王の徳をたたえるようになるのをまつ。」と言われた。その意味は、道の徳を立派に身につけて、人民が王をほめたたえるようになってから、民を正しくみちびいてゆくというのである。出家の仏弟子としてこの心がけに及ばないのは、特に気をつけなければならない。ただ、人知れず仏道にかなった行ないをしていると、おのずから仏道の徳が外にあらわれてくる。自分では、道心のあることや、仏道修行の結果身についてくる徳が外にあらわれ、人に知られるなどということは望みもせず、期待もせず、ただひとすじに、仏祖の教え、仏祖の道にしたがってゆくと、人が自然にその仏道の徳に帰依するのである。

ところがここに、仏道を学ぶ者が間違いをおこすのは、人にありがたがられ、財宝が豊かになったのをもって道の徳があらわれたのだと、自分も思い、人もそれによって判断することである。これこそ悪魔が心にとりついたのだと思うがよい。よくよく思いめぐらすべきである。経典に説く中でも、これをば魔のしわざと言うのである。インド、中国、日本の例を見ても、財宝が豊かになり、おろかな人々から帰依され敬われるのをもって道の徳とせよということは聞いたことがない。

道心というのは、昔から、インド、中国、日本ともに、みな貧乏で、身をもって苦労にたえ、余分なものは費やさず、慈悲心あり、仏道にかなった行ないをすることで、このような人を真実の仏道修行者と言うのである。

徳が外にあらわれるということも、財宝をたくさん持って、ご供

三 楊堅（五四一―六〇四）。隋初代の王。北周の外戚として権力あり、五八一年、北周の帝から位を譲られて帝位につく。在位二十四年、善政を行ない諸般の制度を整備した。
四 類聚名義抄に「称　ホム、アグ」とあり。濁音表記は原文のまま。
五 道を学んで身につけた徳。
六 類聚名義抄「厳　イツクシ」おごそかである。端正である。
七 類聚名義抄「約　ツヅマヤカニ」。原文は省字の左側にかなあり。

校訂

1 原文、随。
2 原文、蜜々。
3 原文、自不レ期下不レ望道心道徳露レ外ニ被上レ知レ人ニ。今、かなを重んじて読んだ。
4 原文は、省の字の左側にツツマヤカニメとあり。約は次行に移る。
5 原文、同学行シ。行は不用と見て削る。

四　学道の人は人情をすつべきなり

夜話ニ云ク、学道ノ人は人情をすつべきなり。人情を捨ツると云フは、仏法を順じ行ズルなり。世人多クハ小乗根性なり。善悪ヲ弁じ是非ヲ分チ、是ヲ取リ非

養が多いといって得意になるのを言うのではない。徳が外にあらわれるには三段階ある。第一には、あの人は、仏道修行をしているのだと人に知られることである。第二には、その道を慕って、ついてくる者が出てくることである。第三には、その道をいっしょになって学び、同じように修行するようになることである。こういうのが、道の徳が外に顕われたというのである。

夜話に言われた。
仏道を学ぶ人は、人情を捨てるべきである。人情を捨てるというのは、仏法を、教えの通りに行ずることである。世間の人はたいて

ヲ捨ツるはなほ是レ小乗の根性なり。ただ世情を捨ツれば仏道ニ入ルなり。仏道ニ入ルには善悪を分ち、よしと思ひ、あししと思フ事を捨て、我ガ身よからん、我ガ心何と有ラんと思ふ心を忘れ、よくもあれあしくもあれ、仏祖の言語行履に順ひ行くなり。

我ガ心によしと思ひ、また世人のよしと思フ事、必ズよからず。然レば、人目も忘れ、心をも捨て、ただ仏教に順ヒ行クなり。身も苦シく、心も患とも、我が身心をば一向に捨テたるものなればと思ウて、苦しく愁つべき事なりとも、仏祖先徳の行履ならば為スベキなり。コノ事は能キ事、仏道に叶ツたりと思フとも、なしたく行じたくとも、仏祖の心になからん事をなすべからず。是レ即チ法門をも能ク心得たる事にて有ルなり。

我ガ心も、また本より習ヒ来レる法門の思量をばすてて、ただ今見ル処の祖師の言語行履に次（第）に心を移しもて行クなり。是ノごとクすれば、知恵もすすみ、悟りも開くるなり。

元来学スル所ノ教家ノ文字の功も、捨ツベキ道理あらば捨テ、今の義につきて見ルベキなり。法門ヲ学スる事はもとより出家得道のためなり。我ガ学スル所多年の功を積めり、何ぞやすく捨テんとなほ心深ク思ふ、即チこノ心を生死繋縛の心と云フなり。能々思量スベ

い、自分ひとり悟ろうとする小乗根性である。善悪是非を分別して、よい方を取り、悪い方を捨てるのは、やはり小乗の根性である。こうした世間の人情を捨てさえすれば、そのまま仏道にはいるのである。仏道にはいるには、善悪を分別して、これが善い、あれが悪いと考えることをやめて、自分の身がよくなるようにとか、自分の気持がどうであろうとか考える心を忘れて、よくてもわるくても、仏祖の言われたこと、行なわれたあとにしたがって行くのである。

自分の心でよいと思い、また世間の人がよいと思うことが、必ずよいのではない。だから、人からの批判も考えず、自分の心をも捨て、ただ仏の教えに順って行くのである。たといからだも苦しく、心もつらい思いをしても、自分の身も心も、全く捨てたものなのだからと思って、苦しくつらいことでも、それが、仏祖や、高徳の先輩のなさった行為ならばなすべきである。反対に、この事はよい事で、仏道にかなっていると思い、実行したいと思っても、仏祖の心にない事をしてはならない。これがすなわち仏法の教えをもよく心得ていることである。

自分の心も、また以前から習い修めた教義によるおしはかりを捨てて、ただ今現に見ているところの祖師の言葉や行ないに、次第に心を移して行くのである。このようにすれば、知恵もすすみ、悟りも開けるのである。

これまで学んで来たところの経論にもとづく学問の力も、捨てるべき道理があったら捨て、今聞くところの意味にしたがって考えるべきである。教えを学ぶことは、本来出家して道を得るためである。

シ。

注

一 人間的な分別判断。
二 小乗は大乗に対する語。自分ひとり煩悩を去って悟りの世界に入ろうとする考え。これに対し大乗の菩薩は「われより先に人をわたさん」という願をおこすものである。
三 シク活用の形容詞の終止形に「し」を重ねるのは、中世初期前後に多く現われる語法である。
四 有徳の先輩。
五 生死輪廻につなぎとどめられること。解脱の反対。

校訂

1 原文、自レ本。

自分の学問は多年の功をつんだのである、どうして容易に捨てることができようかと、依然として心中深く思っている、この心をとりもなおさず迷いの世界にしばりつけられた心というのである。よくよく考えてみるべきである。

五　故建仁寺の僧正の伝をば

夜話ニ云ク、故建仁寺ノ僧正の伝をば顕兼ノ中納言入道書イたるなり。そノ時辞する言に云ク、「儒者に書カせらるべきなり。そノ故は、儒者ハ元来身を忘レて、幼きより長るまで学問を本とす。故に書イたる物に誤り無キなり。只人は、身の出仕交衆を本とし

夜話に言われた。
なくなった建仁寺の僧正栄西禅師の伝記は、顕兼中納言入道が書いたのである。その時、はじめ辞退して、言われた。「儒者に書かせらるべきである。そのわけは、儒者はもともと身を忘れて、幼いころから成人するまで学問を本務としている。だから、

て、かたはら事に学問をするあひだ、自(おのつか)ら[五]よき人あれども、文筆[六]の道にも誤り出来ルなり。」ト。これを思ふに、昔の人は外典の学問も身を忘レて学するなり。
また云ク、故胤[七]僧正云ク、「道心と云フは、一念三千[八]の法門なんどを胸中に学し入レて持ツたるを道心と云フなり。なにとなく笠を頸に懸ケて迷ヒありくをば、天狗魔縁の行と云フなり。」ト。

書いたものに間違いがない。儒者でない普通の人は、自分の勤めや交際を第一として、片手間に学問をするから、自然に文章なども立派な人もあるけれども、詩や文の書き方にも間違いが出てくるのである。」と言われた。この話を考えてみるに、昔の人は、仏教以外の経典の学問でも身を忘れて学んだのである。
また、言われた。
なくなった公胤僧正は、「道心というのは、天台の一念三千の教義などを学んで心に入れて持っているのをいうのである。なんとなく笠を首にかけて、僧の格好をしてうろつき回るのは天狗に惑わされた行と言うのである。」と言われた。

注

一 栄西禅師。
二 源宗雅の子、本名兼綱。『古事談』の著者。建暦元年(一二一一)出家し、建保三年(一二一五)没。このころの入道は、剃髪、染衣して僧の形となるが寺院に入らず、家庭にある者。
三 専門以外の人。
四 役目によって出勤し、人々とつきあいをすること。「交衆ケウシウ」(色葉字類抄)。
五 立派な人。ここは学問のできる人。
六 文は韻文、筆は散文。詩や文章を書くこと。またそのわざ。
七 公胤(—一二一六)。大僧正公顕の弟子。園城寺の長吏となること二回、明王院僧正とも言われた。しかし晩年には法然上人源空をたずねて往生の法を聞き、職を辞して禅林寺のほとりに住み、熱心な念仏行者として知られた。

道元禅師は叡山を下って公胤をたずね、「本来本法性天然自性身と説かれてあるが、もしかくのごとくならば、三世の諸仏は、どうしてさらに発心して三菩提の道を修行するのか」という疑問を呈し、宋に行って善知識をたずねることを勧められている。（天文本建撕記による。）

八　天台宗の法の解き方。人の一念のうちに三千の諸法が完全にそなわっているということ。

九　天狗魔は一種の悪魔で、道心なく、我執驕慢で名利を求める出家人がなるという。魔縁は、魔が人を惑乱してさまざまのさまたげをすること。

校訂

1　原文、幻。

六　故僧正云く、衆各々用ふる所の衣粮等

夜話ニ云ク、[一]故僧正云ク、「衆各用キル所の衣粮等の事、予が与フると思フ事なかれ。皆是レ諸天の供ずる所なり。我レは取り次ギ人に当ツたるばかりなり。また各々一期の命分具足す。奔走する事なかれ。」ト常にすすめられければ、足レ第一の美言と覚ユるなり。また大宋[二]宏智禅師の会下、天童は[三]常住物千人ノ用途なり。然れば、堂中七百人、堂外三百人にて千人につ

夜話に言われた。なくなった栄西禅師は、「あなたがたこの寺においでの修行者たちが、めいめい使っている衣類や食料などは、わたしがあげると思ってはなりません。みなこれは仏法を守る神様たちが供養してくださるのです。わたしはただ取り次ぎ人にあたっているだけです。また、あなたがためいめい、一生の間に必要なものは、生まれつき備わっております。余分に手に入れようとして走り回ってはいけませ

もる常住物なるによりて、長老の住シたる間、諸方の僧雲集して堂中千人なり。その外五、六百人ある間、知事、宏智に訴へ申スに云ク、「常住物は千人の分なり。衆僧多ク集マツて用途不足なり。枉ゲてはなたれん（ことを）。」と申シしかば、宏智云ク、「人々皆口有リ。汝が事に干ラず。歎く事なかれ」云々。

今これを思ふに、人皆生得の衣食有り。思フによりても出来ラず、求メずとも来ラざルニあらず。在家人すらなほ運に任せ忠を思ひ孝を学ぶ。何ニ況ンヤ出家人は惣て他事を管ゼず。釈尊遺付の福分あり、諸天応供の衣食あり。また天然生得の命分あり。求め思ハずとも、任運として有ルべき命分なり。直饒走り求メて財をもちたりとも、無常忽に来らん時如何。故に学人はただ宜ク余事に心ヲ留めず、一向ニ道ヲ学スベキなり。

またある人云ク、「末世辺土の仏法興隆は、衣食等二の外護の外に、累なくて修行せば、其レニ付イて有相著我の諸人集マリ学せんほどに、その中に若シ一人の発心の人も出来ルべし。故に閑居静処を構へ、衣食具して仏法修行せば利益も弘かるべし。」と。

今は思フに然ラず。直饒千万人、利益につき財欲にふけりて聚ツたらん、一人なからんニなほ（お）とるべき。悪道の業因の自ら積ミて仏法の気分無キ故なり。

ん。」と言って、常に道に励むことをすすめられた。わたしは、これはこの上ない立派なお言葉だと思っている。

また大宋国の宏智禅師の門下では、禅師が住せられた天童山は、寺の平常の経済が千人の費用をまかなうものであった。だから、僧堂の中で修行をする人が七百人、僧堂の外で寺の仕事に従事する人が三百人で、合計千人と計算する経費であった。しかるに宏智禅師の住持せられた間は、修行僧が雲のように各地から集まって、僧堂の中の人がすでに千人あった。そのほかに、まだ五、六百人もあったので、寺務をつかさどる役僧が宏智禅師に申し出て、「寺の経常費は千人分であります。ところが、修行僧たちが多く集まるので費用が不足いたします。道理には合いませぬが、ここは特別に、余分の僧は、ほかへやるようになさってくださいまし。」と言ったところ、宏智禅師は、「人はめいめい口を持っている。おまえの仕事と関係はない。心配するな。」と言われたという。

今、この話を考えてみるに、人はめいめい、一生に備わった衣食がある。いくら考えてみたところで出てくるものでもなく、手に入れようとしないとやってこないというものでもない。俗世にいる者でさえ、やはり、衣食のことは運に任せて、ただ君に忠義をつくし、親に孝行しようと思うばかりである。ましてや、出家たる者は、すべて仏道以外のことにはかかわらない。お釈迦様が残してくださった物質的なめぐみもあり、仏法を守る神様がたが供養してくださる衣食もある。また生まれながらその一生にそなわったものがある。さがし求めないでも、命をささえるだけのものは、天然自然にそな

清貧艱難(かんなん)してあるイは乞食(こつじき)し、あるイは菓蓏(さくわら)等を食して、恒(つね)に飢饉して学道せば、是レを聞イて若シ一人も来(きた)り学せんと思ふ人有らんこそ実(まこと)の道心者、仏法の興隆ならめと覚ユる。艱難貧道によりて一人も無カらん[一五]と、衣食饒(ゆたか)にして諸人聚(あつ)マツて仏法なからんと、ただ八両と半斤[一六]となり。

また云ク、当世の人、多ク造像起塔等の事を仏法興隆と思へり。また非なり。直饒(たとひ)高堂大観、珠(たま)を磨(みが)イて金(こがね)をのべたりとも、是レに因ツて得道の者あるべからず。ただ在家人の財宝を仏界に入レて善事をなす福分なり。小因大果[一七]を感ずる事あれども、僧徒のこノ事を営(いとな)むは仏法興隆にあらざるなり。ただ草庵樹下(さうあんじゆげ)にても、法門の一句をも思量し、一時ノ坐禅をも行ぜんこそ、実(まこと)の仏法興隆にてあれ。

今僧堂[一八]を立テんとて勧進(くわんじん)[一九]をもし、随分に労(らう)する事は、必ズしも仏法興隆と思はず。ただ当時学道する人も無く、徒(いたづ)ラに日月(じつげつ)を送る間、ただあらんよりもと思ウて[二〇]、迷徒の結縁ともなれかし、また当時学道の輩の坐禅の道場のためなり。また、思ヒ始(はじ)めたる事のならずとても、恨ミ有ルベカラず。ただ柱(はしら)[二一]一本なりとも立て置きたらば、後来も思ひ企テたれども成らざりと見んも苦思(くし)[二二]スベカラざルなり。

またある人すすみて云ク、「仏法興隆のため関東に

わっている。よしんば奔走して財産を持ってみても、今にも死んだらどうであるか。だから、仏道を学ぶ者は、ただ、ほかの事に心をとめないで、ひたすら道を学ぶべきである。

また、ある人が、「末法の世ではあり、仏出世のインドからは遠く離れたこの日本で仏法をさかんにするには、衣食等について、外部から援助してもらう以外は心にかかることもなく修行をしたら、その点にひかれて、形にとらわれ、自分のことばかり考えている人人が集まって来て、仏法を学んでいるうちに、その中に、あるいは一人ぐらい、真の菩提心をおこす人も出てくるでしょう。ですから、静かな所に、しずかな住まいを作って、衣食に事欠かず仏法を修行したら、利益も大きいでしょう。」と言った。

今これを考えてみると、そうではない。よしんば千万人の人が、利益にひかれ、物欲のとりことなって集まったとしても、それでは、学ぶ人が一人もいないのよりまだいけない。それらの人は、餓鬼・畜生におちるもととなる行為を自分から積んで、仏法の気分がないからである。行ないを潔くする結果貧乏し、さまざまの苦労をなめて、あるいは托鉢によって食物を得、あるいは木の実・草の実などを食べて、いつも腹をすかして仏道を学んでいると、その話を聞いて、もしも一人でもその人について、仏道を学ぼうと思う人ができたら、それこそほんとうの道心者であり、また、ほんとうに仏法がさかんになることであろうと思われる。苦労と貧乏ゆえに仏道を学ぶ人が一人もないのと、衣食が充分あり、人がおおぜい集まって、それで仏法が一かけらもないのとは、はかりにかければ、どちらも

下向すべし。」ト。

答ヘテ云ク、然ラず。若シ仏法に志あらば、山川江海を渡ツても来ツて学スベシ。その志なからん人に往キ向カツてすすむとも、聞キ入レん事不定[二三]なり。ただ我が資縁のため人を誑惑[二四]せん、財宝を貪らんためか。其れは身の苦しければ、いかでもありなんと覚ユるなり。

また云ク、学道の人、教家の書籍及び外典等学すべカラず。見るべき語録[二五]等を見ルべし。その余は且く是レを置クベシ。

今代の禅僧、頌[二六]を作り法語を書かん料に文筆[二七]等を好む、是レ則チ非なり」頌作らずとも、心に思はん事を書イたらん。文筆調ハずとも、法門を書クベキなり。是レをわるしとて見たがらぬほどの無道心の人は、好キ文筆を調へ、いみじき秀句ありとも、ただ言語計を翫んで、理を得べカラず。我レも本幼少の時より好み学せし事にて、今もややもすれば、外典等の美言案ぜられ、文選[二八]等も見らるるを、詮無キ事と存ずれば、一向に捨つべき由を思ふなり。

同じ役に立たぬことである。

また、禅師が言われた。

今の世の人は、たいてい、仏像を造ったり、お寺を立てたりなどすることを仏法がさかんになることだと思っている。これもまた、間違っている。よしんば高大な建物に宝石をみがき黄金をのべてかざってみても、これによって道のさとりを得る者があろうはずはない。ただ、俗世にいる人の財宝を仏様関係のことに取り入れて、よいことをしてしあわせを得るもととなるだけである。在家の物質による供養というものは、いかに多額でもきわめて小さなことにすぎないが、それが原因で、成仏の縁を得るという莫大な結果が得られるのだから結構なことではある。しかし出家の仏弟子がこうしたことに精を出すのは、仏法がさかんになることではない。出家の仏弟子は、ただ、そまつな草の庵ででも、わずかに雨露をしのぐ木の下にいてでも、仏の教えの一言でも考えめぐらし、またはしばらくの間の坐禅でも行なうのが、真に仏法がさかんになることである。

わたしも今、この興聖寺に僧堂を建てようとして、施主の寄付もつのり、自分の力相応にはたらいているが、これは必ずしも仏法がさかんになることとは思っていない。ただ、今さしあたって、仏道を学ぶ人もそんなになく、したがってわたしのする仕事もないので、何もしないでいるよりは、こんなことでもしておこうと思って、また迷っている人々が仏法に縁を結ぶきっかけにでもなってほしいと思い、また、現にここで仏道を学んでいる少数の人々の坐禅の道場とするためである。だからまた、思い立ってはじめたことが実現し

注

一　栄西禅師。

二 字は正覚（一〇九一—一一五七）。真歇清了とともに丹霞子淳の法を嗣ぐ。長蘆山、天童山に住持となる。大慧宗杲の看話禅に対し、『黙照銘』を作り、達磨正伝の禅風を鼓吹した。その頌古百則はのちに『従容録』の骨子となる。
三 明州慶元府天童山景徳寺。もと小院であったのを、宏智禅師の時、道士館、尼寺、教院等をとりはらって大きな禅院となしたという。
四 住持人。ここは宏智禅師をさす。
五 一〇ページ注一〇、一一参照。
六 元来仏の十号の一。一切の悪を断じて人天の供養を受くべきもの。ここは、当然受けてよい人間天上界からの供養という意味に用いている。
七 人の造作を加えず、自然のなりゆきにまかせること。
八 死を意味する。「無常、涅槃ノ義」（天文十八年本節用集）。日葡辞書には「無常の刹鬼」で死を意味する。
九 末法の世。釈尊入滅後、最初の千年（あるいは五百年とも）を正法、次の千年を像法、その後の一万年を末法と言い、次第に人の機根が下落し、法もさとりもない救い難い世となるという末法思想は、平安時代以来日本の上下にわたり真剣に問題にされていた。末法二千年説をとると、末法の第一年は永承七年（一〇五二）であるからこの時はすでに末法にはいっていた。
一〇 釈尊出世のインドから遠く離れた地。遠いほど、法のうるおいがうすいとされる。
一一 親族や檀那が衣服、飲食その他必要なものを供給して仏道修行者を援助すること。

なくても、心を残すことはない。ただ、柱一本でも立てておいたら、後世の人も、思い立って計画はしたけれど、完成はしなかったのだなと見るだろうが、それもいっこう気にすることはないのである。

またある人が進み出て、「仏法がさかんになるように、関東へ下りましょう。」と言った。

禅師が答えて言われた。

それはちがう。もし仏法に志があるなら、山でも川でも大海をこえてでも自分の方からやって来て学ぶであろう。求法の志のない人に、出かけて行って勧めたところで、こちらの話を聞き入れるかどうかはわからない。にもかかわらず、わざわざ鎌倉へ行くのは、ただ自分の物質的なより所を得ようとして人をまどわし、また無理に財宝を得ようためであろうか。そんな事なら、からだが疲れるだけであるから、行かないでもよかろうと思われる。

また、禅師は言われた。

仏道を学ぶ人は、天台・真言など経論をもととした宗旨の書物や、仏教以外の経典などを学んではいけない。しかるべき祖師の語録などを読むがよい。そのほかのものは、しばらくやめておきなさい。

近ごろの禅僧は、頌を作ったり法語をつくるために、詩文の道を好むが、これはまったく間違いである。頌を作らないでも、心に思ったことをその通り書いておけばよい。また文章の法にはあわないでも、仏の教えを書いたらよいのである。それを、まずいからと言って、見ようとしないほどの無道心の人なら、詩文の法を立派にととのえ、すばらしいいい表現があっても、ただ、言葉ばかりをもて

一二　真実には無相である仏や浄土を有るものと思い、我れ有りと執着すること。
一三　物音のない静かな場所、人との交渉のないすまい。「まさに憒鬧を離れて閑居すべし。静処の人は帝釈諸天共に敬重する所」（遺教経）。
一四　地獄・餓鬼・畜生などにおちいるもととなる業。
一五　本義は聖道にとぼしい意で、出家者の謙称であるが、ここは貧乏な道人の意。
一六　両も斤も重さの単位。十六両をもって一斤とする。つまり名がかわるだけで同じく役に立たないこと。
一七　大智度論巻七にも、「小因大果、小縁大報あり。」とあり、たった一回南無仏と唱え、一つまみの香をささげても必ず成仏することを説く。在家のどんな多額の富も小因にすぎないという考え方。しかし、それによって成仏の果が得られるのは大果である。
一八　嘉禎元年十二月付で、僧堂勧進疏（僧堂建立のための寄付をつのる趣意書）が伝わっている。この記事の年時が推しはかられる。
一九　人に善根功徳を積むようすすめる意味であったが、のちおもに堂塔建立等の寄付をすすめることに用いられるようになる。
二〇　何もしないでいるよりは。
二一　後生と同じ。後の世の人。
二二　考え苦しむ。深く考える。原文に音読の点あり。
二三　一定しない、必ず帰依するときまっていない。
二四　うそを言ってまどわす。

あそんで、道理はわからないであろう。わたしも元来、幼い時から特に心がけて勉強したことなので、今でもどうかすると、漢籍などの立派な言葉におのずから考え及び、また文選なども自然に参照されるのであるが、かいのないことだと思うので、全くやめようと思っている。

二五　禅家の祖師の上堂小参の法語や偈頌などを集録した書。
二六　gāthā の訳語。サンスクリットやパーリ語の詩体の一。偈頌ともいう。中国で韻文形式によって宗旨をあらわしたもの。
二七　文は韻文、筆は散文。形式をととのえ詩文を書くこと。
二八　自然に見るようになる。「るる」は自発の助動詞。

校訂

1　原文、狂テ。
2　原文、猶トルベキ。「猶ヲトルベキ」とあったのが、ヲは猶のすてがなと見られて落ちたのではあるまいか。
3　原文、茶菓。
4　原文、狂惑。
5　原文、幻少。

七　我れ在宋の時禅院にして古人の語録を見し時

一日示ニ云ク、我レ在宋の時、禅院にして古人ノ語録を見シ時（とき）、ある西川（せいせん）の僧の道者にて有リしが、我レニ問ウテ云ク、「なにの用ぞ。」

云ク、「郷里に帰ツて人を化せん。」

僧云ク、「なにの用ぞ。」

云ク、「利生（りしやう）のためなり。」

ある日、教えて言われた。

わたしが宋にいた時のこと、坐禅の道場で古人の語録を読んでいた。その時、ある、四川省出身の僧で道心あつい人であったが、この人がわたしにたずねて言った。「語録を見て何の役に立つのか。」

わたしは言った。「くにに帰って人を導くためだ。」

その僧が言った。「それが何の役に立つのか。」

僧云ク、「畢竟じて何の用ぞ。」ト。

予、後にこノ理を案ずるに、語録公案[四]等を見て、古人の行履をも知り、あるいは迷者のために説き聞かしめん、皆是レ自行化他のために無用なり。只管打坐して[五]大事を明ラめ、[六]心ノ理を明ラめなば、後には一字を知ラずとも、他に開示せんに、用ひ尽クスベカラず。故に彼の僧、畢竟じて何ノ用ぞとは云ひけると、是レ真実の道理なりと思ウて、そノ後語録等を見る事をとどめて、一向に打坐して大事を明ラめ得たり。

注

一　四川省。蜀の地方をいう。

二　教化、化導。

三　衆生を利益する。

四　仏祖が学人を化導したてほんを書きしるしたもの。仏道参学者の手びきとする。因縁話頭とも言う。

五　一生参学の大事。

六　仏法では「三界唯一心、心外無別法」「一心一切法、一切法一心」などといってこの「心」がどういうものであるかを明らかにすることが大事である。この一句流布本、慶安本に欠く。

わたしは言った。「衆生に利益を与えるためである。」

僧はさらに言った。「結局のところ何の役に立つのか。」と。

わたしはあとで、この問いの道理を考えたが、語録や公案などを読んで古人の行ないの跡をも知り、あるいは迷っている人のためにその内容を説いて聞かせるなどのことは、みなこれは、自分の修行の上でも、他人を導く上でも、いらないことである。ただひたすら坐禅して一生参学の大事を明らめ、仏法に説くところの心の道理を明らかにしたなら、そのあとは、一文字も知らなくても、人に教え示すのに使い尽くせないほどである。だからあの蜀地の僧が、結局のところ何の役に立つのかと言ったんだなと思い、これはほんとうの道理であると思って、その後は、語録などを読むことはやめ、ひたすら坐禅に徹して、一生参学の大事を明らかにし得たのである。

八　真実内徳無うして人に貴びらるべからず

夜話ニ云ク、真実内徳無ウして人に貴びらるべからず。

コノ国の人は真実の内徳をばさぐりえず、外相をもて人を貴ぶほどに、無道心の学人は、即チあしざまにひきなされて、魔の眷属と成るなり。人にたツとびられじと思はん事、やすき事なり。中々身をすて世をそむく由を以てなすは、外相計の仮令なり。ただなにとなく世間の人のやうにて、内心を調へもてゆく、是レ実の道心者なり。

然レば、古人云ク、「内空シくして外したがふ。」といひて、中心は我ガ身なくして外相は他にしたがひもてゆくなり。我ガ身わが心と云フ事を一向にわすれて、仏法に入ツて、仏法のおきてに任せて行じもてゆけば、内外ともによく、今も後もよきなり。

仏法の中にも、そぞろに身をすて、世をそむけばとて、すつべからざる事をすつるは非なり。此土の仏法者、道心者を立つる人の中にも、身をす（て）たればとて、人はいかにも見よと思ウて、ゆゑなく身をわろくふるまひ、あるいはまた世を執せぬとて、雨にもぬ

夜話に言われた。

ほんとうに内におさめた徳もないのに、人からあがめられてはならない。わが国の人は、真に内徳をさぐり知ることができず、表に見えるかたちだけで人をあがめるので、道心のない修行者はすぐさま悪い方へひっぱられ、仏道をさまたげる魔の手下になってしまう。人にあがめられまいと思うのはたやすいことである。身を捨て世間にそむく様子をして見せる人は、かえって、うわべだけで真実の道心者ではない。表面はただ、なんということもなく世間の人と同じようにしていて、内心を調えてゆくのが、ほんとうの道心ある者である。

であるから、古人も、「内を空しくして外は世の中の風に従う。」と言って、心のなかに自分に対する執着がなく、表面は一般の人と同じようにしていくのである。自分の身、自分の心ということを全く忘れ去って、仏法に入り、仏法のきまりどおりに行なってゆけば、内心も表面もともによく、現在も将来もよいのである。

仏法の中でも、むやみに身を捨て、世間にそむくからといって、捨ててはならない事をすてるのは間違いである。わが国で仏法者とか道心者とかを表看板にしている人の中にも、身を捨てたのだからといって、人はどうとも見るがいいと思って、わけもなく見っとも

れながらゆきなんどするは、内外(ないげ)ともに無益(むやく)なるを、世間の人は即チ是レを貴き人、世を執せぬなんどと思へるなり。中々(なかなか)仏制を守ツて、戒[13]、律儀をも存じ、自[14]行他行仏制に任せて行ずるをば、名聞利養げなると人も[15]管ぜざるなり。其レがまた我がためには、仏教にも順ひ、内外の徳(とく)も成ルなり。

ないふるまいをし、あるいはまたこの世に執着しないといって、雨ふりに仕度もせず、ぬれながら歩いたりするのは、内心のためにも、表面の行ないのためにも、ともに無益であるのに、世間の人はすぐさまこれをありがたい人だ、世に執着しないなどと思っているのである。かえって、仏のきまりを守り、戒律の内容もわかって、自らの行ないも他のための行ないも仏のきまりどおりに行なう人を、名誉、利益を気にする人だと思って、世人も相手にしないのである。けれどもそれがまた、自分にとっては仏の教えにも順い、内心の徳も、表にあらわれた徳も、できてくることになるのである。

注

一　身の内に積んで表にあらわさない徳。
二　あがめられる。ありがたがられる。
三　仏道のさまたげをなすもの。欲界第六天の主、波旬(はじゅん)をかしらとし、魔軍、魔民、魔衆等の眷属（手下）がいる。
四　ありがたがられまいと。「じ」濁点原文にあり。
五　かりのこと。
六　内面の心。
七　自分の身を考えに入れない。
八　内は内徳、外は外相。
九　わけもなく。むやみに。
一〇　西天(さいてん)此土と熟して使う。この国、ここでは日本のこと。
一一　仏法者、道心者を看板にしているもの。
一二　見た目のわるいこと。ぶていさいに。
一三　戒は非を防ぎ、悪を止める力、諸善発生の根本。律儀は戒を実現するやり方。
一四　自分のための行と、他人のための行。

一五　かかわらない。ここは、相手にしない。

九　学道の人、世間の人に知者もの知りとしられては無用なり

夜話ニ云ク、学道の人、世間の人に、知者もの知りと〈知〉られては無用なり。

真実求道の人の一人も有ラん時は、我が知るところの仏祖の法を説カざル事あるべからず。直饒我レを殺さんとしたる人なりとも、真実の道を聞カんと、真の心を以て問はんには、怨心を忘レて為に是レを説クべキなり。その外は、教家の顕密及ビ内外の典籍等の事、知ツたる気色して全く無用なり。人来ツて是のごとキ事を問フに、知ラずと答へたらんに一切苦しカルベカラざルなり。其レを、物しらぬはわろしと人も思ひ、愚人と自ラも覚ユる事を傷れて、ものを知らんとて博く内外典を学し、剰へ世間世俗の事をも知ラんと思ウて、諸事を好み学し、あるイは人にも知ツたる由をもてなす、極めたる僻事なり。学道のために真実に無用なり。知ツたるを知ラざる気色するも六借し、やうがましければ、かへりてたうと気色にてあしきなり。もとより知ラざらん、一の事なり。

我レ幼少の昔、紀伝等を好み学して、其レが今も入

夜話に云われた。

仏道を学ぶ者が、世間の人に、知者だ、物知りだと知られるのは、いらないことである。

ほんとうに仏道を求める人が一人でもある時は、自分の知っている仏祖の法を説かないことがあってはならない。たとい、自分を殺そうとした人であっても、真実の道を聞こうとまごころから尋ねたならば、怨みを忘れて、その人のためにこれを説くべきである。そうした場合のほかは、経論をもととする天台・真言の教えや、仏教や、それ以外の教えの経典などのことを知っている様子をするのは全くいらないことである。人が来て、このようなことを尋ねたら、「知りません」と答えておいていっこうさしつかえない。それを、物を知らないのは見っともないと、人も思うだろうし、自分でも、ばかのように思うのがつらさに、物を知ろうとして広く仏教やその他の経典を学び、おまけに、世間世俗のことまで知ろうと思って、さまざまな事をとりあげて習い、あるいは人に対しても知っている様子を見せるのは、とんでもない間違いである。仏道を学ぶためには、ほんとうにいらないことである。そうかといって、知っているのに知らないふりをするのも、わずらわしく、様子ありげで、かえ

宋伝法するまでも、内外の書籍をひらき、方言を通ずるまでも、大切の用事、また世間のためにも尋常なり。俗なんども尋常の事に思ヒたる、かたがた用事にて有レども、今倩思フに学道の碍にてあるなり。ただ聖教をみるとも、文に見ゆる所の理を次第にこころえてゆかば、その道理をえつべきを、先づ文章に対句韻声なんどを見て、よき、あしきぞと心に思ウて、後に理をば見ルなり。然らばなかなか知らずして、はじめより道理を心得てゆかばよかるべきなり。法語等を書クも、文章におほせて書カんとし、韻声たがへば拄られなんどするは、知ツたる咎なり。語言文章はいかにもあれ、思ふままの理をつぶつぶと書きたらば、後来も文章わろしと思ふとも、理だにもきこえたらば、道のためには大切なり。余の才学も是ノごとし。

伝へ聞ク故高野の空阿弥陀仏は、元は顕密の碩徳なりき。遁世の後、念仏の門に入ツて後、真言師ありて来ツて密宗の法門を問ヒけるに、彼ノ人答へテ云ク、「皆忘レをはりぬ。一事もおぼえず。」とて答へられざりけるなり。

これらこそ道心の手本となるべけれ。などか少々おぼえでも有るべき。しかあれども、無用なる事をば云はざりけるなり。一向念仏の日はさこそ有ルべけれと覚ユルなり。今の学者もこの心有ルべし。直饒元教

ってありがたそうに見えるからよくない。はじめから知らないのが一番よいのである。

自分は幼い時、紀伝道なども好んで学んだ。それが今でも、入宋して法を伝える時にいたっても、仏の経典やその他の教典を読み、また宋の地方の言葉が使えるようになるまでも、しなければならない重要なことであり、また、世間的な仕事のためにもたいしたことであった。世俗の人などもたいしたことだと思っているし、一方では必要なことではあったのであるが、今、よくよく考えてみると、仏道を学ぶには障害なのである。仏の教えを読んでも、ただ文面に見られるところのすじみちを順々に理解してゆけば、その道理を理解できるものを、まず第一に文章について対句や韻や平仄などを見て、これはうまい、これはまずいと心中に考えた上で、道理を考える。してみれば、かえって、文章の方面は知らないで、初めから道理を理解していったらそれでよいわけである。自分で法語などを書くにも、文章の法に合うように書こうとし、韻や平仄が違うと、そこで考えこんだりするのは、よけいなことを知っている罪である。言葉や文章はどうあっても、考えているとおりの道理をくわしく書いてあれば、後の人も、文章はととのっていないと思っても、道理さえよく通じていれば、仏道のためには重要なことである。その他の学問知識も、これと同様である。

聞くところによると、なくなった高野の空阿弥陀仏という人は、もとは天台・真言の教えに詳しい高僧であった。それが寺を出て一介の修行者となり、念仏の教えにはいってのち、真言専門の僧がや

家の才学等有リとも、皆わすれたらん、よき事なり。況ンや今(いま)学する事、努々(ゆめゆめ)有ルべからず。宗門の語録等、なほ真実参学の道者はみるべからず。そノ余は是レを知ルベシ。

って来て、真言宗の教義を尋ねた。ところがかの空阿弥陀仏は、「全部忘れてしまいました。一事も思い出せません。」と言って答えられなかった。

このような人こそ、道心の手本となるであろう。どうして、少しは思い出せないことがあろうか。しかし、用のないことは言わなかったのである。念仏専門の行者となった以上は、そうあるはずだと、わたしも思うのである。今仏道を学ぶ者も、この気持がなくてはならない。よしんば以前から教家の学問などがあったにしても、全部忘れてしまうのが立派なのである。まして、これから学ぶことは、決して決してあってはならない。禅門の語録なども、やはり、ほんとうに仏道を学ぼうとする仏法者は、読んではならない。その他のことは言うまでもなかろう。

注

一　見っともない、「わろし」はていさいの悪いこと。
二　自ら心をいためずにいられないで。
三　わずらわしい。めんどうである。
四　もったいぶる。しさいらしい。
五　ありがたそうで。
六　原文は記典である。しかし、これは、記は紀に通じ、典は内典(ないでん)、外典(げでん)と、当時の読み方ではデンの音を表わす文字であるので、紀伝の音字と認められる。紀伝は紀伝道の略。紀伝道は桓武天皇延暦二十四年はじめて大学寮におかれ、紀伝博士がそれに当たった。三史（前漢書、後漢書、史記）および史文を専門とし、菅原、大江の二氏が世襲したが、後、菅原家のみとなる。道元禅師の時代には、有名な字鏡集の著者菅原為長（一一五八—一二四六）があり、嘉禎年中参議兼勘解由長官となり、建保年中、後鳥羽上皇に貞観政要の御進講をしている。菅原家には三史、文選の家伝の点本もあり、道元禅師在俗の時の学問の傾向がうかがわれる。
七　地方の言語をよくする。当時は南宋であるから、北方

の標準音である漢音は役に立たず、改めて学び直さねばならなかった。

八 まともである。たいしたものである

九 かつ、一方では。「見舞いかたがた立ちよる」という場合の用法と同じ。

一〇 しなければならないこと。用件。

一一 文字の韻や四声、すなわち平仄(ひょうそく)。

一二 先へ進めなくなる。

一三 非難すべき欠点。罪。

一四 くわしく。片はしから、こまごまと。

一五 後の世の人。

一六 学んで得られる知識。学識。

一七 明遍(一一四二—一二二四)。真言僧。少納言藤原通憲の子。幼より奈良東南院に入り、三論および密教を修め、大和光明山に隠れて仏行を積み、さらに高野山蓮華谷に入ってもっぱら出離の法を修した。のち法然に帰依し、名を空阿弥陀仏と改め、法然寂するや、常にその遺骨を首にかけていたという。同時代に、口に念仏を唱えて一生巡遊教化した空阿弥陀仏法性(はっしょう)があるが別人である。

一八 碩は大。徳のすぐれた人。

一九 「おぼゆ」は思い出す。

校訂

1 原文、幻少。

2 原文、記典。注六参照のこと。

3 原文、顕蜜。

4 原文、蜜宗。

十 今この国の人は

夜話ニ云ク、今こノ国の人は、多分あるイは行儀に
つけ、あるイは言語につけ、善悪是非、世人の見聞識
知を思うて、その事をなさば人あしく思ひてん、その
事は人よしと思ひてん、乃至向後までもト執するなり。
是レまた全く非なり。世間の人、必ズしも善とする事
あたはず。人はいかにも思はば思へ、狂人とも云へ、
我ガ心に仏道に順じたらば作シ、仏法にあらずは行ぜ
ずして一期をもすごさば、世間の人はいかに思ふとも、
苦シカルべカラず。

遁世と云フは、世人の情を心にかけざるなり。ただ
仏祖の行履、菩薩の慈行を学行して、諸天善神の冥に
てらす処に慚愧して、仏制に任セて行じもてゆかば、
一切くるしかるまじきなり。

さればとてまた、人のあししと思ひ云ハん、苦シカ
ラずとて、放逸にして悪事を行じて人をはぢずあるは、
是れまた非なり。ただ人目にはよらずして、一向に仏
法によりて行ずべきなり。仏法の中にはまた、しかの
ごとくの放逸無慚をば制するなり。

また云ク、世俗の礼にも、人の見ざる処、あるイは

夜話に言われた。

現今、わが国の修行者は多く、あるいは動作につけ、あるいは言
葉につけて、善悪是非を考え、世間の人が見聞きしてどう思うかを
考え、こんなことをしたら人が悪く思うだろう、こういうことは人
が立派だと思うだろう、ひいてはあとあとのこともあるということ
まで勘定に入れて考えている。これはまた全く間違っている。世間
の人は、善いことでも必ずしも善しとすることはできないものであ
る。だから、人はどのように思おうとも、また狂人と言うなら言っ
てもよい、自分で考えて、仏道にかなっていたらやり、仏法でない
ことならやらないで、一生を過ごしたなら、世間の人はどう思おう
と、さしつかえないのである。

世の名利を離れて一介の修行者となるということは、世人の不た
しかな分別判断を気にかけないことである。ただ仏祖のなさったあ
と、菩薩の慈悲の行ないを学び行じ、諸天善神が目に見えないとこ
ろではっきりと見ていられることを思って自らの欠点をかえりみ、
仏様のきめられたきまり通りに行じてゆけば、何も気にすることは
ないのである。

そうかといってまた、人が悪いと言おうが思おうが、平気だとい
って、勝手気ままに悪事を行なって人の批判を気にかけないのは、

暗キ室の中なれども、[四]衣服等をもきかふる時、坐臥する時にも、放逸に[五]陰処なんどをも蔵サず無礼なるをば天に慚ヂず[六]鬼にも慚ヂずとてそしるなり。ひとしく人の見る時と同ジく、蔵スベキ処をも隠し、慚ヅベキ処をもはづるなり。仏法の中にもまた戒律是ノごとし。しかあれば、道者は内外を論ぜず明暗を択バず、仏制を心に存じて、人の見ず知ラざればとて、悪事を行ずべからざるなり。

これまた間違いである。ただ人の思わくにはよらないで、ひたすら仏法によって行ずべきである。仏法では、また右のような勝手気ままで恥をしらない行為は、してはならないことになっている。

また言われた。

世俗の礼儀でも、人の見ていないところ、あるいは暗い室の中であっても、衣服などを着かえる際、またすわったりねたりする際に、気をゆるして、かくし所などもかくさず礼を欠くのを、天に愧じず、目に見えない死者の霊に対しても愧じないといって非難する。人の見ていない場合も、人の見ている時と同様にかくすべきところをかくし、恥ずべきところを恥じなければならないのである。仏法の中でもまた戒律はこの通りである。であるから仏道に生きる者は、へやの内外の別なく、明るい暗いにかかわりなく、仏のきまりをわきまえて、人が見ていないから知らないからといって、悪事をしてはならないのである。

注

一　将来。ゆくすえ「向後　キヤウコウ」(色葉字類抄)。
二　慚は内心に自らはじる、愧は、他に比べて自らのおとった点を自覚してひけ目を感じる。
三　シク活用の終止形にさらに「し」のついた語法。
四　「床上に露白にして衣を換ふることを得ざれ」(弁道法)。
五　「インジョ、カクシドコロ」(日葡辞書)。
六　目に見えないところにいる死者の霊。

十一　学人問ふて云く某甲なほ学道心に繫けて

一日学人問ウて云ク、「某甲なほ学道心ニ繫ケて年[一]

ある日、仏道を学んでいる人が質問して言った。

月を運ぶといへども、未ダ省悟ノ分有ラず。古人多く道ふ、「聡明霊利に依ラず、有知明敏をも用ヒずト。しかあれば、我ガ身下根劣智なればとて卑下すべきにもあらずと聞エたり。若シ故実用心の存ずべきやうありやいかん。」

示ニ云ク、しかあり。有智高才を須ひず霊利弁聡に頼らず。実の学道あやまりて盲聾癡人のごとくになれとすすむ。全く多聞高才を用ヒざルガ故に下々根劣器ときらふべからず。実の学道はやすかるべきなり。

しかあれども、大宋国の叢林にも、一師の会下に数百千人の中に、実の得道得法の人は僅一二なり。しかあれば、故実用心も有るべき事なり。今これヲ案ズルに、志之至ルと至ラざルとなり。真実志を至して随分に参学する人、また得ずと云フ事無きなり。そノ用心のやう、何事を専ラにし、そノ行を急にすべしと云フ事は次の事なり。

先づ欣求の志の切なるべきなり。たとへば重き宝をぬすまんと思ひ、強き敵をうたんと思ひ、高き色にあはんと思ふ心あらん人は、行住坐臥、事にふれをりにしたがひて、種々の事はかはり来れども、其れに随ひて隙を求め、心に懸クるなり。こノ心あながちに切なるもの、とげずと云フ事なきなり。是ノごとク道ヲ求ムル志切になりなば、あるイは只管打坐の時、あるイ

「わたくしは、ずっと仏道に専念して年月を経てまいりましたが、いまだに、悟ったというほどのこともございません。古人は多く、『悟るには聡明とか霊利とかはいらない、知恵があり頭のはたらきがよいということも　役に立たない。』と言っております。してみると、自分が生まれつき、おろかで知恵が劣っているからといって、卑下することもないと思われます。これについて知っておくべき秘訣や心がけがございましょうか、いかがでございましょう。」

道元禅師が教えて言われた。

その通りである。悟るには知恵も学問もいらない、頭のはたらきがするどく物事をうまく処理する力によるのでもない。されば と言って、真実の学道を間違えて、めくらかつんぼかふぬけのようになれとすすめることがあるのは、嘆かわしいことである。物知りで学問があるということが全然役に立たないのだからこそ、よくよく劣ったうまれつきがだめだと思うことはない。真実の学道はやさしいはずである。

ではあるが、大宋国の修行の道場でも、一人の師匠の門下に学ぶ弟子、何百人何千人の中で、ほんとうに仏道を悟り、法を伝えた人は、わずかに一人、二人である。だから、秘訣や心がけもあるのが当然である。いま、それを考えてみるのに、それは志がしっかりきまっているのと、そうでないのとによるのである。真実、志をしっかりきめ、全力をあげて、師について仏道を学ぶ人は、また悟りを得ないということはない。その心がけとして、どういう事に専心し、どういう修行をまずしなくてはならないかということは、次のこと

は古人の公案に向カはん時、若シクは知識に向カはん時、実の志をもてなさんずる時、高クとも射つべく、深くとも釣リぬべし。是れほどの心発サずして、仏道[14]と云フほどの一念[15]に生死の輪廻をきる大事をば如何が成ぜん。

若シこノ心有ラん人は、下知劣根をも云ハず、愚鈍悪人をも謂ハず、必ズ悟道すべキなり。

またこノ志を発サバ、ただ世間[16]の無常を思フべきなり。こノ言まただ仮令[17]に観法なんどにすべき事にあらず。また無キ事を造ツて思ふべき事にもあらず。真実に眼前の道理なり。人のをしむ聖教の文証[18]道理を待つべからず。朝に生じて夕に死し、昨日見シ人今日無き事、眼に遮り耳ニ近シ。是レは他の上にて見聞キ[19]する事なり。我が身にひきあてて道理を思ふ事を。直饒七旬八旬に命を期すべくとも、遂に死ヌべキ道理有らば、その間の楽シみ悲シみ、恩愛怨敵[20]を、思ひ[21]〈解〉けば何にてもすごしてん。ただ仏道を思ウて衆生の楽を求むべし。況ンや我れ年長大せる人、半バに過ギぬる人、余年幾[22]なれば学道ゆるくすべき。

こノ道理もなほのびたる事なり。世間の事をも仏道の事をも思へ。明日、次の時よりも、何なる重病をも受ケて、東西も弁ぜず、重苦のみかなしみ、また何なる鬼神の怨害をも受ケて頓死をもし、何なる賊難にも

である。

まず第一に、仏道を心から喜び求める志が痛切でなくてはならない。たとえば、たいせつな宝を盗もうと思ったり、てごわい敵を討とうと思ったり、高貴の美人をわがものにしようと思う気持のある人は、ねてもさめても、事にふれ、時にしたがい、いろいろ事情はかわっても、それぞれにつけてすきをうかがい、心にかける。この気持が度はずれて痛切な者は、思いをとげないという事はない。これと同様に、道を求める志が痛切になってくれば、あるいは、ひたすら坐禅をしている時、あるいは昔の人の公案にむかっている時、もしくは、指導者の前に出た時、本気になってする時、いかに高くても射あてることができようし、いかに深くても釣りあげることができるであろう。これくらいの心をおこさないで、仏道という一瞬に、生死の輪廻をたち切る大事を、どうして成就することができよう。

もし、これほどの気持のある人は、知恵のないことも素質の劣っていることも問題ではない。愚鈍であろうが、悪人であろうが、問題ではない。必ず道を悟ることができるはずである。

また次に、この志を起したら、ただうつりかわる世のありさまが一定不変のものでないことを思うがよい。この無常を観ずるという言葉は、また、ただかりの手段としての観法などですべき事ではない。また、ありもしないことを頭の中に作りあげて考えてみるべきことでもない。無常はまことに眼前の道理である。世間でだいじがっている聖典の中の証拠となる文章や道理をまつまでもない。朝に

逢ひ、怨敵も出来ツて殺害奪命せらるる事もや有ラん、真実に不定なり。

然れば、これほどにあだなる世に、極めて不定なる死期を、いつまで〈生〉きたるべしとて種々の活計を案じ、剰へ他人のために悪をたくみ思うて、徒ラに時光を過ゴす事、極メて愚カなる事なり。

こノ道理真実なれば、仏も是レを衆生のために説き、祖師の普説[二三]法語にもこノ道理をのみ説く。今の上堂[二四]請益等にも、無常迅速、生死事大を云フなり。返々もこノ道理を心に忘レずして、ただ今日今時許と思ウて、時光を失ハず学道に心を入ルベキなり。そノ後真実に易きなり。性の上下、根ノ利鈍、全く論ズべからず。

注

一　生まれつきすぐれていて心のはたらきがするどい。
二　知識があり、頭のはたらきがよい。
三　智は生まれついての頭のはたらき。才は学んで得た才能。学識。
四　頭のはたらきがよく物事をうまく処理する。
五　多く聞いて知識を広くもち、学才があること。
六　「下々の人に上々の智あり」（衆寮清規）。
七　鑑智僧璨の『信心銘』には「至道無難」とある。
八　一師のもとにあつまって仏道を学ぶこと。

生まれて夕べには死に、きのう見た人が、きょうはもう死んでいることは、自らの目で見、したしく耳にするところである。これらは他人の身の上で見聞きする事であるが、さらに自分の身におきかえて、よくよくこの道理を考えてほしいものである。かりに、七十歳、八十歳まで生きられるとしても、結局は死ななくてはならない道理があるとすれば、その生きている間の楽しみ、悲しみ、親子夫婦の間の愛情問題や、あだかたきと思う心も、正しく見きわめてみれば、大さわぎする問題でないことがわかるから、どうあろうとすごしていけるであろう。生きている間はひたすら仏道を心にかけて、生きとし生けるものの真の楽しみを求めなければいけない。まして、自身高齢となった人や、人生の半ばを過ぎた人は、この後何年生きられるかと考えてみたら、仏道を学ぶことをなまけられるものではないであろう。

こうした道理を考えることさえ、なお手ぬるいことである。世間のことでも、仏道のことでも考えてみよ。明日にも、いや次の瞬間にも、どんな重病にかかり、東西もわからぬほどの重苦にあえぐか、また、どんな鬼神の憎しみを受けて急死をするか、どんな賊の難にも逢い、怨敵が出てきて、殺害され、命を奪われることになるか、ほんとうにわからないのである。

してみれば、これほどあてにならない世に、死期はいつやってくるかも知れないのに、いつまでも生きながらえていられると思って、さまざま生活手段を考え、その上まだ、他人に対して悪事をたくらんで、むだに時を過ごすということは、きわめて愚かなことである。

この道理が真実であるから、仏もこれを生きとし生けるもののために説き、祖師の普説法語にも、この道理を説いている。また今日の上堂請益等にも、無常が迅速であり、生死を明らめることが大事であることを言うのである。くれぐれも、この道理を心に忘れないで、ただ、この日一日、たった今だけ命があると思って、時をむだにせず、仏道を学ぶことに身を入れなければならない。その覚悟ができれば、その後はまことにたやすいものである。生まれつきのよしあし、りこうかばかかは全く問題ではない。

九　仏道を心からねがい求める心。
一〇　身分の高い美人。
一一　おのれのものとする。
一二　すき。機会。
一三　度がすぎているのに言う。必要以上にはげしい。
一四　これが仏道かとわかるその瞬間。
一五　車輪が回転して窮まりないように、人の心が次々に執着をおこして、無始無終、迷いの世界をめぐること。
一六　世は遷流の義、間は中の義、うつり流れてとどまらない現象世界をいう。
一七　心の散動を止め、その結果生ずる智慧で、諸法の真の姿を観察すること。教家には六観法、三種の観法等の形式があった。「クヮンボウ、ホウヲ　クヮンズル」(日葡辞書)。
一八　証拠となる経論の文言。それは学問にほこる者がだいじにして、勿体をつけていたのであろう。
一九　思うことをねがうの意。
二〇　父母・妻子など肉親の間におこる愛着の情。
二一　道理を明らめた上で考えてみれば。
二二　手ぬるい。
二三　禅家の説法の一種。あまねく正法を説いて人々を導く意。
二四　請益は師匠の説法のほかに、特に願い出て教えを受けること。勅修百丈清規にも請益の仕方を規定しているが、あらかじめ侍者に告げて許しを受け、方丈に至り、焼香礼拝して、「無常迅速、生死事大」のゆえに特に慈悲を

もってお教えをいただきたいと言ってたのむことになっている。

校訂

1　原文、右側に音読みの点あり。

2　原文、盲聾。

十二　人多く遁世せざる事は

夜話に云ク、人多く遁世セざる事は、我身(がしん)[1]を貪ルニ似て我身(がしん)を思ハざるなり。是レ即チ遠慮[一]無キなり。また是レ善知識ニ逢ハざルニ依ルなり。たとひ名聞[2]ヲ思フとも、仏祖の名を得て古徳後賢[3]是レを聞イて悦ばしめん[二]。たとひ利養[三]を思フとも常楽[四]の益ヲ得、竜天[五]の供養を得ベシ。

注

一　遠きおもんぱかり。

二　この「しめ」は尊敬を表わす助動詞。

三　利益を得てわが身を養うこと。

四　涅槃の四徳、常、楽、我、浄。涅槃は寂滅、不生と訳すが、大乗仏教では不生不滅の義とし、常、楽、我、浄の四徳ありとする。「当に仏道の涅槃の常楽を以て一切

夜話に言われた。

人が多く遁世しないのは、自分の身をむさぼっているようで、実は自分の身を思わないのである。これは考えが深くないからである。またこれはすぐれた指導者に会わないからである。

遁世して真の仏法者となれば、かりに名誉の点から考えても、仏祖の名を得、昔の高徳の人や、後世の賢者がこれを聞いて喜ばれるであろう。またかりに利益の面から考えても、常楽我浄という利益を得、竜神や諸善神の供養を受ける身となるであろう。

を益すべし」（大智度論巻十六）。

五　竜神諸天。

校訂

1　原文、右側に音読みの点あり。

2　原文、「名聞利養」利養は余分と見て、今省いた。

3　原文、後見。

十三　古人云く朝に道を聞かば夕に死すとも可なり

夜話ニ云ク、古人云ク、「[一]朝に道を聞カバ夕に死スとも可なり。」ト。今ノ学道の人、この心有るべきなり。[二]広劫多生の間、幾回か徒ラに生じ、徒ラに死せし。[1]まれに人界に生マれて、たまたま仏法に逢フ時、何にしても死ニ行クべき身を、心ばかりに惜シミ持ツとも叶フべカラず。遂に捨行く命を、一日[四]片時なりとも仏法ノためすてたらば、永劫の楽因なるべし。

後の事、明日ノ[五]活計を思ウて捨ツべキ世を捨テず、行ズベキ道を行ぜずシて、あたら日夜を過ゴすは口惜シき事なり。ただ思ヒ切ツて、明日の活計なくは飢エ死にもせよ、寒エ死ニもせよ、今日一日道を聞イて仏意に随ツて死ナんと思ふ心を先づ発すべきなり。そノ

夜話に言われた。

古人は、「朝に道を聞いたら夕べに死んでもよい。」と言っているが、今日仏道を学ぶ者はこの心をもつべきである。われわれは無限に長い時間のあいだに何度も生まれかわり死にかわりするのであるが、その間に幾たびか、仏法にあわず、いたずらに生まれ、またむなしく死んだことであろう。このたびたまに人間界に生まれ、おりよく仏法に出あったこの時にあたり、どうしてみても必ず死んで行く身を、自分の気持だけで惜しんで持っていても、思い通りになるものではない。しょせんは捨てて行く命を、一日でも半ときでも、仏法のために捨てたならば、未来永遠の安楽のもととなるであろう。

あとあとの事や、明日のくらしのてだてを考えて、捨てるべき世を捨てず、修行すべき道を修行しないで、だいじな日夜をむだに過

上に道を行じ得ん事は一定なり。
　こノ心無クて世を背き道を学するやうなれども、なほしり足をら〈踏〉みて、夏冬の衣服等の事をした心にかけ、明日明年の活命を思ウて仏法を学せんは、万劫千生学すともかなふべしとも覚エず。またさる人もや有ラんずらん、存知の意趣、仏祖の教には有ルべしともおぼえざるなり。

注

一　論語里仁篇第四の言葉。
二　広は曠とも書く。久の義。劫は数えきれぬ長い時間。未来に長いのを永劫と言い、過去に長いのを曠劫という。
三　何回も生まれかわる間。
四　「ヘンシ、カタトキ、即ちスコシノ　アイダ」(日葡辞書)。
五　生活のてだて。
六　きまっている。
七　「しり足」は、しりごみすること。「判官組んではかなはじと思ひてしり足ふんでぞやすらひける」(盛衰記)。「ら」は添えたことば。
八　生存すること。命をつなぐこと。

校訂

1　原文、ン。

ごすのは残念なことである。ただ思い切って、明日のくらしのてだてがないなら、餓え死にしてもよい、こごえ死にしてもよい、とにかく今日一日、仏の道を聞いて、仏の心にしたがって死のうと思う気持を、まずおこすべきである。その上で、仏道を行じ道を得ることは間違いない。
　この気持がないと、俗世にそむいて道を学んでいるように見えても、やはりしりごみなんかして、暑い時、寒い時の衣服などのことを内心気にかけ、明日、来年のくらしむきを考えながら仏法を学んでいては、どんなに長い間生まれかわり死にかわりして学んでも、目的を達することがあろうとは思われない。そういう人もあるいはあるかもしれないが、わたしの知っているところでは、仏祖の教えにはあろうとも思われない。

十四 学人は必ずしも死ぬべき事を思ふべし

夜話ニ云ク、学人は必ズしも[一]死ぬべキ事を思フベシ。道理は勿論なれども、たとへばそノ言ハ思ハずとも、しばらく先づ光陰を徒ラにすぐさじと思うて、無用の事をなして徒ラに時をすぐさで、詮[二]ある事をなして時をすぐすべきなり。そのなすべき事の中に、また一切の事、いづれか大切なると云フに、仏祖の行履の外は皆無用なりと知ルベシ。

注

一 「しも」は強め。必ずを強めたのみで、後世のように後に否定を伴なう用法ではない。

二 かいのあること。

十五 納子の行履旧損の納衣等を

示ニ云ク、納子の行履、旧損の納衣[一]等を綴り補うて捨てざれば物を貪惜[二]するに似たり。旧を捐て当るに随ツてすぐせば、新しきを貪惜[三]する心有り。二つながら

夜話に言われた。

仏道を学ぶ人は、まちがいなく死ぬのだということをよく考えよ。人が死ぬという道理は言うまでもないが、それはどういうことかというと、死ぬという言葉で考えなくても、ともかくも、日時をむだに過ごすまいと思って、いらないことをして時日をむだにすごさず、かいのあることをして時をすごすべきである。そのなすべき事の中で、またすべての事のうち、どれが一番重要であるかというと、仏祖の行ないのほかは、皆無用だと心得よ。

教えて言われた。

達磨門下の仏弟子の行ないとして、古くなって悪くなったお袈裟などを、つぎをして捨てずにいると、物をむさぼり惜しんでいるよ。

咎あり。いかん。
問ウテ云ク、畢竟じて如何が用心すべき。
答ヘテ云ク、貪惜貪求の二をだにもはなるれば、両頭倶に失無カらん。[1] 但し、やぶれたるをつづりて久しからしめて、あたらしきを貪らずんば可なり。

注

一 つづり合わせた衣ということで仏袈裟のこと。袈裟は不用の布をつづり合わせて作ったものが釈尊以来の正式のものである。仏衣であるから、古くなったからといって粗末にできない。この問いは師の方から発せられている点に注意。
二 むさぼり惜しむこと。
三 これは貪求の意か。
四 両方。捨てても捨てないでも。

校訂

1 「らん」、原文朱書。

十六 父母の報恩等の事

夜話の次に弉公問ウて云ク、父母の報恩等の事、作スべき耶。

うに見える。古いのを捨ててあるに任せて使っていると、新しい物をむさぼり惜しむ心がある。両方とも欠点がある。どうしたらよいかな。
わたしはおたずねした。
結局どんな心がけでいたらよろしゅうございましょう。
禅師が答えて言われた。
むさぼり惜しむ心と、むさぼり求める心の二つさえなくせば、捨てても捨てないでも、欠点とはならない。ただまあ、破れたものは手当をしてなるべく長く着るようにし、新しいのをしいてほしがらなければよろしかろう。

夜話のおりに、懐弉が問うて言った。
父母に対する報恩などのことは、なすべきでございましょうか。

示ニ云ク、孝順[一]は尤も用フル所なり。但し、そノ孝順に在家出家之別在り。在家は孝経[二]等の説を守りて生をつかふ。死につかふる事、世人皆知レり。出家は恩[三]を棄て無為に入ツて、無為の家の作法は、恩を一人に限ラず、一切衆生斉[四]シく父母の恩のごとく深しと思ウて、作ス所ノ善根を法界[五]ニめぐらす。別して今生一世の父母に限ラず。是レ則チ無為の道に背カざるなり。日々の行道時々の参学、ただ仏道に随順しもてゆかば、其レを真実の孝道とするなり。忌日[六]の追善中陰[七]の作善[八]なんど、皆在家に用フル所なり。

衲子は父母の恩の深き事をば実[九]のごとく知ルべし。余の一切また同ジく重クして知ルベシ。別して一日をしめて殊に善を修し、別して一人をわきて回向[一〇]をするは仏意にあらざる歟。戒経の「父母兄弟死亡の日」[一一]の文は、暫く在家に蒙らしむる歟。大宋ノ叢（林）の衆僧、師匠の忌日にはそノ[一二]儀式あれども、父母の忌日は是レを修したりとも見エざるなり。

注

一 「孝順は至道の法、孝を名づけて戒となす」（梵網経）。

二 孝道を説いた経書。一巻。孔子が門人曾参に孝道について述べたところを録したものと言われる。

道元禅師が教えて言われた。

孝順は、何よりもなすべきことである。ただしその孝順に、在家と出家の区別がある。在家の場合は、『孝経』などに説かれていることを守って、父母の生存中おつかえする。また死後にも報恩の行ないをすることは、世間の人がみな知っている。ところが、出家は、父母の恩を捨て、無為の仏道に入るので、その無為の生き方をしている出家のやり方は、恩を自分ひとりの父母に限って考えない。すべての生きとし生けるものの恩をみな平等に父母の恩と同じく深いと考えて、自分がした善根の功徳をあらゆるところに向けるのである。とりわけてこの世一代の自分の父母に限定しない。これが、とりもなおさず出家としての無為の生き方にそむかないことである。日々の仏道修行、その時その時の仏法参学を、ただ仏道にしたがってしてゆけば、それを真実の孝道とするのである。父母のなくなった日にちなむ追善供養とか、なくなった当座四十九日の間の作善などは、みな在家の人のすることである。

達磨門下の仏弟子は、父母の恩の深いことを、仏法の上から正しく理解すべきである。他のいっさいの恩についても、父母の恩と同様に重く考えなければならない。とりわけて一日に限って善根を行なったり、とりわけてひとりだけについて回向をしたりするのは、仏様のお心にそわないのではあるまいか。梵網戒経に、「父母兄弟の死亡の日には法師を請じて福をもって亡者をたすけるように」とある文章は、まずは在家に対して言ったものであろうか。大宋国の修行の道場の僧たちは、師匠の命日にはそれにちなむ儀式をするが、

父母の命日にそうしたことを行なってはいないようである。

三 「流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者」（清信士度人経）。この偈は、「永平得度略作法」中にも、得度の際誦することになっている。恩を棄てて出家することは不孝のようであるが、それによって真実のさとりに至れば、かえって真実の報恩となること。無為は寂静涅槃、有為の営みのない世界。

四 梵網経四十八軽戒の第二十に「一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母、我れ生々に之れに従って受生せざること無し」とある。

五 あらゆる場所。全宇宙。

六 人の死んだ日。この日に善事をなして、その福をその死んだ人のものとして供養するのを追善という。

七 中有。人の死後、業に応じ七日をくぎって次の生にうつる。その中間をいう。一七日、二七日、三七日、ないし七七日までである。

八 善をなすこと。ここは死者の冥福のための追善。

九 「如実」に。仏の実知慧から見たとおりに。一切衆生の恩を父母の恩とひとしく思う見方。

一〇 自分のした善根功徳を他にふりむけること。

一一 梵網経軽戒第二十五に、「若し父母兄弟死亡の日は、まさに法師を請じて菩薩戒経律を講ぜしめ、福をもって亡者を資け、諸仏を見たてまつり、人天の上に生ずることを得しむべし」とある。

一二 正式の説法（上堂）をして、師匠の恩をしのぶ。道元禅師の広録にも、仏樹和尚（明全）忌の上堂、千光禅師（栄西）忌の上堂、天童和尚（如浄）忌の上堂などが見

える。

十七　人の鈍根と云ふは、志の到らざる時の事なり

一日示ニ云ク、人の鈍根と云フは、志の到ラざル時の事なり。

世間の人、馬より落ツる時、未ダ地に落チざル間に種々の思ひ起る。身をも損じ、命をも失するほどの大事出来たる時、誰人も才覚念慮を起すなり。その時は、利根も鈍根も同ジく物を思ひ、義を案ずるなり。

然れば、明日死に、今夜死ヌべしと思ひ、あさましき事に逢ウたる思ヒをなして切にはげみ、志をすすむるに、悟リをえずと云フ事無きなり。

中々世智弁聡なるよりも、鈍根なるやうにて切なる志を出す人、速ヤカに悟リを得ルなり。如来在世の周利盤特は、一偈を読誦する事は難かりしかども、根性切なるによりて一夏に証を取りき。

ただ今ばかり我が命は存ずるなり。死ナざる先に悟リを得んと、切に思ウて仏法を学せんに、一人も得ざるは有るべカラざルなり。

ある日、教えて言われた。

人が生まれつきにぶいというのは、やりとげようとする気持がゆくところまでゆきついていない時のことである。

世間の人が馬から落ちる時、馬の背を離れてから地面に着くまでの間に、さまざまのことが頭に浮かぶものである。このように、大けがをするか、命を落とすほどの大事件が突発した時には、どんな人でも知恵・分別のはたらきがさかんになるのである。その時は、生まれつきのするどい人もにぶい人も、少しの差もなく物を考え、意味を考えめぐらすのである。

だから、あすにも死ぬだろう、いや、今夜にも死ぬだろうと考えて、とんでもない事件に遭遇した気持になって、ひたむきにはげみ、さらに志を強くしてゆくならば、悟りを得ないということはない。

小ざかしく処世術に長じている者よりも、頭が悪そうでいて、ひたむきな志をおこす人のほうが、かえって早く悟りを得るものである。釈尊のお弟子の周利盤特は、愚かで、たった一つの偈も声に出して読むことができなかったが、心根のひたむきなところがあったから、一夏九十日の間に悟りを得た。

自分の命はたった今だけあるのだ、死なないうちに悟りを得よう

注

一　学んで得た知恵の働きと天然の心の働き。

二　あきれるばかりの事。

三　世わたりの知恵の発達していることであるが、中世では小ざかしい意に用いられる。仏の正法を信ずることができない場所が八つある（八難所）中の一。

四　Cūḍapanthaka. 仏弟子中の愚鈍者の代表。兄とともに仏門に入ったが兄はりこうで、弟はばかであった。釈尊は方便をもって箒を与え、その名を覚えさせたが、それさえできなかった。しかし、一心に努力して唱えたのでついに阿羅漢果を証した。

五　一夏は雨季九十日の安居の期間。

十八　大宋の禅院に麦米等をそろへて

一夜示ニ云ク、大宋ノ禅院に麦米等をそろへて、あしきをさけ、よきを取ツて飯等にする事あり。是レをある禅師云ク、「直饒我が頭を打チ破ル事七分にすとも、米をそろふる事なかれ。」と、頌に作ツて戒めたり。

こノ心は、僧は斎食等を調へて食スル事なかれ。ただ有ルにしたがひて、よければよくて食し、あしきをもきらはずして食すべきなり。ただ檀那の信施、清

と、本気になって仏法を学んだら、悟りを得ない者は一人としてないはずである。

ある夜、教えて言われた。

大宋の禅院で、麦や米をよりわけて、悪いものは除き去り、よいものをとって御飯などにすることがある。

これについてある禅師が、「たとい自分の頭を打ちくだいて七分八裂にしようとも、米をより分けていいものばかりあつめることはしてはならない。」と言って、その意味を頌につくって戒めた。

この意味は、僧はきまった時刻にいただく御飯などを味をととのえて食べてはならない。ただあるにまかせて、結構なものは結構な

浄なる常住食を以て餓を除き、命をささへて行道するばかりなり。味を思ウて善悪をえらぶ事なかれと云フナリ。

今我が会下の諸衆、コノ心あるべし。

因ミニ問ウテ云ク、学人若シ「自己仏法ナリ、[三]也外に向ツテ求ムベカラず。」と聞イて、深くコノ語を信じて、向来の修行参学を放下して、[四]本性に善悪業をなして一期を過ゴさん、コノ見如何。

示ニ云ク、コノ見解、語と理ト相違せり。外に向ツて求むべからずと云ツて、行をすて、学を放下せば、行をもて求ムル所有りと聞えたり、求メざるにあらず。ただ行学本より仏法なりと証して、無所求にして世事悪業等の我が心に作したくとも作サず、学道修行の懶きをもなして、コノ行を以て果を得きたるとも、我が心先より求ムる事無クして行ずるをこそ、外に向ツて求ムる事無シと云フ道理には叶フべけれ。

[五]南岳の磚を磨して鏡を求めしも、馬祖の作仏を求めしを戒めたり。坐禅を制するにはあらざるなり。

[六]坐ハすなはち仏行なり。坐ハ即チ[七]不為なり。是レ即チ自己の正躰なり。コノ外別に仏法の求ムべき無きなり。

ものとしていただき、結構でないものもそれなりに、えりきらいなしないで食べるべきである。ただ施主の信心による供養の物や、寺でまかなわれる世間の執着を離れた食物をもって餓えをしのぎ、命をささえて仏道を行ずるまでである。味わいを考えて食物の善悪をえり好みしてはならないということである。

今、わが門下の修行者たちも、この心を持つべきである。

その時に、おたずねして言った。

仏道を学ぶものが、もし「自己すなわち仏法である、外に向かって求むべきではない」と聞いて、この言葉を信用して、今までやってきた修行参学をやめて、生まれたままの気持で善悪の所行をして一生を過ごそうという、こうした考え方はいかがでございましょうか。

禅師が教えて言われた。

その考え方は言葉と道理が合っていない。「外に向かって求むべきでない」と言って修行を捨て、参学をやめるなら、その行ないを手段として求めるところがあったことになる。それは真の「求めない」ことではない。ただ修行も参学も本来仏法であるとさとって、何ものをも求めることなく、世俗のことや悪業などは自分の心でしたいと思ってもせず、仏道を学ぶ修行はやりたくないことがあってもしいてやり、こうした行ないによってよい果報を得ることがあっても、自分の心では前もって求めることなく行ずることこそ「外に向かって求めることがない」という道理にかなったものであろう。

南岳懐譲禅師が弟子の馬祖道一に対して瓦を磨いて見せ、鏡を求

めてはならないことを教えられた話も、馬祖が坐禅によって仏になろうとしたのを戒めたのである。坐禅そのものをやめさせようとしたのではない。

　坐禅はとりも直さず仏行である。坐禅はすなわち人間的ないとなみの一切行なわれない境地である。これこそ自己の正体である。このほか別に仏法といって求めるべきものはないのである。

注

一 「若し我が呪に順ぜずして説法者を悩乱せば、頭破れて七分と作ること、訶梨樹の枝のごとくならん」（法華経、陀羅尼品）。

二 是非善悪を分別し、是をとり非をすて、善をよろこび悪を憎むのは最も仏法に遠い。

三 自己と仏法と別のものではない。

四 生まれついたままの考えで。

五 馬祖道一（七〇七―七八六、南岳の法嗣）が南岳懐譲禅師（六七七―七四四、六祖の法嗣）に参侍した時、南岳はしたしく心印を授けた。その後馬祖は伝法院に住して常に坐禅をしていた。南岳は法を伝えるに足る者であると見込んで、そこへ出かけて行ってたずねた。
「大徳、坐禅して箇の什麼をか図る。」
馬祖いわく、「作仏を図る。」
そこで南岳は磚を取り上げて、馬祖の庵前の石上で磨きはじめた。
馬祖がたずねた。「師、什麼をか作す。」
南岳いわく、「磨して鏡となす。」
馬祖いわく、「磨磚あに鏡となすことを得んや。」
南岳いわく、「坐禅あに作仏を得んや。」（正法眼蔵三百則による）。
　右は南岳磨磚の話といって有名である。この提唱は正法眼蔵坐禅箴に詳しい。磚は磚であればよいので、鏡にしようとすると作為が加わる。坐禅は、学人が学人のま

ま何のたくらみもなく坐せばよいことを言う。

六　正法眼蔵三昧王三昧の巻に「打坐の仏法なること、仏法は打坐なることを、あきらめたるまれなり」。「これ衆生成仏の正当恁麼時なり」とあり。「この外、別に仏法の求むべき無きなり」の語は最も注目すべき語である。

七　薬山惟儼（七四五―八二八）が坐禅していた時、その師石頭希遷（七〇〇―七九〇）がたずねた。
「汝、這裏に在つて什麼をか為す。」
薬山いわく、「一切不為。」
石頭いわく、「恁麼ならば即ち閑坐せり。」
薬山いわく、「若し閑坐ならば即ち為なり。」
石頭いわく、「汝不為といふ、また箇の什麼をか不為なる。」
薬山いわく、「千聖もまた不識。」（景徳伝灯録巻十四による。）
作為の全くないところに真如が現前することを言う。

校訂

1　原文、釆の右傍に墨で米とあり。

十九　近代の僧侶

一日請益の次に云ク、近代の僧侶、多く世俗にしたがふべしと云ふ。思フに然ラず。世間の賢すらなほ民

ある日、請益のおりに言われた。
近ごろの僧侶は、多くが、お釈迦様の教えどおりでは今の世にあ

俗に随ふ事を穢レたる事と云ツて、一屈原のごときは「二皆酔へり。我レは独醒メたり。」とて、民俗に随ハずしてつひに三滄浪に没す。

況ンや仏法は、事々皆世俗に違背せるなり。俗は髪をかざる、僧は髪をそる、俗は多く食す、僧は一食するすら、皆そむけり。然シテ後、四還ツて大安楽人なり。故に一切世俗に背クベキなり。

注

一 名は平、原は字(前三四三?—二八九?)。中国戦国時代楚の人。懐王に仕え三閭大夫(楚の王族たる昭、屈、景の三姓をつかさどる官)となり、国政に尽力したが讒言によってしりぞけられ、さらに襄王の時に流されて江南に流浪し、ついに汨羅に身を投じて死ぬ。その間、楚の衰微を憂え、不合理な世の中と身の上を嘆いて作った詩を集めたものが『楚辞』とされている。屈原がはたして歴史上の人物であったかどうかはともかく、史記第八十四巻の列伝などで、日本でも平安時代以来親しまれ、同情を受けてきた人物である。

二 「世を挙げて皆濁り、我れ独り清めり。衆人皆酔へり、我れ独り醒めたり」(楚辞、漁父)。

三 漢水の下流。漢水は今の湖北省に在り、大江に注ぐ。昔の楚の国を流れている川。屈原が身を投げて死んだのは汨羅(湖南省北東部を流れる川。湘江と合して洞庭湖

わないから、世の風俗にしたがうべきだと言っている。しかし自分が考えるにそうではない。在俗の人でもすぐれた人は、やはり世間一般の風俗にしたがうことを穢れたことだと言っている。たとえば楚の屈原などは、「世間の人は皆酒に酔ったように正邪の判断ができなくなっている。自分だけが冷静に正邪をわきまえている。」と言って世間一般の風俗にしたがわず、ついに漢水の下流に身を投げて死んだ。

ましてや仏法は、何事につけてもすべて皆世俗と反対である。在家の人は髪を飾るが僧は髪を剃る、在家の人は一日に何回も食事をするが僧は一日一回であるということからして、皆反対である。だが僧はそうした生活をするから、かえって大安楽の人なのである。だから、僧たるものはすべてにわたり世俗にそむいて生きるべきである。

に入る）であるが、『漁父』の詩に「滄浪の水清まば、以て吾が纓を濯ふべし、滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯ふべし」という有名な句があるので、筆録の際、混同したのであろう。なお、『漁父』は屈原と漁父との問答の形をなしており、楚の地方に行なわれていた民謡をもとに、屈原に仮託されたものである。

四　世間生滅のいとなみのないのが、人間として最上の大安楽である。

二十の㈠　治世の法は上天子より

一日示ニ云ク、治世の法は、上天子より下庶民ニ至ルマデ各皆その官に居する者、そノ業を修ス。その人にあらずしてそノ官をするを乱天の事[1]と云フ。政道天意に叶ふ時、世清み民康きなり。故に帝は三更の三点[2]におきさせ給ウて、治世する時としませり。たやすからざる事、ただ職のかはり、業の殊なるばかりなり。国王は自ら思量を以て政道をはからひ、先規をかんがへ、有道の臣を求めて政天意に相合スル時、是レヲ治世と云フなり。若シ是レを怠れば天に背き世を乱し、民を苦しむるなり。其レより以下、諸侯大夫人士庶民、皆各所官[3]の業有り。其レに随ふを人と云ふなり。其レに背ク、天を乱す事を為して天之刑を蒙ルな

ある日、教えて言われた。

天下を治める法は上は天子から、下は庶民に至るまで、皆おのおの、そのなすべき役目にある者が、そのなすべき仕事を行なうのである。しかるべき地位の人でないのに一定の役目を行なうのを天を乱す事と言う。政治のありかたが天意にかなうとき、世は正しく民もやすらかに生活できる。だから、天子は、午前一時にはお起きになり、政務を執る時となされた。天子とても容易でないことは、ただ職務がかわり、することが違うだけである。国王は自分で思慮をめぐらして政道をとり行ない、前代からのきまりを考え、徳をそなえた臣下をさがして用い、このようにして政治が天意によく一致した時、これを治まるみ世と言うのである。もし天子がこれらのことを怠ると、天にそむき世を乱して民を苦しめることになる。天子か

り。

然レば、学人も世を離れ家を出ればとて、徒ラに身をやすくせんと思ふ事、暫くも有るべカラず。利有ルニ似テ後大害有ルなり。出家人の法は、またそノ職[四]を収め、その業を修すべきなり。

世間の治世は先規有道を嗜み求ムれども、なほ先達知識のたしかに相伝したるなければ、自ラし[五]、たがふる事も有ルなり。仏子はたしかなる先規教文顕然なり[六]。また相承[七]伝来の知識現在せり。我レに思量あり。威儀[八]の中において一々に先規を思ひ、先達にしたがひ修行せんに、必ズ道を得べきなり。俗は天意に合せんと思ひ、衲子は仏意に合せんと修す。業等しくして得果勝れたり。一得永得[九]、大安楽のために、一世幻化[一〇]の身を苦しめて仏意に随はんは、行者の志に在るベシ。

然リと雖も、またすぞろに[一一]身を苦しめ、作すべカラざル事を作せと仏教にはすすむる事無きなり。戒行律儀[一二]に随ひゆけば、自然に身安く行儀も尋常に、人目も安きなり。ただ、今案[一三]の我見の安立[一四]をすてて、一向仏制に順フべきなり。

注

一　なすべき社会上の役目。

ら下、大名・家老・さむらい・庶民に至るまで、みなめいめい担当する仕事があり、それに従事するのを人らしい人というのである。それにそむくのは天を乱すこととして、天の罰を受けるのである。

であるから、仏道を学ぶ者も、世を離れ家を出たからといって、なすこともなく、らくをしようなどと、ちょっとの間でも考えることがあってはならない。らくをすることは、その時は利益が有るように見えて、後に大きな損害がある。出家人の法としては、やはり出家人の職務をまっとうし、出家としての仕事をしっかり身につけなければならない。

世間において、天下を治めるには、先代からのきまりをよく心得、徳をそなえた臣下を心がけてさがすが、それでもなお、その道の先輩や指導者が確実に伝え伝えてきたものがないから、おのずから、判断の間違うこともある。仏弟子においては、先代からのきまりも教えの文言もはっきりしている。また、代々うけつぎ、伝えついできた指導者も現存している。自分には考える能力もそなわっている。行住坐臥の作法において、一々、先代からのきまりを考え、先輩に従って修行するならば、必ず道を得ることができる。世俗の人は天意にかなうようにと思い、仏道修行者は仏意にかなうようにと修行する。つとめる業は等しいが、得る果報は仏弟子がすぐれている。一たび得ては永久に失わない大安楽の法のために、この世一代のまぼろしのかりのこの身を苦しめて、仏の心に従うかどうかは、修行者の志一つにある。

とはいえ、またむやみと身を苦しめたり、できないことをせよと

は、仏の教えでは、すすめることはない。戒律にきめられたところを守ってゆけば、おのずから、身も安楽になり、ふるまいも立派になり、見た目もよいのである。ただ、きのうきょう思いついた自分一個の考えなどはやめて、ひたすら仏のきまりに順うべきである。

二　更は夜間の時刻のかわり目。日没に漏刻を設け、その漏の尽きるまでの間を五分して初更（およそ午後八時）、二更（午後十時）三更（午前〇時）四更（午前二時）五更（午前四時）とし、各更の間をさらに五分して一点から五点とする時刻の数え方。三更の三点は大体午前一時にあたる。

三　官とするところの意。

四　「出家の所作の事務、三有り。一には坐禅、二には誦経、三には勧化。衆事若し三事を具足せば、応に出家人なるべし」（三千威儀経）。収は修と同じ。

五　「し」は強めの辞。

六　あきらかで隠れるところがないさま。「ケンゼン」（日葡辞書）。

七　師から弟子へ相伝えてきた。

八　行・住・坐・臥の四をいう。一切の行動が含まれる。

九　一度得たならば永遠に失わない。このことばは受戒の功徳に言うのであるが、ここでは仏道修行についても同様に見なして言っている。

一〇　この一生限りのまぼろしのようなもの。「幻化」は幻術師がかりに作り出したもの。

一一　わけもなく。むやみと。

一二　戒にしたがって身と口と意の非を防ぎ、戒の一々のきまりにしたがって実践修行すること。

一三　今の自分の考え。

一四　安置建立の意。真如は言辞の相を絶したものであるが、かりに、文字言語によって説きあらわすのを安立諦とい

う。ここも、自分流儀の考えで言葉によって真実を立てること。

校訂

1 原文、礼天。

二十の(二) 我れ大宋天童禅院に居せし時

また云ク、我レ大宋天童禅院に居せし時、浄老住持の時は、宵は二更の三点まで坐禅し、暁は四更の二点三点よりおきて坐禅す。長老ともに僧堂裏に坐す。一夜も闕怠なし。そノ間衆僧多く眠る。長老巡り行イて睡眠する僧をばあるイは拳を以て打チ、あるイはくつをぬいで打チ耻しめ勧めて睡りを覚す。なほ睡る時は照堂に行き、鐘を打チ、行者を召して蠟燭ヲ燃しなんどして卒時に普説して云ク、

「僧堂裏にあつまり居して徒ラに眠りて何の用ぞ。然レば何ぞ出家入叢林する。見ず麼、世間の帝王官人、何人か身をやすくする。王道を収め忠節を尽クし、乃至庶民は田を開き鍬をとるまでも、何人か身をやすくして世をすごす。是レをのがれて叢林に入ツて虚く時光を過ゴス、畢竟じて何の用ぞ。生死事大なり、無常

また言われた。

わたしが大宋国天童禅院にあって修行していた時、如浄禅師がその住持であった時は、夜は十一時まで坐禅し、明け方は午前二時半、三時というころから起きて坐禅した。住持人である如浄禅師は、大衆とともに僧堂のうちで坐禅し、一夜も欠かしたことがなかった。その間に、僧たちはたいてい眠った。すると如浄禅師は回って行って、居眠りする僧を、あるいは拳で打ち、あるいは履物をぬいでそれで打って恥ずかしめ、精進をすすめて眠りをさました。それでも眠るときは照堂に行って鐘を打ち、行者をよんで蠟燭をともしなどして、その場でみんなに説いて言われた。

「僧堂のうちにあつまって修行生活をしていて、なすこともなく眠って何になるか。それならどうして出家して修行の道場にはいったのか。世間の帝王、役人などを見ているであろう。だれといって身を安楽にしていようか。あるいは王としての道を修め、あるいは臣

迅速なり。教家も禅家も同ジクすすむ。今夕明旦、何なる死をか受け何なる病をかせん。且く存するほど、仏法を行ぜず眠リ臥して虚しく時ヲ過ゴサン、尤モ愚カなり。故に仏法は衰へ去くなり。諸方仏法のさかりなりし時は、叢林皆坐禅を専ラにせり。近代諸方坐をすすめざれば、仏法澆薄しもてゆくなり。」

是ノごとク道理を以て衆僧ヲすすめて坐禅せしめし事、親シくこれヲ見シなり。今の学人も彼の風を思フべし。

またある時、近仕の侍者等云く、「僧堂裡の衆僧眠りつかれ、あるイは病も発り、退心も起りつべし。坐久シき故歟。坐禅の時尅を縮られればや。」と申シければ、長老大イに諌めて云ク、

「然ルベカラず。無道心の者、仮名に僧堂に居するは、半時片時なりともなほ眠ルベシ。道心あツて修行の志あらんは、長からんにつけ喜び修せんずるなり。我レ若かりし時、諸方ノ長老を歴観せしに、是ノごとクすすめて眠る僧をば拳のかけなんとするほど打チせめしなり。今は老後になりて、よわくなりて、人をも打得せざるほどに、よき僧も出来らざるなり。諸方の長老も坐を緩くすすむる故に、仏法は衰微せるなり。弥々打ツべキなり。」とのみ示サれしなり。

下として忠節を尽くし、くだっては庶民が田をひらき鍬をとってする苦労に至るまで、だれが身を安楽にして世をすごしていようか。こうした世俗の業務をのがれて道場にはいって、なすところなく時間を過ごして結局のところ何になるというのか。生死を明らかにすることは重大であり、この世のうつりかわりは迅速である。教家も禅家も同じくこれを説いて精進をすすめている。今晩にもあすの朝にも、どんな死に方をするか、どんな病気にかかるかわかったものではない。しばらく命のある間に、仏法を修行しないで、眠りこけてむなしく時を過ごすのは特に愚かなことである。それだから仏法が衰えていくのである。諸方の修行の道場で仏法がさかんであったときは、修行の道場では皆坐禅を専一にしていた。近ごろになって諸方の長老が坐禅をすすめなくなったので、仏法はかげがうすくなっていくのである。」

　このように、道理をもって衆僧をすすめて坐禅をさせた事を、わたしは親しく見てきた。今の仏道を学ぶ人も、天童の宗風を思いみるべきである。

　また、あるとき、如浄禅師の身近く仕えている侍者たちが、「僧堂のうちに寝起きしている修行僧たちが睡眠不足で疲れまして、あるいは病気にかかり、いったんおこした道心もあともどりしそうでございます。これは坐禅の時間が長いからでもございましょうか。坐禅の時間を短縮していただきたいものでございます。」と言った。

　ところが如浄禅師は大いにその不心得をいましめて、「それはいけない。無道心の者が名目ばかりで僧堂ですわっているのならば、

わずかな時間でもやはり眠るであろう。道心があって修行の志のあるものは、坐禅の時間が長いほど、喜んで修行しようとするものである。わたしも若い時諸方の長老を歴任したが、このようにすすめて、眠る僧を拳が割れるほど打ってせめたものである。今はもう年をとって体力も衰え、人も充分打つことができないので、立派な僧も出てこなくなった。諸方の住持人たちも坐禅のすすめ方がてぬるいので、仏法は衰微したのである。いっそう打つべきである。」と教えられた。

注

一　大白峰天童山景徳禅寺。

二　天童如浄禅師。老は長者の尊称。

三　午後十一時ごろ。

四　午前二時半から三時のころ。

五　長老は住持人のこと。「今の禅宗の住持の者を必ず長老と呼ぶ」（祖庭事苑）。住持人は方丈があってそこにいるが、如浄禅師は、坐禅の時間には間違いなく僧堂に出てきて修行僧と共に坐禅したのである。次の「僧堂裏に坐す」の主語が長老すなわち如浄禅師。

六　「スイメン、ネムリ、ル。」（日葡辞書）。

七　僧堂の後ろにあり、天窓をあけて明るくしてある。首座の僧が住持人に代わって衆僧を指導するのに用いる。

八　未だ髪を剃らないが、寺に住んでさまざまの仕事に従う者。

九　にわかに。

一〇　あまねく正法を説いて学人に示すこと。説法。「上堂、今朝九月初一、板を打して普請して坐禅す。第一切に忌む、瞌睡することを。直下猛烈を先とす。忽然として漆桶を爆破せば、豁たること秋天に雲の散ずるが如くならん。臂脊に棒し、迸胸に拳す。昼夜方に纔も眠るべからず。虚空消殞して更に消殞す。透過す威音未朕の前」（如浄禅師、台州瑞岩寺語録）。

一一　諸方の叢林。またその住持人をもさす。

一二　澆は水でうすめてうすくなったこと。薄は厚さがうす

いこと。

一三 「縮　シジマル」（類聚名義抄）。ばやは他に対してあつらえる意の助詞。

一四 非を告げてやめさせる。いましめる。「禁　イサム」（名義抄）。

一五 かりの名ばかりに。

一六 如浄禅師は建康の清涼、台州の瑞岩、臨安の浄慈、明州の瑞岩、二度目の浄慈、明州天童と六回住持人となり衆僧を指導している。これを自らへりくだって歴観と言ったと見られる。如浄禅師には「三百年よりこのかた、わがごとくなる知識いまだいでず」（行持巻）の語があり、道元禅師も「諸方天童をほむ、天童諸方をほめず」（行持）とも言っている。次の「是のごとくすすめて」以下も如浄禅師が主語である。

二十一　得道の事は、心をもて得るか

また云ク、得道の事は心をもて得るか、身を以テ得るか。

教家等にも「身心一如」と云ツて、「身を以テ得」とは云へども、なほ「一如の故に」と云フ。正シく身の得る事はたしかならず。

今我が家は、身心倶に得ルなり。その中に、心をもて仏法を計校する間は、万劫千生にも得べカラず。心

また、言われた。

仏道を得るには、心で得るのか、身で得るのか。

教家などでも、「身と心は一つものである」と言い、「身をもって得るのだ」と言っているけれども、なおそれは、「身と心が一つものだからだ」と断わりを言っている。まちがいなく身が道を得るのだということがはっきりしていない。

いま、わが達磨正伝の仏法では、身と心が両方いっしょに道を得

ヲ放下して、知見解会[四]を捨ツル時、得るなり。見色明心、[五]聞声悟道[六]ノごときも、なほ身を得ルなり。然れば、心の念慮知見を一向すてて、只管打坐すれば、今少し道は親シミ得るなり。然レば道を得ル事は、正シく身を以て得ルなり。是レによりて坐を専ラにすべしと覚ユルなり。

注

一　普通は、道などというものは高級な心で考えるように思い、身体で道を得ようとは思わない。ただ「身も、心と離れたものでないから」、身でも得るのだと注釈しているというのである。

二　達磨正伝の仏法。

三　はかり、くらべる。

四　知識、見解、解釈、理会。「参学知るべし、仏道は思量、分別、卜度、観想、知見、慧解の外に在ることを」（学道用心集）。

五　霊雲桃花の話。霊雲は潙山霊裕の弟子。霊雲志勤禅師は三十年弁道していた。あるとき山を旅していた時、山のふもとで休息して、はるかに人里を望み見ていた。ときに春、桃花のさかりに咲いているのを見て、忽然として悟道した。（正法眼蔵谿声山色巻による。）

六　香厳撃竹の話。香厳知閑は潙山霊裕の弟子であったが、「章疏のなかから覚えたことでなく、父母未生以前にあ

るのである。身と心の二つのうち、心でもって仏法をおしはかり考えている間は、無限に長い時間の間、幾千たび生まれかわっても、道は得られはしない。心を投げ捨て、知識や見解や理会をすっかりやめた時に、仏道が得られるのである。霊雲志勤禅師は桃の花を見て悟り、香厳知閑禅師は竹に石があたった音を聞いて悟ったというが、これらの例も、やはり仏道の身を得たのである。

　だから、心の思いはかりや、知識・見解を全く捨てて、ひたすら坐禅すれば、もう少し道に親しむことができるのである。だから、道を得ることは、まちがいなく身をもって得るのである。だからこそ坐禅を専一にしなければならないと思われるのである。

たって一句を言え」と言われて何とも答えようがなかった。ついに年来あつめた書をやき、衆僧に粥飯を給仕する僧となって年月を経た。ついに、武当山の大証国師の庵のあとに草庵をむすんで坐禅していた。あるとき道路を掃いていたおり、箒の先でとばした石が、竹にあたって音を立てた時に、豁然として大悟した。（正法眼蔵谿声山色巻による。）

七　心は心のはたらきのおこるもと。念慮は心のはたらき。

正法眼蔵随聞記　四

一　学道の人身心を放下して

示ニ曰ク、学道の人、身心を放下して一向に仏法に入ルベシ。

古人云ク、「百尺竿頭上なほ一歩を進む。」ト。何にも百尺の竿頭に上ツて足を放たば死ヌベしと思ウて、つよくとりつく心の有ルなり。其レを思ヒ切りて一歩を進ムと云フは、よもあしからじと思ひきりて、放下するやうに、度世の業より始メて、一身の活計に至ルまで、何にも捨テ得ぬなり。其レを捨テざらんほどは、何に頭燃をはらひて学道するやうなりとも、道を得ル事叶ハざるなり。思ヒきり、身心倶に放下すべし。

注

一「百尺竿頭不動の人、然も得入すといへども未だ真となさず、百丈の竿頭すべからく歩を進むべし、十方世界

教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、身も心もなげすてて、ひとむきに仏法の中に入りなさい。

古人は、「百尺の竿頭にあってさらに一歩を進める。」と言っている。人間というものは、いかにも百尺の竿のさきにのぼると、ここで足をふみはずしたら死んでしまうと思って、いっそう強くしがみつく気持があるものである。そこをかえって、「思い切って一歩を進める」と言っているのは、「教えにしたがうのであるから、まさか悪いことにはなるまい」と思い切って、すべてを投げ出すように、世渡りの仕事をはじめとして、自分の生活の手段に至るまでも、捨ててしまえばよいのであるが、それがどうしても捨てられないのである。しかし、その最後のところを捨てないうちは、どんなに、髪の毛についた火をはらうような気持で仏道を学んでいるようであっても、道を得ることはできないのである。

思い切って、身も心もともに捨て去るべきである。

是れ全身」(景徳伝灯録巻第十、長沙景岑章)。永平広録第一巻第十一条および第十三条にもこの則が見える。
二 世わたり。
三 頭髪に火がついたのをはらうように、寸刻の猶予もないこと。「時光の太だ速やかなることを恐怖す、所以に行道は頭燃を救ふ」(学道用心集)。

二 世間の女房なんどだにも

ある時比丘尼[一]云ク、「世間の女房[二]なんどだにも、仏法とて学すれば、比丘尼の身には少々の不可ありとも何で叶ハざルべきと覚ゆ。如何。」と云ヒし時、

示ニ云ク、コノ義然ルべカラず。在家の女人[三]ソノ身ながら仏法を学ンでうる事はありとも、出家人の出家の心なからんは得べカラず。仏法の人をえらぶにはあらず、人の仏法に入ラざればなり。出家在家の儀、ソノ心殊ナルべシ。在家人の出家の心有ラば出離[四]すべし。出家人の在家の心有ラば二重の僻事なり。用心殊ナルべき事なり。

作ス事の難キにはあらず。よくする事の難きなり。出離得道の行ハ、人ことに心にかけたるに似たれども、よくする人の難きなり。生死事大なり、無常迅速なり、心をゆるくする事なかれ。世をすてば実に世を捨ツべ

ある時、尼僧が、「在家の御婦人などでさえ、仏法と言って学んでいますから、それにくらべれば、頭を剃って尼僧にまでなった身に、少々よろしくないことがあっても、仏道にかなわないことはあるまいと存じますが、いかがなものでございましょう。」と言った時、

教えて言われた。

その考えは違っている。在家の女の人は、在家のままで、仏法を学んでさとることがあるが、だからといって、出家した者が出家の心がなかったら仏法を得ることはできない。それは仏法が、人による差別をするのではない。人が仏法にはいらないからである。出家と在家とでは、その心の持ち方が違うであろう。在家人で出家人の気持があれば迷いを離れることができるが、出家の身として在家の人と同じ気持を持つなら、それは二重の間違いである。出家と在家とではその心がけが違うはずである。

キなり。仮名[五]は何にてもありなんとおぼゆるなり。

注

一 bhikṣuṇi の音訳。乞士女、勤事女と訳す。出家した女子。

二 独立のへや（房）を持って社会的に、または家庭で生活をしている女の人。

三 在家の身そのままで。

四 生死（迷いの世界）を出て、さとりの世界に入ること。

五 かりの名目。

三　世人を見るに果報もよく

夜話ニ云ク、世人を見るに果報[一]もよく、家をも起す人は、皆正直に、人のためにもよきなり。故に家をも持チ、子孫までも絶エざルなり。心に曲節[二]あり人のためにあしき人は、たとひ一旦は果報もよく、家をたもてるやうなれども、始終あしきなり。縦ひまた一期[三]はよくてすぐせども、子孫未ダ必ズシモ吉ナラざルなり。

また人ノためニ善キ事を為して、彼の主に善しと思ハれ悦バれンと思ウてするは、悪シきに比すれば勝レたれども、なほ是レは自身を思うて、人のために実に善きにあらざルなり。主には知ラれずとも、人のため

することがむずかしいのではなく、立派にすることがむずかしいのである。迷いを離れて仏道を得る修行は、人それぞれ、特に心にかけているようではあるが、立派にする人が、少ないのである。生死を明らめる問題は重大であり、無常は迅速である。気をゆるしてはならない。世を捨てたとあらばほんとうに世を捨てなければならない。出家・在家などという仮りの名目は、どうでもよいと思われる。

夜話に言われた。

世間の人を見ると、果報にも恵まれ、家をも興す人は、みな心が正直で、人のためにもよくする人である。だから一家を安泰にたもち、ひいては、子孫までも絶えないのである。心にひねくれたところがあり、人のためにならないことをする人は、たとい一時は果報にも恵まれ、家を保っているようでも、しまいまでいいことはない。よしんばまた、その人一代の間は恵まれて過ごしても、子孫は必ずしもしあわせでない。

また、人のためよい事をしても、その相手方からよいことをしてもらったと思われ、喜ばれようと思ってするのは、悪いことをする

[四]にうしろやすく、乃至未来の事、誰がためと思ハざれども、人ノためによからん[五]料ノ事を作シ置キなんどするを、真に人のため善きとは云フなり。

況ンや[六]衲僧は、是レには超エたる心を持ツベキなり。衆生を思ふ事親疎をわかたず、平等に済度の心を存じ、世、出世間ノ利益、都て自利を憶ハず、人に知られず主に悦バれず、ただ人のため善き事を心の中になして、我レは是ノごとクの心もツたると人に知ラれざルなり。

この故実は、先づすべからく世ヲ棄て身を捨ツベキなり。我が身をだにも真実に捨離シつれば、人に善く思ハれんと云フ心は無きなり。然レどもまた、人は何にも思はば思へとて、悪シき事を行じ、放逸ならんはまた仏意に背ク。ただ好キ事を行じ人のためにやすき事をなして代リを思フに我がよき名を留めんと思ハずして、真実無所得にて、[八]先生の事をなす、即チ吾我を離るる第一の用心也。

コノ心を存ぜんと欲ば先づすべからく[九]無常を念フべシ。一期は夢のごとシ。光陰移リ易シ。[一〇]露の命は待チがたうして、明るを知らぬならひなれば、ただ暫クも存じたるほど、聊カの事につけても人のためによく、仏意に順はんと思フべきなり。

のに比べればまさっているが、やはりこれは自身のことを考えて人のためにしているので、ほんとうによいことをしているのではない。当の相手には気づかれなくとも、その人のためあとあとの心配のないように取りはからい、ひいては将来にまでわたって、だれのためとも思わないが、人のためになるようなことをしておきなどするのを、ほんとうの意味で、人のためによいことをするというのである。

ましてや達磨門下の禅僧は、これよりもっと高い気持を持たなければならない。衆生を思うのに、親疎のわけへだてをせず、平等にすくう気持を持ち、俗世のことでも俗世を離れたことでも、利益に関しては、すべて自分のことは考えに入れず、人に知られることなく、相手によろこばれることなく、ただ、自分の心一つで人のためよいことをして、自分がこのような気持をもっているとさえ人に気づかれないようにするのである。

それについての秘訣は、まず、ぜひとも、世間を捨て、自分の身を捨てることである。自分の身だけでもほんとうに捨て去ったならば、人によく思われようという気持はなくなるものである。そうかといってまた、人はどう思おうがかまわないといって、悪いことを行ない、勝手気ままなふるまいをするのは、やはり仏の心にそむくのである。ただよい事を行なって人のために、あとの心配のないような事をして、その代償については、自分の美名をとどめようと思わず、ほんとうに所得なく、次の世のためを思ってするのが、とりもなおさず自分を離れるの第一の心がけである。

この気持を持ち続けようと思うなら、まず、ぜひとも無常を心に

かけて忘れてはならない。一生は夢のようなものである。月日はまたたく間に過ぎてゆく。命は露のように夜の明けないうちに消えてしまうのが常であるから、ただしばらくでも生きているうちに、どんな些細なことでも、人のためになることをして、仏の心にしたがおうと思うべきである。

注

一 果は因に対する結果。報は縁による報い。善因善縁によって現在しあわせであること。

二 曲がったところがある。

三 一生、一代。

四 心配のないこと。

五 ため。

六 仏袈裟つけた達磨門下の禅僧。

七 世は世間、うつりかわって休みない迷いの世界、その迷いの世界を離れ出たところが出世間。

八 後生に対する今の世。後の世のことを中心に考えれば今は先生となる。

九 「菩提心は多名一心なり。竜樹祖師曰く、ただ世間の生滅無常を観ずる心もまた菩提心と名づくと。」「誠にそれ無常を観ずる時、吾我の心生ぜず、名利の念起らず」(学道用心集)。

一〇 「しらず、露命いかなるみちのくさにかおちむ」(重雲堂式)。

一一 「イノチヲ　ゾンズル」(日葡辞書)。「じ」の濁点、原文にあり。

校訂

1 原文、善事ヲ為レ人メ。「為人メ」を句読をかえ、「人」を不用と認めた。

四　学道の人は尤も貧なるべし

夜話ニ云ク、学道の人は尤も貧なるべし。世人を見るに、財有る人は先づ瞋恚恥辱の二難定ツて来るなり。財有れば人是レを奪ヒ取ラんと欲ふ。我レハ取ラれじと欲る時、瞋恚忽に起る。あるイは之レを論じて問注対決に及び、遂には闘諍合戦を致す。是ノごとク間、瞋恚起り耻辱来るなり。貧にして而モ貪ラざる時ハ、先ヅこノ難を免る。安楽自在なり。証拠眼前なり。教文を待ツべカラず。加之先人後賢之レを譏り、諸天仏祖皆之レを耻ヂしむ。而るを、愚人と為財宝を貯はヘ、瞋恚を懐き、愚人と成ラん事、耻辱の中の耻辱なり。貧にして而モ道を思フ者は先賢後聖之仰ぐ所、仏祖冥道之喜ブ所なり。

仏法淩遅し行く事眼前に近し。予、始メ建仁寺ニ入リシ時見しと、後七八年に次第にかはりゆく事は、寺の寮々に各々塗籠をし、器物を持ち、美服を好み、財物を貯へ、放逸之言語を好み、問訊、礼拝等淩遅する事を以て思ふに、余所も推察せらるルなり。仏法者は衣鉢の外は財をもつべからず。何を置かんために塗籠をしつらふべきぞ。人にかくすほどの物を持ツべカラず。持タずハ返ツてやすきなり。人をば殺すとも人

夜話に言われた。

仏道を学ぶ者は、特に貧しくあるべきである。世の中の人を見ると、財宝を持っている人は、まず怒りとはずかしめの二つの難がきっとやってくる。財宝があれば人はこれを奪い取ろうと思い、自分は取られまいと思う。するとたちまち怒りが起こる。あるいはこれを言いあらそって訴訟対決になり、ついには争い、戦いをするに至る。このようなわけで怒りが起こり、はずかしめがくるのである。貧しくして欲ばらない時は、まずこの難をまぬかれる。身は安楽で、心は束縛がない。その証拠は目の前に見るところである。教えを書いた文章をまつまでもない。そればかりでなく、財宝を持つことは昔の人も後世のすぐれた人もそしるところであり、もろもろの天神も仏祖も皆これをはずべきこととしている。であるのに、財宝を貯え、怒りをいだいて愚か者となることは、恥辱の中の恥辱である。貧しくてしかも道を思う者は、昔の賢人や後世の聖人が仰いでたっとぶところであり、仏祖や目に見えない世界の神たちのよろこばれるところである。

仏法が次第に衰えて行くことは、まのあたり近く見るところである。自分が始めて建仁寺にはいった時に見たことと、その後七八年のうちに次第に変わってゆくことは、寺の寮ごとにそれぞれ壁を厚く塗った押し入れを作り、道具を持ち、きれいな衣服を好み、宝物

には殺サれじなんどと思ふ時こそ、身もくるしく、用心もせらるれ。人は我レを殺すとも我レは報を加へじと思ヒ定めつれば、先づ用心もせられず、盗賊も愁へられざるなり。時として安楽ナラずと云ふ事無シ。

注

一 いかり。貪欲、愚痴とともに三毒と言われ、心身を熱悩せしめ、諸の悪行を起こさせる。

二 訴訟の対決。問注は、訴えた者とこれに対して弁護する者との言い分をたずねしるすこと。

三 あらそいたたかう。

四 教えを書いた文章。

五 目に見えない世界にいる神たち。

六 丘陵がだんだん低くなるように物事が衰えてゆくこと。

七 天文本建撕記によれば、建保五年（一二一七）、禅師十八歳の時建仁寺に入って明全についたと見える、そのころであろう。

八 弁道話に「ちなみに建仁寺の全公（明全）をみる、あひしたがふ霜華すみやかに九廻をへたり。」とある期間にあたる。

九 別棟の小さい建物。個人的な住まいとする。

一〇 周囲を壁で厚く塗りこめ、明かり取りをつけ、妻戸から出入りするようにしたへや。衣服、調度などをしまっておく所。今の押し入れ、納戸にあたる。

を貯え、勝手気ままな言葉を好み、きまったあいさつや礼拝などが衰えていったが、これで考えてみても、ほかの寺の様子も、おしはかられるのである。仏法者は、お袈裟と応量器のほかは物を持ってはならない。何を置くために押し入れを設ける必要があるのか。人にかくすほどの物を持ってはならない。物を持たなければかえって安心である。人を殺すことはあっても、人に殺されはしまい、などと思っている時には、からだも休まらず、用心もしないではいられない。人は自分を殺しても、自分は仕返しもしまいと決意していれば、まず用心のしようもなく、盗賊の心配もなくなる。こうなればいつといって安楽でないことがない。

二　問訊は合掌してするあいさつ。礼拝は尊敬の気持を身体の形にあらわすことでさまざまのやり方があるが、ここは五体投地の礼拝。

三　設ける。

五　宋土の海門禅師

一日示ニ云ク、宋土ノ海門禅師、天童の長老たりし時、会下ニ元首座と云フ僧有りき。こノ人、得法悟道ノ人なり。長老にもこえたり。

有ル時、夜、方丈ニ参じて焼香礼拝して云ク、「請フらくは師、後堂首座を許せ。」

門、流涕して云ク、「我レ小僧たりしヨリ未ダ是ノごとくの事を聞かず、汝禅僧としテ首座長老を所望する事を。汝已に悟道せる事は、先規を見るニ我レにも超エたり。然ルに首座を望ム事、昇進のためか。許ス事は前堂をも乃至長老をも許すべし。余の未悟僧ハ之レを察するに、(余りあり)。仏法の衰微、是レを以テ知りぬべシ。」と云ツて流涕悲泣す。爰に僧耻ヂて辞スト雖モ、なほ首座ニ補ス。そノ後首座、こノ事を記録して自ラ耻ヂしめ師の美言を彰ハす。

今之レヲ案ズルニ、昇進を望み、物の首となり、長老にならん事をば、古人是レを耻ヂしむ。ただ道ヲ悟

ある日教えていわれた。

宋の海門禅師が天童山の住持であった時、その門下に元首座という僧がいた。この人は法を得、道を悟った人であった。その点では長老をもこえるほどであった。

ある時、夜、この僧が住持の室へ参って焼香礼拝して、「禅師様、どうかわたくしに後堂首座の地位をお許しくださいますように。」と言った。

海門禅師はこれを聞いて涙を流し、「自分が小僧であった時以来、お前のように、禅僧たるものが首座長老という席次を頼みに来るという、そんな話は聞いたことがない。お前がすでに道を悟っていることは、先代からのきまりにてらしあわせても、わたしをも超えるほどである。であるのに首座を望むのは昇進したいためなのか。許すことは前堂首座をも、あるいは住持の地位をも許そう。だが、お前でさえこの通りなのだから、そのほかの悟りにいたらない僧たちの心中は察するに余りある。仏法の衰微することは、これでも知ることができる。」と言って、涙を流して嘆き悲しんだ。そこでその

らんとのみ思ウて余事有るべカラず。

注

一 諱は師斎。拙庵徳光の法嗣。無際了派（道元禅師入宋当初の天童山の住持）・浙翁如琰らと同門。痴鈍智頴の後をついで天童山景徳寺の住持人となった。この話は、天童山で聞いて来られたものであろう。

二 禅林の住持人の居室。維摩居士の居室が一丈四方であったところから言う。

三 僧堂は、中心にある聖僧（文殊菩薩像）を境にして、前門寄りを前堂、後門寄りを後堂という。首座は僧堂内全体を管理するが、後堂は特に後堂首座が管理する。

四 海門の上略。

五 住持のこと。

六 先代からのきまり。

六　唐の太宗即位の後

一夜示ニ云ク、唐の太宗[1]即位の後、旧き殿に栖み給へり。破損せる間、湿気あがり、風霧〈侵〉して玉躰侵さるべし。臣下作造ルベキ由を奏し鳧ば、帝の云く、「時、農節[2]なり。民定めて愁有ルベシ。秋ヲ待ツて造ルベシ。湿気に侵サれバ地に受ケられず、風雨ニ侵サ

僧は恥じ入って辞退したけれども、あえて首座に任ぜられた。その後この元首座は右の事実を記録して自らを恥ずかしめ、師の立派な言葉を顕彰したのであった。

いまこのことを考えるに、昇進を望んだり、物のかしらとなったり、住持長老の地位につこうと思ったりすることを古人は恥としたのである。禅僧たるものは、ひたすら道を悟ろうということだけ考えて、ほかに何事もあってはならない。

ある夜、教えて言われた。

唐の太宗は即位された後も、古い御殿に住んでいられた。その御殿は破損していたので、湿気があがり、風や霧がはいって、天子のおからだにさわりそうであった。臣下のものが新築されるように申し上げたところ、みかどは、「いまは農繁期である。今新築の事を

れば天に叶ハざルなり。天地に背かば身有ルべカラず。民ヲ煩ハサずんば自ラ天地に叶フべシ。天地に叶はば身を犯スべカラず。」と云ツて、終に宮ヲ作ラず、古キ殿に栖み給へり。

況ンや仏子ハ、如来ノ家風を受ケ、一切衆生を一子のごとく憐レムべシ。我レに属する侍者所従なればとて、呵責し煩はすべからず。何ニ況ンヤ同学等侶耆年宿老等を恭敬する事、如来ノごとくすべしと、戒文分明なり。然レば今の学人も、人には色に出て知ラれずとも、心中に上下親疏を別たず、人のためにはよからんと思フべキなり。大小ノ事につけて、人をわづらはし心を傷す事有ルべカラざルなり。

如来在世に外道多く如来ヲ謗じ悪むも有リき。仏弟子問ウテ云ク、「本より柔和を本とし慈を心とす。一切衆生等シく恭敬すべし。何故にか是ノごとク随ハざル衆生有る。」

仏言く、「我レ昔衆を領ぜし時、多く呵嘖羯摩をもて弟子をいましめき。是レに依つて今是ノごとシ。」と。律中に見エたり。

然レば即チ住持長老として衆ヲ領ジたりとも、弟子の非をただしいさめんとて呵責の言を用フべカラず。柔和ノ言を以テいさめすすむとも、随フべくは随フべきなり。況ンや衲子ハ、親疎兄弟等のためにあらき言

おこすと人民が困るであろう。秋の取り入れのすむのをまって造ろう。天子として湿気におかされるのは地に受け入れられないからであり、風雨におかされるのは天の心にかなわないからである。天地の心にかなわないでは身を保つことはありえない。民を困らせることがなければおのずから天地の心にかなうであろう。天地の心にかなえば、からだにさわることはあるまい。」と言われて、ついに宮殿を造らず、古い御殿に住まわれた。

まして仏弟子は、如来の家風を受けつぎ、一切の生きとし生けるものを一人子のようにあわれみいたわるべきである。自分の配下にある侍者、家来だからといって、大声でしかりせめ、苦しめてはならない。ましてや、同じ門下で仏道を学ぶ仲間や、年上の人、先輩の僧をつつしみ敬うことは如来に対すると同様にすべきであると、戒の文言にもはっきり説かれている。であるから、今の仏道を学ぶ者も、他人には表から見てはわからなくとも、心の中では上下、親疎の区別をたてず、一切の人のためによいようにと思うべきである。大きい事でも小さい事でも、人を困らせ、心を傷つける事があってはならない。

釈迦如来が在世のとき、外道で如来をそしり、にくむものも多くあった。仏弟子がおたずねして、「あなたさまはもともと柔和を根本とし、慈悲を心としていらっしゃるのですから、すべての衆生が等しくつつしみ敬うはずでございます。それなのに、どうしてこのような従わない人々があるのでございますか。」と言った。

仏様は、「自分が過去世に弟子を率いていた時、たいてい弟子を

を以て人をにくみ呵責する事は、一向に止むべきなり。
能々用意スベキなり。

いましめるのに大声でしかりせめた。その報いで、今、この通り外道からそしり、にくまれるのである。」と言われた。この話は、律の中に見えている。

してみると、住持長老として衆を率いていても、弟子の間違いを正し、いましめようとして呵責の言葉を用いてはならない。おだやかな言葉で、改めさせたり、すすめたりしても、従うものは従うのである。まして、仏弟子は、親しい人にも、親しくない人にも、また同輩などに対しても、あらあらしい言葉で人をにくんでしかりつけることは、まったく禁止すべきである。よくよく気をつけるべきである。

注

一 「貞観二年六月ノスヱニ、公卿奏シテ申サク、秋ノ霧ヤウヤクハジマル、宮室卑シテ城地下リウルホヘリ。請フ、一閣ノタカキヲイトナンデ居タマハンコトヲ。上ノ曰ク、朕、気病アリ、クダリウルホヘル所ニヰルベカラズ。シカレドモ、オノオノ来請ノムネヲトケバ、ツヒヘマコトニオホカラン。……朕、徳義、漢ノ文帝ニオヨバズシテ、ツヒヤストコロコトゴトクカノ時ニスギタリ、豈、人ノチチハハタルミチニカナハンヤト。ツヒニツクルコトヲユルサズ。」（仮名貞観政要巻第六）。

二 農業のいそがしい時節。

三 けらい。てした。

四 同じく仏道を学ぶ者、同輩。

五 年をとった先輩の僧。

六 明らかである。「フンミヤウニ」（日葡辞書）。

七 色は顔色。表にあらわして。

八 仏九難のうちにも孫陀利の謗仏、奢弥跋の謗仏、婆羅門女の謗仏のことあり。外道は仏教外に道を立てるもの。

九 羯摩は karman の音訳。僧中の作法、所作。

一〇 非を告げて改めさせる。

一一 同門の修行僧を親しんで言う。

校訂

1　原文、大宋。

2　原文、作造の間に訓よみの傍線あり。しばらく「作造る」とよむ。

3　原文、イマシメテ。

七　衲子の用心仏祖の行履を守るべし

また云ク、衲子の用心、仏祖の行履を守るべし。

第一には財宝を貪るべからず。如来慈悲深重なる事、喩へを以て推量するに、彼の所為行履、皆是レ衆生のためなり。一微塵許も衆生利益のためナラずと云フ事無シ。その故は、仏は是れ輪王の太子にてまします。[2]天をも御意にまかせ給ヒつべし。財を以テ弟子を哀み、所領を以て弟子をはごくむべくんば、何の故にか捨テて自ら乞食を行じ給フべき。決定末世の衆生のためにも、弟子行道のためにも、利益ノ因縁有ルべキガ故に、財宝を貯へず、乞食を行じおき給へり。然ツしより以来、天竺漢土の祖師の由、また人にも知ラれしは、皆貧窮乞食せしなり。

況ンや我ガ門の祖々、皆財宝を畜ふべカラずとのみすすむるなり。教家にもこノ宗を讃たるに、先づ是レ

また言われた。

達磨門下の禅僧の心がけは、仏祖の行ないをその通り守ることである。

第一には財宝を貪ってはならない。釈迦如来の慈悲の深いことを、実際に推しはかってみるに、如来のなされたことはすべて、皆衆生のためである。一微塵ばかりも衆生を利益するためでないということはない。そのわけは、仏はもともと世界征服の王の太子でおいでになる。しようと思えば、全世界をも思い通りになさることがおできになったはずである。財宝をもって弟子をめぐみ、領土をもって弟子を養うのがよいのなら、それもおできになったのに、一体何のために王位を捨ててみずから乞食をなさるわけがあろうか。末世の衆生のためにも仏弟子の修行のためにも、間違いなく利益となる因縁があるからこそ、財宝をたくわえず、乞食を行じて模範を示しておかれたのである。それ以来、インド・シナの祖師のなされたこと、

をほめ、記録[三]の家にもこノ事を記して讃むるなり。未ダ財宝に富み饒にして仏法を行ゼシ事を聞カず。皆よき仏法者と云フは、あるイは布衲衣[四]、常乞食[五]なり。禅門によき僧と云はれはじめおこるも、あるイは教院[六]、律院等に雑居[七]せし時も、禅僧の異をば身をすて貧人なるを以て異せりとす。宗門の家風、先ヅこノ事を存ズべし。聖教の文理[八]を待ツべからず。我ガ身にも田園[九]等を持ツたる時も有りき。また財宝を領ぜし時も有りき。彼ノ時の身心と、こノごろ貧シくして衣盂[一〇]に乏しき時とを比するに、当時[一一]の心勝レたりと覚ゆ。是レ現証[一二]なり。

また云ク、古人云ク、「そノ人に似ずしてそノ風を語ルコトなかれ。」と。言フ心は、その人の悳を学バず知ラずして、そノ人の失なるを、そノ人はよけれども、そノ事あしきなり、（あしき）事をよき人もすると思フべからず。

ただそノ人の徳を取り失を取ルコトなかレ。君子は徳を取ツて失を取ラずと云ヘル、こノ心なり。

注

一 転輪聖王、転輪聖帝ともいう。三十二相を具足し、位に即く時天から輪宝を感得し、その力で四方を降服する

また仏法者と人に知られるほどの人は、皆貧乏で乞食をしたのである。

ましてわが禅門の祖師たちは皆、「財宝をたくわえてはいけない」とすすめられるのである。教家でもこの坐禅宗をほめるには、まず第一にこのことを讃め、高僧伝などを書く人も、このことを書き記してほめたたえるのである。財宝に富み、裕福にくらして、仏法を行じたということは聞いたことがない。みな、立派な仏法者というのは、あるいはつづり合わせた布のお袈裟で、常に乞食によってのみ食を得るという生き方をした。禅門にすぐれた僧がいると言われるようになり、ついに教界にその宗旨がおこった時も、あるいは教家の寺院や律宗の寺院などに、他宗の僧とまじって住んでいた時も、禅僧が他宗の僧と違う点を、身を顧みず貧乏な点にありとしている。宗門の家風はまず第一にこの事をわきまえなくてはならない。仏典の文言や道理をまつまでもない。わたしも、荘園などを持っていた時もあった。また財宝を持っていた時もあった。その時の身心と、近ごろ貧しくて、三衣一鉢にも乏しい時のそれとを較べてみると、今の気持がずっとすぐれていると思われる。これが目の前の証拠である。

また言われた。

古人の言葉に、「その人に似ないで、その風を語ってはいけない。」とある。その意味は、その人の徳を学ぶこともなく、知りもしないで、その人の欠点を、あの人は立派な人だがこういう点が悪い、立派な人でもよくない事をするものだと思ってはいけない、と

という。ここは世界征服の王というほどの意。
二 全世界。
三 行業記や高僧伝を書く人。
四 布の衲衣。衲は世間で役にたたなくなった布をつづりあわせて作った袈裟。
五 十二頭陀行の一。乞食によってのみ食を得て生活すること。
六 天台、華厳、律等の寺院。達磨以来禅僧はこれらの寺に仮寓していた。その数がふえ、独立の禅院をもち、共同生活のための規矩が定まったのが百丈の時と言われる。
七 「ザッコまたはザッキョ、マジワリイル」（日葡辞書）。
八 文言と道理。
九 私有の荘園。
一〇 五条、七条、九条の三枚の袈裟と、応量器という比丘の持つ食器。
一一 現在。今の時。
一二 現前の証拠。

いうのである。
ただその人の徳を取って、欠点をとってはならない。「君子は徳を取って、失を取らず。」と言っているのはこの意味である。

八　人は必ず陰徳を修すべし

一日示ニ云ク、人は必ズ陰徳を修スベシ。必ズ冥加顕益有るなり。たとい泥木塑像の麁悪なりとも、仏像をば敬礼すべシ。黄紙朱軸の荒品なりとも、経教をば帰敬スベシ。破戒無慚の僧侶なりとも僧躰をば信仰スベシ。内心に信心をもて敬礼すれば、必ズ顕福を蒙ル

ある日、教えて言われた。
人は必ず陰徳を修めなくてはならない。目に見えない加護や、目に見えた利益が必ずあるものである。たとえ泥や木や土で作ったそまつなお像でも、仏像をばうやまい礼拝すべきである。黄色い紙と朱塗りの軸のそまつな品でも、経典は帰依し敬うべきである。戒を

なり。破戒無慚の僧なれば、疎相麁品の経なればとて、不信無礼なれば必ズ罰を被ルなり。しかあるべき如来の遺法にて、人天の福分となりたる仏像・経巻・僧侶なり。故に帰敬すれば益あり、不信なれば罪を受クるなり。何に希有に浅増くとも、三宝の境界をば恭敬スべキなり。禅僧は善ヲ修セず功徳ヲ要セずと云ツて悪行ヲ好む、きはめて僻事なり。先規未ダ是ノごとク悪行を好ム事を聞カず。

丹霞天然禅師は木仏をたく、是レこそ悪事と見えたれども、是レも一段ノ説法施設なり。この師の行状の記を見るに、坐するに必ズ儀あり、立するに必ズ礼あり、常に貴き賓客に向カフがごとし。暫時の坐にも必ズ跏趺し、叉手す。常住物を守る事眼睛のごとくす。勤修するもの有れば必ず加す。小善なれども是レを重くす。常の面の行状勝レたり。彼の記をとどめて今の世までも叢林ノ亀鏡とするなり。

しかのみならず、諸ノ有道の師、先規悟道の祖、見聞するに皆戒行を守り威儀を調ふ。たとひ小善と云フとも是レを重くす。未ダ聞カず、悟道の師の善根を忽諸する事を。

故に学人祖道に随ハんと思はば必ズ善根をかろしめざれ。信教を専ラにすべし。仏祖の行道は必ズ衆善の集まる所なり。諸法皆仏法なりと体達しつる上は、悪

破って恥ずかしいとも思わぬ僧でも、僧のすがたは信仰すべきである。心の内に信仰心をもってつつしんで礼拝すれば、必ず目に見えたしあわせをいただくのである。戒を破って恥ずかしいとも思わぬ僧だから、そまつきわまるお経だからといって、これらを信ぜず、礼を失すると、必ず罰を受けるのである。そうあるようにと如来がお残しになった法によって、人間天上のしあわせのもととなった仏像・経巻・僧侶である。だから帰依し敬えば利益があり、信仰しないと罰を受けるのである。どんなにあきれるばかりひどいものでも、仏・法・僧の三宝の形をとったものはつつしみ、うやまうべきである。禅僧は、善を修めることも、功徳をつむことも必要ないと言って、悪行を好むのは、とんだ間違いである。このように悪行を好んだということは、先代からのきまりにも聞いたことがない。

丹霞天然禅師は、寒さのひどい朝、木仏を焼いて暖を取ったという話が伝わっている。これこそ悪事のように見えるけれども、これも説法のためにとられた一つの手だてである。このかたの行状記を見ると、すわるにつけ立つにつけ、必ず礼儀があり、常に高貴な賓客に対しているようであった。ちょっとの間すわるのにも、必ず坐禅の時と同じく足を組んですわり、立つ時は型どおり胸の前に手を組んだ。寺の財産は自分の目玉のように大切にした。修行に励むものがあれば必ず力をそえてやった。小さな善事でも大切にした。平常の行状が実に立派であった。この禅師の行状を記しとどめて、いまでも禅林の亀鑑としている。

それだけではない、道を得た多くの祖師たちや、先代のお手本と

は決定悪にて仏祖の道に遠ざかり、善は決定善にて仏道の縁となる。知ルベシ、若シ是ノごとクならば何ぞ三宝の境界を重くせざらんや。

　また云ク、今仏祖（の道）を行ぜんと思はば、所期も無く所求も無く、所得も無くして無利に先聖の道を行じ、祖々の行履を行ずべきなり。所求を断じ、仏果をのぞむべからず。さればとて修行をとどめ、本の悪行にとどまらば、還ツて是レ所求に堕し、[一七]窠臼にとどまるなり。全く一分の所期を存ぜずして、ただ人天の福分とならんとて、僧の威儀を守り、済度利生の行儀を思ひ、衆善を好み修して、本の悪をすて、今の善にとどこほらずして一期行じもてゆけば、是レを古人も[一八]漆桶ヲ打破スル底と云フなり。仏祖の行履是ノごとクなり。

注

一　泥でこねた仏像。木彫りの仏像。塑像は、粘土にわらや雲母をまぜ、木骨を心にして作る像。金銅の像などとちがってそまつである。

二　仏教経典のこと。仏教経典は黄色い紙に書くのが普通であった。「これすなはち黄巻朱軸なり」（正法眼蔵三昧王三昧巻）。

三　「三宝に三種の功徳有り、いはゆる一体三宝、現前三

もなり、仏道を悟った祖師たちのことを見聞きすると、皆戒行を守り、行住坐臥をおろそかにせず行動している。たとえ小善であってもこれを大切にしている。道を悟った祖師が善根をゆるがせにしたということは、聞いたことがない。

　だから仏道を学ぶ人が、祖師の道に従おうと思うならば、必ず善根を軽んじてはならない。専一に仏の教えを信じなくてはいけない。仏祖が道を行ぜられるところは、必ず多くの善のあつまるところである。諸法はすべて仏法であるということが、身に親しくわかった上は、悪はどこまでも悪であって仏祖の道に遠ざかり、善はどこまでも善であって仏道の縁となる。わかるであろう、もしその通りならば、仏・法・僧の三宝の形をとるものを重んじないわけにはいかないではないか。

　また、言われた。

　今、仏祖の道を修行しようと思うならば、期待するところもなく、求めるところもなく、得るところもなく、利を離れて、むかしさとりを開いた人々の道を行じ、代々の祖師の行なわれたところを行ずべきである。求める心を断ち、仏になることも望んではならない。だからといって、修行をやめ、もとの悪行にとどまっているならば、かえってこれは求める心におちいり、落ちこんだ穴から出られないことになるのである。まったく少しの期待もなく、ただ人間天上のしあわせのもととなろうとして、僧としての身のふるまい方を守り、衆生を救い利益する行ないを心がけ、もろもろの善をとりあげて修め、今までの悪を捨て、今善を行なったからと安心しないで、一生

行じつづけてゆけば、これを古人も漆桶（うるしおけ）を打ち破ることだと言うのである。仏祖の行ないとはこういうことである。

宝、住持三宝なり」(教授戒文)。ここはこのうち、仏像、経巻、僧侶の住持三宝に当たる。境界は対象として認識される世界。

四 智通大師(七三九—八二四)。石頭希遷の法嗣。ある年、慧林寺において、天の大寒なるに遇った。丹霞天然が木仏を取ってこれを焚いたので、人がこれをそしった。天然は、「焼いてお舎利を取ろうと思うのだ。」と言った。人が、「木仏を焼いてお舎利の取れるはずはない。」と言うと、師は、「そんなら、わたしを責めることはないだろう。」と言った話。(景徳伝灯録巻第十四による。)

五 安立の異名。(成唯識論述義)。かりにもうける手だて。「此の中に諸法の生滅無しといへども、而も戒蘊、定蘊、慧蘊、解脱蘊、知見蘊の施設可得有り」(正法眼蔵摩訶般若波羅密)。　施設、原文は施説。

六 坐禅の時の足の組み方。

七 叉手当胸（しゃしゅとうきょう）。立っている時、両手を胸のところで組む儀礼。手をたれて立つのは無礼である。

八 目のたま。

九 修行にせいを出す。

一〇 くわえる。力を添えてやったこと。「袈裟も無所従来なり、……所持のところに現住し、受持の人に加す」(正法眼蔵伝衣巻)。

一一 亀は吉凶をうらなうもの、鏡は物を照らすもの、ともにてほんとすべきもの。

一二 行住坐臥の四。立ち居ふるまい。

一三 ゆるがせにする。

一四 教えを信じること。

一五 「作善の正当恁麼時、きたらざる衆善なし」(正法眼蔵諸悪莫作)。

一六 「一切法即是仏法」(金剛般若経)。「諸法の仏法なる時節」(正法眼蔵現成公按)。すべてのものが仏法でないものはないと身をもってさとること。

一七 窠は鳥の巣、臼はうす、いずれも落ちこんで落ち着くあながある。一つのところに落ちついてしまっては、いけないのである。

一八 漆桶は底知れぬ無明にたとえる。これを打破するのが了悟の時である。

校訂

1 原文、荒にソのかなあり。今、漢字に従う。
2 原文、少善。
3 原文、忽緒。
4 原文、窠旧。

九の(一) 学道の人は先づすべからく貧なるべし

一日僧来ツて学道之用心を問フ次(ついで)に示ニ云ク、学道の人は先づすべからく貧(ひん)なるべし。財多ければ必ズその人ノ志を失(うしな)ふ。在家学道の者、なほ財宝にまとはり、居

ある日、一人の僧が来て仏道を学ぶ心がけをたずねた時に、教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、まず必ず貧乏でなければいけない。財宝が多い

所を貪り、眷属に交ハれば、直饒その志ありと云へども障道の縁多し。古来俗人の参ずる多けれども、そノ中によしと云へども、なほ僧には及バず。僧は一衣一鉢の外は財宝を持タず、居所を思ハず、衣食を貪ラざる間、一向に学道す。是レは分々皆得益有ルなり。そノ故は、貧なるが道に親シきなり。

龐公は俗人なれども僧におとらず禅席に名を留めたるは、彼の人参禅の初め、家ノ財宝を以ちて出でて海にしづめんとす。人之レを諫めて云ク、「人にも与へ、仏事にも用フべし。」

他に対へて云ク、「我レ已にあたなりと思ウて是レをすつ。焉ンぞ人に与フべき。財は身心を愁しむるあたなり。」と。遂に海に入レ了リぬ。

而シテ後、活命のためにはいかきをつくりて売つて過ぎ梟。俗なれども是ノごとく財をすててこそ禅人とも云はれけれ。何ニ況ンや一向に僧はすつべきなり。

僧の云ク、唐土には寺院定まり、僧祇物あり、常住物等あツて僧のために行道の縁となる。その煩無シ。この国はそノ儀無ケれば、一向棄置せられても、中々行道の違乱とやならん。是ノごとく、衣食ノ資縁を思ひあててあらばよしと覚ゆ、如何。

示ニ云ク、然ラず。中々唐土よりこノ国の人は無理に人を供養じ、非分に人に物を与フる事有ルなり。

とその志がくじける。在家で仏道を学ぶものでも、やはり財宝を気にかけ、住居をむさぼり、一族縁者とつきあっていると、たといその志はあっても、道のさわりとなることが多い。昔から在家の人で参学する人は多いけれども、その人々の中ではすぐれていても、やはり僧には及ばない。というのも、僧はお袈裟一枚と、応量器一個のほかは財宝を持たず、住居を考えず、衣食をむさぼらないから、ひとむきに仏道を学ぶ。こうした人はそれぞれ分に応じてみな益を得ることがある。そのわけは、貧乏なことが仏道に親しいのである。

龐居士は俗人であったが、僧に劣らず禅席に名を残したのは、次のようなわけがあったからである。龐居士が参禅し初めた時、家の財宝を持ち出して海に沈めようとした。人がこれを見て、「人に与えるなり、仏事にでも使われるがよかろう。」と言って意見した。彼はその人にこたえて、「わたし自身すでに身のためにならないと思って捨てるのである。どうして他人に与えることができよう。財宝は身心を苦しめるあだかたきである。」と言った。そして、とうとう全部海に捨ててしまった。

その上で、生活のためには、ざるを作って売ってその日を過ごした。俗人であったが、こうして財宝を捨てたからこそ禅を修行する人とも言われたのである。ましてや僧においては、ただただ財宝は捨てるべきである。

僧が言った。

「中国では禅僧のおるべき寺院もきまっており、僧団の所有物もあり、その寺院に備わった財産もありますから、僧のため修行生活の

先づ人はしらず、我レはこノ事を行じて道理を得たるなり。一切一物も思ひあてがふ事もなくて、十年余過ぎ送りぬ。一分も財をたくはへんと思フこそ大事なれ。[三]僅(はつか)の命を送るほどの事は、何とも思ひ畜(たくは)へねども、天然として有ルなり。人皆[四]生分(しやうぶん)有り。天地之レを授く。我レ走リ求メざれども必ズ有ルなり。況ンや仏子は、[五]如来遺属(ゆゐぞく)の福分あり。求メざレドモ自(おのづか)ラ得ルなり。ただ一向に道を行ぜば是レ天然なるべし。是レ現証なり。

注

一　三衣一鉢であるが、衣鉢を強めて言ったのであろう。
二　めいめいその人なりに。
三　名は蘊、字(あざな)は道玄。儒家の人。初め石頭希遷禅師に参じ、後、馬祖道一禅師に参じてその法を嗣ぐ。詩偈三百余篇あり。「龐居士蘊公(おんこう)は祖席の偉人なり。江西、石頭の両席に参学せるのみにあらず、有道の宗師におほく相見し相逢しきたる。」(正法眼蔵神通巻)。
四　自分に対して害をなすもの。
五　ざる。「畿内にていかき、江戸にてざる」(物類称呼)。
六　僧祇は衆、すなわち比丘・比丘尼の大衆。衆僧の共有にかかる物。
七　「キチ　ステオク」(日葡辞書)。

たすけとなって、生活の心配もございません。ところがわが国ではそうしたこともありませんから、経済的なことを一切棄てておかれても、かえって仏道修行の乱れとなりましょう。ですから、このように、後援者をさがして、衣食をたすけてもらうあてを作っておいたらいいと思いますが、いかがでございましょう。」

教えて言われた。

そうではない。中国の人より、かえってわが国の人は、わけもなく僧を供養し、分不相応に人に物を与えることがある。まず、ほかの人はどうか知らないが、わたしはこの事を実際に行なって、道理を得たのである。全くあてにするものは一物もなくて、十年余り過ごして来た。少しでも財物を貯えようと思うことこそ大問題である。わずかの命を送る間のことは、どう思いめぐらして貯えなくても、天然自然にあるものである。人皆めいめい持って生まれた食分(じきぶん)、命分(みょうぶん)がある。天地がこれを授けてくれる。自分が走り回って求めなくても、必ずあるものである。ましてや仏弟子は、如来が遺してくださった福分がある。求めなくても自然に得られるのである。ただひたすら仏道を行じたなら、これが天然にあるべき生き方であろう。これが目の前に見られる証拠である。

八 かえって。
九 法に違い、秩序が乱れること。
一〇 外側から仏道修行をたすける縁となるもの。
一一 あてにするところを作っておく。
一二 分不相応に。
一三 「緬ハッカニ」(類聚名義抄)。
一四 生得の命分。その人の一生に備わっているもの。
一五 如来が、後世の仏弟子に残してくださったしあわせのもと。一〇ページ注一〇・一一参照。

九の(二) 学道の人多分云く

また云ク、学道の人、多分云ク、若シその事をなさば世人是レを謗ぜんかと。この条甚だ非なり。世間の人何とも謗ズとも、仏祖の行履、聖教の道理にてだにもあらば依行すべし。世人挙ツて褒るとも、聖教ノ道理にアラず、祖師も行ぜざらん事ならば依行すべからず。

その故は、世人親疎我レをほめそしればとて、彼の人の心に随ひたりとも、我が命終の時、悪業にもひかれ悪道へ趣カん時、何にも救フべカラず。喩へば皆人に謗られ悪るとも、仏祖の道にしたがうて依行せば、その冥実に我レをばたすけんずれば、人のそしればとて、道を行ぜざるべからず。

また言われた。

仏道を学ぶ人はよく、もしこれこれの事をしたら世間の人がこれをそしりはしないかと言う。これはたいへん間違っている。世間の人が何とそしっても、それが仏祖の遺された行ないであり、仏の教えの道理でありさえすれば、それによって修行すべきである。世間の人がこぞってほめても、仏の説かれた道理でなく、祖師も行じなかったことであるならば、それによってはならない。

そのわけは、世の中の、自分に親しい人やら親しくない人やらが、ほめたり、そしったりするからといって、その人の心に随っても、自分が死ぬ間ぎわ、悪業にひかれて、地獄・餓鬼等の悪道へ落ちようとする時、それらの人が自分を救ってはくれないのである。

かりにすべての人にそしられ、にくまれても、仏祖の道にしたが

また是のごとク謗讃[三]する人、必ズしも仏道に通達し、証得せるにあらず。何としてか仏祖の道を善悪をもて判ずべき。然も世ノ人情には順フベカラず。ただ仏道に依行すべき道理あらば、一向に依行すべきなり。

注

一　人はその人のした行為（業）にひかれて六道（天上・人間・修羅・地獄・餓鬼・畜生）にゆく。このうち、修羅以下は悪業によってつれてゆかれる悪道である。「おほよそ無常たちまちにいたるときは、国王・大臣・親暱・従僕・妻子・珍宝たすくるなし。ただひとり黄泉におもむくのみなり。おのれにしたがひゆくは、ただこれ善悪業等のみなり。」（正法眼蔵出家功徳）。

二　目に見えないところのもの。

三　そしったりほめたりする人。

十　某甲老母現在せり

また僧云ク、某甲老母現在せり。我レハ即チ一子なり。ひとへに某甲が扶持にて度世す。恩愛もことに深し。孝順の志も深し。是レに依ツて聊か世に順ヒ人に随ツて、他の恩力をもて母の衣糧にあづかる。若シ遁世籠居せば一日の活命も存じ難し。是レニ依ツて世間

って、行じていれば、その目に見えない加護こそ、ほんとうに自分を助けてくれるであろうから、人がそしるからといって道を行じないことがあってはならない。

またこのようにそしったりほめたりする人が、必ずしも仏道に通達し、さとりを得ているのではない。仏祖の道を、どうして世間の善悪の標準で判断することができようか。しかも流転の世界の人情に順ってはならないのである。ただ仏道によって行ずべき道理があるならば、ひたすらそれによって行じなくてはならない。

また、ある僧が言った。

「わたくしには年老いた母がおります。わたくしはその一人子でございます。わたくしの仕送りで生活しております。母がわたくしを思う情は特別深いものがございます。わたくしも何とか孝行をいたしたいものと考えております。そのため、少しばかり俗世にもした

に在リ。一向仏道に入ラざらん事も難治なり。若シなほただすてて道に入ルべき道理有らば、そノ旨何ナるべきぞ。

示ニ云ク、この事難治なり。他人のはからひにあらず。ただ我れ能く思惟して、誠に仏道に志あらば、何なる支度方便をも案じて、母儀の安堵活命をも支度して仏道に入ラば、両方倶によき事なり。こはき敵ふかき色、おもき宝なれども、切に思ふ心ふかければ、必ズ方便も出来ルやうもあるべし。是レ天地善神の冥加も有ツて必ズ成るなり。

曹渓の六祖は新州の樵人、たき木を売ツて母を養ヒき。一日市にして客の金剛経を誦ずるを聞イて発心し、母を辞して黄梅ニ参ズ。銀三十両を得て母儀の衣糧にあてたりと見えたり。是レも切に思ひける故に天の与へたりけるかと覚ゆ。能々思惟すべし。是レ一の道理なり。

母儀の一期を待ツて、そノ後障碍無ク仏道ニ入ラバ、次第本意のごとくして神妙なり。知ラず、老少は不定なれば、若し老母は久シく止まつて我レは前に去ル事も出来らん時は、支度相違せば、我レは仏道に入ラざる事をくやみ、老母は許さざる罪に沈ミて、両人共に益なくして互ヒに罪を得ん時如何。

若シ今生ヲ捨テ仏道に入ツたらば、老母直饒餓死す

がい、人の思わくにも従って、人々のおかげでもって、母の着る物・食べるものも得るような次第でございます。もしわたくしが、俗世の交わりを断ち、仏道修行に専心して、世間からひきこもってしまいますと、一日も生きてゆくことができないと思われます。これによって俗世の中で暮らしております。かといって、ひたすら仏道に入らないのも、心のおさまらぬことでございます。もしこうした境遇のわたくしでも、やはりこの母を捨てて仏道に入るのがよいという道理がございますならば、それはどんな事でございましょう。」

道元禅師が教えて言われた。

この事はむずかしいことである。他人からさしずすべき事ではない。ただ、自分でよくよく考えて、ほんとうに仏道に入ろうという志さえあるならば、なんとか準備もし、てだても考えて、母御の財産を確保するなり、生活の手段を用意するなりして、その上で仏道に入るなら、母子、両方ともに結構なことである。どんなに手ごわい相手でも、どんな深窓の美人でも、どんなに大切にされている宝物でも、なんとかして思い通りにしようと思う心が痛切に深いときは、必ず手だても出てくるであろう。そこには天にも地にもみちている護法の善神の目に見えない加護もあって、必ず成就するのである。

曹渓の六祖、慧能禅師は、嶺南新州の木こりであった。毎日、たき木を売って母を養っておられた。ある日、たき木を売りに市へ出たところ、客が金剛般若経をよむのを聞いて道心をおこし、母にいとまを告げて黄梅山の五祖のもとに身を投じた。その時は、銀三十

とも、一子を放して道に入れしむる功徳。豈得道の良縁にあらざらんや。我レも広劫多生にも捨テ難き恩愛を、今生人身を受ケて仏教に遇へる時捨てたらば、真[三]実報恩者の道理、何ぞ仏意に叶ハざラン哉。一子出家すれば七世の〈親〉得道すと見えたり。何ゾ一世の浮生の身を思つて永劫安楽の因を空シく過ゴさんやと云フ道理もあり。是レを能々自ラはからふべし。

注

一　生活の資をもってたすけること。

二　親子の間の情であるが、ここは、親が子を愛する情。次の「孝順」に対する。「オンアイ、オンナイ」(日葡辞書)。

三　おさまりにくいこと。むずかしいこと。「かたがた難治のやうに覚え候」(平家物語、御輿振)「ナンヂ　ヲサメガタシ」(日葡辞書)。

四　堵の内に安んずることが本義であるが、鎌倉、室町時代には土地の領有を公認せられることを言った。生活の根拠を得ること。

五　強敵。

六　天にも地にもいる護法の善神。

七　大鑑慧能(六三八—七一三)。俗姓は盧氏。五祖弘忍の法嗣得法ののち十六年間山林にかくれ、のち曹渓山宝林寺に住し三十八年間説法した。六祖の伝は正法眼蔵行持巻に

両を恵んでくれる人があって、母御の今後の衣食にあてたということである。これも真実深く出家を望んだので、天が与えてくださったかと思われる。よくよく考えなさい。これが一つの道理である。

また次に、母御が天寿を全うされるのを待って、その後、さわりもなく仏道に入れば、順序もよく、思いどおりになってたいそう結構なことである。しかし、老少不定であるから、年老いた母はあとに残って、自分が先に死ぬような事もないではなかろう。もしそうなった時には、手はずが違って、自分はついに仏道に入らないことをくやみ、老母はわが子の出家を許さない罪におち、両人ともに利益はなく、二人とも罪を得ることになったらどうであるか。

もし、この一生を捨てて仏道に入ったならば、老母はよしんば餓え死にしても、ひとり子をゆるして仏道に入らせる功徳は、将来道を得るすぐれた因縁ではないか。また自分も、今までの長い長い間生れかわり死にかわりしても、捨てることのできなかった恩愛の情を、今この世に人として生をうけ、難値難遇の仏の教えにあった時に捨てたならば、これこそ真実の報恩者というべき道理である。どうして仏の心にかなわないことがあろうか。子供が一人出家すると、七生前の親までが道を得ると、経文にも書いてある。たったこの世限りの、空に浮かんでいるようなはかない一身のことを考えて、未来永遠安楽となる因縁があるのを、どうしてむだにすごすことができようか、という道理もある。これを自分でよくよく考えめぐらすがよい。

も「六祖は新州の樵夫なり。いとけなくして父を喪す、老母に養育せられて長ぜり。樵夫の業を養母の活計とす。十字の街頭にして一句の聞経よりのち、たちまちに老母をすてて大法をたづぬ。これ希代の大器なり、抜群の辦道なり。断臂たとひ容易なりとも、この割愛は大難なるふし」と讃嘆している。なお、六祖の伝を知る資料としては、『六祖壇経』、『祖堂集』（巻二）、『宋高僧伝』（巻八）、『景徳伝灯録』（巻五）、『神会（じんえ）語録』などがある。

八　金剛般若波羅密経一巻。般若の空を説く。禅門でよく読まれる経である。

九　五祖大満弘忍（六〇一—六七四）。四祖道信の法嗣。黄梅憑茂山に住した。

一〇　順序。

一一　霊妙不可思議。ここは、理想的だの意。

一二　老人が先に死に、若い者があとに残るときまったものでないこと。

一三　「流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者」（清信士度人経）。親子の情をすてて出家することが、結局、真に親の恩に報いるゆえんであるということ。

校訂

1　濁音原文。

正法眼蔵随聞記　五

一　学道の人自解を執する事なかれ

一日参学の次、示ニ云ク、学道の人、自解を執する事なかれ。縦ひ所会有りとも、若シまた決定よからざる事もあらん、また是レよりもよき義もや有ラんと思ウて、ひろく知識をも訪ひ、先人の言をも尋ヌべきなり。また先人の言なれども堅く執スル事なかれ。若シ是レもあしくもや有ラん、信ずるにつけてもと思ウて、勝レたる事あらば次第につくべきなり。

昔忠国師の会に、有ル供奉来れりしに、国師問ウテ云ク、「南方の草の色如何。」

奉云ク、「黄色なり。」

また、国（師）の童子の有りけるに問へば、同ジく童子も「黄色なり。」と答へしかば、

国師、供奉に云ク、「汝が見、童子にこえず。汝も黄色なりと云フ。童子も黄色なりと云フ。是レ同見なるべし。然レば、童子、国皇の師として真色を答へし、

ある日、一同あつまって法を聞いていたおり、教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、自分の見解を固執してはならない。たといわかったと思うことがあっても、もしやまた、たしかによくない事があるのではないか、また、これよりもすぐれた意味もあるのではなかろうかと考えて、広くその道の指導者をたずね、昔の人の言っている言葉も調べてみるべきである。また昔の人の言葉ではあっても、それに固執してはいけない。これも、もしかしたら正しくないのではなかろうか、信頼するにつけてもなお念を入れてと考えて、それよりすぐれた点があれば、順次すぐれた方に従うべきである。

昔、南陽の慧忠国師の道場に、ある供奉僧がやって来た。

国師が問うて言った。「南方の草の色はどんな色か。」

供奉が答えて言った。「黄色でございます。」

また国師は、国師に仕えている童子に同じことを問うた。すると、その童子も同じく「黄色でございます。」と答えた。

そこで国師は供奉に向かって、「おまえの見解は童子の見解を超

汝が見所常途(じやうへと)にこえず。」ト。

後来(こうらい)、有ル人云ク、「供奉が常途(じやうへと)ニこえざる、何のとがか有ラん。童子と同ジく真色を説ク。是レこそ真の知識たらめ。」と云ツて、国師の義をもちゐず。

故に知ンぬ、古人の言をもちゐず、ただ誠の道理を存ずべきなり。疑心はあしき事なれども、また信ずまじき事をかたく執して、尋ヌべき義をもとぶらはざるはあしきなり。

注

一 参はあつまる。一同集まって法を聞いていた時。

二 会得したところ。

三 南陽慧忠国師（―七七五）。六祖慧能の法嗣。南陽白崖山に住して四十年門を出なかった。後、召されて唐の粛宗・代宗の仏法の師となり、西京光宅寺に住す。大証禅師とおくり名された。

四 供奉は内供奉の略。内供とも。宮中の道場に奉仕する僧の役名。景徳伝灯録には紫璘供奉（天子に侍するため特に紫衣を賜わった璘という供奉の僧）という人が見える。慶安本、流布本ともに紫璘供奉とする。景徳伝灯録ではこの供奉は慧忠国師に論戦をかけているが、もちろん国師の足もとにも及ばない。ここも一応は供奉の高慢を押える話であるが、さらにそれ以上の意味を追及して

えていない。おまえも草の色は黄色だと言い、童子も同じく黄色だと答えた。これは同じ見解である。してみれば、この童子も国皇の師としてほんとうの色を答えることができる。おまえの見るところは、あたりまえ以上ではない。」と言った。

後になってある人が、「供奉の答えがあたりまえ以上でないのが何がわるい。少年が見るのと同じように、草の真実の色を説いている。これこそほんとうの指導者であろう。」と言って、国師の言葉に賛成しなかった。

これによっても、昔の人の言葉にはよらず、ただほんとうの道理をわきまえればよいことがわかる。疑心を抱くのはよくないことであるけれども、また信じるべきでないことを固執して、追及すべき意味をもよく考えてみないのはよくない。

いるのである。

五　寺院に入ってまだ剃髪せず、もっぱら仏典の読み方などを習う者。年は七歳から十五歳の間。

校訂

1　原文、無シ。「無レ」と見て、かなに改めた。

2　この条、慶安本、流布本と大差あり、次に掲ぐ。「南陽忠国師、紫璘供奉ニ問、甚レノ処ヨリカ来ル。奉云、城南ヨリ来ル。師云、城南草何レノ色ヲカ作ス、奉云、黄色ヲ作ス。師乃童子ニ問、城南ノ草何色ヲカ作ス。子云、黄色ヲ作ス。師云、祇這童子モ亦簾前ニ紫ヲ賜テ御ニ対シテ玄ヲ談スヘシ。」（慶安本。原文、句読点なし。）流布本はこれを全部漢文体とす。

3　原文、又問。問は不用と見て省く。

4　原文、二か所とも右傍に「草イニ」とあり。

二　学人第一の用心は先づ我見を離るべし

また示ニ曰ク、学人第一の用心は、先ヅ我見ヲ離ルベシ。我見ヲ離ると者、この身を執スベカラず。縦ひ古人の語話を窮め、常坐鉄石ノごとクなりと雖モ、この身に著して離レざラン者、万却千生仏祖ノ道を得べカラず。

また、教えて言われた。

仏道を学ぶ者の第一の心がけは、まず我見を離れることである。我見を離れるというのは、この身に執着してはならないということである。よしんば昔の人の語録、法話の奥底までさぐり、常に坐禅して鉄石のように不動であっても、この身に執着して離れなければ、

何ニ況ンヤ権実[二]の教法、顕密の聖教を悟得すト雖も、この身を執スル之心を離レず者、徒らに[三]他ノ宝を数へテ自ら半銭之分無し。

ただ請フらくは学人静坐[四]して道理を以てこノ身之始終を尋ヌベシ。身躰髪膚者父母之二滴、一息に駐りぬれば山野に離散して終ニ泥土[五]と作る。何ヲ以テノ故にか身を執せんや。

況ンヤ法[六]を以テ之レを見れば十八界[七]之聚散、何の法をか定メて我身[八]と為ん。教内教外[九]別レりト雖モ、我身之始終不可得[一〇]なる事、之レを以て行道之用（心）と為る事、是レ同じ。先づこノ道理を達する、実ニ仏道顕然ナル者なり。

注

一　実我があると執するあやまった見解。五見の一。五見は、我見（我ありと考える）・辺見（断常二見のいずれかにかたよる）・邪見（因果を信じない）・見取見（一つの見解を最上のものと固執する）・戒禁取見（さまざまの制約を守ってこれを最上とする）。いずれも悪慧である。

二　天台の教判によれば唯一真実の実教は法華涅槃時のみで、それ以前はすべて権教（かりの教え、方便の教え）である。

無限の長い時の間を、いくたび生まれ代わり死に代わりしても、仏祖の道を得ることはできない。

ましてや、真実の教えやかりの教えや、天台真言の教理がどんなによくよくわかっても、この身に執着する心が捨てられなければ、むなしく他人の宝を数えて、自分には半銭のわりまえもないのと同じである。

ただ、どうか仏道を学ぶ者は、静かに坐して、道理をもってこの身の始めと終わりを考えてほしいものである。身体髪膚はもと父母の二滴にすぎず、一つ呼吸がとまれば、ただちに生のないものとなり、四大は山野に離散して、ついに泥土となるばかりである。どういうわけで身に執着できようか。

まして、法の立場からこの身を見れば、十八界が集まったり散ったりするばかりで、どの部分をとって、これがわが身ときめられようか。教内と言い教外と言い、宗旨は別になってはいるが、この身の始めも終りもとらえようがないという、この道理をもって仏道を行ずる心得とすることは、まったく同じである。まずこの道理に深く通ずるのが、ほんとうに仏道がはっきりすることである。

三　「日夜他の宝を数へて自ら半銭の分無し」（学道用心集）。「譬へば貧窮の人、日夜に他の宝を数へて半銭の分無きがごとく、多聞もまた是のごとし」（華厳経、菩薩明難品第六）。

四　「若し我見起るの時は静坐観察せよ。今我が身体内外の所有、何を以て本とせんや。身体髪膚は父母に稟く、赤白の二滴は始終是れ空なり。所以に我れにあらず。」（学道用心集）。

五　「をしむにたとひ百計千方をもてすといふとも、つひにこれ塚中一堆の塵と化するものなり。」（正法眼蔵行持巻）。

六　理法。一切万有のあり方。

七　六根（眼耳鼻舌身意の六つの感覚機関）、六境（色声香味触法の対象の世界）、六識（眼耳鼻舌身意の認識作用）を合わせて十八となる。一切のものはすべてこの十八の組み合わせによるにすぎない。

八　我が本来固定した実体のないものであるから、その我の身も実体はない。

九　教内は経典による教家の教え。教外は教外別伝、すなわち禅門の教え。

一〇　不可得（空）であるから、教えに従って、仏道を行ずることもできる。

三　古人云く、霧の中を行けば覚えざるに衣しめる

一日示ニ云ク、古人云ク、「霧[一]の中を行けば覚エざるに衣しめる。」ト。よき人に近ヅけば、覚エざるによき人となるなり。
昔[二]、倶胝和尚に使[三]へし一人の童子のごときは、いつ学し、いつ修したりとも見えず、覚エざれども、久参[四]に近[五]づいしに悟道す。
坐禅も自然に久シくせば、忽然として大事[六]を発明して坐禅の正門[七]なる事を知る時も有ルべし。

ある日、教えて言われた。
昔の人は、「霧の中を歩くと、知らないまに、着物がしっとりする。」と言っている。すぐれた人に親しんでいると、気がつかないうちに、自分もすぐれた人になるというのである。
昔、倶胝和尚につかえていた一人の童子などは、いつ仏法を学び、いつ修行したとも見えず、自分でも気がつかなかったが、久しく仏道を学んだ人の身近にいたので、道を悟った。
坐禅も、自然に長い間やっていると、ひょっこりと悟りが開けて、坐禅が仏法の正しい入り方であることがわかる時もあるであろう。

注

一　「善者に親近すれば霧露の中に行くがごとし。衣を湿さずといへども、時々に潤有り」（潙山警策）。

二　倶胝は大梅法常の法嗣天竜和尚に嗣す。倶胝和尚は、人が法をたずねるとただ指一本を立てるのみであった。倶胝和尚の門下に一人の童子があった。外で人から、「和尚はどんな法を説かれるか」とたずねられた時、指一本立てて見せた。倶胝はこの話を聞くと、童子が得々として立てて見せた指を即座に斬ってしまった。童子は痛さに泣きさけんで逃げ出した。倶胝はこれを呼びとめ、童子がふり

返った瞬間、指一本立てて見せた。童子は忽然として領悟した。倶胝和尚、滅にのぞんで門下の人々に向かって言った。「吾れ天竜一指頭の禅を得て一生受用不尽。会せんと要すや。」指一本立てて遷化した（正法眼蔵三百則による）。この話は、景徳伝灯録、無門関などにもあって有名である。倶胝の詳伝は不明。

三 「仕へし」に同じ。

四 久しく仏道に参学した人。

五 「近づきし」の音便。tikazukisi→tikazuisi.（kの脱落）

六 一生参学の大事を明らかにする。

七 「仏法におほくの門あり。なにをもてかひとへに坐禅をすすむるや。しめしていはく、これ仏法の正門なるをもてなり。」（正法眼蔵弁道話）。

四 嘉禎二年臘月除夜

嘉禎二年臘月除夜、始メテ懐弉を興聖寺の首座に請ず。即ち小参の次、秉払を請ふ。初メて首座に任ず。即チ興聖寺最初ノ首座なり。

小参に云く、宗門の仏法伝来の事、初祖西来して少林に居して機をまち時を期して面壁して坐せしに、その年の窮臘に神光来参しき。初祖、最上乗の器なりと知ッて接得す。衣法ともに相承伝来して児孫天下に

嘉禎二年十二月三十日夜、道元禅師ははじめて懐弉を興聖寺の首座に請ぜられた。すなわち禅師は小参の説法にひきつづき、懐弉に払子をとって大衆に説法するようにと頼まれた。こうしてはじめて首座に任ぜられた。これがすなわち興聖寺最初の首座である。

その時の道元禅師の説法は、次の通りであった。

わが宗門の仏法伝来の次第は、そもそも、初祖達磨大師が天竺から西来して崇山の少林寺にとどまり、時機到来を待って壁にむかっ

流布し、正法今日に弘通す。

初メて首座を請じ、今日初メて秉払をおこなはしむ。衆のすくなきにはばかる事なかれ。身、初心なるを顧ミル事なかれ。[一五]汾陽は纔に六七人、[一六]薬山は不満十衆なり。然れども仏祖の道を行じて是レを叢林のさかりなると云ヒき。見ずヤ、[一七]竹の声に道を悟り、[一八]桃の花に心を明ラめし、竹豈利鈍有り、迷悟有ランや。花何ぞ浅深有り、賢愚有ラん。花は年々に開くれども皆得悟するにあらず。竹は時々に響けども聴ク物[一九]ことごとく証道するにあらず。ただ久参修持の功にこたへ、弁道勤労の縁を得て悟道明心するなり。是レ竹の声の独り利なるにあらず、また花の色のことに深きにあらず。竹の響き妙なりと云へども自ラの縁を待ツて声を発す。花の色美なりと云へども独リ開クるにあらず。春の時を得て光を見る。

学道の縁もまた是ノごとし。人々皆道を得ル事は衆[二〇]縁による。人々自ラ利なれども道を行ずる事は衆力を以てするが故に、今心を一つにして参究[二一]尋覓すべし。玉は[二二]琢磨によりて器となる。人は練磨によりて仁となる。何の玉かはじめより光有ル。誰人か初心より利なる。必ずみがくべし、すべからく練ルベシ。自ら卑下して学道をゆるくする事なかれ。

[二三]古人云ク、「光陰虚シくわたる事なかれ。」ト。今問

て坐禅をしていたところ、その年の十二月、二祖慧可大師神光が来て弟子となった。初祖は、慧可大師がこの上ないすぐれた器であることを知って、親しく教え導いた。爾来仏法は、得法の証としての袈裟とともにうけつぎ伝えられて、達磨の子孫は天下に流布し、正法が今日にひろく行なわれるにいたった。

さて今日、この興聖寺において、はじめて首座を任じ、払子をとって説法をしてもらうこととなった。新首座は、参学者の少ないことを気にしてはならない。経験の浅いことも心配してはならない。汾陽の門下はわずかに六、七人、薬山の門下は十人に満たなかった。しかし、いずれも仏祖の道を行じて、これこそ叢林の盛んな時であると言ったものである。かの、竹に石のあたる音を聞いて道を悟った香厳智閑禅師、桃の花を見て心を明らめた霊雲志勤禅師のことを考えよ。なんで竹に利鈍があり迷悟があろうか。花に浅深があり、賢愚があるだろうか。花は年々に開くが、見る者がみな悟るわけではない。竹はいつも音を発しているが、聴く者がことごとくさとりを得るわけでもない。ただ長い間の参禅修行の功にむくい、弁道に苦労を重ねた縁があって道を悟り心を明めるのである。竹の声が特別に、するどいはたらきがあるのではない、また花の色が特別に美しかったのでもない。竹の響きがすぐれていても、それはそれなりの因縁があって音を発するのであり、花の色が美しいといっても勝手に開くのではなく、春という季節になると、美しく開花するのである。

仏道参学における因縁もまた同様である。学道の人がみな道を得

フ、時光はをしむによりてとどまるか、をしめどもとどまらざるか。また問フ、時光虚シク度(わた)らず、人虚シく渡るカ。時光をいたづらに過ゴす事なく学道せよと云フなり。

是(かく)ノごとク参、[二四]同心にすべし。我レ独(ひと)[二五]リ挙揚(こやう)せんに容易にするにあらざれども、仏祖行道の儀、皆是(かく)ノごとクなり。如来にしたがツて得道するもの多けれども、また阿難[二六]によりて悟道する人もありき。新[二七]首座非器なりと卑下する事なく、[二八]洞山(とうざん)[二九]の麻三斤(まさんぎん)を挙揚して同衆に示すべしと云ツて、座[三〇]をおりて、再ビ鼓(く)[三一]を鳴ラして、首座秉払す。是レ興聖最初の秉払なり。[三二]弉公三十九の年なり。

注

一 西紀一二三六年。前年以来の僧堂の勧進もおわって道場が完備し、この年の十月十五日に、興聖寺開堂の式があった。

二 陰暦十二月の異称。

三 くわしくは観音導利院興聖宝林寺。道元禅師が山城国深草極楽寺跡に天福元年（三三）春に建てられた。

四 禅林の第一座。一衆をひきい、住持人にかわって説法もする大切な役。

五 参は、大衆を集めて法を説くこと。正式の説法（上

ることは、同学同参のみんなの縁によるのである。人はめいめい自らするどい心のはたらきがあるのであるが、仏道を行ずることは同学同参のみんなの力によるのであるから、今、心を一つにして、坐禅に坐禅を重ねて、仏道を尋ねもとめよ。玉はみがかれてはじめて器となり、人は練磨してはじめて真の人となる。はじめから光のある玉もなければ、はじめからすぐれたはたらきのある人もあるわけではない。必ず切磋せよ、ぜひとも練磨せよ。自ら卑下して学道を手ぬるくしてはならない。

石頭希遷禅師は『参同契』で、「光陰虚(むな)しくわたることなかれ」と言っている。そこで諸君にたずねるが、そもそも光陰は惜しんだらとどまるものであるか、それとも惜しんでもとどめられないものか。また、こうもたずねよう、光陰が虚しくすぎるのではなく人が虚しくすごすのであるか。参同契のこの言葉は、光陰をむなしくすごさず、仏道を学べというのである。

このように参学は一同心をあわせて行なうように。わたしがひとりで仏法を説き示そうとしても容易なことではないが、ここに新しく首座を得て、ともに諸君の指導に当たってもらうこととなった。釈迦如来にしたがって得道する者も多かったが、また侍者の阿難によって道を悟った人もあった。新首座は力量がないと卑下することなく、洞山守初禅師の麻三斤の話(わ)をとりあげて、同学の人々に説き示すように。

禅師はこう言って法座をおり、再び鼓(く)を鳴らして、首座が払子を

とって説法を行なった。これが興聖寺最初の秉払である。ときに懐弉禅師は三十九歳であった。

堂）に対して、日の暮れ方に所を定めず、あるいは寝堂、あるいは法堂において法座にのぼって説法するのを小参という。特に四節の終りには頭首（首座・書記・蔵主・知客・知殿・知浴）を請じて秉払せしめることがあると、百丈清規に見える。

六　首座が住持人に代わって払子を取り、法座にのぼって説法すること。「永平三祖行業記」によれば、道元禅師は、懐弉禅師以外は決して秉払を許されなかったという。

七　達磨直伝の宗門。

八　菩提達磨大師。中国に仏法の実物を伝えた第一の祖師。南天竺香至国の第三王子と言われる。

九　中国河南省崇山の少林寺。梁の普通八年（五二七）、達磨大師が南海を経て中国に来り、この寺で九年間面壁坐禅して弟子四人を接得した。

一〇　機は法を聞いてさとるべき人。弟子。

一一　おしつまった年の暮れ。

一二　達磨の仏法を受け伝えた第二祖。慧可大師（四八七―五九三）。

一三　学人を親しく指導すること。

一四　この袈裟は代々相伝えて六祖に至り、曹渓山にとどめられた。

一五　汾陽善昭（九四七―一〇二四）。首山省念の法嗣。俗姓は兪氏。太原の人。得法の後、汾陽の太子院に住し、門を出ないこと三十年であった。

一六　薬山惟儼（七四五―八二八）。石頭希遷、馬祖道一に参じ、石頭の法を嗣ぐ。得法の後、澧州薬山に住す。『知事清規』

にも「薬山はすなはち古仏なり、不満十衆の衆を衆とす。汾陽は
趙州もまた古仏なり、不満二十衆の衆を衆とす。汾陽は
纔に七八衆なるのみ。……今より後、有道有徳は薬山の
下なり、汾陽の後なり。薬山の家風を貴ぶべし、汾陽の
勝躅を慕ふべし」と言って讃嘆している。また、「薬山
の不満十衆、これ正命なり。汾陽の七八衆、これ正命の
かかれるところなり。」（正法眼蔵三十七品菩提分法）。

一七　香厳撃竹の話。一五〇ページ注六参照。

一八　霊雲見桃花の話。一五〇ページ注五参照。

一九　者と同じ。

二〇　衆は共に修行する僧衆。

二一　たずねもとめる。

二二　玉をみがき石をみがくように、たゆまず努力すること。

二三　『参同契』の語。二二一ページ注一四参照。

二四　石頭希遷撰の『参同契』の意をこのように説いて聞かされたのであろう。「参」はあつまって学道すること。

二五　古則、公案をとりあげ、衆に示して仏法の真髄を説くこと。

二六　Ananda の音訳。義訳は慶喜。釈尊の従弟。出家して仏に侍すること二十余年、仏説をすべて記憶し、多聞第一と言われる。ここは懐弉禅師を阿難に比している。

二七　懐弉禅師をさす。

二八　洞山守初。雲門文偃の法嗣。崇慧大師。

二九　「洞山に僧有つて問ふ、いかなるかこれ仏。山云く、麻三斤。僧、悟ること有つて便ち礼拝す。」（金沢文庫本正法眼蔵三百則中巻）。「洞山の麻三斤も典座の時なり。」

(典座教訓)。

三〇 法座。

三一 「小参には鼓を鳴らすこと一通して衆集まる」(百丈清規)。改めて小参の式をとったのである。

三二 公の敬称をつけたのは、懐弉禅師の弟子たちによってこの書が編纂された時であろう。

校訂

1 原文、「不レ満二十衆一」。と訓点があるが、「知事清規」、正法眼蔵等の例により、訓読せず。

五 俗人の云く何人か厚衣を欲せざらん

一日示ニ云ク、俗人の云ク、「何人か厚衣を欲せざらん、誰人か重味を貪らざらん。然レども、みちを存ぜんと思ふ人は、山に入リ水にあき、さむきを忍び餓ヱをも忍ぶ。先人くるしみ無きにあらず、是レを忍ビてみちを守れば、後人是レを聞イてみちをしたひ、徳をこふるなり。」ト。

俗の賢なる、なほ是ノごとシ。仏道豈然ラざランや。古人も皆金骨にあらず、在世もことごとく上器にあらず。大小ノ律蔵によりて諸比丘をかんがふるに、不可思議の不当の心を起すも有リき。然レども、後に

ある日、教えて言われた。

世俗の人が言っている。「立派な着物を着たくない人があろうか。おいしい物を食べたがらない人があろうか。けれども、道にしたがって生きようと思う人は、人里遠い山水の境に分け入り、寒さにも耐え、餓えをもしのぶのである。むかしの人が苦しみがなかったのではない、苦しみにたえて道を守ったから、後世の人も、話を聞いて自分もまたその人の道を慕い、その徳を慕うのである。」と。

俗人でも、すぐれた人はやはりこの通りである。仏道においても、こうなくてなんとしよう。古人もみな骨が黄金でできていたのでもない。仏在世の弟子たちが皆々生まれつきすぐれていたのでもない。

は皆得道シ羅漢[三]となれり。しかあれば、我等も悪くつたなしと云へども、発心修行せば得道すべしと知ツて、即ち発心するなり。
古へも皆苦をしのび寒をたへて、愁ながら修道せしなり。今の学者、くるしく愁フるとも、ただ強て学道すべきなり。

注

一　人里遠い山水の境に深く分け入るのを言う。
二　律は比丘、比丘尼がたもつべき仏の制戒。律の最初のおこりは、みな仏弟子たちの非行をいましめられたことに始まっている。
三　arhat 阿羅漢の上略語。応具と訳す。「諸漏すでに尽きでまた煩悩なく、己利を逮得し、諸の有結を尽くして心自在を得たり。これ大阿羅漢なり。学仏者の極果なり」というのが正法眼蔵阿羅漢巻に道元禅師が説かれている定義である。大乗仏教がおこってから、その以前の部派の仏教を小乗としておとしめ、阿羅漢をも「小乗の極果」と説くようになったが、道元禅師においてはそのような区別をしてはいないようである。

校訂

1　原文、羅難。

大小の律をしるした書によって出家の仏弟子たちのことをしらべてみると、思いもよらない道にはずれた心をおこす者もあった。それでも、みな、後には道を得て、学仏者の極果を得た。してみれば、自分たちも、悪い人間であり、すぐれたところのない者ではあるけれども、発心して修行すれば、道を得ることができるのだということを知って、直ちに発心するのである。
昔の人もみな、苦しいのをがまんし、寒さにたえて、つらい思いをしながら道を修行したのである。今の仏道を学ぶ人も、苦しく、つらいと思っても、ただ無理にも仏道を学ぶべきである。

六　学道の人悟りを得ざる事は

学道の人、悟りを得ざる事は、即ち古見を存ずる故なり。本より誰教へたりとも知らざれども、心と云へば念慮知見なりと思ひ、草木なりと云へば信ぜず。仏と云へば相好光明あらんずると思ウて、瓦礫と説けば耳を驚かす。即チこノ見父も相伝せず、母も教授せず。ただ無理に久シく人の言ふにつきて信じ来れるなり。然れば、今も仏祖決定の説なれば、心を改めて、草木と云へば草木を心としり、瓦礫を仏と云へば即ち本執をあらため去ば、真ニ道を得べきなり。

古人云ク、「日月明ラカなれども浮雲之レを掩ふ、叢蘭茂せんとするとも秋風之レを吹キ破る。」ト。貞観政要に之レヲ引イテ賢王と悪臣とに喩ふ。今は云く、浮雲掩へども久シからず、秋風やぶるともひらくべし。臣わろくとも王の賢久シくは転ぜらるべからず。今仏道ヲ存ぜんも是ノごとクなるべし。何に悪をしばらくをかすとも、堅く守り、久シくたもたば、浮雲もきえ、秋風もとどまるべきなり。

注

仏道を学ぶ人が悟りを得ないのは、つまり、むかしからの見解を持ち続けるからである。もともと、だれが教えたともわからないのだが、「心」といえば、さまざまな心のはたらきや知識見解のことだと思い、「心とは草木だ」と言うと信じない。「仏」といえば、「三十二相、八十種好をそなえ、光明をはなっているだろう」と思って、「仏とは瓦や石ころだ」と説くと聞いてびっくりする。つまり、このむかしから持っている見解というものは、父が伝えたのでもなく、母が教えたのでもない。ただ道理もなく長い間、人が言うことをそのままに、信じ込んできたのである。であるから、今も同様に、仏祖のまちがいのない教えであるから、心を改めて、「心は草木だ」と言ったら、草木を心と理解し、「瓦や石ころ」を「仏である」と言ったら、直ちに以前からもっている執着をあらためてゆくと、真に仏道を得ることができるのである。

古人は、「日も月も明らかに光を放っているが、浮雲がこれをおおう。かんばしい叢蘭は茂ろうとするが、秋風がこれを吹き破る」と言っている。『貞観政要』にこの言葉を引用して、賢王と、その明をおおう悪臣とに喩えてある。が、今これを言い直してみれば、「浮雲はおおってもいつまでもあるものではない、いずれは晴れる。秋風が吹き破っても、やがてはかおり高い花をひらく。」である。たとえ臣が悪くとも、王が常に賢明であれば、悪い方へひき入れら

一 古くから持っている見解。

二 念慮は心のはたらきとおもんぱかり、知見は知識、見解。

三 あらんとする。あるはずと考える。

四 「ある時僧ありて（大証）国師に問ふ、いかにあらんかこれ古仏心。国師いはく、牆壁瓦礫」（正法眼蔵心不可得、また身心学道巻にもあり。）

五 「日月明ならんと欲すれども浮雲之れを蓋ふ、蘭芝脩まらんと欲すれども秋風之れを敗る」（淮南子、説林訓）。

六 「叢蘭茂せんと欲すれども秋風之れを敗り、王者明ならんと欲すれども讒人之れを蔽ふ」（帝範、去讒第六。また貞観政要巻第六、讒佞を杜づる第二十三にあり。）『帝範』は唐の太宗が、人君の道を説いて太子に授けた書であり、『貞観政要』は約五十年を経て、玄宗の時代の臣呉兢が、太宗と諸臣との問答をしるしたものである。ここは、『帝範』の太宗の言葉を『貞観政要』に引いたという意。

校訂

1 原文、存ゼシ。

七の㈠　学人初心の時

一日示ニ云ク、学人初心の時、道心有ツても無クても、経論聖教等よくよく見るべく、学ぶべし。

れることはない。今、仏道を心に持ち続けることも、この通りでなければならない。しばしの間どんなに悪をおかすことがあっても、心に堅く仏道を守り、久しく保ち続けるなれば、浮雲も消え、秋風もやむように、悪もやむのである。

ある日、教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、初心の時には、道心の有無にかかわらず、経

我レ初めてまさに無常[二]によりて聊か道心を発し、あまねく諸方をとぶらひ、終に山門[三]を辞して学道を修せしに、建仁寺に寓せしに、中間に正師[1]にあはず、善友なきによりて、迷ツて邪念をおこしき。

教道の師も先づ、学問先達にひとしくよき人なり、国家に知ラれ、天下に名誉せん事を教訓す。よツて教法等を学するにも、先ヅこノ国の上古の賢者にひとしからん事を思ひ、大師等[四]にも同ジからんと思ウて、因ミニ高僧伝[五]、続高僧伝[六]等を披見せしに、大国の高僧、仏法者のやうを見しに、今の師の教へのごとクにはあらず。また我がおこせる心は、皆経論伝記等には厭ひ悪みきらへる心にて有りけりと思フより、漸く心つきて思フに、道理をかんがふれば、名聞を思フとも当代下劣の人によしと思はれんよりも、上古の賢者、向後の善人を耻ヅべし。ひとしからん事を思フとも、こノ国の人よりも唐土天竺の先達高僧を耻ヅべシ。かれにひとしからんと思フべし。乃至諸天冥衆、諸仏菩薩等を耻ヂ、かれにひとしからんとこそ思フべきに、道理を得て後には、こノ国の大師等は、土〈瓦〉のごとく覚エて、従来の身心皆改メぬ。

[八]仏の一期の行儀を見れば、王位を捨てて山林に入リ、学道を成じて後も一期乞食すと見エたり。

[九]律に云ク、「[一〇]家、家ニあらずト知リて捨家出家ス。」

論・聖教などをよくよく読み、また学ぶように。

わたしは、幼少の時、親の死にあって、いささか道心を起し、あまねく方々の寺に師をたずね、ついにはいったん入門した比叡山を下って、仏道を学び、建仁寺に身をよせるに至ったが、それまでの間には、正法を説く師匠にめぐりあうことができず、修行上の善い友だちもなかったので、迷って邪念を起した。

わたしを教え導いてくれた師匠も、学問はその道の先輩と等しい立派な人であったが、第一に、国家に名が知られ、天下に名声があがるようにと教訓された。それで教義法文などを学ぶにも、まず、わが国の上古のすぐれた人と同じようになりたいと思い、大師号を受けた人々と同じようになりたいと思った。それで『高僧伝』『続高僧伝』などをひもといて、大国の高僧や仏法者と言われる人のありさまを見たところが、今の師匠の教えとは違っていた。また、自分が起した心は皆、経論や伝記などには、にくみきらっている心であったのだと思い至ってからやっと気がついて、道理を考えてみれば、たとえ名聞を思うにしても、当代の下劣の人に立派だと思われるよりも、上古の賢者や、将来の善人を恥じるべきである。肩をならべようと思うなら、わが国の人よりも、中国やインドの先達高僧と比べて、自分の劣っている点を恥じるべきであり、この人々と等しくなろうと思わなくてはならない。ひいては諸天の神々や目に見えない世界にいる神や、諸仏、菩薩などを恥じ、彼らに等しくなろうとこそ思うべきであった。この道理がわかってからは、わが国の大師号を受けた人々などは土瓦のように思われて、いままでの身心

ト。

ふるく云く、「誇リて上賢にひとしからんと思ふ事なかれ。いやしうして下賤にひとしからんと思ふ事なかれ。」と云フは、倶に慢心なり。高ウしても下らん事をわするる事なかれ。安んじてもあやふからん事を忘るる事なかれ。今日存ズれども明日モと思フ事なかれ。死に至りあやふき事、脚下に有り。

を全部かえてしまった。

釈尊一代のなさったあとを見ると、王位をすてて山林に入り、仏道を成就して後も、一生、乞食をなさったと書いてある。摩訶僧祇律には、「家が真の家でないことを知り、家を捨てて出家する」と言っている。

むかしの言葉に、「得意になって上古のすぐれた人に等しかろうと思ってはならない。また卑屈になって下賤に等しかろうと思ってはならない。」と言っているが、得意になるのも卑屈になるのも、ともに慢心である。高い所にいても、自らへりくだることを忘れてはいけない。安全と思っていても危険のあることを忘れてはならない。今日は生きているけれども、明日も命があると思ってはならない。死や危険は、今すぐにもやってくるのである。

注

一　経は経典。論は教法の注釈およびその深い意味を説いた書。

二　道元禅師は三歳の時、父久我通親の死にあい、八歳の時母（松殿関白基房の女）の死にあっている。建暦二年（一二一二）十三歳の春、元服を前に外叔良顕法眼について出家を求め、叡山の横川般若谷の千光房の室に入った。建保元年（一二一三）天台座主公円について剃髪受戒した。

三　山門は比叡山延暦寺のこと。禅師はここでの教学に疑問を持ち、三井寺に公胤をたずねなどしていたが、建保五年（一二一七）十八歳の時叡山を下り、建仁寺に入って明全に随侍した（天文本建撕記による）。

四　伝教、慈覚、智証大師や弘法大師など。

五　十四巻。梁の慧皎の著。梁高僧伝、また梁伝ともいう。後漢の明帝永平元年（六七）から梁の天監十八年（五一九）

までの四五三年間の高僧の事歴を述べた書。
六 四〇ページ注一参照。
七 「キャウコウ、ユクスエ」(日葡辞書)。
八 釈尊一代の生き方。次の「王位を捨てて山林に入り、学道を成じて後も一期乞食す」をさす。
九 摩訶僧祇律。四十巻。東晋仏陀跋陀羅・法顕共訳。大衆部系の律。
一〇 原漢文は「知家非家」。摩訶僧祇律第一四波羅夷法を明す第一の本文は「信家非家」。

校訂

1 原文、ヲコノ。
2 原文、知家非家。家非家は Agārānagāra で、摩訶僧祇律の本文では、「家と非家とを信じて」という読み方もある。

七の(二) 愚癡なる人は

また云ク、愚癡（ぐち）なる人はそノ詮（せん）なき事を思ひ云フなり。此（ここ）につかはるる老尼公、当時いやしげにして有るを耻ヅるかにて、ともすれば人に向ツては昔上﨟（むかし（し）じやうらふ）にて有りし由をかたる。喩（たと）へば今の人にさありけりと思はれたりとも、何の用とも覚えず。甚（はなは）ダ無用なりと覚ユるなり。

また、言われた。
おろかな人というものは、かいもないことを考えて言うものである。この寺に仕えている年老いた尼君は、現在いやしい身分でいるのが恥ずかしいと見えて、何かといえば、人に対しては、昔身分のある婦人であったことを話す。よしんば、このあたりの人に、昔はそうであったのかと思われたとしても、何の役に立つとも思われな

皆人のおもはくは、こノ心有るかと覚ゆるなり。道心無きほども知らる。此らの心を改メて、少し人には似べきなり。

またあるイは入道[二]の極メて無道心なる、去リ難き知音にて有ルに、道心おこらんと仏神[三]に祈禱せよと云ハんと思ふ[1]。定めて彼[四]腹立して中たがふ事有ラん。然レども道心をおこさざらんには、得意[五]にてもたがひに詮[2]なかるべし。

い。全くいらないことだと思われる。

しかし、たいていの人の考えには、皆こうした気持があるのではないかと思われる。その道心のなさ加減もわかる。こうした心を改めたら、少しは人らしくなるであろう。

また、あるいは、きわめて道心のない入道で、知らん顔もできない知人がいる。道心がおこるように仏や神にお祈りしなさいと忠告しようと思うが、そんなことをしたら、その人はきっと腹を立てて仲たがいするかもしれない。しかし、道心をおこさないことには、友だちであってもお互いにかいのないことであろう。

注

一　上﨟に同じ。身分ある婦人。
二　俗家にいるままで、剃髪して袈裟をつけ、僧の形をしている人。
三　「ブツジン、ホトケ、カミ」(日葡辞書)。
四　「フクリウ、ハラヲタツル、フクリウスル」(日葡辞書)。
五　親しい友だち「もとよりのとくいに侍りければ」(躬恒集)。

校訂

1　原文、思ヒ。
2　原文、全。

八の㈠　三覆して後に云へ

示ニ云ク、「三覆して後に云へ。」と云フ心は、おほよそ物を云ハんとする時も、事を行はんとする時も、必ズ三覆して後に言ひ行フべし。先儒多くは三たび思ひかへりみるに、三タびながら善ならば言ひおこなへと云フなり。宋土の賢人等の心は、三覆をばいくたびも覆せよと云フなり。言よりさきに思ひ、行よりさきに思ひ、思ふ時に必ズたびごとに善ならば、言行すべしとなり。衲子もまたかならずしかあるべし。我レながら思フ事も云フ事も、主にも知られずあしき事も有るべき故に、先づ仏道にかなふやいなやとかへりみ、自他のために益有りやいなやと能々思ひかへりみて後に、善なるべければ、行ひもし言ひもすべきなり。行者若シこの心を守らば、一期仏意にそむかざるべし。

昔年建仁寺に初めて入リし時は、僧衆随分に三業を守ッて、仏道のため利他のためならぬ事をば言はじ、せじと各々心を立てしなり。僧正の余残有リしほどは是ノごとシ。今年今月はその儀無し。

今の学者知ルべシ、決定して自他のため仏道のために詮有ルベキ事ならば、身を忘レても言ひもし行ヒもすべきなり。その詮なき事をば言行すべからず。

教えて言われた。

「三度考え直してのち言え。」という言葉があるが、その意味は、すべて物を言おうとする時も、事を行なおうとする時も、必ず三度考え直して後に言ったり、行なったりすべきであるというのである。昔の儒者は多くは、「三度考え直して、三度とも善であるならば言いもし、行ないもせよ。」と解釈している。しかし中国の賢人の気持では、三度考え直せというのは、幾度も考え直せということである。言葉に出す前に考え、行為に移す前に考え、考えるたびごとに善であるなら言ったり行なったりすべきであるというのである。達磨門下の禅僧もまた必ずこうあるべきである。自分で、思う事も、言う事も、自分でも気がつかないところで、悪い事もあるものだから、まず仏道にかなっているかどうかを反省し、また自他のために利益があるかどうかを、よくよく反省して後に、善であるようなら行ないもし、言いもすべきである。仏道の修行者がもしこの気持を守るならば、一生仏の心にそむかないであろう。

以前、わたしが建仁寺に始めてはいった当時は、修行僧たちは分にしたがって身と意と口の三業を守り、仏道のため、人のため利益にならないことは、言うまい、しまいとめいめい志を立てたものである。栄西禅師がなくなって後も、その徳のなごりがある間はこの通りであった。しかし今日ただ今では、もうその風儀は見られない。

宿老耆年の言行する時は、若臘にては言を交フべからず。仏制なり、能々これを忍ぶべし。

身を忘レてみちを思ふ事は俗なほこの心なり。

昔、趙の藺相如と云ヒし者は、下賤の人なりしかども、賢によりて趙王にめしつかはれて、天下を行ひき。

趙王の使として趙璧と云フ玉を秦国へつかはされしに、かの璧を十五城にかへんと秦王云ヒし故に、相如に〈持〉たしめてつかはすに、余の臣下議して云く、「これほどの宝を相如ほどのいやしき人にもたせてつかはす事、国に人なきに似たり。余臣の耻なり。後代のそしりなるべし。路にしてこノ相如を殺して玉を奪ヒ取れ。」と議しけるを、時の人、相如にかたりて、「こノ使を辞して命を守るべし。」と云ヒければ、

相如云ク、「某甲敢て辞すべからず。相如、王の使として玉をもち秦に向カフニ、倭臣のためにころさると後代に聞エん、我ガために悦ビなり。我ガ身は死すとも、賢ノ名はのこるべし。」と云ツて、終に向カヒぬ。

余臣この言を聞イて、「我等この人をうちえん事有ルべからず。」とて留まりぬ。

相如、終に秦王にまみえて、璧を秦王に与へしに、秦王十五城を与へまじき気色を見て、はかり事を以て

今日仏道を学ぶ人はぜひ知っておいてもらいたい。自他のため、仏道のために、間違いなく役に立つことならば、身を顧みず、言いもし、行ないもすべきである。反対に、そうした効果のないことは、言ったり行なったりしてはならない。年とった先輩の僧が物を言ったり行なったりしている時には、後輩の僧は口をさしはさんではいけない。これは仏が制止せられたところである。よくよくこれをおかさないように。

自分の身を顧みず道を思うことは、俗人でもやはりこうした気持がある。

昔、趙の藺相如と言った人は、身分のいやしい人であったが、思慮のすぐれた人だったので、趙王に召し使われて、後には天下の政治をとり行なった。

ある時、趙王の使いとして、趙璧という玉を持って秦の国へつかわされた。それは、秦王がこの趙璧を、秦の十五の都市と交換しようと言ったので、相如に持たせてやったのである。その時、他の臣下が相談して、「これほどの重宝を相如のような賤しい者に持たせてやるのは、趙に人物がないようである。ほかの臣下の恥である。後世の人がそしるであろう。途中で相如を殺して玉を奪い取れ。」と相談していた。それをその時聞いた人が相如に告げて、「この使いを断わって命を守るべきです。」と言った。

すると、相如は、「わたくしはどうしてもやめるわけにはいきません。なぜなら、この相如が王の使いとして玉を持って秦の国に向

秦王に語ツて云ク、「そノ玉、きず有り。我レ是レを示さん。」と云ツて、玉を乞ヒ得て後相如云く、「王の気色を見るに、十五城を惜シめる気色あり。然れば我が頭この玉をもて銅柱にあててうちわりてん。」と云ツて、怒れる眼を以て王をみて、銅柱のもとによる気色、まことに玉をも犯しつべかりし。

時に秦王云ク、「汝玉をわる事なかれ。十五城与ふべし。相はからはんほど、汝璧をもつべし。」と云ヒしかば、相如ひそかに人をして璧を本国にかへしぬ。

また澠池にして趙王と秦王と共にあそびしに、趙王は琵琶の上手なり。秦王命じて弾ぜしむ。趙王相如にも云ひあはせずして即チ琵琶を弾ぜし時に、相如、命にしたがへる事をいかりて、我レ行きて秦王に簫をふかしめんとて、秦王に告ゲて云ク、「王は簫の上手なり。趙王聞かんとねがふ。王、ふき給フべし。」と云ヒしかば、秦王是レを辞せしかば、

相如云ク、「若シ辞せば王をうつべし。」と云ツて近づく。時に秦の将軍劔を以てちかづきよる。相如これをにらむ。両目のほころびさけにけり。将軍劔をぬかずしてかへりしかば、秦王終に簫を吹くと云へり。

また後ニ、大臣として天下を行ヒし時に、かたはらの大臣我レにかさむ事をそねみて打タんとす。時に相如、所々ににげかくれ、わざと参内の時は参会せず、

かうところを、自国の臣に殺されたと後世に知られるのは、わたくしにとって喜ばしいことです。わたくしの身は死んでも、賢人の名は残るでしょう。」と言って、ついに秦へ向けて出発した。

暗殺をくわだてた他の臣下らは、相如のこの言葉を聞いて、「われわれはこの人を討ち取ることはできまい。」と言って、暗殺をとりやめた。

相如はついに秦に着き、秦王にお目にかかって、玉を秦王に与えた。ところが、秦王に十五の都市を渡さない様子が見えたので、相如は、一計を案じ「その玉にはきずがございます。わたくしがそれをお教えしましょう。」と言って、玉を手に入れた上で、相如は言った。

「あなたの御様子を見ると、十五の都市を惜しんでおられる様子がある。それでは、わたしの頭をこの玉といっしょに銅柱にぶっつけて、打ち割ってしまいますぞ。」こう言って、怒りの眼で王を見ながら、銅柱のもとにさしよった様子は、本気で玉をこわしてしまいそうな勢いがあった。

それで、秦王は、「お前、玉を割るではない。十五の都市は与えよう。その手配をする間、玉はお前が持っているがよい。」と言った。そこで、相如はひそかに人をやって、玉を本国の趙にかえしてしまった。

また河南の澠池という所で、趙王と秦王とが会盟して音楽の遊びをしたことがあった。趙王は琵琶の名手だった。それで、秦王が無礼にも趙王に命じて琵琶をひかせた。趙王は相如に相談もせず、す

おぢおそれたる気色なり。

時に相如が家人[二四]、「かの大臣を打タん事、やすき事なり。何の故にかおぢかくれ給ふ。」

相如云ク、「我れ彼れをおづるにあらず。我れ目をもて秦の(将)軍をも退け、秦の玉をも奪ヒき。彼ノ大臣打ツべき事、云フにもたらず。然れども、軍をおこし、つはものをあつむる事、敵国のためなり。今、左右の大将として国を守る、若シ[二五]二人中をたがひて軍を興さば、一人死せば隣国の一方かけぬる事をよろこびて、軍を興すべし。故に二人ともに全くして国を守ランと思ふによツて、かれと軍を興さず。」ト。

彼の大臣、この言をかへり[二六]聞イて耻ヂて来リ[二七]拝して、二人和シテ[二八]国を治む。

相如、身を忘れ道を存ズる事是ノごとシ。今仏道を存ぜん事も、かの相如が心のごとくなるべし。「若シ[二九]みち有りては死すとも、み(ち)なうしていくる事なかれ。」と云フなり。

注

一　名義抄、「複・返・覆」にこの訓あり。「諸善友、斯の文を三復して自利利他同じく正覚を成ぜよ」(禅苑清規亀鏡文)。

ぐに琵琶をひいた。その時相如は、趙王が秦王の言うなりになったことを怒って、それでは自分は行って秦王に簫を吹かせようというわけで、秦王に告げて、「あなたは簫の名手でいらっしゃいます。趙王がお聞きになりたいそうでございます。どうぞお吹きください。」と言った。秦王がこれを断わったので、相如は、「もしお断わりになるなら、あなたの命をいただきますぞ。」と言って、近づいて行った。秦の将軍も剣を持って相如に迫った。相如がこれをにらみつけると相如のまなじりがぱっと裂けた。将軍はその勢いに恐れ、剣を抜かずに引き返したので、秦王はついに簫を吹いたという。

また後に、相如が趙の大臣として、天下の政治をとっていた時に、同僚の大臣は、相如が自分より勢いの強くなる事をねたんで、相如を討とうとした。その時相如は方々逃げかくれ、宮中に行かなければならない時は顔を合わせないようにして、おじ恐れている様子であった。

その時、相如の家臣がたずねた。「あの大臣を討ち取るのはたやすい事でございます。どういうわけでそんなにおじ恐れて逃げかくれなさいますか。」

相如が言った。「わたしはあの大臣をこわがっているのではない。わたしはかつて秦の将軍をも一にらみで退け、秦王に取られた玉もまんまと奪い返した。あの大臣を討ち取るぐらいは言うにも足りない。しかし、軍を起し兵を集めるのは敵国と戦うためである。わたしは今彼と左右の大将としてこの国を守る任にある。もし二人が仲たがいして軍をおこしたら、どっちか一人が死ぬであろう。すると、

隣国は、二人のうち一人が欠けたことを喜んで、軍をおこして攻めて来るに違いない。だから、二人そろって、わが国を守ろうと思うから、それであの大臣と事をおこすようなことはしないのだ。」

相手の大臣はこの相如の言葉を人づてに聞いて、自分の考えを恥じ、相如のもとに来て謝罪の拝をし、二人相和して国を治めた。

相如が自分の身を顧みず道を守ったことはこのとおりである。今、心に仏道を忘れない事も、あの相如の心のようにあるべきである。「道を守って死のうとも、道無くして生きていてはならない。」とも言われる。

二 ここは中国をさす。

三 自分自身。

四 「建仁寺に始めて入りし時」を、明全の弟子として正式に建仁寺に入った時と見れば、「余残有りしほど」は同時代となる。また、栄西入滅前とすれば「僧正の余残有りしほど」と「今年今月」と、三段階の説明となる。

五 身に行なうこと、口に言うこと、心に思うこと。この三つで一切の生活活動が尽くされる。

六 栄西禅師。遁世者として僧正となったことについては、「遁世の身ながら、僧正になり給ひける事は、遁世の人をば非人とて、言ふかひなく名僧の思ひゐたる故に、仏法のためと思ひ給ひて、名聞にはあらず、遁世の光を消さじとなり。」と、沙石集の著者が述べている。

七 「ヨザン」(日葡辞書)。なごり。

八 臘(﨟)は出家受戒後の年数。僧は階級なく、ただ受戒後の年数によって前後の順序とする。法﨟の若いこと。

九 相如は戦国時代趙の名将。この話は史記巻八十一、廉頗、藺相如列伝に出る。

一〇 才智がすぐれ、思慮に富んでいること。

一一 恵文王。姓は嬴、字は何。武霊王の子。

一二 趙の恵文王が楚の和氏から得た璧。卞和の璧とも言う。

一三 秦の昭王。

一四 この相如暗殺の話は史記には見えない。

一五 はじめ趙の宦者令繆賢の舎人であった。秦から和氏の璧を乞われた時、はじめてその賢により推挙された。

一六 「わ国」(わが国)「わ産」(わが国の産物)等、「わ」

は「わが」の意であるから、ここは自国の臣。

一七 河南省河南府にある。いわゆる澠池の会。前段のように璧を完うして帰り、国の体面を保った功により、相如は陪臣から一躍上大夫となった。しかし、秦の勢いは強く、趙は石城を抜かれ、二万の兵をうしなった。この敗色濃い時の秦からの誘いである。相如は王に従い、将軍廉頗はもし三十日にして王の一行が帰らなかったら太子を立てて趙の存続をはかる手はずを決め、悲愴な決意で出かけた。

一八 絃楽器の一種。史記では瑟。

一九 管楽器の一種。史記では盆缻。缻は酒を入れる土器、たたいて音を出す。

二〇 両方のまなじり。史記「目を張つて之れを叱す」。

二一 澠池の会の功により、上卿となる。

二二 廉頗。攻城野戦の功ある自分をさしおき、相如は口舌の労により自分の上に位することを不満に思った。

二三 かさ高くなる。他をしのぐ勢いとなる。「もつての外の過分なり、頼朝にかさみて見ゆ」（源平盛衰記、頼朝、義経中違）。

二四 武家時代の家の子、郎党。武家の臣下。

二五 史記では「両虎ともに闘はば倶には生きじ」と言ったという。

二六 伝え聞く。まわりまわって耳に入る。

二七 史記によれば「肉袒（衣をはだぬぎ肉をあらわす）荊を負う（荊は罪人を打つむち）」とある。自らを罪人になぞらえてその罪を謝したのである。

二八　いわゆる刎頸の交わりの故事がこれである。

二九　「寧ろ法有つて死すとも、法無くして生きざれ」（禅苑清規護戒章）。

校訂

1　原文、義。

2　原文、玉。

3　原文、惜ヌル。

4　原文、アテの右に朱で々とあり。

5　原文、王。ここは、史記にも、「秦王、その璧を破らんことを恐れ、乃ち辞謝して曰く」とあり、問題は玉に集中していたようであるから玉とする。

6　原文、滛池。

7　原文、「フカセシメン」セは余分と見て削る。

8　原文、シテは朱書。

八の㈡　善悪と云ふ事定め難し

また云ク、善悪と云フ事定メ難し。世間の綾羅錦繡をきたるをよしと云ヒ、麁布糞掃をわるしと云フ、仏法には是レをよしとし清シとす。金銀錦綾をわ（る）しとし穢れたりとす。是ノごとク一切の事にわたりて皆然り。

また言われた。

善悪ということは定められないものである。世間の人は、あや・うすもの・にしき・ぬいとりなどの高価な着物を着たのをよいと言い、そまつな布、人が捨てた布で作った着物を悪いと言う。しかし、仏法ではかえってこの麁布、糞掃の衣をよいとし、清いとする。そして、金銀綾錦をよくないとし、けがれているとする。このように、

予がごときは聊か韵声をととのへ、文字をかきまぐる[1]を、俗人等は尋常なる事に云フも有り。またある人は、出家学道の身として是ノごとキ事知れると、そしる人も有り。何れを定メて善ととり悪とすつべきぞ。文に云ク、「ほめて白品の中に有るを善と云ふ。そしりて黒品の中におくを悪と云フ。」ト。

また云ク、「苦をうくべきを悪と云ヒ、楽を招くべきを善と云フ。」ト。

是ノごとク子細に分別して、真実の善をとツて行じ、真実の悪を見てすつべきなり。僧は清浄の中より来れば、物も人の欲をうご（か）すまじき物をもてよしとし、きよしとするなり。

注

一　インドでは、不用の布を屋外にすてた。これを糞掃と言い、人の欲心が少しも残っていないので仏教では清浄の衣とし、これをよく洗い、つづり合わせて袈裟を作る。「いはゆる十種の糞掃、一者牛嚼衣、二者鼠噛衣、三者火焼衣、四者月水衣、五者産婦衣、六者神廟衣、七者塚間衣、八者求願衣、九者王職衣、十者往還衣。この十種を、ことに清浄の衣財とせるなり。世俗には抛捨す、仏道にはもちゐる。」(正法眼蔵伝衣巻)。

二　白は善、黒は悪をあらわす。善の類、悪の類。

すべてのことについて同様である。

わたしなども、多少は平仄をととのえて詩も作り、まがりなりにも文字を書くのだが、在家の人などは、それをたいしたものだと言うものもある。またある人は、出家学道の者がそのようなたしなみがあると言ってそしる人もある。どちらをはたして善いとして取り、悪いとして捨てたらよかろうか。

経文には、「人がほめて清らかな仲間に入れることを善と言う。人がそしって汚れた仲間に入れることを悪と言う。」と言っている。また、「果報として苦を受けるべきことを悪と言い、楽を招くべきことを善と言う。」とも言っている。

このように、綿密に判断して、真実の善を取って行ない、真実の悪を見て捨てればよいのである。僧は欲を離れた世界から来たものであるから、人の欲を動かさないような物をよいとし、清いとするのである。

三　自性清浄の本体は人間の執着を一切離れている。

校訂

1　原文、マゲル。

八の㈢　世間の人多分云く

また云ク、世間の人多分云ク、「学道の志あれども世のすゑなり、人くだれり。我ガ根劣なり。[一]如法の修行に堪ふベカラず。ただ随分にやすきにつきて結縁を思ひ、[二]他生に開悟を期すべし。」と。

今ハ云ク、この言フ事は、全ク非なり。仏法に正像[三]末を立ツ事、しばらく一途の方便なり。真実の教道はしかあらず。依行せん、皆うべきなり。在世の比丘必ズしも皆勝レたるにあらず。不可思議に希有に浅増し[五]き心〈根〉、下根なるもあり。仏、種々の戒法等[四]をわけ給フ事、皆わるき衆生、下根のためなり。人々皆仏法の機なり[六]。非器なりと思ふ事なかれ。依行せば必ず得べキなり。

既に心あれば善悪を分別しつべし。手足あり、合掌行歩にかけたる事あるべからず。仏法を行ずるに品[七]をえらぶべきにあらず。[八]人界の生は皆是レ器量なり。余の畜生等の性[九]にては叶フベカラず。学道の人はただ明

また言われた。

世間の人は多く、「仏道を学ぼうという気持はあるのですが、世は末世であり、人も質が劣っております。わたくしも生まれつきが劣っております。かた通りの修行には堪えられそうもありません。ただ分に応じて、たやすくできることをして仏縁を結び、こんど生まれ代わった時に悟りの開けるのを待ちましょう。」と言う。

しかし、今言いたいのは、この言葉は全く間違いである。仏教で正法・像法・末法の三時期を立てるのは、一応のてだてにすぎない。真実の仏教仏道はそうではない。教えに従って行ずれば皆悟りが得られるのである。釈尊在世の時の僧が必ずしも皆すぐれていたのではない。思いもつかない、世にもまれな、あきれるばかりひどい気持や素質をもった人もあった。釈尊が種々の戒法を分けて立てられたのは、みな、よくない人々や、生まれつきの劣った人々のためなのである。人はめいめい皆仏法を聞いて悟る資格がある。その資格がないと思ってはならない。教えにしたがって行ずれば、必ず得ることができるのである。

日を期する事なかれ。今日今時ばかり、仏に随ツて行じゆくべきなり。

注

一　仏の教えのとおり修行すること。

二　次に生まれかわった世以後の生。今生に対する。

三　およそ仏が出世されると、その仏について、法の行なわれ方が三時代に分かれる。第一は、正法。仏滅後なお教と行と証（さとり）のある時代。第二像法。教と行のみあって証のない時代。第三末法。教のみあって行もなく証もない時代。仏により正像末の年数の差がある。釈迦牟尼仏についても諸経において一定していないが、わが中古以来の仏教者の間では正法五百年、像法千年、末法万年という説が多く信じられていた。これに対し、「しばらく一途の方便なり」と言ったのは道元禅師の卓見である。

四　四分律、十誦律等、後世律蔵に集大成された戒律は、最初は一定の組織はなく、比丘に不都合な行ないがあった時、それに対して仏が制止せられたことがもとでできた。一々の戒律にあげてある因縁を見ると、さまざまの悪行があったことが知られる。

五　条項を分けて説く。

六　教法に激発されて活動する心の働き。人めいめいに備わっている。

心があるからには、善悪を分別することができよう。手足があるからには合掌したり歩いたりに不足はあるまい。仏法を行ずるには、それだけで充分で、素質の上下は問題ではない。人間界に生をうけたものは皆仏道を行ずる資格を具えている。他の畜生などの生命ではできないのである。仏道を学ぶ人は、ただ明日をあてにしてはならない。今日ただ今だけと思って、仏の教えにしたがって行じてゆくべきである。

七　等級。部類分け。
八　地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、縁覚、菩薩、仏の十界のうち、人間界。
九　生命。

九　俗人の云く、城を傾くる事は

示ニ云ク、俗人の云ク、「城を傾クる事は、うちに[一]ささやき事出来るによる。」

また云ク、「家に両言有ル時は針をもかふ事なし。家に両言無キ時は金をもかふべし。」ト。

俗人なほ家をもち城を守るに同心ならでは終に亡ぶと云へり。況ンヤ出家人は、一師にして[二]水乳の和合せるがごとし。また[三]六和敬の法あり。各々[四]寮々を構へて[五]心身を隔て、心々に学道の用心する事なかれ。一船に乗ツて海を渡るがごとし。心を同ジクし、威儀を同ジくし、互ヒに非をあげ是をとりて、同ジく学道すべきなり。是レ仏（在）世より行じ来れる儀式なり。

注

一　ひそひそ話。内緒ごと。
二　「堂中の衆は、乳水のごとく和合して、たがひに道業を一興すべし」（正法眼蔵重雲堂式）。「たとひ澆風の叢

教えて言われた。

世俗の人も「城が傾くのは、味方の中に内証事が出てくることによる。」と言う。

また、「一家のうちで意見が対立している時は、針を買うこともできない。一家のうちで意見の対立がない時には、黄金でも買うことができる。」とも言う。

世俗の人でさえ、家を保ち、城を守るのに、心を一つにしないと、ついには亡びてしまうと言っている。ましてや、出家の仏弟子は、一人の師匠のもとで、水と乳がとけ合ったようなものである。また、六和敬という法もある。めいめいが個人の部屋を持って、心もからだも互いにへだてて、各自思い思いに仏道を学ぼうと心がけてはならない。一師のもとでの学道は、一つ船に乗って海を渡るようなものである。心を同じくし、行・住・坐・臥を同じくし、互いに悪いところは注意しあい、よいところはとりあって、同じように仏道を学ぶべきである。これが仏在世の当時から行なってきたやり方である。

林なりとも、なほこれ薝蔔の林なるべし。……また合水の乳のごとし。」（正法眼蔵出家功徳）。

三 僧は和合を義とする。和合に理和合と事和合の二種がある。そのうち事和合すなわち形にあらわしてする和合の六つの形式。「瓔珞経」に「いはゆる六和敬は、三業、同戒、同見、同行」とあり、身、口、意の三業を同じくし、戒法を同じくし、空等の見解を同じくし、行道を同じくすること。

四 「典座教訓」に「前資勧旧独寮等幾僧」とあり、法臘の高い人や特に役のある僧は独立の建物に住んでいたことが知られる。

五 身心は一つであるから、身が隔たると心が隔たる。

十　楊岐山の会禅師

示ニ云ク、楊岐山の会禅師、住持の時、寺院旧損してわづらひ有りし時に、知事申して云ク、「修理有るべし。」

会云ク、「堂閣やぶれたりとも露地樹下には勝れたるべし。一方やぶれてもらば一方のもらぬ所に居して坐禅すべし。堂宇造作によッて僧衆得悟スベク者、金玉をもてもつくるべし。悟りは居所の善悪によらず。ただ坐禅の功の多少に有るべし。」ト。

翌日の上堂に云ク、「[二]楊岐はじめて住するに屋壁

教えて言われた。

楊岐山の方会禅師が住持人となった時、寺の建物は古くなって破損し、困っていた。

その時、寺の事務に当たる役僧が言った。「修繕していただきとう存じます。」

方会禅師が言った。「建物がこわれていても、露天や木の下にいるよりはよいであろう。一方がこわれて雨もりがしたら、もう一方のもらない所にいて坐禅をしたらよい。お堂の立派さで僧たちが悟りを得られるのなら、黄金珠玉を使ってでもつくろう。しかし、悟りは住まいのよしあしによるものではない。ただ、坐禅をしたかし

踈（おろそか）なり。満床にことごとくちらす雪の珍珠。くびを縮却してそらに嗟嘘（さきょ）[三]す。かへッて思ふ古人の樹下に居せし事を。」ト。

ただ仏道のみにあらず。政道も是ノごとシ。太宗[四]は〈居家〉[九]をつくらず。

竜牙[六]云ク、「学道は先づすべからく貧を学スベし。貧を学して貧なる後に道まさにしたし。」と云へり。昔釈尊より今に至ルまで、真実学道の人、一人も宝に饒（ゆたか）なりとは、聞カず見ざる処（ところ）なり。

注

一 楊岐方会（九九二—一〇四九）。石霜楚円の法嗣。俗姓は冷氏。袁州宜春の人。この話は、「正法眼蔵行持巻」「知事清規」にも見える。「五祖法演禅師いはく、師翁（楊岐方会）はじめて楊岐に住せしとき、老屋敗椽して風雨の敝はなはだし。ときに冬暮なり。殿堂ことごとく旧損せり。そのなかに僧堂ことにやぶれ、……衆僧やすく坐禅することなし。」（行持巻）。

二 「行持巻」「知事清規」に乗せる偈は、「楊岐、乍住屋壁疎、満床尽撒雪珍珠、縮却項暗嗟嘘、翻憶古人樹下居」。「乍住」は住したばかり。

三 なげいてため息をつくこと。

四 唐の太宗。

ないかにかかっている。」

方会禅師は、翌日の説法に言われた。「楊岐の道場に住持人となってみると、建物の壁はすきまだらけで、床一面に雪の珠玉をちらしている。坐禅の僧は寒さのためくびをちぢめ、ひそかにため息をついている。これによって、樹下に坐して修行した古人のあとが、ひとしおしのばれる。」と。

しかしこれは、仏道ばかりのことではない。政道でもこの通りである。唐の太宗は住まいを新造せず、古い御殿に住まれた。

竜牙居遁（りゅうげこどん）禅師は、「仏道を学ぶには、まずぜひとも、貧乏を学ばなければならない。貧乏を学んでほんとうに貧乏してはじめて、真に道に親しくなる。」と言われた。

昔、釈尊が王位を捨てて乞食せられてから今に至るまで、真実に仏道を学んだ人は、一人として、財宝に豊かであったということは、聞いたことも見たこともないのである。

五　日常住む家。「居屋ばかりをかまへて、はかばかしく屋をつくるに及ばず」（方丈記）。
六　竜牙居遁（八三五―九二三）。洞山良价の法嗣。俗姓は郭氏、撫州南城の人。翠微・香厳・徳山に歴参す。得法の後、竜牙山妙済禅院に住す。

校訂
1　原文、大宗。
2　原文、食。

十一　ある客僧の云く、近代の遁世の、法

一日ある客僧[一]の云ク、「近代の遁世の法、各々時料[二]等の事、かまへて、後、わづらひなきやうに支度す。これ小事[1]なりと云へども学道の資縁なり。かけぬれば事の違乱出来ル。今コノ[三]御様を承り及ブに、一切その支度無く、ただ天運にまかすト。こと実ならば、後時の違乱あらん。如何。」

示ニ云ク、事皆先証あり。敢て[四]私曲を存するにあらず。西天東地の仏祖皆是ノごとシ。私に活計を至サん、尽クル期有ルベカラず。またいかにすべしとも定相なし。この様は、仏祖皆行じ来れるところ、私なし。若し事闕如し絶食せば、その時こそ退[五]しもし、方便を

ある日、さる客僧が問うて言った。

「近ごろの遁世のやり方は、めいめいに寒暑を防ぐ用意などして、できるだけ、あとで困らないように準備をします。これらのことは、小さいことではございますが、仏道を学ぶ助けとなるものでございます。これが不足しますと、修行に乱れもおこってまいります。ところが、今、こちら様のご様子を承りますと、いっさいそのような準備はなく、ただ天運にまかせていらっしゃるとのことでございます。それがほんとうなら、あとあと、うまくいかないことも起こりましょう。いかがなもので。」

道元禅師が教えて言われた。

それについては、みな昔の人の実例がある。わたしがあえて自分

もめぐらさめ。かねて思ふべきにあらず。

注

一 修行のために旅をしている僧。また、招かれた僧。
二 季節によって必要な品物。
三 興聖寺での道元禅師の日常。
四 個人的であることが同時に正しくないことになる。「監院の職は為公是れ務む。いはゆる為公とは、私曲無きなり」(知事清規)。
五 一たん至った位から退転すること。

校訂

1 原文、少事。

十二 伝へ聞きき、実否を知らざれども

示ニ云ク、伝へ聞きき、実否[一]を知らざれども、故持[二]明院の中納言入道、ある時秘蔵[三]の太刀をぬすまれたりけるに、さぶらひ[四]の中に犯人[五]有りけるを、余のさぶらひ沙汰[六]し出シてまゐらせ[七]たりしに、入道の云ク、「是レは我が〈太刀〉にあらず、ひが事なり。」とてかへしたり。

だけの考えでやっているのではない。インド、中国の仏祖はみな、この通りである。自分のはからいで暮らしを立てようとしたらきりがあるまい。またどの程度ならいいというきまった標準もない。わたしの今のやり方は、仏祖がみな実行してこられたところで、わたしの個人的な考えではない。もしその日の生活に事欠き、いよいよ食べ物もなくなったら、その時には、この勇ましいやり方を引っこめもし、対策も講じましょう。前もって考えるべき事ではありません。

教えて言われた。

伝え聞いたことで、ほんとうかどうかは知らないが、なくなった持明院の中納言入道(一条基家)が、あるとき秘蔵していた太刀を盗まれたことがあった。ところが仕えている武士の中に、その犯人があったので、他の武士が詮議して、太刀をお返し申し上げた。ところが中納言入道は、「これはわたしの太刀ではない。間違いだ。」と

決定その太刀なれども、さぶらひの耻辱を思ウてかへされたりと、人皆是レを知りけれども、そノ時は無為にて過ギし。故に子孫も繁昌せり。俗なほ心あるは是ノごとシ。況ンや出家人ハ、必ずこノ心有ルべし。

出家人は財物なければ智恵功徳をもて宝とす。他の無道心なるひが事なんどを直に面にあらはし、非におと(す)べからず。方便を以てかれ腹立つまじきやうに云フべきなり。「暴悪なるはそノ法久しからず。」と云フ。たとひ法をもて呵嘖すれども、あらき言なるは法も久しからざるなり。小人と云フは、いささか人のあらき言に即ち腹立して、耻辱を思フなり。大人はしかあらず。たとひ打ツたりとも報を思はず。国に小人多し。つつしまずはあるべからず。

と言って、その太刀を、お返しになった。

まぎれもなく盗まれたその太刀ではあったのだが、盗んだ武士の恥になることを思いやって、そのまま返されたのだと、ほかの人もみな知ってはいたが、その時は何事もなくてすんだ。だから、その家は子孫までも繁昌している。世俗の人でもなお、心ある人はこの通りである。ましてや出家人は、必ずこうした心を持たなくてはならない。

出家人はもともと財物は持たないのであるから、知恵や功徳を宝とする。他人の無道心な間違いなどを、すぐさま顔にあらわし、間違いときめつけてはならない。てだてをめぐらして、相手が腹を立てないように言ってやるべきである。「あらくれてわるいと、その法は長続きがしない。」という。よしんば、法にしたがって責めさいなんでも、あらい言葉を使うと、その法も長続きがしないのである。小人というものは、ちょっとした荒い言葉にも、すぐ腹を立て、恥をかかされたと思うのである。大人は、そういうことはない。たとい、打たれても、しかえしなどは考えない。この国には小人が多い。気をつけなくてはならない。

注

一　「ジップ、マコトヤ　イナヤ。コトノ　ジップガ　シレヌ」(日葡辞書)。
二　一条基家（一二〇三—一三〇四）。建仁元年（一二〇一）に出家入道。法名真智、持明院はその号。一条通基の子。
三　「ヒサウ、モノヲ　ヒサウ　スル」(日葡辞書)。
四　公家に侍い仕える者。武家はこの階級から出た。
五　「ボンニン、ヲカス　ヒト」(日葡辞書)。
六　公の処置をとる。ここは詮議する。

七　さし上げる。

校訂

1　原文、少人。

正法眼蔵随聞記　六

一　仏法のためには身命ををしむ事なかれ

一日示ニ云ク、仏法のためには身命ををしむ事なかれ。俗なほみちを思へば、身命をすて親族をかへりみず忠節をつくす。是レを忠臣とも賢者とも云フなり。

昔、漢の高祖、隣国と軍を興す。時ニ有る臣下の母、敵国に有りき。官軍も二心有ラんかと疑ヒき。高祖も若シ母を思ウて敵国へ〈去〉る事もや有らんずらん、若シ〈去〉るならば軍やぶるべしとあやぶむ。

ここに母も、我ガ子若シ我レ故に二心もや有ランずらんと思ウて、いましめて云ク、「我れによりて我ガ国に来ル事なかれ。我レによりて軍の忠をゆるくする事なかれ。我レ若シ〈生〉きたらば汝若シ二心もこそ有ラん。」と云ツて、剣に身をなげてうせしかば、その子、もとより二心なかりしかば、その軍に忠節を至す志深かりけると云フ。

ある日、教えて言われた。

仏法のためには身命を惜しんではならない。世俗の人でも、道を思う時には、身命をすて、親族をかえりみず、忠節を尽くす。このような人を忠臣とも賢者とも言うのである。

昔、漢の高祖が隣国と戦いを始めた。その時、ある臣下の母が敵国にいた。高祖の軍もこの臣下に二心がありはしないかと疑った。高祖も、彼がもし母を思って敵国につくようなことがありはしないか、もし彼が敵方につけば、戦は敗けるだろうと心配していた。

その時、母も、わが子がもしや自分のために二心を抱きでもしたらと思い、いましめて、「わたしのためにこの国へ来てはいけない。わたしのために軍に対する忠節にゆるみがあってはいけない。もしわたしが生きていたら、お前が、二心を持つかもしれないから。」と言って、剣に身を投げて死んでしまった。その子も、はじめから二心はなかったので、いっそうその軍に忠節を尽くす志が深かった

況ンや衲子の仏道を行ずる、必ず二心なき時、真に仏道にかなふべし。仏道には、慈悲智恵もとよりそなはれる人もあり。たとひ無けれども、学すればうるなり。ただ身心を倶に放下して、三宝の海に廻向して、仏法の教へに任せて私曲を存ずる事なかれ。

漢ノ高祖の時、ある賢臣の云ク、「政道の理乱は縄の結ほれるを解クがごとし。急にすべからず。能々結び目をみて解クべし。」ト。

仏道も是ノごとシ。能々道理を心得て行ずべきなり。法門をよく心得る人は、必ず道心ある人のよく心得るなり。いかに利智聡明なる人も、無道心にして吾我をも離レず、名利をも捨テ得ざル人は、道者ともならず、正理をも心得ぬなり。

注

一 前漢第一世。姓は劉氏、名は邦、字は季。沛の人。秦王子嬰を降し、秦を滅ぼしたのち、楚の項羽を垓下に破って天下を統一した（在位、前二〇二—一九五）。

二 三宝は仏法僧。三宝の世界の広大無辺なことを海にたとえた。

三 おのれの修めた功徳を他にめぐらしむけること。

四 文字はおさまるとみだれるとであるが、主意はおさまること。

という。

ましてや、禅僧が仏道を行ずるには、絶対に二心がない時に、ほんとうに仏道にかなうであろう。仏道修行には、慈悲や智恵がはじめからそなわっている人もある。しかし、たとえそなわっていなくても、修行すれば身につけることができる。ただ身心をともになげすてて、仏法僧の願海にふりむけ、仏法の教えに任せて、自分だけの間違った考えを持ってはならない。

漢の高祖の時、ある賢臣が、「政道の乱れを正すのは、縄がからみ合って固くなったのを解くようなものでございます。急いではいけません。よくよく結び目を見て解くべきでございます。」と言った。

仏道もこの通りである。よくよく道理を理解して行ずべきである。教えの説いているところをよく理解する人は、必ず道心ある人で、それでこそよく理解するのである。どんなに智恵・分別があって頭のよい人でも、道心がなくて、自分を捨てることができず、名誉や利益もすてることのできない人は、仏道者ともならず、ほんとうの道理も理解することができないのである。

五　原文、結（ムスボ）ヲレル。musuforu→musuboru（f の脱落）。「春くれば柳のいともとけにけりむすぼほれたるわが心かな」（拾遺集）。

六　諸仏の教法。

七　利智は智恵が明らかで、是非の分別がするどいこと。聡明は耳さとく、目のよく見えること。

八　釈氏要覧に智度論を引いて言う。「得道の者を名づけて道人となす。余の出家者の未得道の者、また道人と名づく。道者またこの説に同じ。」

二　学道の人は吾我のために仏法を学する事なかれ

示ニ云ク、学道の人は吾我のために仏法を学する事なかれ。ただ仏法のために仏法を学すべきなり。その故実は、我ガ身心を一物ものこさず放下して、仏法の大海に廻向（ゑかう）すべきなり。そノ後は一切の是非を管ずる事無く、我が心を存ずる事なく、成し難き事なりとも仏法につかはれて強ひて是レをなし、我が心になしたき事なりとも、仏法の道理になすべからざる事ならば放下すべきなり。あなかしこ、仏道修行の功をもて代りに善果を得んと思ふ事なかれ。ただ一たび仏道に廻向しつる上は、二たび自己をかへりみず、仏法のおきてに任せて行じゆきて、私曲を存ずる事なかれ。先証

教えて言われた。

仏道を学ぶ人は自分のために仏法を学んではならない。ただ仏法のために仏法を学ぶべきである。その秘訣は、自分の身も心も一物のこさずすて去って、それを仏法の大海の中にさし向けるべきである。その後は、一切の是非にかかわることなく、自分の心をもつことなく、できないことでも、仏法に使われて無理にもこれをやり、自分としてはやりたいと思うことでも、仏法の道理にてらして、してはならないことならばすて去るべきである。決して決して、仏道修行の功によって、代わりによい果報を得ようと思ってはならない。ただひとたび仏道にすべてをさし向けた上は、二度と自分をかえりみることなく、仏法のきまりどおりに行じていって、自分だけの考

皆是ノごとシ。心にねがひて[二]もとむる事無ければ即ち大安楽なり。

世間の人にまじはらず、己(おのれ)が家ばかりにて生長したる人は、心のままにふるまひ、おのれが心を先(さき)として人目を知ラず、人の心をかねざる人、必ずあしきなり。学道の用心も是ノごとシ。衆にまじはり、師に随ひて我見を立せず、心をあらため行けば、たやすく道者となるなり。

学道は先づすべからく貧を学すべし。なほ利をすてて一切へつらふ事なく、万事なげすつれば、必ずよき僧となるなり。大宋によき僧と人にも知られたる人は、皆(みな)[三]貧道なり。衣服もやつれ[四]、諸縁[五]ともしきなり。

往日(そのかみ)天童山の書記[六]道如(だうにょ)[七]上座と云ヒし人は、官人宰相[八]の子なり(し)かども、親族にもむつびず、世利をもむさぼらざりしかば、衣服のやつれ、破壊(はゑ)したる、目もあてられざりしかども、道徳人に知ラれて、大寺の書記ともなりしなり。

予、かの人に問ウテ云ク、「和尚は官人の子息、富貴の孫なり。何ぞ身に近づくるもの皆下品(げぼん)[九]ニして貧道なる。」

[一〇]これ答ヘテ云ク、「僧[一一]となれればなり。」

えをもってはならない。むかしからの実例はすべてこの通りである。心にねがい求めることがなければ、とりもなおさず大安楽である。

他人の中に出たことがなく、自分の家だけで成長した人は、思いのままにふるまって、自分の気持を第一として、人から見てどうであるか、人がどう思うかを考えない。このような人は必ずよくない。学道の心がけもこれと同じである。同行の僧衆と生活を共にし、師にしたがって自分というものを考えず、心を新しくしていけば、容易に道者となるのである。

仏道を学ぶには、まず第一に貧を学ばなくてはならない。その上に利益を捨てて、一切人にへつらわず、万事をなげすてれば、必ず立派な僧となる。大宋国でも、立派な僧と人にも知られた人は、皆貧しい人であった。衣服も見すぼらしく、その他の生活用具も乏しかった。

以前、わたしが天童山にいた時、かの寺の書記で道如上座といった人は、大臣の子であったが、親族ともつきあわず、世俗の利益をもむさぼらなかったから、衣服が見すぼらしく、破れていて、目もあてられなかった。それでも仏道の徳は人に知られて、大寺院の書記にもなったのである。

わたしはこの人にたずねたことがあった。「あなたは官人の子息であり、富貴の家柄のかたです。どうして身のまわりのものが皆そまつで、貧乏していらっしゃるのですか。」

道如上座が答えて言った。「僧となったからだ。」

注

一　禁止の意を強めることば。「あなかしこ、わきざしたち、いづ方をもみつぎ給ふな。」（徒然草）。

二　望みを持つ間は人の心は休まらない。

三　「貧に二種有り。一には財貧、二には功徳法貧。」（大智度論）。ここは財貧。

四　「やつる」とは、その人が普通にあるべき姿よりもみすぼらしいこと。「ただ舎人二人めしつぎとして、いとやつれ給へれど」（竹取物語）。

五　いろいろの生活を助ける物資。

六　寺院の公私の文書をつかさどる役。古清規には書状という。六頭首（ちょうしゅ）の一。

七　上席に坐する人の意。禅院の先輩で、法位の上の人に対する敬称。

八　天子をたすけて国政を行なう最高の官職。わが国平安時代には、参議の異名。

九　品（ほん）は等級をあらわす。

一〇　人称代名詞。

一一　下の「れ」は完了の助動詞「り」の已然形。

校訂

1　原文、穴賢（アナカシコ）。

三　俗人の云く財はよく身を害す

一日示ニ云ク、俗人[一]の云ク、「財はよく身を害す。昔も之レ有リ、今も之レ有リ。」と。

言フココろは、昔一人の俗人あり。一人の美女をもてり。威勢ある人これを〈請〉ふ。かの夫、是レを惜シむ。終に軍を興してかこめり。彼のいへ既にうばひとられんとする時、かの夫（云く）、「なんぢがために命をうしなふべし。」

かの女云く、「我れ汝がために命をうしなはん。」と云ツて、高楼よりおちて死ニぬ。

そノ後、かの夫うちもらされて、命遁れし時いひし言なり。

昔、賢人、州吏[二]として国を行なふ。時に息男あり、父を拝してさる時、一疋の縑[三]をあたふ。

息の云く、「君、高亮[四]なり。こノ縑いづくよりか得たる。」

父云く、「俸禄のあまり有り。」

息かへり皇帝に参ラす[1]。（帝）はなはだその賢を感ず。

かの息男申さく、「父なほ名をかくす。我レはなほ名をあらはす。父の賢すぐれたり。」ト。

こノ心は、一疋の縑は是レ少分なれど賢人は私用せ

ある日、教えて言われた。

世俗の人が、「財宝は身をそこなうものである。昔もそういうことがあったし、今も現にある。」と言った。

この意味は、次のようなことがあったのである。昔一人の俗人があった。一人の美女をもっていた。権勢ある人がこの女をよこせと言って来たが、かの夫は惜しんで聞き入れなかった。相手はとうとう兵をくり出して彼の家を囲んだ。この家もすでに奪い取られそうになった時、かの夫が女にむかって言った。「おれはお前のために命を失うことになった。」

女は、「わたくしはあなたのために命を捨てましょう。」と言って、高楼から身を投げて死んでしまった。はじめにあげた言葉は、その後、かの夫が、討手をのがれて生きのびた時に、言った言葉である。

昔、ある賢人が、州の長官として国政を行なっていた。時にその息子がいて、父を見舞って都に帰る時、父は一疋の縑の絹を与えた。

息子が言った。「あなたは節操高いかたです。この絹はどこから手に入れられたのですか。」

父が言った。「俸禄の余りがあったのだ。」

息子は都に帰り、皇帝のもとにこの絹を奉った。皇帝はふかく父の賢人であることに心を動かされた。

しかし息子は言った。「父はなお名をかくしておりますのに、わ

ざる事、聞えたり。また、まことの賢人はなほ賢の名をかくして、俸禄なれば使用するよしを云フ。

俗人なほ然り。学道の衲子、私を存ずる事なかれ。またまことの道を好まば、道者の名をかくすべきなり。

また云ク、仙人[五]ありき。有る人問ウテ云く、「何ンがして仙をえん。」仙の云ク、「仙を得んと思はば道をこのむべし。」ト。然あれば、学人仏祖を得んと思はば、すべからく祖道を好むべし。

注

一　この話は、晋書第三十三巻石崇伝に見える。
二　州録事。中国を九州に分かった一つの地方の長官。
三　「縑 音兼、絹。カトリ」(類聚名義抄)。かとりは細糸で、目を細かく織った絹織物。貢物に用いられる。
四　節を持すること高く明らかなこと。「節を秉りて高亮、身を正して朝に在り」(羊祜、開府を譲る表)。
五　仙は山に入って不老不死の術を得た人、またその術。

校訂

1　原文、参ズ。今、意味を考えて改めた。

たくしは名をあらわしました。父の賢はわたくしよりすぐれております。」と。

この話の意味は、一疋の絹はわずかなものであるが、賢人は決して公のものを私に用いないことがわかる。しかし真の賢人は、自分が賢人であるようなことは言わないで、俸禄だから使用するとだけ言ったというのである。

俗人でさえこうである。仏道を学ぶ修行僧は、私心があってはならない。また、真実の道を好むならば、仏道者という名をもかくすべきである。

また、禅師が言われた。

仙人があった。

ある人が彼にたずねて言った。「どうしたら仙人になることができますか。」

仙人が言った。「仙人になろうと思うなら、何をさしおいても仙人の道をすてずに行ないなさい。」と。

こういうわけだから、仏道を学ぶ人が仏祖の道を得ようと思うなら、何はおいても仏祖の道をすてずに行なうべきである。

四　昔、国皇有り

示ニ云ク、昔、国皇有り。国ヲをさめて後、諸臣下に告グ。「我レよく国を治む。賢なり。」
諸臣皆云ク、「帝は甚ダよくをさむ。」
一リノ臣ありて云ク、「帝、賢ならず。」
帝云ク、「故如何。」
臣云ク、「国を打チ取リし時、帝の弟にあたへずして息にあたふ。」
帝の心にかなはずしておひたてられて後、また一リノ臣に問フ、「朕よく心帝なりや。」
臣云ク、「甚ダよく仁なり。」
帝云ク、「ソノ故如何。」
云ク、「仁君には忠臣有り、忠臣は直言あるなり。前ノ臣、はなはだ直言なり。是れ忠臣なり。仁君にあらずはえじ。」
即ち帝、コレを感じて前ノ臣をめしかへされぬ。
また云ク、秦の始皇の時、太子、花園をひろげんとす。
臣の云ク、「尤モナリ。もし花園ひろうして鳥類多くは、鳥類をもて隣国の軍をふせいつべし。」
よツてそノ事とどまりぬ。

教えて言われた。
昔、国王があった。国を治めて後、諸臣に告げて言った。「わしはよく国を治めた。賢明な天子である。」
諸臣は皆言った。「帝はたいへんよく国をお治めなされました。」
ところが一人の臣があって言った。「帝は賢明な天子ではございません。」
帝が言った。「どういう理由か。」
その臣が言った。「あなた様は天下を手中におさめられた時、領土を弟様に与えられず、皇子たちにお与えになりました。」
これが帝の気に入らなかった。で、この臣は追放されてしまった。
その後、また一人の臣に帝がたずねた。
「朕は帝として立派な心を持っているかな。」
問われた臣が言った。「まことに仁徳あつくいらっしゃいます。」
帝が言う。「どういう理由によるか。」
で、その臣が言った。「仁君には忠臣があるものでございます。忠臣は直言をするものでございます。以前追放された臣は、思い切った直言を申し上げました。つまりかの者は忠臣でございます。このような直言の臣は、君が仁君でなければ得られないでございましょう。」
帝はこの言葉に感じて、直ちに先に追放した臣を召し返された。

また宮殿をつくり、〈階〉をぬらんとす。臣の云ク、「もツとも然るべし。〈階〉をぬりたらば敵はとどまらん。」よツてその事もとどまりぬ。

云フ心は、儒教の心是ノごとシ。たくみに言を以て悪事をとどめ、善事をすすめしなり。衲子の人を化する善巧としてその心あるべし。

注

一　正しいことをはばからず言うこと、またその言葉。

二　始皇帝（——前二一〇）。秦第一代の帝。姓は嬴、名は政、荘襄王の子。春秋以来分裂していた趙・韓・魏・楚・斉・燕の六国を滅ぼして天下を統一し、周代の封建制を改め、集権的、官僚主義的封建制を確立した。北方匈奴の侵入を防ぐため万里の長城を築いた。天子の力は絶大であるから、これに直言するには勇気や知恵がいる。

三　「ふせぎつべし」の音便。fusegitubesi→fuseitubesi.（gの脱落）

四　はしは、きざはし。宮殿にのぼる階段。宮殿の入口であるから、そこで敵がとどまれば好都合である。

五　孔子を中心とする学派の教え。

六　善事のために、じょうずに手だてをめぐらすこと。善巧方便とも言う。

校訂

また、禅師は言われた。

秦の始皇帝の時、太子が花園を拡張しようとした。臣が言った。「まことに結構でございます。花園が広く、鳥類が多くなりましたら、鳥類でもって隣国の軍勢を防ぐことができましょう。」

この言葉によって、花園拡張のことは中止になった。

また、宮殿を造営し、きざはしを塗ろうとした。臣が言った。「たいへん結構でございます。きざはしを塗っておきましたら、敵がそこから先へは攻め入らないでございましょう。」

それで、このことも中止となった。

この話の意味は、儒教の教えるところは、このようなものである。言葉を上手に使って、悪事をやめさせ、善事を勧めたのである。禅僧が人を教化する手だてとしても、この心得がなくてはならない。

1 原文、モチ。チはテの古体であったか。

五 僧問うて云く、智者の無道心なると

一日僧問ウテ云ク、「智者の無道心なると、無智の有道心なると、始終[一]如何。」

示ニ云ク、無智の道心、始終退する事多し。[二]智恵有る人、無道心なれどもつひに道心をおこすなり。当世現証[三]是レ多し。しかあれば、先づ道心の有無をいはず、学道勤労すべきなり。

また云ク、内外[四]の書籍に、まづしうして居所なく、あるイは滄浪[五]の水にうかび、あるイは首陽[六]の山にかくれ、あるイは樹下露地に端坐し、あるイは塚間[七]深山[八]に草庵する人あり。また富貴にして財多ク、朱漆をぬり、金玉をみがき、宮殿等をつくるもあり。倶に典籍にのせたりと云へども、褒めて(注)後代をすすむるには皆貧にして無財なるを以て本とす。そしりて来業[九]をいましむるには、財多キをば驕奢[一〇]のものと云ツてそしるなり。

注

一 結局のところ。

ある日、僧が質問した。「知恵があって道心がない人と、知恵はなくても道心がある人と、結局どちらがものになりましょうか。」

教えて言われた。

知恵のない者の道心は、結局はあともどりする場合が多い。知恵のある人は、はじめ道心がなくても、しまいには、道心をおこすものである。今の世にも、その実例はたくさんある。それだから、まず、道心のあるなしは問題にせず、仏道を学ぶことに力をつくすべきである。

また言われた。

仏教や儒教その他の書物を見ると、貧しくて住むべき家もなく、あるいは、屈原のように滄浪の水にうかんでさすらい、あるいは、伯夷・叔斉のように首陽山にかくれてわらびを食べ、あるいは、木の下や屋根もない地面に坐禅し、あるいは、墓の間や、深山に草庵を結んで過ごした人もある。また、富貴で財宝が多く、住む家には朱や漆を塗り、金玉をみがき立てて、宮殿等を造った人もある。いずれもともに書物にのっているけれども、ほめたたえて、後の世の人をはげますには、皆、貧しくて財宝のないことをもととしている。そしって、未来にむくいを引きおこす行為をやめさせるには、財宝

を多く持っているのを、驕吝の者と言って非難するのである。

二　すでに至り得た地位を保ち続けられず、後退する。

三　現在見られる証拠。

四　内典、外典。仏教と、それ以外の教えの教典。

五　楚の屈原の故事。屈原、滄浪については一四二・一四三ページ注一・三参照。

六　伯夷叔斉の故事。伯夷叔斉は周の人、孤竹君の二子。伯夷は、父が弟の叔斉に国を譲る気持があるのを察し、父の没後、国を弟に譲って国をのがれ、弟の叔斉もまた受けずに国を出た。のち、周の武王が殷を討とうとした時、兄弟ともにいさめたがきかれなかったので、周の穀物を食べるのを恥じ、首陽山にかくれ、わらびを食べてついに餓死したという。(史記伯夷列伝)。

七　塚間は人を葬った所。墓場。樹下、露地、塚間の端坐、みな十二頭陀行（ずだぎょう）の内にある。摩訶迦葉尊者はその代表であろう。

八　大梅山の法常禅師、潙山霊祐禅師、香厳智閑禅師等、正法眼蔵行持巻に多くの例が見える。

九　未来の果報を招くべき業。業は、結果をひきおこす行為。

一〇　ぜいたく。おごり。

校訂

1　原文、塚の左に墨でツカとあり。

六　学人、人の施をうけて悦ぶ事なかれ

示ニ云ク、学人、人の施[一]をうけて悦ぶ事なかれ。またうけざる事なかれ。

故僧正[二]云ク、「人の供養を得て悦ぶは制[三]にたがふ。悦ばざるは檀那[四]の心にたがふ。」ト。

是の故実は、我レに供養するにあらず、三宝に供ずるなり。故に彼の返リ事に云フべし。「コノ供養、三宝定メて納受あるらん。申シけがす[五]。」と云フべきなり。

注

一　布施。
二　栄西禅師。
三　仏制。
四　dānapati. 施主。
五　伝えることを謙遜して言う。

教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、人から布施をいただいてよろこんではいけない。また辞退してもいけない。

なくなった栄西禅師は、「人の供養を受けてよろこぶのは仏制にそむく。かといって、よろこばなければ施主の気持にそむく。」と言われた。

これに対する心得はこうである。この施物は、自分に供養されたのではない、三宝に供養されたのである。そこで、施主に対する返事には、「この御供養は、三宝もさだめし御受納あることでございましょう。はばかりながらお取り次ぎ申します。」と、こう言うべきなのである。

七　ふるく云く、君子の力牛に勝れたり

示ニ云ク、ふるく云ク、「君子の力牛に勝れたり。しかあれども、牛とあらそはず。」ト。

今の学人、我レ智恵を学人にすぐれて存ずとも、人と諍論[一]を好む事なかれ。また悪口をもて人を云ヒ、怒目をもて人を見る事なかれ。

今の世の人、多く財をあたへ恩をほどこせども、瞋恚[二]を現じ、悪口を以て謗言[三]すれば必ず逆心[四]を起すなり。

教えて言われた。

昔の言葉に、「君子の力は牛よりすぐれている。しかし、君子は牛と力争いなどしない。」とある。

今、仏道を学ぶ人も、自分が、仲間の学人に比べてすぐれた知恵を持っていても、議論や言い争いを好んではいけない。また、口ぎたなく人をののしり、おこった目つきで人を見てはいけない。

今の世の人はたいてい、財宝をたくさん与え、恩を施してあっても、怒りを顔にあらわし、口ぎたない言葉で非難すると、必ず手むかう心をおこすのである。

注

一　我を張って、互いに言いあらそうこと。「戯論、諍論の処、多く諸の煩悩を起こす。智者はまさに遠離すべし、まさに百由旬を去るべし。」(宝積経)。

二　いかりの心。貪、癡とともに三毒と言われる。

三　「ハウゲン、ソシルコトバ」(日葡辞書)。

四　反逆する気持。

八　真浄の文和尚

示ニ云ク、真浄の文和尚、衆に示シテ云ク、「我れ昔雪峰とちぎりを結びて学道せし時、雪峰同学と法門を論じて、衆寮に高声に諍談す。つひにたがひに悪口に及ぶ。よツて喧嘩す。事散じて、峰、真浄にかたりて云ク、『我れ汝と同心同学なり。契約あさからず。何が故に我れ人とあらそふに口入レせざル。』浄、揖して恐惶せるのみなり。

そノ後、かれも一方ノ善知識たり、我レも今住持たり。そのかみおもへらく、法門論談すら畢竟じて無用なり。況ンや諍論は定メテ僻事なるべし。我れ争ツて何の用ぞと思ひしかば、無言にして止りぬ。」ト。

今の学人も門徒も、その跡を思ふべし。学道勤労の志有ラば、時光を惜しンで学すべし。何の暇にか人と諍談すべき。畢竟じて自他ともに無益なり。何ニ況ンや世間の事においては、無益の論をすべからず。

君子の力は牛にもすぐれたり。しかれども牛と相ひ争はず。我れ法を知れり、彼れにすぐれたりと思ふとも、論じて彼を難じ負かすべからず。

若シ真実に学道の人有りて法を問はば、惜シむべからず。ために開示すべし。然れども、なほ其れも三度問はれて一度答ふべし。多言閑語する事なかるべし。この咎は身に有り。是レ我レを諫らるると思ヒしかば、そノ後人と法門を諍論せず。

教えて言われた。

真浄禅師克文和尚が、参学の衆僧に教えて言われた。

「わたしが昔、雪峰道円と親友の約束をして、心を合わせて仏道を学んでいた時、かの雪峰が修行仲間のひとりと、教えについて議論して、衆寮の中で、大声で口論を始めた。しまいには、たがいに相手の悪口を言い合って、けんかになってしまった。事が終わってから、雪峰はわたし（真浄）に向かってさんざ言った。

『わたしとあなたとは心を一つにし、同じく仏法を学んでいる仲である。かたい約束もしてある。どうしてまた、わたしが人と言い争っている時に何とか言ってくれなかったのだ。』

そう言われてわたしは、一言もなく、頭を下げて恐縮するばかりであった。

その後、かれ（雪峰）も一方のすぐれた指導者となった。わたしも今この寺に住持人となった。しかし、あの時わたしは思ったのだ。仏の教えについて議論するのさえ結局は無用のことだ。ましてや口争いなどは、絶対に間違いである。わたしまでがいっしょになって言い争って何になろうと、こう思ったので、何も言わないでおいたのだ。」と。

今日仏道を修業している者も、信者の人も、この克文和尚がなさったところをよく考えてみるように。仏道を学んで骨身を惜しまぬ志があるならば、時を惜しんで学ぶがよい。人と言い争うひまのあろうはずがない。自分にとっても、相手にとっても、結局無益である。ましてや、仏教以外の世間のことについて、無益の議論をして

はならない。

君子の力は、牛よりもすぐれている。しかし君子は牛と力争いなどはしない。自分は法をよく知っている、あの人よりすぐれていると思っても、議論して相手を言い敗かしてはならない。

しかし、もし真実に仏道を学ぼうとする人があって、法をたずねるならば、法を惜しんではならない。その人のために説いて聞かせなさい。しかしながら、なおそれさえ、三度問われて一度答えるほどにするがよい。多くしゃべってむだを言うことのないように。ただしこの欠点は、実はわたしがもっている。それでこの話は、自分をいましめているのだと思ったので、その後、人と教えについての議論をしないのである。

注

一　泐潭克文禅師（一〇二五—一一〇二）。黄竜慧南の法嗣。陝府の人、俗姓は鄭氏。初め大潙山に学び、のち慧南に得法。報寧、帰宗、泐潭に歴住。真浄禅師の号を賜う。

二　雪峰道円。真浄禅師克文と同じく黄竜慧南の法嗣である。ともに積翠に学び、のち雪峰山に住した（嘉泰普灯録による）。

三　もとの意味は、やかましく言い立てる。

四　「口入る」は物事に口出しする、また間にはいってとりもちをする。名詞形は「クチイレ」または「クニュー」。原本左側に訓読のしるしの傍線がある。

五　両手を胸の前で組み合わせてする礼法。会釈。

六　まちがいなく。

七　信者。「先師門徒の中、此の邪見を起こす類有り」（永平室中聞書）。

校訂

1　流布本以来、雪峰は雲峰（文悦、九九二—一〇六三）の誤りとされてきたが、雪峰道円と見れば改める必要は認められない。慶安本も雪峰。

2　原文、オシラク。

3　原文、必竟。

4　テの濁点、原文のまま。

九　古人多くは云く光陰虚しく度る事なかれ

示ニ云ク、古人多クは云ク、「光陰虚シク度る事なかれ。」と。あるイは云ク、「時光徒に過ゴス事なかれ。」と。学道の人、すべからく寸陰を惜シむべし。露命消えやすし、時光すみやかに移る。暫く存ずる間に余事を管ずる事無く、ただすべからく道を学スベシ。

今の時の人、あるイは父母の恩すてがたしと云ヒ、あるイは主君の命そむきがたしと云ヒ、あるイは妻子の情愛離れがたしと云ヒ、あるイは眷属等の活命我れを存じがたしと云ヒ、あるイハ世人謗ツつべしと云ヒ、あるイハ貧シウして道具調へがたしと云ヒ、あるイハ、非器にして学道にたへじと云フ。是ノごとキ等の世情をめぐらして、主君父母をもはなれず、妻子眷属をもすてず、世情にしたがひ、財色を貪るほどに、一生虚シく過ゴシて、まさしく命の尽くる時にあたツて後悔すべし。

すべからく閑に坐して道理を案じて、終にうち立タん道を思ひ定むべし。主君父母も我レに悟りを与ふべきにあらず。恩愛妻子も我がくるしみをすくふべからず。財宝も死をすくはず。世人終に我レをたすくる事

教えて言われた。

古人は多く、「光陰をむだに過ごしてはならない。」と言っている。あるいは、「時光をなすことなく過ごしてはならない。」と言っている。

仏道を学ぶ者は、必ずわずかの時間も惜しまなくてはならない。露のようにはかない命は消えやすい、時はいち早く移ってゆく。生きているわずかな間に、ほかのことにかかわらず、ただ仏道を学ぶべきである。

今の世の人は、あるいは父母の恩を思えばすてて出家もできないと言い、あるいは主君の言いつけにはそむけないと言い、あるいは妻子の情愛は離れられないと言い、あるいは一家一族の生活を考えれば自分のことばかり言ってもいられないと言い、あるいは出家などしたら世間の人が悪く言うだろうと言い、あるいは貧乏で、出家するにも道具がそろわないと言い、あるいは力がないから仏道を学ぶにはたえられないなどと言って、出家学道をしない。こうしたさまざまな世間的な分別を働かせて、主君や父母をも離れず、妻子や一族をも捨てず、世間的な分別にしたがって、財をむさぼり色情をむさぼっているうちに、一生はむだに過ぎて、いざ命が終わろうという時に臨んで、後悔するであろう。

なし。非器なりと云ツて修せずは、何の劫にか得道せん。ただすべからク万事を放下して、一向に学道すべし。後時を存ずる事なかるべし。

注

一 「謹んで参玄の人に白す、光陰虚しく度ることなかれ。」(参同契)。光は日、陰は月。日月、時日。
二 「露命を無常のかぜにまかすることなかれ」(正法眼蔵出家功徳巻)。
三 財貨と女色と。
四 うち立つは出発する。いでたつ。ついにはゆくべき死出の旅。
五 親子、妻子等の間の愛情。
六 「おほよそ無常たちまちに至るときは、国王大臣親暱従僕妻子珍宝たすくるなし。ただひとり黄泉におもむくのみなり」(正法眼蔵出家功徳巻)。

校訂

1 「ト」は朱書。

十　学道はすべからく吾我をはなるべし

ぜひとも静かに坐して道理を考え、最後にいで立つ死出の旅路の覚悟をするがよい。主君や父母も自分に悟りを与えることはできない。父母妻子の愛情も自分の苦しみを救うことはできない。財宝も死をのがれさせてはくれない。世間の人は、結局、自分を助けてくれることはない。力がないと言って修行しなかったら、いつになったら仏道を得ることができようか。未来永劫その時はない。ただ、必ず万事をなげすてて、ひたすらに仏道を学ぶべきである。いずれ後にと考えてはならない。

一日示ニ云ク、学道はすべからく吾我をはなるべし。たとひ千経万論[一]を学し得たりとも、我執をはなれずはつひに魔坑[二]におつ。古人云ク、[三]「仏法の身心なくは、焉ンぞ仏となり祖とならん。」ト。

我をはなると云フは、我が身心をすてて、我がために仏法を学する事無きなり。ただ道のために学すべし。

身心を仏法に放下しつれば、くるしく愁ふれども[四]、仏法にしたがつて行じゆくなり。乞食をせば人是レをわるし[五]と思[六]はんずるなんど、是ノごとク思ふほどに、何にも仏法に入り得ざるなり。世情[七]の見をすべて忘レて、ただ道理に任セて学道すべきなり。我ガ身の器量をかへりみ、仏法にもかなふまじきなんど思フも、我執をもてる故なり。人目をかへりみ、人情をはばかる、即チ我執の本なり。ただすべからく仏法を学すべし、世情に随ふ事なかれ。

ある日、教えて言われた。

仏道を学ぶには、必ず自分というものを離れなくてはいけない。よしんば千万の経論を学び得ても、自分に対する執着がとれなければ、しまいには悪魔の世界に落ちてしまう。古人も、「自分というものをすてて仏法の身心となるのでなければ、どうして仏となり祖となることができようか。」と言っている。

我を離れるというのは、自分の身心をすてて、自分のために仏法を学ぶことがないのである。ただただ道のために仏道を学ばなくてはならない。

すでに身心を仏法の中になげすてた上は、苦しくつらいことがあっても、仏法にしたがって修行してゆくのである。托鉢をしたら人がみっともないと思うだろうなどと、こんな考えを持っているから、どうしても仏法に入ることができないのである。世間的な分別でする考えをすべて忘れて、ただ道理にしたがって学道すべきである。自分の力量を考えてみて、とても仏法にもかなうまいなどと思うのも、我執があるからである。人からどう見られるかを気にし、世間の人の批判に遠慮するのは、とりもなおさず我執のもとである。ただ必ず仏法を学ぶべきである。世間的な分別にしたがってはならない。

注

一　非常に多くの経論。
二　悪魔のすむ世界。「魔に四種あり、一に煩悩魔、二に五衆魔（色、受、想、行、識による迷い）、三に死魔、四に天子魔（世間の楽に執着し、所得ありとおもって邪

見をおこし、一切賢聖の涅槃の道法を憎み嫉む)。」「魔は是れ天竺の語、秦（中国）には能奪命者といふ。ただ死魔のみ実によく奪命す。余はまたよく奪命の因縁をなしまた智慧の命を奪ふ。是の故に殺者と名づく」（正法眼蔵発菩提心巻）。

三 自己を捨てないと、それはわたくしの身心で、仏法の身心にならないから。

四 つらく思う。

五 ここは「わろし」と同じ意。みっともない。

六 「んずる」は「ん、と、する」のつまった形。

七 世間的な善悪による情量分別。

十一 弉問うて云く、叢林の勤学の行履と云ふは

一日弉問ウテ云ク、「叢林の勤学の行履と云フは如何。」

示ニ云ク、只管打坐なり。あるイは閣上[一]、あるイハ楼下にして常坐をいとなむ。人に交ハり物語をせず、聾者のごとく唖者のごとくにして常に独坐を好むなり。

注

一 閣は二階立ての建物、楼は何階にもなったたかどの。

ある日、わたし（懐弉）がおたずねした。

修行の道場で、骨身おしまず仏道を学ぶ行ないとは、どのようなことでございますか。

禅師が教えて言われた。

ひたすら坐禅することである。あるいは閣上あるいは楼下において、常に坐禅をするのである。人といっしょにいておしゃべりをせず、つんぼのように、おしのようになって、常にひとり坐禅を捨てないのである。

寺院の建物の適当な所をえらんで坐禅すること。「雲堂公界の坐禅のほか、あるひは閣上、あるひは屏処をもとめて、独子ゆきて穏便のところに坐禅す。」（正法眼蔵行持巻下、天童如浄禅師の章）。

二 「其中、未住院よりこのかた、郷人とものがたりせず、光陰をしきによりてなり。」（同行持巻下、天童如浄禅師の章）。

校訂

1 原本、座。

2 原本、瘂者。

十二　泉大道の云く

一日参ノ次に示ニ云ク、泉大道[一]の云ク、「風に向ツて坐し、日に向ツて眠る。時の人の錦被たるにまされり。」ト。

このことば、古人の語なれどもすこし疑ひ有り。時の人と云フは、世間貪利の人を云フか。若シ然ラば、敵対[二]尤もくだれり。何ぞ云フにたらん。若シ学道の人を云フか。然ラば何ぞ錦を被ると云ハん。この心をさぐるに、なほ被を重くする心有りやと聞ゆ。聖人[三]はしからず。金玉と瓦礫とひとしくす。執する事なし。故に釈迦如来、牧牛女[四]が乳の粥を得ても食し、馬麦[五]を得

ある日、修行僧があつまって法を聞いていた時、教えて言われた。大道谷泉が、「風に向かって坐り、日に向かって眠る。このわたしの日常は、時の人が錦の着物を着かざったのにもまさる。」と言っている。

この言葉は、古人の言葉ではあるが、少し疑いがある。時の人というのは世間で利を食っている人を言うのか。もし、そうなら、そんな人を相手とすることは実に低級である。言うにも足りない。もし仏道を学ぶ人を言うのか。それならばどうして錦を着ると言うことがあろうか。こうしたことを言う気持を察するに、やはり、衣服を重視する気持があるのではないかと思われる。さとりを得た人は

ても食す。何(いづれ)も(ひ)としくす。

[六]法に軽重なし。[七]情愛ニ浅深(せんじん)あり。今の世に金玉を重しとて人の与フれども取ラず、木石をば軽しとて是レを愛するも有り。思フべし、金玉も本来土中より得たり、木石も大地より得たり。何ぞ一つをば重しとて取ラず、一ツをば軽しとて愛せん。こノ心を案ずるに、重キを得て執すべき心(こころ)有らんか。軽キを得て愛する心有らば、とがひとしかるべし。是れ学人の用心すべき事なり。

注

一　南嶽芭蕉庵主大道谷泉。汾陽善昭の法嗣。

二　相手として張り合う。

三　さとりを得た人。

四　釈尊は六年苦行の後、尼連禅河に浴し、ブッダガヤに行く途中、ウルビーラ村長の娘スジャタのたてまつった乳粥を受けた。

五　八三ページ注四一参照。

六　「経（維摩経）に曰く、若しよく食(じき)において等(とう)なれば、諸法もまた等なり」（赴粥飯法）。

七　分別判断と好ききらいの執着。

こんなではない。金玉と、瓦や石ころとを等しく見る。執着する事がない。だから釈迦如来は、牛飼い女のさしあげた乳の粥も召しあがり、馬の飼いばにする麦の供養を受けても召しあがった。いずれも差別なく見られた。

仏法においては物に軽重はない。ただ人間の分別判断と、好ききらいに深い浅いがある。今の世に、金玉は貴重なものとして人が与えても受け取らず、木石は軽いものとして喜んでだいじにする者もある。しかし考えてもみよ、金玉も本来土の中から得たものである、木石も大地から得たものである。なんで一方を重いとして取らず、一方を軽いとして愛することがあろうか。この気持を察するに、貴重なものを持つと執着する気持があるのではなかろうか。軽小なものでも、手に入れて愛着する心があるなら、罪は同じであろう。これは仏道を学ぶ人が心すべき事である。

十三　先師全和尚入宋せんとせし時

示ニ云ク、先師全和尚入宋せんとせし時、本師叡山の明融阿闍梨、重病に沈み、すでに死なんとす。そノ時この師云ク、「我レ既に老病に沈み、死去せんとする事近キにあり。汝一人老病をたすけて、冥路をとぶらふべし。今度の入唐暫く止ツて、死去の後そノ本意をとげらるべし。」ト。

時に先師、弟子及ビ同朋等をあつめて商議して云ク、「我レ幼少の時双親の家を出でて後、こノ師の覆育を蒙ツて今成長せり。世間養育の恩尤も重し。また出世ノ法門の事、大小権実ノ教文、因果をわきまへ是非を知ツて、等輩にもこえ、名誉を得たる事も、また仏法の道理を知ツて、今入宋求法の志をおこすまでも、彼の恩にあらずと云フ事無し。然るに今年すでに窮老して、重病の床に臥し給へり。余命存じがたし。後会期すべきにあらず。よツてあながちに是レをとどむ。彼の命もそむき難し。今身命を顧ミず入宋求法するも、菩薩の大悲利生のためなり。彼の命をそむき、宋土にゆかん道理如何。各々存知をのべらるべし。」

時に人々皆云ク、「今年の入宋止るべし。老病已に窮れり、死去定なり。今年ばかり止ツて、明年の入唐

教えて言われた。

なくなった師匠の明全和尚が宋に渡ろうとされた時、その育ての師匠である比叡山の明融阿闍梨が大病にかかり、危篤におちいっておられた。

その時、明融阿闍梨が、「わたしはもう老病で、息を引き取るのもまもないことである。お前一人にだけは、どうかこの老病をみとり、死出の旅路を見送ってもらいたい。今度の入宋はしばらく中止して、わたしが死んでから、入宋の望みを果たしてもらいたい。」と言われた。

その時明全和尚は、自分の弟子や、兄弟弟子たちを集めて相談して言われた。

「わたしは幼少の時、両親の家を出て以来、この師匠に育てられ、おかげで今これまでに成長した。世間的にいっても育ての恩は特に重い。また出家者の立場からいっても、生滅の世間を出離する仏の教えの事や、大乗・小乗、権教・実教などの教えの文言を習い、因果の理を心得、是非の区別をわきまえ、同輩にもすぐれ、名誉を得た事も、また仏法の道理をわきまえて、今こうして宋に渡って法を求めようという志をおこすに至るまでも、一つとしてこの師匠の御恩でないものはない。しかるに師匠は今年、全く老い衰え、重病の床に臥しておられる。余命があるとは考えられない。今別れては二

尤モ然ルベシ。彼の命をもそむかず、重恩をも忘れず、今一年半年の入唐ノ遅々、何のさまたげか有ラん。師弟の本意も相違せず、入宋の本意も如意なるべし。」

時に我れ、末臘にて云ク、「仏法の悟り、今はさて有りなんとおぼしめさるる義ならば、御とどまり然るべし。」

先師の云ク、「然ンなり。仏法修行のみち、是レほどにてさても有りなんと存ず。始終是ノごとクならば、さりとも出離、などかと存ず。」

我レ云く、「その義ならば御とどまり有るべし。」

時に先師、皆の議をはりて云ク、「各々の議定、皆とどまるべき道理なり。我が所存は然らず。今度止りたりとも、決定死ぬべき人ならば、其レによりて命のぶべからず。また、我レとどまりて看病外護せんによりて、苦痛もやむべからず。また最後に我があつかひ勧めんによりて決定生死を離ルベキ道理にもなし。ただ一旦命に随ひたるうれしさばかりか。是レによりて出離得道のために一切無用なり。誤ツて求法の志を〈障〉へて、罪業の因縁となるべし。然ルに、若シ入唐求法の志を遂ゲて、一分の悟りをもひらきたらば、一人有漏の迷情にこそたがふとも、多人得道の縁となるべし。功徳若シ勝れば、また師の恩報じつべし。たとひまた渡海の間に死ニて本意をとげずとも、求法の

度とお目にはかかれまい。だから師匠も、無理にもわたしをひきとめようとなさる。師匠の仰せにそむくこともできない。がまた、今こうして身命をかえりみず宋に渡って法を求めるのも、菩薩の大きな慈悲からであり、衆生のためになろうとしてである。師匠の仰せにそむいて宋国に出かける道理はどうであるか。めいめい思うところを述べられよ。」

その時、人々はみな言った。「今年の入宋は御中止なさるように。老病もここまで来ては、先が見えております。今年だけこの国にとどまって、来年になって入宋なさるのがいちばんよろしいでしょう。師匠の仰せにもそむかず、重恩も忘れないことになります。あと一年や半年入宋がおくれても、何のさわりがありましょう。師弟の情誼にももとらず、入宋の望みもかなうわけです。」

その時、わたしは末席にあって言った。「仏法の悟りが、もうこのままでよいのだとお思いでしたら、おとどまりなさるのがよろしゅうございましょう。」

明全和尚が言われた。「そうである。仏法修行の道は、ここまでくれば、このままでもよかろうと思う。一生このようにして修行してゆけば、迷いを離れることも、よもやできないことはあるまいと思う。」

わたしは言った。「そういうことでございましたら、おとどまりなさいませ。」

かくて明全和尚は、皆の論じ終わるのを待って言われた。

「ごめいめいの評議では、いずれも行かない道理と承りました。し

志をもて死せば、玄奘三蔵のあとをも思ふべし。一人のためにうしなひやすき時を空シくすぐさん事、仏意にかなふべからず。よツて今度の入唐、一向に思ひきりをはりぬ。」とて、終に入宋しき。

先師にとりて真実の道心と存ぜし事、是等の心なり。然れば、今の学人も、あるイは父母のため、あるイは師匠のために、無益の事を行じて、徒ラに時を失ひ、勝れたる道を指おきて、光陰をすぐす事なかれ。

時に弉公云ク、真実求法のためには、有漏の父母師僧の障縁をすつべき道理、然るべし。但し、父母恩愛等のかたをば一向に捨離すとも、また菩薩の行を存ぜん時、自利をさしおきて、利他をさきとすべきか。然ルに老病にしてまた他人のたすくべきもなく、我レ一人その人にあたりたるを、自ラの修行を思ツて彼をたすけずは、菩薩の行にそむくか。また大士の善行を嫌フべカラず。縁に対し事に随ツて、仏法を存ズべきか。若シ是レらの道理によらば、またゆいてたすくべきか、如何。

示ニ云ク、利他の行も自行の道も、劣なるをすてて、すぐれたるを取るは大士の善行なり。老病をたすけんとて水菽の孝を至すは、今生暫時の妄愛迷情の悦びばかりなり。背きて無為の道を学せんは、たとひ遺恨はありとも、出世の縁となるべし。是レを思へ、是レを

かし、わたしの考えはちがう。このたび行くのをやめても、どの道死ぬにきまった人ならば、それによって命がのびるわけでもない。また、わたしがとどまって看病して、ごめんどうを見たからといって、苦痛がなくなるはずもない。また、臨終にわたしがお世話をして、冥路のさわりのないようにとお勧めしたところで、それで必ず生死輪廻の苦が離れられるという道理でもない。ただ師匠としては、一応、自分のいうことをきいてくれたといって喜ぶまでのことではなかろうか。こういうわけで、今、入宋を思いとどまるのは、迷いを離れ道を得るためには一切無用である。そんなことをすれば、師匠としてはまちがって弟子の求法の志をさまたげ、罪業の因縁となるであろう。反対に、もしわたしが入宋求法の志を遂げ、わたしなりの悟りをも開いたならば、師匠一人の煩悩による迷いの情にはそむいても、多くの人が道を得る縁となるであろう。もしその功徳がすぐれていたら、これによってもまた師匠に恩返しができるであろう。よしんばまた、海を渡る間に死んで、入宋求法の望みが遂げられなかったとしても、(求法の志をいだいて死ぬのであるから、仏家のほとりに生じ、来生にまた志を遂げることもできよう。)玄奘三蔵のあの雄大な旅行のあとも考えてみるがよい。一人の人のために、とりにがしやすい時をむだに過ごすことは、仏の心にかなうはずがない。これによって、今度の入宋のことはきっぱり決意がつきましたぞ。」こう言って、ついに入宋された。

わたしが、なき師、明全和尚について、真実道心とお見受けしたのは、こうしたお気持である。だから、今の仏道を学ぶ人も、ある

思へ。

注

一　道元禅師が先師と言われるのは、如浄禅師とこの明全師のみである。

二　仏樹坊明全（一一八四―一二二五）。姓は蘇我氏、伊賀の人。横川首楞厳院の僧。椙井房明融阿闍梨の弟子であったが、建仁寺栄西禅師に参じてその上足となる。「弁道話」に「ちなみに建仁の全公をみる、あひしたがふ霜華すみやかに九廻をへたり。いささか臨済の家風をきく。全公は祖師西和尚の上足として、ひとり無上の仏法を正伝せり、あへて余輩のならぶべきにあらず。」とあり、道元禅師は明全を師として九年を経たことがわかる。明全は貞応二年（一二二三）、この段に見られる事情の中で道元禅師とともに入宋し、天童山景徳寺に入り、無際了派、ひきつづき長翁如浄禅師のもとに修行したが、宝慶元年（一二二五）五月二十五日、天童山了然寮において四十二歳で入寂した。入宋前、後高倉太上皇に菩薩戒をお授けしたこともある。

三　元来は釈迦牟尼仏を言うが、また得度の後、僧として必要な作法・知識・学問などを授けてくれる師匠をもいう。「舎利相伝記」（道元禅師が、宋から明全師の遺骨から得た舎利を持ち帰られた事情を記した書）によると、明全は「八歳にして親をはなれ、叡山にのぼりてすむ、

いは父母のため、あるいは師匠のために、益のないことをして、むだに時を失い、何にもすぐれた仏道をさしおいて、時日を過ごしてはならない。

その時、わたし（懐奘）は言った。

真実法を求めるためには、迷いの世界にある父母・師僧についての絆を捨てるべき道理は、まことにその通りでございましょう。ただ、父母の恩愛の情については全く捨て去るにいたしましても、また菩薩の慈悲の行を思いますと、自利をさしおいて利他を先とすべきではございますまいか。それだのに、老病でほかに看病のし手もなく、自分ひとりが看病すべき人であるのに、自分の修行のことを考えて、瀕死の病人の世話をしないのは、菩薩の行にそむくのではございますまいか。また、菩薩は善行に差別をしないものでございます。縁につれ、事にしたがって、その時々に仏法を考えるべきでもございましょうか。もし、こうした道理によれば、また行って看病すべきでございましょうか、いかがでございましょう。

道元禅師が教えて言われた。

他のためにする行も、自分の修行の道も、劣った方をすてて、すぐれた方をとるのが菩薩の善行である。親の老病をたすけようと、貧しい食事の世話などをするのは、生きているこの世でのわずかな間、迷った心で喜ぶにすぎない。それにそむいて、無為の仏道を学んだら、たとえ死に目に会えない恨みは残っても、長く迷いを離れる縁となるであろう。これをよく考えよ、よく考えよ。

十六にして僧となり、(具足戒を受けたこと)学海をわたりゆく」とあるから、その幼時から明融阿闍梨に育てられたことがわかる。

四 acārya の音訳語。軌範、正行と訳す。弟子の行為を正し、他の軌範となるべき高僧の敬称。わが国では、天台、真言の高徳の僧が朝廷から補せられる僧職の名。

五 明融阿闍梨。

六 外国人のことを長く唐人と称したように、平安時代以来、中国に行くことを一般に入唐と言ったのであろう。

七 相談。話し合い。商は商量の商。はかる。

八 前記「舎利相伝記」によれば、八歳の時からである。

九 天地が万物をおおい育てる意から、父母の恩沢をいう。

一〇 流転の世間を出離すること。

一一 老いをきわめ、天寿をおわらんとしている。

一二 こののち会うこと。

一三 bodhisattva の音訳略語。覚有情、大士等と訳す。仏果を成ぜんがために四弘誓願を発し、六度の行を修して上求菩提下化衆生する人をいう。出家、在家を問わず、仏道を行ずる人をいう。

一四 たしかなこと。「定おこしおるまいか」(狂言記柿山伏)。

一五 思いどおりになる。

一六 僧の順位は、出家以後安居の数の多少によって定まる。この時道元禅師は法臘が若く、末席にあったことをいう。

一七 このままでよかろう。

一八　「しかあるなり」の音便であろう。

一九　戒法を保ち、身口意の非を護るのを内護というに対し、親族や檀那が衣服・飲食を供養するのを外護という。ここは生活のめんどうを見ること。

二〇　漏は煩悩の異名。煩悩具足の迷いのこころ。

二一　唐大慈恩寺の玄奘三蔵（六〇〇—六六四）。洛州緱氏県の人。姓は陳氏。十二歳の時出家し、太宗の貞観三年（六二九）、二十九歳の時単身インドに渡り、ナーランダ寺のシーラバドラ（戒賢論師）について唯識の教えを受け、留まること十年、サンスクリット経典六百五十七部を携えて貞観十九年（六四五）京師に帰り、以後その翻訳に従う。後秦の鳩摩羅什訳を旧訳と言うに対して新訳と称する。三蔵は、経・律・論の三蔵に通達した高僧の意で、敬称。ただし玄奘三蔵は志を遂げたのであるから、「求法の志を以て死せば」の次に「結縁なり」などという言葉があったのではなかろうか。

二二　決意を固めた。

二三　道元禅師と同行した。

二四　「伝光録」の記事と合わせ考えると、この時懐奘禅師の老母が他に世話する人もなく老病に沈んでなくなったらしい。当時興聖寺の制として「一月両度、一出三日」であったが、懐奘禅師は母の臨終の時もこの制を守り、同門の人の勧めにもかかわらず、ついに寺を出られなかった。この段の示教は、老母の死と仏制の間にあって迷わざるを得ない懐奘禅師に対する道元禅師の慈誨である。

二五　おそらく、この母の一人子であったのであろう。

二六　mahāsattva の音訳。菩薩大士と続け、菩薩の尊称、また菩薩をもさす。

二七　明融阿闍梨のことなら、入宋をやめて、「とどまりて」助けるのであるが、当面の問題は老母臨終の場へ「ゆく」こと。

二八　菽は豆類の総称。豆を食い水を飲むような貧しい暮らしの中で親に孝行すること。「水菽の歓」（礼、檀弓(だんぐう)）。

二九　最後の望みにそむく。

三〇　無為は、生滅・因果の営みの全くないところ。すなわち仏（さとり）の道。

校訂

1　原本、義。

2　原本、ドモ。

3　原本、存セン。

十四　世間の人自ら云く

一日示ニ云ク、世間の人、自ラ云ク、「某甲(それがし)師の言(ことば)を聞くに、我が心にかなはず。」ト。我レ思フに、こノ言非なり。そノ心如何(いかん)。若シ聖教(しやうげう)等の道理を心得をし、すべてその心に違する、非なりと思フか。若シ然らば、何ぞ師に問ふ。またひごろの[一]情見をもて云フか。若シ然らば、無始より以来(このかた)[二]の妄念

ある日、教えて言われた。

世間の人は自分から、「わたしは、師の教えを聞いても、どうもわたしの考えと合いません。」と言う。

わたしが思うのに、この言葉は間違っている。そう言うその人の気持を察してみると、聖教などの道理を自分で理解し、もし、その理解したところと合わないのはすべて間違いだと思うのであろうか。

なり。

学道の用心と云フは、我ガ心にたがへども、師の言、聖教のことばならば、暫く其レに随ツて、本の我見をすてて改めゆく、この心、学道の故実なり。

我レ当年傍輩[三]の中に我見を執シて知識をとぶらひし、我ガ心に違スルをば、心得ずと云ツて、我見に相叶フを執シて、一生虚シく仏法を会せざりしを見て、知発[四]して、学道は然ルベカラずと思ウて、師の言に随ツて、暫く道理を得き。そノ後看経[五]の次に、ある経に云ク、「仏法を学せんとおもはば、三世[六]の心を相続する事なかれ。」と。知りぬ、先の念を記持[七]せずして、次第に改めゆくべきなり。

[八]書に云ク、「忠言は耳にさかふ。」と。我がために忠なるべき言、耳に違するなり。違すれども強て随はば、畢竟じて益あるべきなり。

注

一　思量分別の心。これは真実のものではない。情見は、そのはじまりも知れない過去からの無明によっておこる。

二　根拠もなく起る真実でない思い。

三　同一の師につき、あるいは同一の主君に仕える友だち。仲間。

もしそうなら、なんで師にたずねるのか。また、平生の自分の分別判断に基づいて言うのであろうか。もしそうなら、自分の分別判断などというものは、それこそ無限の過去以来の根拠のない思いにすぎない。

仏道を学ぶ心がけというのは、自分の気持に合わなくても、師の言葉、聖教の言葉ならば、一応それにしたがって、もとからの自分の見解をすてて改めていくことである。この心が、仏道を学ぶ秘訣である。

わたしは、修業時代、仲間の中に、自己の見解を固執して、指導者を訪ねても、自分の考えに合わない教えは納得がいかないと言い、自分の見解にかなうものだけにとりついて、一生むだに、仏法がわからずに終わった者があったのを見て、気がついて、仏道を学ぶにはそれではいけないと思って、師の言葉にしたがって、いささか道理をさとった。その後、経を読んでいたおりに、ある経に、「仏法を学ぼうと思ったら、過去・現在・未来と時間的に移りゆく心を同じものとしてひきついではならない。」という言葉があった。それでわかったのだが、以前の思いをいつまでも覚えていず、順々に新しくしてゆくのである。

孔子家語に、「忠言は耳にさからう。」と言っている。自分のために真心をつくして言ってくれる言葉は、耳に気持よくはいってこないのである。聞いていい気持がしなくても、無理にもしたがうと、結局は益があるのである。

四 知ることによって心が開けること。
五 経文を看読すること。声をあげて読む儀式ではない。
六 過去、現在、未来。
七 覚えている。
八 孔子家語。

校訂
1 原文、得テ。

十五 人の心元より善悪なし

一日雑話の次に云ク、人の心元より善悪なし。善悪ハ縁に随ツておこる。仮令、人発心して山林に入る時は、林家はよし、人間[一]はわるしと覚ユ。また退心して山林を出る時は、山林はわるしと覚ゆ。是レ即ち決定して心に定相なくして、縁にひかれてともかくもなるなり。故に善縁にあへばよくなり、悪縁に近づけばわるくなるなり。我が心本よりわるしと思ふことなかれ。ただ善縁に随ふべきなり。

また云ク、人ノ心は決定人の言に随ふと存ず。大論[二]に云ク、「喩へば愚人の手に摩尼[三]を以てるがごとし。是レを見て、『汝下劣なり、自ラ[四]手に物をもてり。』と云フを聞イて思はく、『珠は惜しし、名聞は有

ある日、いろいろの話のおりに言われた。

人の心はもともと善悪はない。善悪は縁にしたがっておこるのである。かりに、人が菩提心をおこして山林に入る時は、山林の住まいはいい、人の世はよくないと思われる。また反対に、気がくじけて山林を出る時は、山林はよくないと思われる。これがとりもなおさず、心には一定の形があるわけではなく、縁にひかれて善くも悪くもなることである。だから、善縁にあえば心も善くなり、悪縁に近づけば心も悪くなるのである。自分の心が元来悪いのだと思ってはならない。ただ善縁にしたがうべきなのである。

また言われた。

人の心は、どこまでも、人の言葉によって左右されるものだと思う。

り。我レは下劣ならじ。』と思ふ。思ひわづらひて、なほ名聞に引カれて、人の言について珠をおいて、後に下人に取らしめんと思ふほどに珠を失フ。」と云フ。

人の心は是ノごとシ。一定此ノ事我がためによしと思へども、人の語につく事あり。されば、何に本よりあしき心なりとも、善知識にしたがひ、良キ人ノ久シク語ルを聞ケば、自然に心もよくなるなり。悪人にちかづけば、我が心にわるしと思へども、人の心に暫く随ふほどに、やがて真実にわるくなるなり。

また、人の心、決定してものをこの人にとらせじと思へども、あながちにしひて切に重ねて云へば、にくしと思ひながら与フルなり。決定して与へんと思へども、便宜あしくて時すぎぬれば、さてやむ事も有り。

然らば、学人道心なくとも、良キ人に近づき、善縁にあふて、同じ事をいくたびも聞き見ルべきなり。このノ言一度聞き見れば、今は見聞かずともと思フ事なかれ。道心一度発したる人も、同じ事なれども、聞くたびにみがかれて、いよいよよきなり。況ンや無道心の人も、一度二度こそつれなくとも、度々重なれば、霧の中を行く人の、いつぬるるとおぼえざれども、自然に恥る心もおこり、真の道心も起るなり。

故に、知りたる上にも聖教をまたまた見るべし、聞くべし。師の言も、聞キたる上にも聞きたる上にも重

大智度論に、「たとえばおろかな人が手に宝珠を持っているようなものである。ほかの人がこれを見て、『お前は下劣なやつだ。自分で手に物を持っているではないか』と言うのを聞いて考える。珠は惜しいが、世間ていもある、自分は下劣な人間になりたくはないと思う。思いなやんだあげく、やはり世間ていにひかれて、人の言葉に随って珠を下に置き、あとで召し使いに拾わせようと思っているうちに、珠を失ってしまう」という話がある。

人の心はこのようなものである。このことは間違いなく自分のためによいことだと思っていても、人の批評が気になって、それにひかれる事がある。だから、どんなにもともと悪い心でも、立派な指導者にしたがい、立派な人が長い間にわたって説く事を聞いていると、自然に自分の心もよくなるのである。悪人に近づいていると、自分の気持でも初めは悪いと思っていても、一応その人の気持にしたがっているうちに、そのままほんとうに悪くなるのである。

また人の心は、物を、この人には絶対にやるまいと思っていても、むりやりにどうしてもと何回も何回も言われると、いやなやつだと思いながらもやってしまうものである。また、必ずあの人にあげようと思っていても、機会がなくて時がたってしまうと、あげないでしまうこともある。

だから、仏道を学ぶ人は、たとい道心がなくても、立派な人に近づき、善縁にあって、同じことを幾度も聞いたり見たりすべきである。このことは一度聞いたし、見もしたから、もう見ないでも聞かないでもいいと思ってはならない。一度道心をおこした人も、同じ

ネ重ネ聞くべし。弥深き心有るなり。道のためにさはりとなりぬべき事をば、かねて[11]是レに近づくべからず。善友[12]にはくるしくわびしくとも近づきて、行道すべきなり。

ことであっても、聞くたびにみがきがかかって、ますますよいのである。まして無道心の人も、一度二度聞いているうちは心をひかれることがなくても、たびたび重ねて聞いていると、霧の中を歩く人が、いつ濡れたとも気がつかないうちに着物がしめるように、おのずから、自分の無道心を恥ずかしく思う心もおこり、ほんとうの道心もおこるのである。

　だから、知っている上にも、教えの書物を重ね重ね見なさい、聞きなさい。師の言葉も、聞いた上にもそのまた上にも、重ね重ね聞きなさい。ますます深い内容があるのである。仏道のために障害となりそうなことには、前もって近づいてはならない。善友には苦しくつらくても近づいて、仏道を行ずべきである。

注

一　人のすむ所。世の中。
二　大智度論。百巻。インドの竜樹菩薩の著。羅什三蔵訳。大品般若経の注釈書。
三　mani の音訳語。珠の総名。また宝、如意とも訳す。
四　自分で物を持つことは下賤のしわざだと非難した。
五　すべてにわたってすぐれた人。理想的な人。
六　道理にたがってまでも。
七　「ビンギ」（日葡辞書）。
八　そのまま。
九　「つれなし」は相手にしない。無関心なこと。
一〇　潙山警策の語。「善者に親近すれば霧露の中に行くがごとし。衣を湿さずといへども、時々に潤あり。」
一一　前もって。
一二　kalyāṇamitra. 我れにしたがって、善行をおこす者。

校訂

1　原文、言。次の「事ニ」と、混乱したのではないか。
2　原文、人ノ事ニ語ニ。「事ニ」を余分と見て省いた。

十六　大恵禅師ある時

示ニ云ク、大恵禅師、ある時尻に腫物を出す。
医師是レを見て、「大事の物なり。」と云フ。
恵云ク、「大事の物ならば死すべしや。」
医云ク、「ほとんどあやふかるべし。」
恵云ク、「若シ死ぬべくは弥坐禅すべし。」と云ツて、なほ強盛に坐したりしかば、かの腫物うみつぶれて、別の事なかりき。
古人の心是ノごとシ。病を受ケては弥坐禅せしなり。今の人の病なからん、坐禅ゆるくすべからず。
病は心に随ツて転ずるかと覚ユ。世間にしやくりする人、虚言をもし、わびつべき事をも云ひつけつれば、其れをわびしき事に思ひ、心に入れて、陳ぜんとするほどに、忘ツてその病止るなり。我レも当時入宋の時、船中にして痢病をせしに、悪風出来ツて船中さわぎし時、病忘レて止まりぬ。
是レを以つて思ふに、学道勤学して他事を忘れば、病もおこるまじきかと覚ユるなり。

注

教えて言われた。
大恵禅師が、ある時、尻にはれ物をでかした。
医者がこれを見て、「悪性のものです。」と言った。
大恵が言った。「悪性というと死ぬかもしれませんか。」
医者が言った。「かなり危険です。」
大恵は、「死ぬかもしれないのなら、ますます坐禅をしよう。」と言って、いっそう、猛烈に坐禅したので、そのはれ物はうみつぶれて、何事もなくすんでしまった。
古人の気持はこの通りである。病気になったらますます坐禅したのである。今の人で病気のない者が、坐禅を手ぬるくしてはならない。
病気というものは、気の持ちようで変わるかと思われる。世間でも、しゃっくりをしている人に、うそを言って、よほどへこたれるようなことを言ってやると、それをつらい事に思い、本気になって言い訳をしようとするのにまぎれて、しゃっくりもとまってしまう。わたしも以前、宋に渡る時、船の中で下痢をわずらったが、暴風がおこって船じゅう大さわぎした時、病気は忘れて、そのままなおってしまった。
これによって考えると、力をつくして仏道を学び、ほかのことを忘れてしまうと、病気もおこらないのではないかと思われる。

一　大恵禅師（大慧禅師）の号を贈られた人は二人ある。一は南岳懐譲禅師（六七七—七四七、六祖大鑑慧能の法嗣）、一は宋の径山の大慧宗杲（一〇八九—一一六三）である。この条、天文本建撕記にも引かれてあり、「大唐ノ祖師大恵禅師」とある。二四七ページ十八段の大慧禅師の話が、「大慧語録」に見えるので、ここも大慧宗杲であろう。
二　勢い強く盛んに。易林本節用集「か」の部に「強盛」とあり。
三　普通と違ったこと。かわった事。「汝、別の事なかりけるうれしさよ」（盛衰記）。
四　力をおとすようなこと。「わぶ」は元来、つらい事、悲しいことに会って力を落とすこと。あやまる意味の「わぶ」も、相手に迷惑をかけたことに対して、自ら力を落としていることを表明するのが原義である。
五　つらい事、悲しい事に出会うとがっかりして力を落とす。その状態が「わびし」である。
六　申し開きをしようと。
七　道元禅師は貞応二年（一二二三）二月二十一日京都を発して瀬戸内海を航し、三月中旬博多に着き、その下旬、商船に便乗して宋に向かった。

十七　俗の野諺に云く

示ニ云ク、俗の野諺に云ク、「唖せず聾せざれば家ニ公とならず。」ト。云フ心は、人の毀謗をきかず、人

教えて言われた。
世俗のことわざに、「おしになり、つんぼにならなければ、一家

の不可を云はざればよく我が事を成ずるなり。是ノごとクなる人を、家の大人とす。

是レ即チ俗の野諺なりと云へども、取つて衲僧の行履としつべし。他のそしりにあはず、他のうらみにあはず、いかでか我が道を行ぜん。徹[3]得困の者、是レを得べし。

注

一　世俗の間に行なわれることわざ。

二　一家のあるじ。

三　力のありったけをつくすこと。「大潙陞堂の次、僧有り、出でて云く、請ふ、和尚衆のために説法せんことを。師云く、我れ儞がために徹困なることを得たり。僧、作礼す。」(正法眼蔵三百則上巻)。

十八　大恵禅師の云く

示ニ云ク、大恵禅師の云ク、「学道はすべからく人の千万貫銭をおへらんが、一文をもたざらん時、せめら(れ)ん時の心のごとくすべし。若しこの心有らば、道を得ル事易し。」と云へり。

信心銘ニ云ク、「至道かたき事なし、但揀択を嫌ふ。」

のあるじにはなれない。」と言っている。

この意味は、人が自分をそしっても耳にも入れず、その代わり自分も人の悪いところを言い立てなくなれば、自分の思うところをなしとげることができるというのである。こういう人を一家の大人とするのである。

これはただ世俗の人が言う身近なことわざであるが、とり用いて禅僧の行ないとしてもよい。ひとからそしりも受けず、また恨みも受けないような生き方をしていて、どうして自分の道を行なっていけようか。力のありったけを出しつくした者のみが、はじめて自分の道を貫ぬくことができるのである。

教えて言われた。

大恵禅師が、「仏道を学ぶには、千万貫の借金を背負った人が、一文の銭もない時に、返債を迫られた時の気持になってせよ。もし、こうした気持があれば、道を得ることはたやすい。」と言われた。

三祖大師の『信心銘』には、「無上の大道はむずかしいことはな

ト。揀択の心を放下しつれば、直下に承当するなり。[四] 揀択ノ心を放下すと云フは、我を離るるなり。所謂我が身仏道をならんために仏法を学する事なかれ。ただ仏法のために仏法を行じゆくなり。たとひ千経万論を学し得、坐禅〈床〉をやぶるとも、この心無くは、仏祖の道を学し得べカラず。ただすべからく身心を仏法の中に放下して、他に随うて旧見なければ、即ち直下に承当するなり。

い。ただえりきらいする心がいけない。」と言っている。すなわち、是をとり、非をすて、善をとり悪をきらうという差別の心をやめれば、ただちに真実をそのままに受け取ることができるのである。えりきらいする心をやめるというのは、自分を離れることである。つまり、自分の身で仏道を成就するために仏法を学んではならない。ただ、仏法のために仏法を行じてゆくのである。たとい千万の経論を学びとり、床が抜けるほど坐禅しても、この気持がなければ、仏祖の道を学びとることはできない。ただぜひとも仏法の中に身心をなげすて、師の言葉にしたがって、以前からの見解を持たなければ、直ちに真実が受け取れるのである。

注

一 「おふ」は負債があること。その已然形から、完了の助動詞「り」の未然形に続いた形。「ヒャクメヲ　オウ」（日葡辞書）。

二 三祖鑑智僧璨（――六〇六）の著。六二四字の小詩篇であるが、仏法の真髄を遺憾なく表現したものとして、禅門で広く愛誦された。その冒頭の句が「至道無難、唯嫌揀択」である。

三 「若し人、永平に作麼生か唯嫌揀択底の道理と問はば、ただ他に向かって道はん、金翅鳥王は生竜にあらざれば食せず、補処の菩薩は兜率にあらざれば生ぜず。」（永平広録巻七）。

四 真実をその通りにうけとること。「此の身心を以て直に仏を証す、是れ承当なり」（学道用心集）。

五　坐禅する設けの場所。僧堂内は長連床。また、個人では木床、縄床の上にも坐する。

十九　春秋に云く

示ニ云ク、春秋[1]に云く、「石[2]の堅き、是レをわれどもその堅きヲ奪フべからず。丹[3]のあかき、是レをわれどもソノあかき事を奪フべからず。」ト。
玄沙[4]因に僧問フ、「如何ナルカ是レ堅固法身[5]。」沙云ク、「膿滴々地。」ト。けだし同じ心なるべきか。

注
一　この春秋は、『呂氏春秋』。二十六巻、秦の呂不韋が賓客を集めて撰した。道、儒、兵、農、刑名の諸家の説および春秋、戦国時代の時事にも及ぶ。なお道元禅師は、宋から『呂氏春秋』を持ち帰られたと伝える。
二　「石は破るべきなり、而も堅を奪ふべからず。丹は磨くべきなり。而も赤を奪ふべからず。」（呂氏春秋巻第十二、清廉）。
三　朱砂、辰砂等の赤色の鉱物。あか色の絵の具を作る。
四　玄沙志備（八三五—九〇八）。雪峰義存の法嗣。俗姓は謝氏。福州閩県の人。この話は、大慧の正法眼蔵巻一に出る。
五　何ものにも破壊されることのない真実の本体。

教えて言われた。
『春秋』に言っている。「石の堅い性質は、たとえそれを割ってみても堅さにかわりはない。丹土のあかい性質は、それをほぐしてもかわるものではない。」
玄沙の志備和尚が、服薬を誤って、からだじゅう赤くただれたことがあった。その時、ある僧がたずねた。
「堅固法身とはどのようなものでございますか。」
志備和尚が答えた。「薬にあたってただれると、からだじゅうみがポタポタたれる、これが堅固法身の姿である。」
おそらく同じ意味であろう。

校訂

1　この一段は、慶安本、流布本ともになく、長円寺本にのみ存する。「けだし同じ心なるべきか」は、後人の書き入れではあるまいか。

二十　古人云く知因識果の知事に属して

示ニ云ク、古人云ク、「知因識果の知事に属して、院門の事すべて管ぜず。」ト。言フ心は、寺院の大小ノ事、すべからク管ぜず、ただ工夫打坐すべしとなり。

また云ク、「良田万頃よりも薄芸身にしたがふるには如カず。」

「施恩は報をのぞまず、人に与へておうて悔ユる事なかれ。」

「口を守ル事鼻のごとクすれば、万禍及バず。」と云へり。

「行堅き人は自ラ重んぜらる。才高き人は自ラ伏せらる。」

「深ク耕して浅く種ウる、なほ天災あり。自ラ利して人を損ずる、豈果報なからんや。」

学道の人、話頭を見る時、目を近ヅけ力をつくして

教えて言われた。

古人は、「寺院の事務は、因果の理に明らかな役僧にまかせて、いっさいかかわらない。」と言っている。その意味は、寺院の大小の事は、知事にまかせて手出しをせず、自分はただ力をつくして坐禅せよというのである。

また、「みのりの多い田を何万町も持っているよりも、わずかな芸でも身につけている方がよい。」

「人に恩を施すには、相手の恩返しを期待してはならない。人に与えておいて、あとで、やらなければよかったと思ってはいけない。」

「口を鼻と同じようにして沈黙を守れば、どんな禍もやってこない。」と言っている。

「行の堅固な人は、しぜんに人から重んぜられる。しかし学才高い人は、やがて人に追いこされる。」

「深く耕して浅く植え、人事をつくしてもなお天災を受けることも

能々是レを看ルベシ。

注

一 因果の道理をよく知っていること。
二 僧院事務を司どる僧の総名。都寺、監寺、副寺、維那、典座、直歳の六知事がある。
三 寺院経営の方面。
四 頃は田百畝の称。田の広く多いことをいう。
五 過去の業因によって感得する報い。善にも悪にもいうが、ここは悪い場合。
六 古人の語や古則公案にかかげられた話。

校訂

一 原文、必ズ。

ある。まして己れを利して他人をそこなう者に、どうして報いがなかろうか。」
仏道を学ぶ人は、古則公案を読む時は、一層深い意味を見落さないように、あらゆる力をふりしぼって、よくよく読み取るべきである。

二十一　古人の云く百尺の竿頭に更に一歩を進むべし

示ニ云ク、古人の云ク、「百尺の竿頭に更ニ一歩を進むべし。」ト。この心は、十丈のさをのさきにのぼりて、なほ手足をはなちて即ち身心を放下せんがごとし。
是レについて重々の事あり。
今ノ世の人、世を遁れ家を出たるに似れども、行履

教えて言われた。
古人は、「百尺の竿の先にあってなお一歩を進めよ。」と言っている。その意味は、十丈の竿の先にのぼってさらに手足を放して、身心を投げ出すようなものである。
これについては段階がある。

をかんがふれば、なほ真の出家にては無きも有り。所謂出家と云フは、先ヅ吾我名利をはなるべきなり。是レをはなれずしては、行道頭燃をはらひ、精進手足をきれども、ただ無理ノ勤苦のみにて、出離にあらざるも有り。大宋国にも離レ難き恩愛をはなれ、捨テ難キ世財をすてて、叢林に交ハり、祖席を〈経〉れども、審細にこの故実を知らずして行じゆくによりて、道をもさとらず、心をも明らめずしていたづらに一期をすぐすも有り。

その故は、人の心のありさま、初めは道心をおこして、僧にもなり知識に随へども、仏とならん事をば思ハずして、身の貴く、我が寺の貴き由を施主檀那にも知られ、親類境界にも云ひ聞かせ、何にもして人に貴がられ、供養ぜられんと思ひ、あまつさへ僧ども不当不善なれども我れ独り道心も有り、善人なるやうを、方便して云ひ聞カせ、思ひ知らせんとするやうもあり。是レは言フニ足ラざルの人、五闡提等の在世の悪比丘のごとく、決定地獄の心ばへなり。是レを物もしらぬ在家人は、道心者、貴き人、なんど思フもあり。

このきはをすこしたち出でて、施主檀那をも貪ラず、親類恩愛をもすてはてて、叢林に交ハり行道するも有れども、本性懶惰懈怠なる者は、ありのままに懈怠ならん事もはづかしきかして、長老首座等の見る時は相

今の世の人は、遁世し出家もしているように見えても、やっていることを調べてみると、やはりほんとうの出家でない者もある。いわゆる出家というのは、まず自分とか、名誉とか、利益とかを離れるべきものである。これらを離れなくては、たとい仏道を行ずること頭についた火を払うように寸刻を惜しみ、手足を切るほど精進努力しても、ただすじの通らない苦労をするばかりで、迷いを離れたことになっていない者もある。大宋国においても、離れがたい父母妻子を離れ、捨てがたい世間の財産を捨てて、修行の道場に入り、諸方の禅門をたずね歩いても、事こまかにこの秘訣を知らないで修行してゆくために、道を得ることもなく、心も明らかにせず、むだに一生を過ごす者もある。

その理由は、人の心の様子は、はじめは道心をおこして僧にもなり、指導者にもつくのであるが、仏となることを思わないで、自分の位が高いこと、自分の寺が位が高いことを施主・檀家に知らせ、親類縁者にも言って聞かせ、どうかして人からありがたがられ供養されようと思い、おまけに、ほかの僧たちはだらしない悪人であるが、自分だけは道心もあり善人である様子を、てだてをめぐらして言って聞かせ、わかってもらおうとすることもある。これらは言うにも足りない人である。断善根といわれた仏在世の五人の悪比丘のようなもので、間違いなく地獄に堕ちる心のありさまである。またこういう僧を、何も知らない在家の人たちは、道心者だ、ありがたいおかただなどと思う人もある。

この程度から少しあがって、施主・檀家をも貪らず、親類も恩愛

構へて行道する由をして、見ざル時は事にふれてやすみ、いたづら[七]ならんとするも有り。是レは在家にしてさのみ不当ならんよりはよけれども、なほ吾我名利のすてられぬ心ばへなり。

またすべて師の心[八]をもかねず、首座兄弟の見不見をも思はず、つねに思はく、仏道は人のためならず、身のためなりと云ツて、我が身心にて仏になさんと真実にいとなむ人も有り。是レは以前の人々よりは真の道者かと覚ユれども、是レもなほ吾我を思ツて、我ガ身よくなさんと思へる故に、なほ吾我を離レず。また諸仏菩薩に随喜せられんと思ひ、仏果菩提を成就せんと思へる故に、名利の心なほ捨てられざるなり。

是レまではいまだ百尺の竿頭をはなれず、とりつきたるごとし。ただ身心を仏法になげすてて、更に悟道得法までものぞむ事なく修行しゆく、是レを不染汚[九]の行人と云フなり。「有仏[一〇]の処にもとどまらず、無仏の処をもすみやかにはしりすぐ。」と云フ、この心なるべし。

注

一　頭髪に火がついたのをはらうほど急を要する気持。

二　二祖が達磨に至って許されず、臂を断って決意を示し

の情もすてきって、修行の道場にはいって修行する者もあるが、生来ものぐさで怠け根性の者は、正直に怠けているのも恥ずかしいと見えて、住持人や首座などの見ているところでは、せいぜい修行しているふりをし、見ていないときは、何かにつけて休み、遊んでいようとする者もある。これは在家人でその通りだらしないことばかりしているよりはましだが、やはり自分や名誉利益がすてられない心のありさまである。

また、いっさい師匠に気がねもせず、首座や兄弟弟子が見ていようといるまいとかかわりなく、いつも「仏道は人のためではない、自分の身のためである」と言って、自分の身心でもって自分を仏にしようと、本気でやっている人もある。これは前にあげた人々に比べればほんとうの仏道修行者かと思われるが、これもやはり自分のことを考えて、自分の身をよくしようと思っているために、やはり自分というものを離れていない。また諸仏菩薩に喜ばれようと思い、仏となり道を完成しようと思っているために、依然として名誉利益を求める気持がすてられないのである。

ここまでのところは、いずれも百尺の竿頭にのぼってそこを離れず、しがみついているようなものである。ただ身心を仏法になげすてて、その上、道を悟り法を得ることさえ望まず修行してゆくこと、これをけがれのない修行者というのである。

「仏があるところにもとどまらず、仏のないところも速やかに走りすぎてゆく。」という趙州の言葉は、この意味であろう。

たこともある。

三 親類および自己の勢力の及ぶ範囲をいう。

四 無法なこと。心にしまりがないこと。

五 昔、五人の悪比丘があったが、なまけ者で経も読まず、従って人も供養しなかった。それで命をつなぐために内心は邪思に満ちていながら、縄床を求めて坐禅の形を示した。人々はこれを見て聖者と思って供養した。しかしついに福尽き、命終わって地獄に堕し、八千劫の間その施を償い、また人間に生まれたが男女の根なき石女と生まれたという（止観輔行）。闡提は一闡提（icchāntika）の略。信不具・断善根と訳す。仏法を信ぜず、成仏しないこと。

六 住持人のこと。「今、禅宗住持の者、必ず長老と呼ぶ」（祖庭事苑）。

七 なす事なくしていること。

八 心をかねるとは、他の人の気持になって、その思わくを考えること。「ココロヲ　カヌル」（日葡辞書）。

九 染汚は煩悩の異名。悟ったとか、法を得たとか思うことも本来曇りなき心田をけがすことになる。「南岳山観音院大慧禅師、因みに六祖問ふ、還つて修証を仮るや否(いな)や。大慧云く、修証は無きにあらず、染汚即不得。六祖云く、ただ是(こ)の不染汚、諸仏の所護念。」（正法眼蔵洗浄）。「染汚」は古くはゼムワ・ゼンマであるが、今普通にはゼンナと読まれる。

10 「趙州(でうしう)因(ちな)みに僧辞を告ぐ。師、問ふ、甚(いづれ)の処に去るや。僧云く、諸方に仏法を学し去る。師、払子を竪起(じゅき)して云

く、有仏の処にも住すること得ず、無仏の処も急にすべからく走過すべし。」(正法眼蔵三百則)。

校訂

1 原文、何ンド。
2 原文、此ノキワノキワヲ。「ノキワ」の三字削る。
3 原文、懶随。

二十二　衣食の事兼ねてより思ひあてがふ事なかれ

示ニ云ク、衣食の事、兼ネてより思ひあてがふ事なかれ。

たとひ乞食の処なりとも、失食絶煙の時、そノ処にして乞食せん、そノ人に用事云はんなんど思ひたるも、即ち物をたくはへ、邪食にて有るなり。衲子は雲のごとく定マれる住処もなく、水のごとく流れゆきてよる所もなきを、僧とは云フなり。直饒衣食の外に一物ももたずとも、一人の檀那をたのみ、一類の親族をも思ひたらんは、即ち自他ともに結縛の事にて、不浄食にてあるなり。

是ノごとキ不浄食等をもてやしなひもちたる身心にて、諸仏の清浄の大法を悟らん、心得んと思フとも、

教えて言われた。

衣食の事は、前々からあてを作っておいてはならない。

よしんば乞食する場所についても、もしも食べる物がなくなった時には、あすこで托鉢をしよう、あの人に頼んで布施をしてもらおうなどと思っているのも、とりもなおさず物を貯えているのと同じで、正しい生き方でなくなる。禅僧は雲のように定まった住所もなく、水のように流れていってよるべもないのを僧というのである。たとえ、衣食のほかに何一つ持たなくても、一人の施主を頼りとし、一軒の親族でも考えに入れているのは、とりも直さず、頼む方も頼まれる方も、両方ともそれにしばられることになって、正しい生き方ではなくなる。

このような正しくない生計によって養った身心でもって、諸仏の

何にもかなふまじきなり。たとへば藍(あゐ)[四]にそめたる物はあをく、蘗(きはだ)[五]にそめたるものは〈黄〉(き)なるがごとくに、邪命食をもてそめたる身心は即ち邪命身なり。コノ身心をもて仏法をのぞまば、沙(いさご)をおして油をもとむるがごとし。ただ時にのぞみて、ともかくも道理にかなふやうにはからふべきなり。兼[六]ネて思ひたくはふるは皆たがふ事なり。能々(よくよく)思量すべきなり。

清浄な大法を悟ろう、わかろうと思っても、とても望みはない。たとえば、藍で染めたものはあおく、蘗(きはだ)で染めたものは黄であるように、邪命食(じゃみょうじき)によってつくられた身心はとりもなおさず邪命身である。この身心で仏法を得ようと望むのは、砂を圧(お)して油を求めるようなものである。ただ時に臨んでいかようにも道理にかなうようにはからうべきである。前もって心づもりをしておくことは、みな、道理にたがうことである。よくよく考えめぐらすべきである。

注

一 これこれの人。特定の人をあてにするのを言う。
二 邪命食。比丘が、乞食・信施によらず、田畑を耕作したり、天文・数学等の術を用いたり、富豪の庇護をうけたり、その他うらないなどをして生計をたてるのを言う。
三 煩悩の異名。身心を縛りつけて、解脱の妨げとなる。
四 藍の水にひたして染めること。
五 ヘンルウダ科の落葉喬木。幹の皮の内側が黄色く、薬用、染料等にする。黄蘗、黄柏。
六 前もって。

二十三　学人各々知るべし

示ニ云ク、学人各々(おのおの)知るべし、人々一の非[一]あり。憍奢(けうしゃ)[二]是レ第一の非なり。内外(ないげ)[三]の典籍(てんじゃく)に同ジく是レをいま

教えて言われた。仏道を学ぶ人は、めいめい次のことをよく心得ておくように。人

しむ。

外典に云ク、「貧シくしてへつらはざるは有れども、富ミておごらざるは無し。」と云ツて、なほとみを制しておごらざる事を思ふなり。この事大事なり。能々是レを思ふべし。

我ガ身下賤にして人におとらじと思ひ、人にすぐれんと思はば憍慢のはなはだしきものなり。是レはいましめやすし。仮令世間に財宝にゆたかに、福力もある人、眷属も囲繞し、人もゆるす、かたはらの人のいやしきが、此レを見て卑下する、このかたはらの人の卑下をつつしみて、自躰福力の人、いかやうにかすべき。憍心なけれども、ありのままにふるまへば、傍らの賤シき、此レをいたむ。すべての大事なり。是レをよくつつしむを、憍奢をつつしむと云フなり。我ガ身(富)めれば、果報にまかせて、貧賤の見うらやむをはばからざるを憍人と云フなり。

古人の云ク、「貧家の前を車に乗ツて過グる事なかれ。」と云へり。然レば、我ガ身車にのるべくとも、貧人の前をば憚るべしと云へり。外典に是ノごとシ、内典もまた是ノごとシ。

然るに、今の学人僧侶は、知恵法文をもて宝とす。是レを以ておごる事なかれ。我れよりおとれる人、先人傍輩の非義をそしり非するは、是れ憍奢のはなはだ

はそれぞれ、一つの欠点がある。おごり高ぶる心、これが第一の欠点である。仏教でもほかの教えの書物でも、同じようにこれをいましめている。

儒教の経典には、「貧しくてへつらわない人はあるが、富んで気の大きくならない者はない。」と言って、やはり、富んだ時の気持をおさえて、おごり高ぶらないように注意している。この事はだいじなことである。よくよく考えなければならない。

自分が下賤でありながら、人に負けまい、人よりすぐれようと思うなら、憍慢もはなはだしいものである。しかし、これはまだ注意してやめることもしやすい。ところが、たとえば俗世間で、財宝ゆたかに、現世の勢力も備わり、つき従う者が取り囲み、世間の人もこれを認めているというような人があるとする。それを、近くにいる身分のいやしい者が見て、劣等感を起こす。こういった、近くにいる者に劣等感を起こさせないようにするには、自ら富も勢力もある人はどうしたらよいであろうか。本人は高ぶる心はないのだが、何の心もなくふるまうと、近くにいる下賤の人の心を傷つける。こういうことが万事につけてのだいじな点である。このところをよくつつしむのを、真に憍奢をつつしむというのである。自分が富んでいると、そのしあわせにまかせて、貧賤な人が見てうらやむのも気にかけないのを、高ぶった人というのである。

古人も、「貧しい家の前を車に乗って通ってはならない。」と言っている。してみると、自分が当然車に乗る身分であっても、貧乏人の前では遠慮したほうがいいというのである。儒教でもこの通りで

しきなり。

古人云ク、「智者の辺(ほとり)にしてはまくるとも、愚人の辺(ほとり)にしてかつべからず。」ト。

我ガ身よく知りたる事を、人のあしく知りたりとも、他の非を云フはまた是レ我が非なり。法文を云フとも、先人[1]の愚をそしらず、また愚癡、未発心の人のうらやみ卑下しつべき所にては、能々(よくよく)是レを思フべし。

建仁寺[七]に寓せしとき、人々多く法文を問ヒき。非も咎(とが)も有りしかども、この儀を深く存じて、ただありのままに法の徳をかたりて、他の非を云ハず、無為[八]にてやみき。愚者ノ執見深きは、我が先徳の非を云へば、嗔恚(しんい)をおこすなり。智恵ある人の真実なるは、法のまことの義[2]をだにも心得つれば、云ハずとも、我が非及ビ我が先徳の非を思ひ知り、あらたむるなり。是(かく)ノごとキ事、能々(よくよく)思ひ知るべし。

注

一 わるいこと。欠点。
二 おごりたかぶること。
三 内典、外典。
四 果報よく権勢のあること。
五 「ナイデン」(日葡辞書)。
六 仏法を説いた文言。

ある。仏教でも同じである。

ところが、今の仏道を学ぶ人や僧侶は、知恵や、仏法を説いた文言(もんごん)を宝とする。その点で自分がすぐれているからと言って人に対しておごり高ぶってはいけない。自分より下の人、また先輩や同輩の誤りを言い立て、非難するのは、おごりの心もはなはだしいものである。

古人は、「智者の見る前で敗けるのはよろしいが、愚かな人の見る前で勝ってはいけない。」と言っている。

自分が正しく知っていることを、人が間違って理解していても、その人の間違いを言い立てると、それは自分の間違いとなる。法の文言についての論議でも、先人の愚かな点を悪く言わず、また、愚かで未発心の人が聞いてうらやんだり、劣等感を起こしそうな所ではよくよくこれに気をつけなければいけない。

わたしがしばらく建仁寺にいた時、人々が多く法の文言についてたずねた。その言うところには、間違いも欠点もあったが、このことを深く考えて、ただありのままに、仏法の徳を話して、相手の間違いは言わず、何事もなくてすませた。愚かで自分の考えを固執する人は、自分の師匠筋の間違いを言われると腹を立てる。知恵があり、真実の心のある人は、法の真実の意味さえ理解がいけば、自分の間違いも師匠筋の間違いも胸にこたえて、改めるものである。こうしたことは、よくよく心得ておくべきである。

七 これは帰朝後しばらく、建仁寺におられた時のこと。
八 仏法の上からは、事件のない方が望ましい。「一生安穏にて弁道無為にあらむと、ねがふべし」(重雲堂式)。

校訂
1 原文、先人ノ傍愚。傍は、今、不用と見て削る。傍は謗であったか。
2 原文、儀。

二十四　学道の最要は坐禅これ第一なり

示ニ云ク、学道の最要は坐禅是レ第一なり。大宋の人多く得道する事、皆坐禅の力(ちから)なり。一文(もん)不通にて無[一]才愚鈍の人も、坐禅を専らにすれば、多年の久学聡明の人にも勝(すぐ)れて出来(しゅつらい)する。然レば、学人祗管(しかんた)打坐(ざ)して他を管ずる事なかれ。仏祖の道はただ坐禅なり。他事に順ずべからず。

奘問ウて云ク、打坐と看語[二]とならべて是レを学する[1]に、語録公案等を見ルには、百千に一つハいささか心得られざるかと覚(おぼ)ユる事も出来(いできた)る。坐禅は其レほどの事もなし。然レどもなほ坐禅を好むべきか。

示ニ云ク、公案話頭を見て聊(いささ)か[三]知覚あるやうなりと

教えて言われた。

仏道を学ぶ肝心かなめは、坐禅が第一である。大宋国の人が、多く悟りを得るのは皆、坐禅の力である。文字一つ知らず、学問のない、愚鈍な人でも、坐禅を専一にすると、長年の間参学した聡明の人にもまさってしでかすものである。であるから、仏道を学ぶ人は、ひたすら坐禅して、他のことにかかわってはならない。仏祖の道はただ坐禅である。他の事に従ってはならない。

わたし(懐奘)がおたずねした。

坐禅と、語録公案などの研究とをあわせて学んでおりますと、語録や公案などを見ている時には、百千に一つぐらいは、少しばかり、心得られはしないかと思われることも出てまいります。しかし坐禅

も、其レは仏祖の道にとほざかる因縁なり。無所得、無所悟にて端坐して時を移さば、即チ祖道なるべし。古人も看語、祇管坐禅ともに進めたれども、なほ坐をば専ら進めしなり。また話頭を以て悟りをひらきたる人有りとも、其レも坐の功によりて悟りの開くる因縁なり。

まさしき功は坐にあるべし。

注

一 学問の素養がないこと。次の愚鈍は生まれつきおろかな事。
二 語録公案を見て考えること。
三 慮知念覚。思慮分別の範囲にはいってくること。

校訂

1 原文、「ナラバベテ言」。バを削る。

先師永平奘和尚学地に在リシ日、学道の至要聞クに随ツて記録す。所以に随聞と謂フ。雲門室中の玄記ノごとク、永平の宝慶記ノごとシ。今六冊を録集して巻ヲ記シ仮名正法眼蔵拾遺分の内に入ル。六冊倶ニ嘉禎

ではそれほどのこともございません。それでもやはり坐禅をとりあげてなすべきでございましょうか。

教えて言われた。

公案話頭を見て、いくらか理解がいくようであっても、それは仏祖の道に遠ざかる因縁である。所得もなく、悟りもなく、ただ端坐して時を過ごすならば、それがただちに仏祖の道である。古人も、看語も祇管坐禅もともにすすめてはいるが、やはり坐禅を専ら勧めたのである。また、話頭でもって悟りを開いた人もあるけれども、それとても坐禅の功によって悟りの開ける因縁ができたのである。

ほんとうのてがらは坐禅にあるであろう。

この書は、亡くなった師匠、永平寺二世の懐奘和尚が、修行時代に、仏道修行の至要を、道元禅師から聞くに随って記録したものである。だから「随聞」というのである。これは雲門室中の玄記や、道元禅師が如浄禅師から聞いたところを書きしるしておかれた宝慶

年中ノ記録なり。

[六]康暦二年五月初三日宝慶寺 浴主寮ニ於テ書ス焉。

三州播頭郡中島山　長円二世暉堂ガ写シなり。

寛永二十一甲申歳八月吉祥日

記のような書である。今、六冊にまとめ、巻数をつけ、仮名書きの正法眼蔵の拾遺のうちに編入した。六冊ともに、嘉禎年中の記録である。

康暦二年五月初三日、宝慶寺浴主寮で書す。

三州播頭郡中島山　長円寺二世暉堂宋恵の写しである。

寛永二十一甲申歳八月吉祥日

注

一　さらに学ぶべきことのある境界。未得悟の時。学ぶべきことのなくなった境界を「無学」という。

二　雲門は雲門文偃（八六四―九四九）。雪峰義存の法嗣。俗姓は張氏、呉越、蘇州、嘉興の人。匡真禅師。門人守堅の編集した広録は、上巻対機、十二時歌、偈頌、中巻室中語要（祖庭事苑に引くところの名は雲門室中録）、垂示代語、下巻勘弁その他という構成である。禅師の私室内において聞き得た奥深い言葉の意。

三　道元禅師が、宋の理宗の宝慶元年（一二二五）七月二日から、同三年（一二二七）までの間、天童山如浄禅師から親しく教えを受けたことを書きとめておかれた書。禅師生前には発表されず、滅後、遺物の中から発見され、懐奘禅師が建長五年（一二五三）十二月十日に書写されて後世に伝わった。懐奘禅師書写の原本は、豊橋の全久院に現存する。

四　漢字の正法眼蔵三百則に対して、仮名まじりで書かれた正法眼蔵をさす。

五　嘉禎は文暦二年（一二三五）九月十九日改元、四年（一二三八）

十一月二十三日をもって暦仁元年となるまでの間。道元禅師三十五歳から三十八歳まで、懐弉禅師三十七歳から四十歳までの期間。

六 天授六年（一三八〇）。康暦は北朝の年号。懐弉禅師滅後百年に当たる。

七 福井県大野市にある。懐弉禅師の法嗣寂円（一二〇七—一二九九）の開いた寺。寂円は宋の人、もと天童如浄禅師の弟子であったが、如浄禅師の滅後、道元禅師を慕って日本に来た。その弟子に永平五代をついだ義雲（一二五三—一三三三）がある。

八 禅門で、浴室をつかさどる役目の人が平常いる所。

解　題

水野弥穂子

一　正法眼蔵随聞記

十三世紀の前半に、わが国に出現した偉大な宗教家、道元禅師（一二〇〇——一二五三）は、中国から帰って数年を経て、独立の道場を得、弟子の養成を始めた。その当初に、親しく禅師に随侍し、のちに永平二世を嗣いだ孤雲懐弉禅師（一一九八——一二八〇）が、その四年間の教えを、聞くにしたがって書きとめたのが、この正法眼蔵随聞記である。

道元禅師には、別に「正法眼蔵」九十五巻という大部の書がある。それは、仏教の真髄を真正面から説き明かした雄大な宗教書である。その説くところは、仏法そのものであり、「説く」その態度も、また真の仏法の具現で、道元禅師の到達した境地を、文章の上に表現したものと言ってよい。そのため「正法眼蔵」は、いわゆる相対の世界に生きている者にとってはきわめて難解な書となっている。そこには、仏法だけが生きていて、道元禅師の姿を見ることさえむずかしい。

これに対して、随聞記は、道元禅師に全幅の信頼を倚せ、生々世々にわたる随侍を願った孤雲懐弉という人が、文暦元年（一二三四、道元禅師三十五歳、懐弉三十七歳）始めて禅師の教えを受けてから、自らも得法の人となって後進の指導に当るようになる四年間、禅師の教えを全身で受け取った時期のことが、もとになってできた書物である。衣食という生活の基本的なところから始めて、懇切に、仏法者としてのあり方を説く道元禅師、その教えを一句もらさじと聞き入る懐弉禅師の姿も彷彿と浮かぶ思いのする書である。

二　随聞記の流布と長円寺本の出現

従来、随聞記といえば、明和七年（一七七〇）に面山瑞方（一六八三――一七六九）の名において刊行されたものが最もひろく行なわれ、明治以後最近に至るまで、その本文がほとんど唯一のものとして広く世に流布してきた。しかし、随聞記の最も古い板本は慶安四年（一六五一）に出ており、さらに、十八年後の寛文九年、十年の二回にわたり、同じ本文を板本を改めて刷り直したものが世に行なわれていた。

しかし、これら初期の刊本には序も跋もなく、のちに明和本の校訂をした面山瑞方によれば、教家（天台、真言などの宗旨）の僧が、古寺から見つけ出し、理がすぐれていたので刊行するに至ったものであるという。

したがって禅宗独特の読み方などにも合わず、永平を祖師と仰ぐ者にとっては不満の多いものであった。

面山は二十七歳の時、この書の古写本が永平寺あるいは大乗寺にあったらしいことを知り、何とかして正しい本文を見たいという願いを持って、長年探索を続けたが、四十七歳の時、若狭の空印寺に入るに及んで、はからずもその前住者から、古写の善本を手に入れた。これによって寛文本の誤りを正そうとし、ようやく宝暦八年七十六歳の時遂行較正をすませ、出版のための序および詳しい凡例を書いたらしい。しかし、何かの事情でその年には出版されず、さらに十二年後の明和七年、面山示寂の翌年に至って板本として世に出るに至った。この明和本においてはじめて、現在見るような跋を得、随聞記が嘉禎年中の永平二代の記録であることが明らかになった。

この明和本の面山の序および凡例によると、面山は寛文の本文はきわめて悪いものであるが、自分が手に入れた古写本ははなはだすぐれたもので、これによった自らの校定は完全を得たと書いてある。慶安本の本文が不完全であることを知っているだけで、他に拠るべき古写本を知らない間は、われわれは、それに従って、面山校定の本を現在見うる最善の随聞記としなければならなかった。

しかるに、昭和十七年に至って、大久保道舟博士が、愛知県長円寺に、江戸初期書写の随聞記を発見され、発表された。

これが、この本の底本となった長円寺本である。

長円寺本は、寛永二十一年（一六四四）長円寺二世暉堂和尚が写したものであるが、そのもとになった本は、康暦二年（一三八〇）宝慶寺浴主寮（ほうきょうじよくすりょう）において写されたものであることが明らかになっている。宝慶寺は、懐弉禅師の法嗣寂円禅師の開いた寺である。寂円はもと宋の人で、一説に天童如浄禅師の俗姪とも言われる。天童山で道元禅師を知り、禅師の徳を慕って、如浄禅師滅後日本に渡来し、永平の宗風をよく受け継いだ。家風峻烈枯淡で弟子は多くなかったが、のちに永平寺に入って五世を嗣ぐ義雲を出した。宝慶寺には永平寺荒廃の後も宗門の重要な宝物を多く蔵し、もって永平寺の法器を補ったと伝える。従って宝慶寺に由緒正しい書物が伝わったであろうことは、きわめて自然に考えられる。

長円寺は、京都所司代として有名な板倉勝重の開基の寺である。長円寺本随聞記を写した二世暉堂宋慧和尚は、七年前の寛永十四年には本光寺住職として、伝光録を書写しており、寛永二十一年五十八歳の時この随聞記を書写し、引き続き、約一年三か月かかって、八十四巻の正法眼蔵全巻の書写を終えた人である。その本文を検討すると、筆写の態度は綿密である。よい古写本の俤を、正確に伝えてくれる筆者としての条件を備えている人と言えよう。

この本文によって、はじめて、鎌倉、室町時代の言葉によって書かれた随聞記に接し得たことを知り得る。

三　長円寺本と流布本との相違

このようにして出現した長円寺本と、従来の流布本ないし慶安本とは、どのような相違があるか。

(1)　巻序の相違

全六巻であることは同じであるが、従来の巻六が長円寺本では巻一となり、従来の巻一が長円寺本では巻二となり、以下順に一巻ずつ移動して従来の巻五が巻六となって終っている。これは、新しく発見、発表された『天文本建撕記（けんぜいき）』が引用している巻序とも一致するものであり、随聞記全体の内容の構造を研究してみると、長円寺本の巻序の方がもとの形に近いと思われる。

(2) 章の出入

流布本・慶安本巻一（長円寺本では巻二）の第二段目に、仏照禅師の会下（えか）の肉食僧（にくじきそう）の話が載っているが、長円寺本にはない。内容を検討してみると、これは後人の書き込みが本文に入ったものではないかと思われる。

また、長円寺本巻六（流布本・慶安本では巻五）の十九段に、「春秋に云く、石の堅き、是れをわれどもその堅きを奪ふべからず云々」の一段がある。慶安本・流布本にはない。この前後は、比較的短い古人の語などを多く記してある所で、手控えの性格を持つ随聞記中でも最も手控え的な部分である。そのため、慶安本ないし流布本の祖本において、書き落されたと見てよさそうである。

(3) 表記形式の相違

慶安本・流布本は、片かな漢字まじりの書き下し文である。それに対して、長円寺本は、ところどころに和化漢文の俤を残し、返り点・一二点によって読むように書いた部分が相当ある。全段漢字ばかりの所もある（巻五の二段など）。面出は、自分が見た古写本に、慶安本の「如、ヌ、也」等が仮名になっていることをあげて古写本のすぐれた点とし、自らも本文中「然バ」「然レバ」等の表記をすべて「しかあれば」と「あ」を補った書き方に改めている。しかし、正法眼蔵のようにはじめから和文として書かれたものと、随聞記とを混同してはならない。道元禅師の正法眼蔵とか、慈円の愚管抄とかは、和漢両方面にわたるすぐれた知識人が特別の見識に立ってはじめから和文として書いたものであるが、当時の一般の傾向として、記録体の普通の形である和化漢文の要素の残っている方が、より古い形と言いうるであろう。

四　長円寺本の本文の特色

長円寺本の本文は、前項にあげたように、和化漢文の形式をまじえた記録体の文章であるが、その中にはいくつかの特色を持っている。

まずその用語の中には、慶安本・流布本などで書き改められてしまった語が古い形のまま残っているように見える所が

ある。これは、後世の人に理解されなくなったため書き改められたもので、これを日葡辞書などの古い文献によると、長円寺本の本文は、たしかに、鎌倉、室町時代に生きていた言葉であることが確かめられる。ここに一例をあげれば、

一向棄置（キチ）セラレテモ（長円寺本巻四ノ九ノ(一)）

慶安本は「捨置（シャチ）」、流布本は「捨置」でふりがながない。ところが、日葡辞書には「キチ、ステオク」と見られて、この言葉が生きていたことが知られる。

僧ノ損スル事ハ多ク冨家ヨリヲコレリ……学道ノ人ナニトシテ冨家ナルベキ。（巻一の五）

この「冨家」はフケと読み、冨裕な家のことである。鎌倉時代には関白藤原忠実（一〇八一——一一六二）を世の人が冨（ふ）家殿（けどの）と呼んだ例もある。しかし、フケという言葉はこの後、耳慣れない言葉となったらしい。慶安本では初めの方の「冨家」を「富貴」に直した。次に、流布本では二つとも「富貴」に直してしまっている。このようなことは、本文のみならず、ふりがなについても同様な性質をもっていると見られる。

次に、長円寺本の用語には漢字を表音的に用いている点が多い。これはこの書が、元来聞き書きであった事実を示すものである。

故用祥僧正の弟子也（巻二ノ一）

栄西の房号である葉上は、神泉苑で雨を祈った時、たちまち雨が降り、葉ごとに露が宿って栄西の姿を宿したことに由来すると言われるから、「葉上」が正しいのであるが、用祥の字は知事清規にも見え、『渓嵐拾葉集』にも「用上」、「用浄」と見える。また、懐弉禅師のことも、古い記録に「慧上」などと書いてあるように、当時は固有名詞でも表音を目的とした用字法が行なわれるのは珍しいことではない。流布本がわざわざ「葉上」としたのは一種の規範意識と注釈を兼ねたものと見てもよい。

灸治一所瀉薬一種ナンド（巻一ノ六）

慶安本は「瀉薬（シャ）」、流布本は「煎薬」としてある。流布本が煎薬と直したように、瀉薬では下し薬で、いきなり下し薬

を用いるのは少し合わないように思う。しかし、炙薬（しゃやく）という言葉はあって、病状にあわせてあぶって用いる薬だそうである。センヤクとシャヤクとを誤ったと見るのは、常識に過ぎて根拠が薄いと思われる。

我幼少ノ昔、記典等ヲ好ミ学ノ（巻三ノ九）

この「記典」は、慶安本「外典（デン）」、流布本も「外典」としてある。まことに「記典」とは見なれない字である。しかし、どんなに写し誤るといっても、外と記とはそう簡単に混同されるものではない。これを、「キテン」と読んでは意味が取れないが、典は、室町時代には内典・外典ともにデンと読む字である。「キデン」ならば、平安時代以来、貴族の学問の最も正統な学問として「紀伝道」がある。従って、記典は紀伝の音写であり、紀伝と書くのが正しい。元来、片かな、漢字まじりの記録体の文というものは、草書とひらがなの多いかな草子・物語などの伝写よりは誤りの少ないものである。しかるにここに紀伝を記典とするような誤りがあるのはかえって、長円寺本が、目慣れない言葉をその通り、私意を交えずに書き写したことを示すものである。

長円寺本の本文のもう一つの特色に、濁音表記と促音表記がある。

濁音表記としては、一点の声点が加えられている。慶安本・流布本でも、また赤松月船旧蔵本でも、みな濁音表記が見えるので、随聞記はよほど古くから濁音表記を持っていたのではないかと考えられる。その中でも、慶安本・流布本は、江戸時代の手が加わったかと思われるが、長円寺本に見える濁音表記は、濁音の語にすべてついているのではないが、つけられている限りではほとんど正しいものである。

促音表記は「ツ」を書く場合もあり、また「道心アテ」のように、促音に当るかなを書かずに促音を表わす場合もある。いずれにしても、記録体の文としては、音便形の方が普通であったので、しいてもとの活用形にもどさない長円寺本は、古い形を存していると見られる。

また、長円寺本の読解によって、『伝光録』に伝えられる、懐弉禅師がその母の死に際しても、僧堂の外出制限を越えては見舞に行かれなかった話が、この随聞記の筆録期間中、巻六の十三段の記事と相表裏するものであることも知られる

に至った。

これらについてはなお、雑誌『文学』昭和三十六年六月号、拙稿「長円寺本正法眼蔵随聞記の本文について」、また筑摩書房古典日本文学全集第十四巻所収正法眼蔵随聞記の解説（拙稿）をも合わせ見られたい。

五　流布本の本文の性格

このようにして、室町時代の俤を伝える長円寺本が見られるようになってみると、従来ほとんど完全と思われていた面山校訂の流布本と、あまりに違いすぎることに疑問を持たれるのは当然であろう。

しかし、長円寺本・慶安本・流布本の本文を一々比較してみると次のことがわかる。

慶安本は長円寺本と比べると、写しもよくなく、後人の解釈により改めた点もかなり見えるがなお、古い随聞記の俤を存しているものである。

面山校訂の流布本は、きわめて多く慶安本の本文を受けつぎ、その中の誤りと思われる文字を訂正し、かつ、所々に、あまり多くはないが長円寺本と一致する本文を有している。そのほかに、面山の流布本にのみ見える字句を持っている。その独自の字句は、話の意味を取りやすくするため、または文の形式をととのえるための接続詞・助詞や、主語を補ったものなどが大部分である。

このように見てくると、面山が校訂した仕事は、次のようなものではなかったかと想像される。

面山の手もとには、慶安本と同じ本文である寛文九年の板本があった。宗門の碩学であった面山としては、その明らかな誤りとか、公案などの引用については常識的に直ちに正しい形に戻すことができた。そのうち、いわゆる古写の善本と思われる書物が手に入った。これと比べ合わせて、慶安本の本文のよくないところを書き改め、脱落した所は補った。その上でもう一度、宗門の人々が読んで道のためになるように、わかりやすく文章を整えた。これをもって面山は祖師の意図を正しく伝える事業の完成と見たのである。

この面山の態度が、当時としては普通に取られる校訂の態度であったことは、卍山が刊行した永平広録のある部分と、のちに発見された慶長五年写の門鶴本永平広録とを比べるとき、また面山校訂の宝慶記・建撕記と、のちに発見された懐弉親筆の宝慶記や天文本建撕記と比べてみるとき、明らかに認められるところである。

そして随聞記の場合、面山が、自分の見た古写の善本の長所を、慶安本と比較して、あげている箇条は、かえって、いわゆるその古写本が、古い随聞記の俤から離れていたのではないかと思われる点が多い。

六　随聞記本文の系統と随聞記の性格

面山校訂の流布本において、慶安本・長円寺本による部分以外の独自の本文は面山の見識と親切心による書き入れをも含むと考えてよいとすれば、随聞記の系統は大きくは二つあったことになる。一つは長円寺本の系統であり、一つは慶安本の系統である。慶安本は前にも述べた通り、後人の手も加わっており、一般的に言ってあまりよい本文を持っているとは言えないが、天文本建撕記の中のごくわずかな引用に見ても、本文は慶安本に近い。また、現在見られる随聞記の写本は駒沢図書館蔵、赤松旧蔵本正法眼蔵随聞記（寛文十年写）と、長野県大昌寺蔵の正法眼蔵随聞記（寛政七年写）の二本のみであるが、いずれも、慶安本とほとんど同じ本文を持っている。してみると、慶安本の祖本も、かなり古い伝統を持つことが推測される。

私は、この随聞記が、元来懐弉禅師の手控えの書であったことから、このような大きな二つの流れが、かなり早い時代に起ったのではないかと考えている。

そこで、随聞記に大きな二つの系統が残されるに至った経路を推測するためにも、まず、この書の性格を吟味しておかなければならない。

前にも述べた通り、この書が慶安四年、寛文九年、十年の三回にわたり刊行された時には、序も跋もないので、この書の性格を決定する手がかりは何もなかった。それが面山校訂の流布本に至って始めて次の跋を得た。

跋語

先師永平弉和尚在二学地一之日、学道至要随レ聞記録、所三以謂二随聞一者、如雲門室中玄記、永平宝慶記、今録二集六冊一調レ巻入二仮字正法眼蔵拾遺分内一、六冊倶嘉禎年中記録。

これによって、孤雲懐弉禅師がはじめて道元禅師の教えを受けた時の記録で、嘉禎年中の記録であることが明らかになった。面山の流布本の一つの大きな功績である。

長円寺本の出現によってもこの跋はほとんど同じであったが、二字違っている。(本文二六〇ページ参照)

流布本は「所以謂随聞記者」の者がない。したがって、読み方も「ゆゑに随聞記と謂ふ」と切って読むことになる。「調レ巻」が「記レ巻」となっている。前者は巻を整頓した意になり、後者は、はじめて巻数を書きこんだ意にとることができる。いずれも長円寺本に従っておいてよいであろう。

ここで、「雲門室中の玄記」と、「永平宝慶記」とをあげているのは注意を要する。

雲門録は、今見られるところ上中下三巻に分かれ、上巻は対機、十二時歌、偈頌、中巻室中語要(祖庭事苑では室中録)、垂示代語、下巻は勘弁その他になっている。室中とは禅師の方丈の室内において親しく聞いた教えということで、公の説法とは違った親密な教えということである。

次に宝慶記は、よく知られているように、道元禅師が宋の天童山で、如浄禅師に会い、特にお願いして随時直接教えを受けられた。その時の親しい教えを書きしるした書で、しかも道元禅師自らは公表の意志がなかった。禅師がなくなった時、遺物の中から見いだされ、懐弉禅師が清書をしてはじめて世に出た書である。

このように見てくると、雲門室中記、宝慶記に比せられる随聞記もまた、道元禅師の丈室内における親しい教えの記録であり、かつ、筆録者懐弉禅師においてかつて公表の意志なく筐底に秘められていたものが、懐弉禅師入滅により、その遺物を整理した弟子によってはじめて世に出た書であると見ることができる。

「先師永平弉和尚」(なくなった師匠の孤雲懐弉禅師)と言っているその人は、懐弉禅師の遺物整理に当り、この随聞記を発

見書写した親しい弟子であることが知られる。

このように、随聞記はもと手控えの書であったから、これが世に伝わる時に、二つの運命をたどり得ることが考えられる。

一つは、できるだけ、本文を忠実に伝えておくことであり、一つは、手控えであるから、多少手を入れて後の世の、より多くの読者にわかりやすくしておくのである。前者は宝慶寺に伝えられて長円寺本の祖となり、後者は慶安本の祖となったと考えてよいであろう。

七　随聞記の内容

随聞記をこのように考えると、特に注意すべきことは次の点である。

跋にもある通り、「学道の用心」を主としたものであることは申すまでもなく、いろいろな人に向かって、仏道修行者の覚悟ともいうべきものを説いている。しかし、いつの場合にも、侍者として影の形に添うごとく側についていた懐弉禅師の存在と切り離しては考えられないことである。

懐弉禅師は、道元禅師よりは二歳の年長であり、法相・天台の学はもとより、小坂の証空上人をたずねて念仏を学び、多武峯の覚晏をたずねて日本達磨宗という禅宗の一派の印可をも受けた人である。それが、道元帰朝の報を聞いて建仁寺にたずね、数日を費やして問答商量を経た結果、自己のこれまでの学問の一切をなげうって、道元禅師に師事することを願った。時に道元禅師はまだ建仁寺仮寓中であったから、独立の住居の定まるまで師事の時期を延ばして別れたという。その約束が数年後に実現されて、懐弉禅師は文暦二年のおそらく十二月に、深草のほとりの庵居に道元禅師をたずね、改めて侍者として随侍することになったのである。このように、すでに学行ともに苦しい遍歴を経たのち初めてたどりついた正師のもとで、改めて修行を始めたのが懐弉禅師である。道元禅師の確実な嗣法の弟子はこの懐弉禅師ただ一人とも言われている。そして、事実この嘉禎年中に、懐弉禅師は自ら得法している。のちに、懐弉禅師は、「自分は、道元禅師の

方丈の室にあって、人が聞かないことを聞いたことはあっても、人の聞いたことで自分が聞かないことはなかった」と言われたという。もとより道元禅師の仏法は遍界不曾蔵で、秘伝・奥儀などあろうはずはないが、しかし、相手によって法を説くのは当然である。特に、徹通義介の書いた『永平室中聞書』の中に、次のような記事がある。

「先師（道元禅師）常に示して曰く、若し我れ、仏法に於て内外を存ぜば、諸天聖衆定んで聞召し、必ず又虚妄の罪に堕せんか。ただ秘事、口訣有りて未だ他の為に説かざる者は、所謂住持の心術、寺院の作法、乃至嗣書相伝の次第、授菩薩戒作法、是の如き事なり。是等は伝法の人に非ずは、輙く伝へず云々。然れども、是の如き事、某甲（懐弉）一人之れを伝ふ。」

この中で、仏法を人によって分けへだてて説くことはないが、住持の心術、寺院の作法については、誰にでも教えるものではない、と言っているのはもっともなことである。これを随聞記にあてはめれば、「知因識果の知事に属して、院門の事すべて管ぜず」（巻六ノ二十）などは、その一つと見てよいであろう。また、秦の始皇帝の太子を諫めた故事を引いて、「衲子の人を化する善巧」をすすめる（巻六ノ四）のも、指導的立場に立つ人の心得として、ゆきとどいた教えである。

このような点から、随聞記は単に入門の書ではなく、得法の弟子が聞き取った永平室中の親密な教えを含んでいることを忘れてはならないであろう。

八　懐弉禅師略伝

最後に、懐弉禅師の略伝を、主として伝光録により、三祖行業記、および天文本建撕記等をも合わせ考えて簡単にまとめておこう。

孤雲禅師、諱は懐弉。俗姓は藤氏、九条大相国為通の曾孫、鳥養中納言為実の孫（三祖行業記・天文本建撕記）と伝える。十八歳の時、横川の円能法印について落髪し、天台・法相の学問を修めたが、名利の学問の益のないことを知ってひそかに菩提心を起した。

ある時、母の所へ行った。母が言った。「わたしがお前を出家させたのは、僧としての位が上がって公卿づきあいをしてもらうためではない。ただ、名利の学をやめて、黒衣の非人（遁世の求道者）として、背に笠をかけ、わらじがけで歩く人であってほしいと思うばかりである。」懐弉はこれを聞いて直ちに承諾し、遁世の僧となって再び比叡山にのぼらなかった。その後、小坂光明寺の開祖証空上人（一一七七――一二四七）について浄土門の教えを聞き、多武峯に上って仏地房覚晏の門をもたたいた。覚晏は、宋の拙庵徳光から書信による印可を得て日本達磨宗を立てた大日能忍の上足である。のちに興聖寺に帰投して僧団の有力な構成員となる懐鑑・義介・義尹・義演等はみなこの覚晏の門下である。

ここで懐弉は、覚晏の印可を得るまでに至る。

安貞二年（一二二八）、道元禅師帰洛の報が伝わった。懐弉は、宋から直接伝えた仏法はいかなるものか知ろうとして、建仁寺に仮寓中の道元禅師をたずねて問答商量に及んだ。伝光録によると、はじめ二、三日の間は、懐弉の言うところと意旨合致した。懐弉はひそかに、自分の到達した境地も、入宋して得た仏法も同じものだと思って喜んでいた。ところが、日を経るにつれて、道元禅師の説かれる仏法の真義は、実は全く別のところにあることがわかってきた。懐弉は直ちに自らの非をさとり、改めて発心して道元禅師に師事することを求めた。道元禅師は、自ら建仁寺仮寓の身であるから、別に独立の居所を得た時、たずねて来るようにと約束して、いったん懐弉を帰したという。

その後道元禅師は叡山の圧迫もあって建仁寺を離れ、深草の極楽寺のほとりに草庵を結んで住むようになった。訪れる人もなく約二年を経た文暦元年（一二三四、十一月五日改元）、懐弉はここに参随して侍者となり、約三年の間に得法した。以後、建長五年（一二五三）道元禅師の入滅に至るまで、常に侍者として仕え、二十年間に、病気のため師の顔を見なかったのは十日間だけであったという。

懐弉禅師に名利の学問を投げ捨てて真の求道者となることをすすめた母君は、嘉禎年間になくなったらしい。その臨終の報を受けても、懐弉禅師は、僧堂の外出の制限を過ぎてはついに見舞にゆかず、仏祖の規範を重んじて人情にしたがわなかった。

永平寺に移ってから、道元禅師はすべて始めての仏事は懐弉に行なわせた。懐弉が不審に思ってその理由をたずねると、道元禅師は、「自分は、あなたより年は若いが、長生きしそうにもない。あなたはわたしより長く生きて、わが仏法を末ながく広めてもらおうと思うからだ」と言われたという。平常の待遇も、師匠のように大切にされたという。

建長五年七月十四日、道元禅師が病のため永平寺を退かれたあとを受けて永平寺二世となる。

道元禅師滅後も方丈のかたわらに先師の遺影を置き、朝夕のあいさつも生きている人に仕えるのと変わりなかった。

文永四年（一二六七）まで十五年間永平寺に住持し、病により三世徹通義介に譲った。そのあと、義介が一時住持職を退く事件がおこり、文永九年（一二七二）、七十五歳の老軀を押して再び住持の任につくなどの苦難をなめた。

弘安三年（一二八〇）四月病おこり、六月まで持つまいと言われたが、永平寺で自分のため特別に法要を営むことのないように、道元禅師の忌日のために行なう八日間の仏事の中の一日の回向にあずかろうと願い、望み通り八月二十四日に入滅されたという。

天文本建撕記によれば、永平寺では遺言によって、二十四日の懐弉忌にも、香華を供え、お経を読むことなどは、道元禅師の真前に向かってする。それは、常に道元禅師の側に随侍していられるからであるという。遺骨もまた道元禅師の墓の侍者の位置に納め、別に墓を立てさせなかった。

道元禅師の主著、正法眼蔵を浄書して後世に伝え、永平広録の巻二以下を編み、宝慶記を清書し、また、自ら公表の意志はなかったが随聞記を残し、道元禅師の宗風を世に久しく伝えた。弘安元年（一二七八）八十一歳の時、『光明蔵三昧』一巻を著わしている。

〔付記〕

この書は先に、筑摩書房の現代版古典日本文学全集第十四巻の中に収録されたものであるが、このたび筑摩叢書の一冊に加えられるに当り、多少の修正を施し、新たに解題を書いた。これひとえに長円寺本研究の機会を与えてくださった前

国立国語研究所長西尾実先生の学恩によるもので、ここに誌してあつく御礼を申し上げる次第である。

なお、巻六の八段に見える「雪峰」が雪峰道円のことであることなど、多くの御教示を賜わった駒沢大学教授鏡島元隆先生はじめ、学友その他の方々から多くのお力添えをいただいたところが少なくない。また仏教および道元禅の基礎知識については、駒沢大学教授酒井得元先生のお教えをいただいた。深く感謝の意を表したい。

また、前版に引き続き、古写本の閲覧、翻刻を御快諾くださった長円寺住職成河仙洲師、駒沢大学図書館当局に厚く感謝の意を表したい。

また、大本山永平寺前後堂、宝慶寺住職橋本恵光老師からは、終始あたたかいお励ましをいただいた。あつく御礼を申し上げたい。

前版に引き続き、古写本の閲覧、翻刻を御快諾くださった長円寺住職成河仙洲師、駒沢大学図書館当局に厚く感謝の意を表したい。

筑摩書房の竹之内静雄氏、大野千枝子さんに非常にお世話になった。あわせてここに謝意を表したい。

道元・その人と思想

増谷文雄

1　道元の人となり

人の顔貌はその性格とはなれて存してない。その性格をはなれてその思想は考えられない。しかるに、幸いなことに、わたしどもは、第十三世紀のこの国の祖師たちについて、その顔貌と性格とを伺うことのできるいくつかの画像を有する。法然については、知恩院に蔵する伝隆信の肖像画がある。親鸞については、西本願寺の所蔵にかかるいわゆる「鏡の御影」がある。道元については、越前の宝慶寺に蔵する「道元禅師画像」がそれである。その画像は、「自讃」によれば、建長元年（一二四九）の作であって、道元が四十九歳のころの面目を写したものと知られる。その当時は、「似絵（にせえ）」すなわち大和絵風の肖像画の流行していた時代であって、どの祖師がたの肖像画も、現実をはなれて理想化したものではないが、殊に、道元の画像は、はなはだ異色ある面目を描きだして、ありし日の風貌を偲ばしめられる思いがある。その面貌には、気骨稜々たるものが漂っている。鋭気があふれて、一切の妥協をこばんでいる。柔和とか、円満とかいう要素はとぼしい。わたしどもは、いま道元と七百年をへだててこの国に生を享（う）けているが、彼の述作や語録をひもどく時、そこにも、この画像にみるような強烈な性格が、七百年の歳月をこえて相見るがごとき鮮（あざや）かさをもって迫ってくる。

道元は、第十二世紀の最後の年、正治二年（一二〇〇）一月二日に生まれた。久我家の出であるという。建暦二年（一二一二）十三歳で叡山に入った。彼の教師たちは、まず学問をして人に知られ、天下に名誉あまねかれ、と教えた。だが、

『高僧伝』や『続高僧伝』などを読んでみると、かの国の高僧たちの様子は、この教師たちの教えるところとは違っている。また、経典をひもどいてみると、そうした心はまず厭い離るべきもののように説かれている。考えてみると、どうやら、この国の仏教者はまだ本当の仏教をつかんでいないらしい。そのことに気がついた時、道元はまだ十五歳の少年であったが、その稜々たる気骨と無妥協な性格は、もはや《この国の大師などと呼ばれる人々を土瓦のごとく》にしか考えないようになった。それ以後、彼のあるいた道は、ただ一筋に「正伝の仏法」にむかってつづいている。

十五歳で叡山を下ってから足かけ四年、十八歳にして、彼ははじめて尊敬することのできる師にめぐり合うことができた。栄西（一一四一―一二一五）の法嗣明全（一一八四―一二二五）がそれであった。その時、正伝の仏法を追求する道元は、はじめて、仏祖正伝の仏法を主張する禅のながれに触れることを得た。彼が明全によって伝え聞くことを得た栄西の言行は、しばしば、若くして求道にもえる彼の心をうった。そのいくつかは、のちに道元によって、またその弟子のために、ふかい感銘とともに語られたことが、『随聞記』にもみえる。その一つに、こんな話しがある。

栄西が建仁寺にいた時のことである。ひとりの貧しい男がきて、慈悲をもって救い給えという。聞けば、親子三人が、もう幾日か、なんにも食べるものがなく、餓え死にしそうであるという。そのころの建仁寺は、なにしおう貧乏寺で、栄西やその弟子たちも、時に絶食することがあったらしい。今日も、考えてみると、何にもやるものがない。思案のすえ、栄西が思いついたのは、薬師の像の光背をつくるために、うちのべた銅がすこしとってあることであった。彼はそれを束ねまるめて、《これを食べものに代えるがよい》と、その男に与えた。あとで、弟子たちが、そのことを難じて、「仏物己用」の罪をいかがなさる所存でござるかといった。「仏物己用」とは、仏に供養されたものを私事に用いることをいい、その罪は盗みの罪にひとしいとされる。その時、栄西のいったことは、《たといわたしは地獄へおちようとも、衆生の飢えを救わねばならぬ。それが本当の仏のこころである。》ということであった。

それまでの仏教者にとっては、仏像の光背をとって貧人に与えるなど、とんでもないことであった。彼らが意としたことは、堂塔を建てる、仏像を造る、経を読み、供養をいとなむこと。そして、僧たるものは、学問をして人に知られ、国

に重んぜられることが、究極の目標であるという。そのような仏教者のなかで、伝えきく栄西の言行は、道元にとって大きな驚きであり、なにか清純なものがあふれていた。どうやら、本当の仏教というものは、この人の指している方向にあるように思われる。

だが、本当の仏教の詳細については、なお、すべてが栄西において朗然というわけにはいかない。その方向は彼の指すかたにあるとしても、細かいところは、解らないことばかりである。『典座教訓』は道元が宋から帰ってから十年目、三十八歳のころの労作であるが、その中には、はじめて彼の地の仏教にふれた時の事情と感銘を記して、はなはだ興味ふかいものがある。その一節につぎのような条がみえる。

「しかあるに、いまわが日本国、仏法の名字聞き来ることすでに久し。しかあれども、僧食如法作の言、先人記せず、先徳教へず。況んや僧食九拝の礼、未だ夢にも見ざるあり。」

彼がいっているのは僧の食作法のことである。だが、解らないことは食作法のことばかりではなかった。旧来の仏教者はまるで見当はずれの方向にむかっているらしい。本当の仏教の片鱗は栄西によって瞥見することを得た。では、その全貌はどうであるか。それを飽くまでも追求せずにはおけないのが、道元の人となりである。かくて、彼は、おなじ思いの師の明全を促して、直往して宋に渡る。時に貞応二年（一二二三）、道元は二十三歳、明全は四十歳であった。

2　宋における道元

彼らを乗せた船は、貞応二年の三月下旬に博多を出て、四月初旬に慶元府に着いた。いまの寧波である。明全は不幸にしてその翌々年の五月、天童山にあって病歿した。道元は在宋ほぼ五年、天童山の如浄禅師にまみえて、ついに大事を成就し、安貞元年（一二二七）の八月に帰国した。その間における彼の行動は、従来の留学僧のそれと、いささか異なるものがあった。

その第一に、まず語学のことを挙げておかねばならない。私見をもっていえば、古来から海を渡ってかの国に学んだ留

学僧は、かなりの数にのぼるであろうが、その中にあっても、かの国のことばを自由に駆使することをえた者は、けっして多くなかった。そして道元は、その第一に指を屈せらるべき練達の人であったようである。そのことは、彼のおおくの労作にも、あきらかに観取される。たとえば、さきにあげた『典座教訓』には、しばしば、かの地の僧との会話が記してとどめられているが、それらは、けっして和風の漢文ではなくて、純乎たる中国語の生きた会話である。このことは、かの地における彼の所得が何であったかを考えるにあたって、かなり重要な意味をもつ。さいわい中国と日本は同文の国である。筆談をもってしても、ある程度の用は弁ずることができるであろう。しかし、心中の機微にふれることをキャッチするには、それでは用をなすまい。

道元は、四月初旬に慶元府に着くと、なお船にとどまって、そこで三ヶ月あまりを暮した。おそらく中国語の会話をならうためであったろうと思われる。そのころ、ひとりの老いた僧が、船に椎茸を買いにやってきた。道元にとっては、はじめて見るかの国の僧であったのであろう。自室に請じて、お茶をふるまい、問いてみると、阿育王山で典座（てんぞ）の職にあるものだということであった。典座とは、つまり食事係であって、禅院の六知事の一つである。とうぜん、この国の若き仏者とかの国の老いたる僧のあいだには、典座の職を中心として会話がはじめられた。その内容は、詮ずるところ、道元の仏教の理解が、なお本当の仏教の理解から、はなはだ遠いものであることを露呈していた。

かの典座はことし六十一歳であるという。故郷を出て、この道に入ってから、すでに四十年になるが、やっと去年の夏（げ）安居（あんご）あけに、阿育王山の典座の職についた。ついては、あすの五月五日には、一山の大衆に御馳走をしたいと思って、この船まで日本の椎茸をもとめにきたということである。

「阿育王山というと、ここからどの位の道のりですか。」

「三十四五里（日本の里程にして五六里）もありましょうか。」

「いつ寺にお帰りか。」

「椎茸が買えたらすぐ帰ります。」

「今日はからずもお会いできて、お話しできるのは、まことに奇縁というもの。ひとつわたしが御馳走しましょう。」
「それは頂いてはおれない。明日の供養はどうしてもわたしが司らねばならん。」
「寺には、あなた以外にも斎粥（食事）のことの解るものもあろう。典座ひとりいなくとも、なんの差支えもあるまい。」
「わたしはこの老年にしてこの職につくことを得た。老いの修行というものである。なんでこの仕事をひとに譲りましょう。」
ここにいたって、会話はあきらかに食いちがいを露呈した。道元は、食事を司る役目など軽いものだと考えている。それが常識である。だが、典座の方では、いかにもその仕事が大事であるような口ぶりである。そこで若い道元は、ずばりと遠慮のない問いをこころみる。
「あなたはもうお年である。それなのに、どうして坐禅弁道なり、古人の語録を読むことなりに専念なさらないのか。わずらわしい食事係などをして、何のよいことがありますか。」
それまでの道元の仏教の理解、もしくは、従来のわが国の仏教の理解からするなれば、それは至極もっともな質問である。ところが、かの老いたる典座は、それを聞いて呵々大笑していった。
「外国の好人、いまだ弁道を了得せず、いまだ文字を知得せざるあり。」
あなたはまだ、仏道の修行がなんであるやら、経典の文字がなにを意味するものなのやら、ご存じないとみえるというのである。道元ははっとした。心の転倒するばかりの驚きにかられ、全身に汗するほどの恥しい思いをした。彼は本当の仏教を追求してここまでやってきた。しかるに、はじめて会ったかの国の老僧は、あなたはまだ仏道も仏教もご存じないらしいという。道元はもう必死になって問うていった。
「如何があらんかこれ文字。如何があらんかこれ弁道。」
だが、そのとき、その老典座が、

「もし問処を蹉過せずんば、豈その人にあらざらんや。」
と答えてくれた言葉の意味するところも、道元にはよく解らなかった。その質問を素通りしてはいけないというのである。そこでじっくり取組んで、はじめて物になるのだというのである。
「だが、もしそれでも解けなかったら、いつかまた阿育王山においで。ひとつ、ゆっくりとその問題を話し合いましょう。」
彼はそういって座を起つと、
「日晏れ了ん。忙ぎ去なん。」
と帰って行った。
それは道元にとって、思いもかけない痛棒であった。その痛棒の下で、はからずも彼は、在宋五年の課題をつかんだ。《如何があらんかこれ文字。いかがあらんかこれ弁道》。それは、本当の仏教はなにかという、彼が日本を出る時にいだいていた漠然たる課題を、さらに絞って焦点を明らかにしたものである。そして、そのように明確にされた課題を担って上陸することを得た道元は、まことに幸いであったといわねばならない。けだし、真の課題をつかむことは、この道の半ばにもあたるであろうからである。

3　空手にして郷に帰る

では、道元は、その課題とどのように取組み、いかなる解答を与えることを得たであろうか。そのことをずばりと語ったものは、嘉禎二年（一二三六）冬十月の十五日、宇治の興聖禅寺に住するにあたっての語録であろうと思う。
「山僧叢林を歴ること多からず。只これ等閑に天童先師に見えて、当下に眼横鼻直なることを認得して人に瞞せられず。便ち乃ち空手にして郷に還る。所以に一毫も仏法無く、任運しばらく時を延ぶ。朝々日は東より出で、夜々月は西に沈む。雲収つて山骨露はれ、雨過ぎて四山低し。畢竟して如何。」

すでに言うがごとく、道元は在宋ほぼ五年にして大事を了得し、安貞元年（一二二七）八月に故国に帰ってきた。二十八歳の時のことである。それからほぼ十年にして、彼のために宇治興聖寺の専門道場がととのい、開堂の法会が行なわれた。ここに引用したものは、その法会において表白した彼のことばの冒頭であって、そこには、彼の参学の過程がのべられ、その所得が語られていて、道元の仏教把握の肝要は、そこに見事に打ち出されている。だが、いささか難解のふしも存するので、すこしく注釈をこころみ、文字の表裏をうかがってみると、つぎのようである。

山僧とは、禅僧が自分をゆびさしていうことばであって、道元自身のこと。叢林とは、これまた禅僧が寺院もしくは僧伽をいうことばである。道元の在宋五年の修行は、天童山景徳禅寺ならびに阿育王山広利禅寺を中心とし、諸山遍歴の旅にも、おおよそ浙江の寺々を訪れたくらいで、結局するところ、天童山の如浄によって大事を成就した。では、そこで把握し得たものはなにか。それを道元はここに、「当下に眼横鼻直なることを認得して人に瞞せられず」と、まことに異様な表現をもって提示している。それは、単にその表現が異様なだけではなく、また、その内包するところも、まったく従来この国の仏教者の常識とするところの意表に出でるものであった。

これまでにも、海を渡ってかの国に学んだ仏教者はすくなくない。その中にはこの国の仏教者の第一級にくらいする人人もある。その時彼らがかの国から齎らしたものは、いまだこの国に知られていない経巻であり、仏像であった。それによって、この国の人々は、仏教の新しい一面に接することを得た。また彼らはしばしば、新しい道具や技術をも併せ齎らし、それらによって、この国の文化はゆたかにせられた。さらには、たとえば、茶の実をもたらして、その栽培と喫茶の法を伝えるというようなこともあった。それら新奇なものの招来は、人々の眼をそばだたしめ、心をおどらせるに足りた。ではいま、道元が在宋五年にして新らたにもたらしたものは何か。それはただ「眼横鼻直なることの認得」であるという。それは一体なにを意味するのであるか。

眼横とは、読んで字のごとく、眼は横むきについているということ。鼻直とは、鼻はたてむきに顔の真中にあるということ。つまり眼横鼻直の四つの文字は、人間のあたりまえのあり方を表現するものに他ならないのであって、道元は、そ

のことを判然として認得しえて、もはや人のまどわしに瞞着せられざるものとなったという。それは一体、いかなる意味であるか。

『随聞記』の一節によると、道元はかの地の禅院にあったころ、つぎのような問訊にあったことがあるという。その時、道元は禅院の一室で古人の語録を披見していた。すると、西川（蜀の地方）から来たという一人の僧が、彼に問いかけていった。

「語録を見てなにの用ぞ。」

「古人の行李を知らん。」

行李とはふつう行履とかく。古人先徳のあるいてきた跡を知りたいのだと答えたのである。だが、かの僧はさらに追求して問うた。

「なにの用ぞ。」

「郷里にかへりて人を化せん。」

日本に帰ってからの教化に資するのだ、というのである。だが、かの僧の追求はなお止まない。

「なにの用ぞ。」

「利生のためなり。」

衆生を利益したいというのだ。だが、かの僧はさらにいった。

「畢竟してなにの用ぞ。」（長円寺本、三、七、参照）

その時、道元はついに絶句するより他はなかったであろう。だが、その生涯をかけて仏教を学せんとならば、当然、そのように追求してみなければならない筈である。そして、そのように追求しいたってみるとき、いったい、仏教とは何のために修するのであるか。これまでの留学僧はすべて、なにか新しいものをもって帰ってきた。それらが人々の眼を見張らせ、心を驚かせた。だが、それらの経卷が仏教であるかといわば、否といわねばならない。では、それらの仏像が仏教

であるかといわば、それも否である。道元のことばをもっていえば、「仏像舎利は如来の遺骨なれば恭敬すべしといへども、またひとへに是れを仰ぎて得悟すべしと思はば、還つて邪見なり」ということである。詮じてみれば、それらは結局人の瞞わしというもので、この人生のあるがまま、喫茶喫飯、行住坐臥をほかにして仏教というものはない。そこに到りついた時、それを道元は「眼横鼻直なることを認得した」と表現しているのである。

そのことを、もっと具体的に理解しようとなれば、もう一度、道元が入宋のみぎり、慶元府の船のなかで会った老いたろ典座との会話を思い出してみるがよい。彼はその時まだ、仏教とはなにか特別のものでもあるかのように予想していた。だから彼は、ひたすら食事の世話のために奔走している典座にむかって、「何ぞ坐禅弁道し、古人の話頭を看ぜずして、煩はしく典座に充てて只管に作務す。なんの好事かある。」と詰問した。それを聞いて、かの典座は呵々大笑、「外国の好人、未だ弁道を了得せず、未だ文字を知得せざるあり」といったが、いまにして思えば、その大笑ももっともなことであった。

その典座は、さらに、道元が天童山にいるころ訪ねてきてくれたという。道元は、感慨もひとしお、あれからずっと、彼によって与えられた課題と、必死にとり組んできたことを語った。その時、道元のために語った彼のことばは、一歩をすすめて道元を導くものであった。

道元「如何があらんかこれ文字。」
典座「一二三四五。」
道元「如何があらんかこれ弁道。」
典座「徧界曾つて蔵さず。」

人瞞をこえ、迷妄を破って、到りついてみると、そこにあるものは、もう一度、柳はみどり、花はくれないなる世界があり、眼は横むきに、鼻はたて向きの人間がある、とでもいえばよいであろうか。彼はそのことを教えているのである。

その名は一人の老いたる典座としてしか記されていないが、彼こそは道元にとって生涯の大善知識であった。印可を与え

てくれたのは如浄であるが、仏教のなんたるかを教えてくれたのはこの老いたる典座であったからである。
さて、仏教とはそのようなもの、弁道とはこのようなことと解ってくると、この人生のいとなみそのものを離れて、どこに仏教をもとめよう術もない。なにかそのほかに別の仏教があるように思うのは、つまり人のまどわしに瞞されているのである。その人瞞をすっと脱ぎ去ってみると、やはり、あしたに日は東より出で、夜の月は西に沈むのである。
まことに、この国に仏教という名が伝え聞かれてから既に久しい。だが、仏教をかかるものとして把握しえたものは、道元をもって最初の人となす。しかして、かかるものとして把握された仏教は、もはや特別の仏教というものではない。そのゆえに、もし汝が在宋五年にして得来ったものはなにかと問われるならば、「わたしは空手で帰って来た」というより他はないのであった。

4　わが身心を放下して

道元は建長五年（一二五三）五十四歳で病歿した。その生涯は高僧としてむしろ短いものであった。だが、その生涯において書きのこしたものは決してすくなくない。その中でも、もっとも大部であり、かつ重要なものは、ほかならぬ『正法眼蔵』九十五巻である。その九十五巻のうち、最初に書かれたものは「弁道話」であって、その時、道元は京都深草の安養院にあり、なお三十二歳の若さであった。やがて、彼が宇治の興聖寺に入って、そこに坐禅の専門道場をひらくと、その清新溌剌たる仏教に心ひかれて、来り投ずるものが尠くなかった。それらの人々をむかえて道元は、鋭気にこの新しい仏教の眼目を説くことに力め、その間に制作された『正法眼蔵』は、すくなくも四十余巻におよぶ。だが、宇治にあること約十年、寛元元年（一二四三）七月、彼は越前の志比庄なる僻地に移って、その歿年まで、ほぼ十年間そこにとどまった。その間、また衆に示し、書写しのこされた『正法眼蔵』もまた、およそ四十巻におよぶ。それに年時未詳のものを加えて九十五巻となるが、その最後のものは、その歿年の病中においての制作である。まさにそのライフ・ワークである。
その内容はいずれも難解であるといわれる。そのうらみは否定することができない。だが、よくよく案じてみると、道

元はなお心して人々に理解しやすからしめようと力めていることが知られる。あの時代にあって、仮名文をもって書いたということが、すでに何よりもその努力を語っている。それにも拘らずなおかの巻々が難解であるということは、一つには、筆者のたつ世界と読者のいる世界とがとおく懸絶しているからであることを思わなければならない。たとえをもって言ってみるならば、遙かなる山頂にたって、見はるかす風景を語る人があるとする。それを平地にある者が如実に理解しようとしても、とうてい理解しがたい。だが、彼もまた山頂にむかって進むならば、すでにその半ばにして、山頂の人のいうところをいささか理解しうるにちがいない。さらに、ついに山頂に到りつくにおよんでは、そのまったく真なることを知るにいたる。そのことを『正法眼蔵』第九十一巻「唯仏与仏」の章には、

「仏法は、人のしるべきにはあらず、ひとり仏にさとらるるゆゑに、唯仏与仏、乃能究尽といふ。」

とも喝破している。そのような巻々がこの『正法眼蔵』である。とするならば、自己の境地をそのままにして、ただ文字の論理をのみを追うて理解しようとしても、『正法眼蔵』はいつまでも難解の書としてとどまるであろう。それにつけて、わたしは、法然や親鸞のえらんだ道と、この道元のえらんだ道が、まったく対照的に相異なるものであったことを思わざるを得ない。

それは、仏教の術語をもっていえば、法と機の問題である。もっと平たくいえば、仏法と人間の問題である。この二つのものの関わり方において、法然と親鸞の撰んだ道は、まず、機すなわち人間の側の吟味から出発する。彼らは、涙をさんぜんとわが機のうえに注ぎながら、その歎かわしい姿を見究める。そこに見出されるものは、煩悩具足の凡夫のすがたであって、それは到底、出離解脱ののぞみもない。ではいったい、かかる煩悩具足の凡夫にもふさわしい教えは何か。かくして、機によって法の撰択なされ、専修念仏の道がえらびとられる。それが法然の道であり、また親鸞の道であった。したがって、たとえば『歎異抄』に読みいたるものは、その常識を絶した論理にもかかわらず、わが身のあさましさに身ぶるいしつつも、納得せしめられざるを得ない思いにいたる。

しかるに、道元のまつしぐらにまず赴いたところは、機の問題ではなくして、法の問題であった。本当の仏教とはどの

ようなものであろうか。それがまず彼の問題であった。機の問題はあとまわしである。機をもって法をえらぶなどというのは、彼にとっては、とんでもないことであった。『随聞記』のなかには、つぎのような一節がみえる。

「学人第一の用心は、先ず我見を離るべし。我見を離るるとは、この身を執すべからず。たとひ古人の語話を究め、常坐鉄石の如くなりとも、此の身に著して離れずんば、万劫千生にも仏祖の道を得べからず。」(長円寺本、六、一〇)

またある時には、あきらかに念仏門の諸師の主張を指して、このように批判したこともあった。

「世間の人多分云く、学道の志あれども、世のすゑなり、人くだれり。我が根劣なり。如法の修行に堪ふべからず。ただ随分にやすきにつきて結縁を思ひ、他生に開悟を期すべしと。今は云く、此の言ふ事は全く非なり。仏法に正像末を立つ事、しばらく一途の方便なり。依行せん。皆うべきなり。在世の比丘必ずしも皆勝れたるにあらず。不可思議に希有に浅増しき心、下根なるもあり。仏種々の戒法等をわけ給ふ事、皆わるき衆生、下根のためなり、人々皆仏法の機なり。非器なりと思う事なかれ。依行せば必ず得べきなり。」(同、五、八の㈢)

では、末法の歴史観をも否定し、凡夫の自覚をも却けて、道元はいかにして必得の道をあるけというのであるか。それは詮ずるところ、わが身に仏法をひきつけるのではなくて、仏法にわが身を投げかけてゆくことであった。

「学道の人は吾我のために仏法を学する事なかれ。ただ仏法のために仏法を学すべきなり。その故実は、わが身心を一物ものこさず放下して、仏法の大海に廻向すべきなり。その後は一切の是非を管ずる事無く、我が心を存する事なく、成し難き事なりとも仏法につかはれて強ひて是れをなし、我が心になしたき事なりとも、仏法の道理になすべからざる事ならば放下すべし。」(同、六、二)

ある学者は、宗教とは楕円形に似ていると言った。なんとなれば、楕円形はその中に二つの中心点をもっているが、宗教にもいつも二つの中心があるからである。キリスト教風にいえば、神と人間とがそれである。仏教の術語をもっていえば、法と機とがそれなのである。その二つの中心のうち、いずれに重きをおいて考えるかは、人それぞれの考え方であって、それがその人の宗教観の性格をさだめる。すでに述べたように、法然や親鸞は機に重点をおいて、かの凡夫往生の仏

教を形成した。しかるに、いま道元は法に重点をおいて仏教を把握して、この直指単伝の家風をこの国にもたらした。彼が『正法眼蔵』九十五巻をもって綿々として綴るところのものは、その法の風光に他ならない。唯仏与仏のよく究尽するところの境涯である。『正法眼蔵』の難解の所以は、第一義的にはそこにある。ただ、よく吾我の見をすてて、親しみ読んでゆくうちには、この難解の書もまた次第にその秘密を露わしてくるのであろう。

5　学道の人のために

それに反して、『正法眼蔵随聞記』六巻は、はるかに親しみ深く、また解りやすい。私事をいえば、この書は、わたしにとって愛惜おくあたわざる愛読書であって、そこから受けた影響もまた計り知れないものがある。私事をこえていわば、この書はいまや、かの『歎異抄』とならんで、日本民族が有する宗教的文献のうち、もっとも広汎なる影響をもつものであろう。

この書の編者は懐奘（一一九八—一二八〇）である。彼は、道元の歿後、その教団をひきいて第二祖となった人である。その年齢は道元よりも二歳うえであって、その学問、教養は、あるいは道元以上であったかも知れない。この『随聞記』の流布本を編んだ面山もそのことに触れて、

「後に光明蔵三昧を述せられしを拝読すれば、顕密の学も祖師に劣るまじ。但仏祖正伝の訣分明ならぬゆゑに祖師に依随せらるなるべし。」

と記している。わたしは最近ようやく『光明蔵三昧』を入手して読むことを得たが、それには及ばずとも、この『随聞記』そのものの文だけで、彼がどれほどの人物であったかは、充分にうかがえる。

一体、聴いて受けとることは、説いて教えることに劣らず、容易ならぬことである。教えるものが何を説いて与えようとも、受けとる側にその準備がなかったならば、金玉の説もまた瓦礫にひとしいものとなるであろう。しかるに、いまこの書において相対坐するものは、説くは道元、聞くは懐奘。そこに、この『随聞記』が、かの『正法眼蔵』にも劣らない

宗教的文献としてある所以がある。

懐弉がこの師のもとに投じたのは、文暦元年（一二三四）の冬のこと。その時、道元はなお三十五歳、懐弉は三十七歳であった。それより以後、懐弉はずっとこの師のもとにあり、越前の隠棲にも同行して随侍ほとんど二十年にわたった。だが、この『随聞記』の内容は、彼が道元に投じてから、ほぼ四年のあいだに、聞くにしたがいて記しとどめたものと知られる。したがって、説く者も、聞く者も、なお気鋭にして、油の乗りきった時期のものであった。

そこに道元の語り、懐弉の聞いて記した事がらは、むろんさまざまであった。さきにも記したように、明全から伝え聞いた栄西の言行なども、そこに感銘ふかく語り出されている。かの国にあったころ知見し体験したことも、しばしば、なつかしげに語り出されている。さらには、『続高僧伝』などで読んだ古仏先徳の行履（あんり）も、随処に語り説かれている。そのように、そこに語りかつ記されていることはさまざまであるが、それにも拘らず、この書の全六巻は、渾然として一つの見事な統一をなしているように、私には思われる。その理由はほかでもあるまい。そこに語り記されているものが、すべてただ一点、正伝の仏法にむかって集中し、そこに見事な焦点を結んでいるからであろう。

ただし、そこで語られている正伝の仏法は、さきの『正法眼蔵』において説かれているものと、いささかその説き方を異にしていることを感ずるのは、わたしだけであろうか。端的にいえば、ここに道元によって語られているところの正伝の仏法とは、つまるところ学道の人そのものである。いかなる態度をもって仏教に向うか。いかなる心得をもって道を求めるか。それがそのまま、道元における正伝の仏法の追求にほかならない。さる文学評論家のことばを借りて、求道者と観察者にわかつならば、道元の仏教は求道者の仏教であって、観察者の仏教などというものは、彼には考えられない。かくて、この『随聞記』においては、いつも「学道の人」が問題の中央に位置をしめているのである。

「学道の人、衣糧を煩ふこと莫れ。」（長円寺本、二、一三）

とも語られている。

「学道の人は、人情を棄つべきなり。人情をすつると云は、仏法に随がひ行くなり。」（同、三、四）

とも語られている。
「学道の人、世間の人に智者、もの知りとしられては無用なり。」(長円寺本、三、九)
とも語られている。その言葉は、学者として生きるわたしどもには、はなはだ耳の痛いことである。
「学道の人は最も貧なるべし。貧しふして道を思ふは、先賢古聖の仰ぐところ、諸仏諸祖の喜ぶ所なり。」(同、四、四、参照)
と語ったこともあった。その心とするところは、すべて専門の道をあゆむ者一般に通ずるであろう。
「学道の人、たとひ悟り得ても、今は至極と思ふて行道をやむることなかれ。道は無窮なり。」(同、一、五)
と語ったこともあった。道は無窮の一句は、学問の道をゆくわたしどもにも、感銘ふかく受納しうるところである。
ひるがえってみると、道元はこの他にも、しばしば学道の人の用心について記している。『学道用心集』もそれである。『弁道話』もそれである。そのほか、「語録」にせよ、「清規」にせよ、彼はたえず学道の人のために書いてきた。だが、いま、この『随聞記』にしるすところは、もっとも具体的にして、生きた言葉をもって綴られている。その教団の立場からいうなれば、この師のすくなからぬ著作のなかにおいて、もっとも重き位置を占めるものは、いうまでもなく、『正法眼蔵』九十五巻である。だが、世のおおくの人々は、道元の仏教にふれるにあたり、まずこの『随聞記』にいたる。それも決して偶然のことではあるまい。

正法眼蔵随聞記内容細目

正法眼蔵随聞記　一

正法眼蔵随聞記　二

正法眼蔵随聞記　三

正法眼蔵随聞記　四

正法眼蔵随聞記　五

正法眼蔵随聞記　六